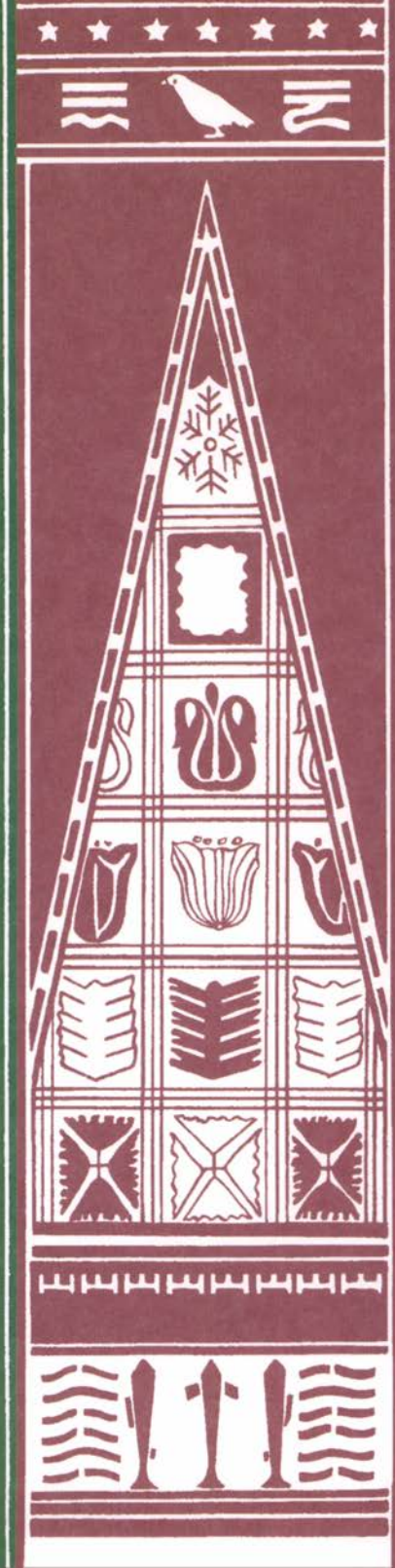
# 少年

第五年
第三号



# 岳　山

第五年第三號

明治三十四年十一月

# 目次

## 挿畫


日本北アルプスの鑑畫觀　中村清太郎筆
信越國境背梁山脈スケッチ　榎谷徹藏筆
（以上石版）
五龍岳　三枝威之介撮影
槍ヶ岳山脈より望める雲の海　高野鷹藏撮影
（コロタイプ）
五龍、唐松、大黒、牛首諸岳スケッチ　榎谷徹藏筆
（寫眞版）


## 本欄


越中毛勝山（地圖に所謂瀧倉岳）　文學士　南日重治
信越國境背梁山脈登攀記　榎谷徹藏
硫黄岳笠ヶ岳登山記　古瀬鶴之助
本谷駒ヶ岳（大原方面より登る記）　鵜殿正雄
火山の探險と其研究　吉川純三郎
陸中駒ヶ岳に登る記　千葉悅彌

日本北アルプス風景論　　小島烏水

## 雜錄

○口繪說明（中村清太郎）○山岳地の迷信を餘り多く破壞する勿れ（大下藤次郎）○鈴々岳及羅臼岳を見る（岩佐定一）○朝日岳登山案內（景翠生）○白馬岳の人夫賃金と好案內者（榎谷）○木曾駒ヶ岳に就て（榎谷）○鳳凰山所產ホウワウシャジン（辻本）○鳳凰山及地藏岳に就て（辻本）○白根附近明細圖の辯解附白根臆測圖に就て（N生）○赤石の荒川岳に就て（苔瓠生）○冬山の色（N生）○信濃高原の秋（丸山晩霞）○高山地圖の速成を望む（鵜殿）○「飛驒案內」と「淺間山」の出版（水島）○マッテルホルン雪中登山紀行（鈴木春効）○「日本アルプス」と甲州人（野尻正英）

## 雜報

○有珠嶽の噴火○富士山の暴風雨○富士山雜記○高層氣象觀測○淺間山噴煙記○草津輕便鐵道○八ヶ岳に降雪○八ヶ岳にて凍死○木曾駒ヶ岳の山開き○御岳山の登山者○御岳郵便局○御岳山銅像建設○英人の燒岳探險噴煙黑黃色に變ず○悲し峠開鑿の議○慘憺たる燒岳○阿蘇山の噴烟○伊國火山活動

## 會報

○會員登山報○書東及びハガキ○會員計報○本號の插圖畫○大北聰彥氏の奇禍○第五回有志晩餐會○高山深谷第一輯印畫說明○新入會員

# 越中毛勝山（地圖に所謂瀧倉岳）

文學士　南日重治
同行者　南日雄次　南日良吉

富山の平原に立つて東望すると、立山、劍山から續く連嶺が、白兀赤兀となつて一たび低下し、更に北方に至つて隆起して、四時不斷の白雪を點綴する、駢卵狀の秀麗なる三峰を引起すのが見える、この最北端に位する一峰は、片貝川の源で、片貝谷村では毛勝山（ケカツザン）と稱して居る。

毛勝へ登らうと云ふ氣は、昨年八月初め、伊折から早月川に沿ふて立山へ行つた時に起つた、早月の雪溪を劍山の麓に沿ふて傳はつた時、疲れた足を停めて來し方を振り向いた途端、遙か北方の天空に殘雪斑々たる峻峰の聳立せるを見て、ひどく美觀に打たれた。伊折の案内者は、只片貝谷の山であると敎へて呉れた計りで名を知らなかつた。室堂へ到着して其名を質したら、或人は下新川の夫婦山と云ひ、或者は小劍山と云ひ、其名稱の區々として一定して居ないのに少なからず驚かされたが、二十萬分地形圖に示す瀧倉岳がそれに當るので、日本山岳志によつて登路を調べたが、平澤村からすることが分つた。

今年度自分が登攀を志した山の内に、瀧倉が數へられて居たのは云ふまでも無い。殆んど毎日のやうに降られながらも、兎も角も、二十八日藥師岳第二回の登山をすまして三十日奥大日に登り、再び瀧倉の英姿に接し、針木峠を越えて、信州から大蓮華に登り、越後から迂回して越中に戻り、滑川附近に滯在して登山の機を待つたが、毎日降るばかりで何日止むとも分らないので、一先づ歸宅したが、十七日から積雨が止んで十八日と續いたから、モー大丈夫と見込を附けて、十九日、岩瀨二番下り十

時十分發列車に乘つて魚津へと向ふた。

十一時魚津に着して國道に沿ふて東すること半里餘にして、平澤街道の分岐點を問ふたが、大分來過ぎたと云はれて引き返し、停車場から五六町位の處で右へ入る。坦々たる九尺の街道で二里半の平澤まで車馬が通ずる。

十二時過六鄕丸で午餐を喫べる。午後一時出發。蒸し暑い午後の太陽、緩やかに爪先上つた木蔭なき往來を、遠慮なく照りつけて、白い光が眼の先にきらめき、稻葉にそよぐ風も力なく、汗頻りににじみ出て、渴すること甚だしい。道坂へ行くと、路傍に淸泉が湧き出て、不動尊をまつれるところがあつたので、一休憩した。

島尻で片貝村役場へ行つて、二十萬分地形圖をひろげて、自分等は瀧倉岳登山の目的を持て來たことを話したが、庶務係大家某は、瀧倉なる名稱はわれども、地圖の上にあらはれたる瀧倉のずつと北に當る、餘り高からぬ山の名で、地圖の上の瀧倉は、アブキ谷、日の又の何れからも登ることが出來て、村では之を毛勝山と呼んで居ること、及び案內者を傭ふには、平澤よりも平澤の對岸山女(アヤメ)村小字東藏へ行く方がよいと云ふことを委しく告げられ、剩へ山女區長山本四郎三郎宛の紹介狀を與へられたので、親切を謝し、はや絕巔近きにあるやうな氣がして、雀躍して行く。このあたりから、志ざす山は見えるとのことであるが、疊雲深く高嶺の空をとざして、炭燒煙のたゆげに騰る彼方の綠山より上は何も見えない。三時二十分山女村區長の宅に到着した。

村は海拔千尺はあるまい。片貝川を挿んで平澤村に對して居る。片貝川水力電氣の工事がある爲めに村は隨分活況を呈して居る。戶數は東藏山女を合せて四十餘戶、平澤は二十戶、奧平澤は八戶、奧平澤は平澤の上更に十町奧にあつて、片貝谷の最奧に位する、一番遠い奧平澤でも魚津までは三里に近い位なのに、道路がよいので、鮮魚は每日でもたべられる。且つ田畑は奧平澤の更に向ふまであれば、

山村としてはよく開化して居る。

村から池原古鹿熊虎谷を經て伊折に達するとも出來るし、村から直接山越して伊折に達するとも出來る、前者は七里位、後者は五里强ださうである。鐘釣温泉へは俗名トッサカ峠（鷄冠峠）を越え六里にして達するとが出來るさうであるが、今は誰も通るものが無いので、道が荒廢に歸したさうである。

山女區長山本氏は木材業が重で、片貝谷の殖林事業に意を注がれて、附近の山岳に精通して居らるる。瀧倉岳に關する說も、役場で聞いたものと大同小異で、つまりアブキ谷及び日の又の源にある最高點は毛勝山で、瀧倉岳は二十萬分地形圖の示すタキクラ谷の源で、トッサカ峠の北に位する山の名稱であると云ふのであつた。又氏の話によると片貝川の流の大部分は毛勝山に發するので、今より二十餘年前、毛勝の雪溪が大部分融解し去つた爲めに、片貝川の水量が大に減じて、片貝谷村に大凶作をひき起したことがあるとのことである。自分はこの毛勝山と云ふのは、地圖の上にあらはれてゐる、瀧倉岳に相當すると云ふことを確信し、案内者のことを深く依賴して、安心して寢に就いたのは十時頃。

八月二十日晴

四時前起床、月は今しがた沈んで、星華淡く山峽の空に散らかつて居る。曉の風は冷やかに谷間の稻葉を搖がせ、今日こそ愈々志ざす山の頂へと胸は跳る。

朝餉をすまして案内者の來るを待つ。五時六時と過ぎたが未だ來ない。餘り氣が急くので聞きにやつて貰つたら、よんどころない用事が急に起つて、案内を他の人に賴んで置いたら、其人が斷つて來たので、仕方なしに今から用意する所だとのことで、七時にやつと來た。案内者名は田口彌八郎（五十七歳）若い時分は獵師をやつて居たが、今は罠で熊を捕る外は一切獵を止めて、炭燒を生業としてゐるのだとか。

七時十分に出發する、村をはなれ五六町行つて、藍のやうに美はしい片貝川の釣橋を渡つて、左へ

折れて少し行くと、早や奥平澤に達する。それから少し進むと田畑がなくなつて、大日嶽の一峰が行手の空に屹立してゐる。綠草美はしき河邊を行くこと數町で、河向ふ右手に一本の大きな杉を見る。これは百二三十年前まで存在して居た、木地屋村の跡であると云ふ。漆器の木地をこしらへるのが村の生業であつたが、漆器がだん〳〵流行らなくなるにつれ、生活が困難になり、一村擧つて下新川郡舟見在へ移轉したんだと云ふ。

しばらくにして、道は殖林せる畑中を過ぎ行く、一里餘も來たと思はるゝ時分に、道は片貝川の東又に沿ふて左折し、谷は急に蹙まる。數町行つてヲノマと云ふ所で休憩する、時に十時半、こゝは山中の炭燒小屋から炭をもつて來て、更にこゝから村の方へ運搬するための中次場で、多くの小屋が散在して居る。

數分休憩のあとで、釣橋を渡り左岸を行くこと五六町で、三日市の人某が十年間此の方試掘しつゝある金坑を右岸に見る。このあたりから、東又の流れ幽谷の致を發輝して、巖々奇狀を呈し、澄潭奔瀨の美を盡して居る。十町ばかりで、右の溪間に、大明神山から毛勝につゞく嶺があらはれて、雪溪が長く毛勝の頂から麓まで曳いて居るのが見える。

暫時にして、東又の流が二つに分れて、右の溪間から來るのがアブキ谷であること、地圖の上で明かに知らるゝ、アブキ谷を遡ぼらうか、日の又から登らうかと考へたが、前者は道程が近いのと、且つは案内者の炭燒小舍が途中にあつて、絕頂から下つて來て一夜のやどりをするには好適の箇所ときいて、それを選ぶことにした。

釣橋を渡つて少し行くと、早やアブキの岸へ出る、それから少し川とはなれて雜木間を通つて行くと、正十一時彌八郎が炭燒小屋について休憩する。こゝまで平澤から三里に近い。釣橋さへ無ければ馬でも通さば通さるゝ位のよい道である。

十分ばかり經たつた後で出發する、多分夕方までには、絶頂からこの小舍まで歸れましやうと案内者は云ふが、萬一の事があつて、山頂で今夜を過さねばならぬことがあれば、不完全ながらも、野宿しても冴えぬ位の材料は必要と思つて、今迄荷つて來て貰つたものを其儘荷つて貰ふ。

是から先き、道は草に蔽はれて、それを分けて行くのがうるさい。五六町行つたと思ふ頃河原へ出る。河原を傳はつて、流を二三度も左右に渡つて、十二時河畔で午餐を喫する、十二時半出發、しばらく行くと河は右へ折れる。それから流を數度徒渉し、到底渡ることが出來ないところが二箇所ばかりあつて、左岸の榛莽を分ける以外は、絶えず河原を傳はり行く。二時頃雪溪に到着する、七月二十五六日から此の方の降雨がなかつたら、雪溪がもつと下方までわつたらう。

三四町傳はつて行くと、雪溪が二つに分れる、眞直に行けば大明神山に達するのだと云ふ。左へ行く、雪溪の左角の土の上に大きな巖が下の方へ傾いて居て、風凌ぎには頗ぶる好都合だが、惜いことには水がないので野宿には適せぬ。こゝはやう〳〵春も半ば頃で、あたりの蕨が拳のやうな頭を擡げて居る。

雪溪にかゝる頃、一團の浮雲岫にかゝるよと見る内にだん〳〵擴がつて、山腹から上を蔽ひかくす、しばらくすると、蒸々たる白雲が谷間から上騰して、湯氣のやうにふは〳〵と湧き返る。これではとても遠望はきくまい、せめて頂上の土だけでも踏んで見たいと思ふ氣になる、雪溪を左折してから十町位上ると、更に小さい雪溪が右から入り込んで居るが、それには目もふれず眞直に五六町位上ると、雲が大分谷底へ吹き落されて、毛勝の絶頂が近く正面に見える、案内者は三十年前に二三度こゝへ來たのださうだが、眞正面から絶頂へは何うしても登り切れないところがあつて、何でも五六町手前から雪溪の左の草原を推し分け、無暗と嶺まで登つてから、山背を右に傳はつて、絶頂に達したやうに覺えて居ると云ふ。

雪溪と別れて、左の草原に突進しはじめたのは三時頃であつた。草間の水涸れた溝のやうなところを行くので、一足を踏み辷らす毎に石を轉がすので、危險が甚だしい。一度毎に草につかまつては足場を探すと云ふ風にやらなければならないので、中々骨が折れる。途中に大きな熊の足跡があつて、草が左右に薙ぎ倒されてゐる。彌八郎の話によると、中々の大熊で、暫らく前までこゝに草を喰つて居たに相違なからうと。叢の間に今を盛りと實つて居る熊苺は喰べ切れぬ程あるが、急く登山だから、殘念ながら後に殘して行く。

嶺に達したのは四時二十分、岩蔭に水溜のある、風の當らない、野宿には屈强の箇所を見付けて休む。雲は大方はれて、白馬の連嶺は、早や手に取るやうに見える。彌八郎に今日小舍へ歸れば遲くなるから、今夜こゝに野宿して、明朝の眺望をほしいまゝにしやうぢやないかと云へば、今夜中にどんなに遲くなつても歸つて、明日から、賴まれた炭燒竈を造らなければならぬと云ふ。

仕方がないので、腰が大分だるいと云ふ案内者と荷物とをのこして、自分等三人は山頂へ向ふ。眞直に南へ少し登つて、タケカンバの間を拔けて東へ迂回し、絶頂めがけて白山オホバコの一面に生え敷く草地を南西の方へすゝむ。途中幾度か草に足を辷らし、やつと絶頂に達したのは五時、休憩地から四百尺位のものだらう。絶頂には陸軍の二等三角測量標がたつて居る。南西方面は一面の偃松が地を蔽ふて、東に向ふ方向は寧ろ寛なる傾斜をなして居る。斯くして自分等は到頭毛勝山の絶頂に達したわけである。

毛勝の絶頂は、南方劍岳に至る諸山の内で、最も東方に寄つて居る、絶頂から西の方(少し南へ寄つて居るが)に一峰がある。それが毛勝の分峰とも見るべきで、更に西方大明神まで嶺を曳いて居る。アブキの谷に入らぬ前に見えたのは之で有る、分峰の南に方り、一尖峯が高く聳えて居る。之は毛勝の一峯と見るには少し遠く、少し連絡が切れて居るやうな感がある。尖峰の南東に、尖峰より低い一峰

が見える、それと尖峰と毛勝の絶頂とが、大蓮華から見るやうな、また富山の平原から見らるゝやうな、三峰駢立の姿を形成するのだらうと畧うなづかるゝ。白兀赤兀は尖峰の南東にある峰の蔭になつて、劍山から其峰までの間は一大缺罅の狀態になつて居る。北方には、少し西に寄つたところに、一峰が遠くに、雲を貫いて居る、可成に高いやうだが、毛勝より下位にある。後で聞いて見ると片貝谷村の稱へて居る瀧倉岳であつた。

雪溪の上で湧き返つて居た雲は、大部分何れかへとけ去つて、信越の國境を跳躍する奔馬の如き日本北アルプスの諸山、劍山に遮ぎられぬ針木峠以北は、悉く雲を脱して眸中に入る。豪壯な鹿島鎗ヶ岳、秀麗な大蓮華山が特に目に立つ。南方を見ると劍山が覇者のやうに屹立つて、其右の肩から見ゆるのは別山で、別山から奥大日、大日、小大日と嶺が長く西に曳いて居る。奥大日と別山との間の低い尾根の上から淨土山が立つて、其右には立山があはく天を劃して居る。モ少し天氣がよかつたら、大日の上から藥師岳が窺いて居たかも知れない。北東方には重疊せる白雲を距てゝ、日本海はかすかに見える。

一通りは目的を達したので、且は毛勝を除く他の二峰をきはむるには、少なくも未だ一日以上を要するだらうと思つたので、其用意ない自分等は、直ちに下つて、せめて明るい間に雪溪に達したいものと、頂上の滯在僅か二十分にして下つた。水溜の處へ來たのは六時十分で、僅かの處に四十分餘もかゝつた。大急ぎて六時十五分に下りはじめる。其困難は上つた時に劣らぬ。雪溪に到着したのは七時十五分で、大分暗くなつた。日中は左程でもなかつた雪は氷のやうに凝結して、足が辷つて思ふ通りに前へ出ない。絶頂から下るに際して鳶口を落して來た甥は、間に合はせの杖をついて下りたが、十間餘も足をはづして辷る、自分も杖をはづして轉ぶこと二三度、暗中雪を辿るので、目が眩み心が急く、それにだん〳〵腹が減つて、一層のこと、雪溪の上で生米を嚙んで、夜を徹しやうかとも思ふ氣になつたが、雪溪の最後の曲り目へ來た時分に月が出て來て元氣が付き、梅干をかんで一層小屋

まで行かうとする決心を固めた。それから後は月を手頼りに、元來た道を辿つて小屋に着いたのは十時半。

雲はすつかりはれて、月は冴えて居る。飯を焚きながら今日の登山を追想する。彌八郎は「思つて居たより餘程苦しい山でした。モーこれで此の山へは登りませぬ」と云ふ、本當に疲れたらしい。自分は雪溪より上の草叢の中で、アルミニウム製水呑を失ひ、甥は絶頂の下で鳶口を失ひ、草叢の中で着御座をなくした。雪溪から上は少し面倒である。夕飯を喰つてから、狹い炭小屋に頭をならべて四人共寢たのは十二時過であつた。

二十一日晴

六時起床、アブキ川の縁へ行つて顔を洗ふ。昨夜の苦みを思ひやれば夢のやうである。朝飯をすませし用意を終へ、彌八郎に別れを告げて出掛けたのは九時頃、元來た道を小走りに行く、奥平澤、平澤、島尻を經て、道坂の清水のそばへ來て晝飯を喰つたのは一時頃。見返れば遠くの山々早や白雲がかゝつて、昨日踏んだ山の姿も見えない。かくて片貝谷にしばしの別れを告げて、魚津停車場に着いたのは二時頃。二時五十分の上り列車にのつて歸る。

## 毛勝の登路標高及び其名稱

毛勝山は片貝川の源であるだけに、片貝谷村から登る方が一番便宜が多い、平澤或は山女からアブキ谷の入口までは三里に近い。それに炭燒が絶えずそこらまで行くので、道は大變よい。それから絶頂までは二里位、雪溪から上に時間がかゝる。雪溪は幅が狹いが可成に長い、少なくも端から端まで二十町足らずあるだらう。朝三時頃に山女を出て、毛勝の絶頂に登つて小の間までの往復は、健脚家に取つては苦しくは無からう。小の間迄歸れば暗くなつても、山女までは歸らずには居られまい。片貝

川は極めて單純で、特にアブキ谷と來ては、分流が一つも無い。但し彌八郎の小屋は今年限りで、移轉するのださうだから、來年からは當にならないが、小屋がなくても、河が近いし、薪料も乏しくないやうだから、野宿には差支なからう。

アブキ谷から登つて又元へ歸るのは、平凡たるを免れぬ。伊折へ下つて見るもよからうと思ふ。伊折は滑川から六里、立山室堂へ六里、奥大日へ六里、別山へもそれ位のものだらう。伊折の區長酒井長作氏は宿泊も案内者の周旋もやつて呉れる。伊折から約三里早月川の上流番場島と云ふ處に藥草取の小屋があつて、伊折附近の登山の出立點となつて居る。毛勝へ登るのも矢張りこゝから來る。この道は、山女からするよりも多くの峰、多くの河を徒渉せねばならぬだけ、それだけ變化に富んで居るだらう。ほかに、内山音澤の獵師が此山へ來るさうであるが、鐘釣方面から直接に來るのか、或はトツサカ峠(鷄冠峠)から來るのか分らないが、何れにしても不可能なことは無からう。毛勝の東方面(即ち黑部川に向ふ方面)は傾斜が急でないから、黑部川までは下られるさうである。しかし河を渉つて、向ふ側へ上ることが出來るかは疑問である。毛勝から嶺傳ひに、劍山へ行くことが出來るだらうか、出來ないことはないと信ずるが、それも斷言は出來ない。距離の近い割合に、雜木や偃松を分けて行かねばならないのと、白兀から向ふは急傾斜をなして居る爲め、處々迂回せねばならぬので、可成の日數を要するだらうと思ふ。若し乎さう云ふ計畫で案内者を備ふたら、片貝谷村で應ずるものは殆んどなからう。斯の如き企てに加はらうと云ふ考のある案内者のはじめからなきに附け加へ、彼等は依然として劍山へ登つた人間は無いと信じて居るからである。故に此計畫遂行は劍山方面よりするか、さもなければ他から案内者を連て來なければならぬ。

この山の標高に關しては、日本山岳志に八千二百五十尺とある計りで、他に記錄がない、劍山がより高いので、聊か壓せられて居る氣味があるが、越中平原から見たところ、八千尺の室堂から、大日

岳と別山との間の尾根の上から見たところ八千五百尺以下に下るとは思はれない。

此の山の名稱は、結局どう云ふことに決まるだらう、伊折や内山音澤ではどう云ふ風に稱へて居るかを知るのは、頗ぶる參考になるだらうが、聞合せる閑暇がなかつた。越中の古い地圖を參照しても、大日本地名辭書を見ても、片貝川の本流は瀧倉岳に發することになつて居て、毛勝と云ふ山名はないが、二十萬分地形圖にある瀧倉谷の源が瀧倉岳であつて、日の又或はアブキ谷から登る最高峰は、毛勝山であると云ふ村の意見も、一理あると云はねばならぬ。

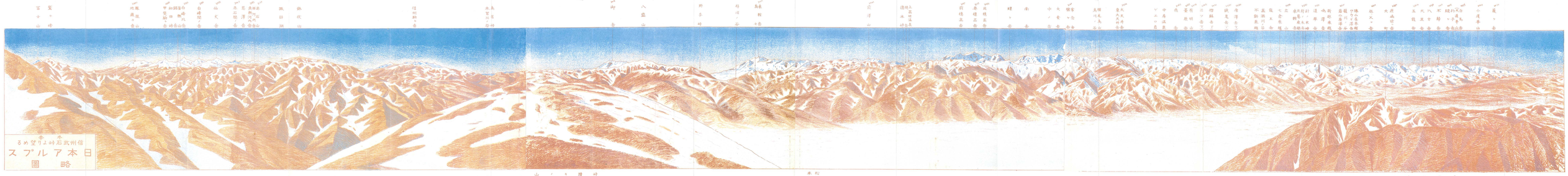
然らば、毛勝と云ふのは何の意だらう、木勝山即ち「木多き山」の意だらうと云ふ人もある。或は左樣云ふ積かも知れない。事實此の山は雪溪から上に、他の山に比して、雜木の多いことは事實である。ほい(薪料)うたてき(ひどい)の古語が通用語として行はれてゐる地方だから、さう云ふ意味と見る方が、一番穩當と思はれる。

毛勝へ三角測量標の建築材料をもつて行つたのは、島尻の人三井七右衞門ださうで、よく片貝谷の山に通じて居るさうである。山女字東藏では此山を知るもの可成あるさうで、且つ島尻より一里奥であるだけ、それだけ便利がよい、案内料は東藏では七拾錢、島尻で壹圓ださうである。最後に此山へ登るにはカンジキが是非必要であることを云つて置く。

# 信越國境脊梁山脈登攀記

榎谷徹藏

## 一、大黑越




山岳會大正參年參月參日隊發會製

宮村清太郎著

夜來の雨氣は、朝になつても、矢張り重くるしう四山に迫つてゐる。毒々しい暗灰色の雲は、低う白馬の裾に及んで、懷かしい雪田も、骨ばつた皺脉も、何も彼も一切その厭な深い雲の奥に封じ込められて了つてゐる。

昨日約束をして置いた荷持の丸山廣太郎は、恁ういふ天候なんで何うなさるかと思つて尋ねに來たと云つて、空身でひよつくり顏を見せたが、自分は元より今日大黑越をやる心意であるから、何糞つ、行くんだと云つて直ぐに結束。

四屋村山木旅館を立つたのが八月廿四日午前七時四十分。蕭條とした青田の畦みちを西へ。同じ塲所を通つてゐても、四日前に白馬へ登つた時の感じとは、天候の具合で、全で別な思ひに包まれ乍ら、細野の廣太郎の宅へ寄つたのが八時七分。彼れが山裝束の仕度をしてゐる間に、自分はその黑ずんだ上り框に腰を掛けて、樣々と村のことを聞いた。彼は得々としてその系統正しき一門の誇りを說いた。池田城主丸山肥後守の後裔であること、小松を姓とするのが當然なんだけれど、當時敵の多かつたがために、已むを得ずその姓を冒す譯に行かなかつたこと、紋所は鳳蝶であること、丸山家がこの村に四十二戸あること、伊勢の白子村にも同姓が十六戸あることなど、如何に彼は訴ふるが如く私に語つたことか。

かれ此れ半時間も經つてから、やつと此處を出た。西南の方、雲の翳しに暗んだ、奥深い谷間に向つて、寂しい高原を靜に辿つて行く。十町餘りで苔い落葉松の原にかゝつた。濕みのある、柔い落ち付いた綠の葉蔭にうす暗くなつた下草を分けて、向瀨木(當字)の細流が、餘り激しい音も立てずに佗しく流れてゐる。私達の辿る細逕は、暗褐色の土と枯草とがぶく〳〵になつて、一と足毎にじゆつゝゝと水がにじみ出すのだ。振り返ると、向ふ下りになつた四屋近くの狹い青田に、うす日がぱつと漏れてゐて、仄かな明るい綠が、鮮やかに浮き立つてゐる。濃厚な木立の透間から見える緩い調子のその

明線、實に立派な繪畫だと思つた。

この林を拔けると、左右から迫つた翠い峯の底、平川に臨むだ寬大な雜草の平地があつて、逕はぐれ〳〵とその央を通つてゐる。露を帶びた草原の寥しさ。私も語らず、廣太郎も云はず。默又默。二人は荒凉とした自然の偉い懷に抱かれて、唯てく〳〵と歩いてゐるのみだ。此の時、太古の原の果てといつたやうな感が、意味もなく私の胸を領じた。そのうち唐澤(當字)のがら〳〵石で充ちた谷が右手から落ち込む所に來た。その合流點には、千坪餘りの靜かな池が、寂寞として四山の翠を蘸してゐる。これはつい此間の荒れから出來たんださうだが、慥に名を附けらるべき資格を有つてゐるから、唐澤池と假に命名する。池畔の磊石に腰を掛けて一服やつてるうち、幽かに雨が濺ぎかゝつて來た。私の胸は俄に塞がつた。

この邊から兩岸の峯は、非常に迫つて、平川の澗流は淙々として白を噴いてゐる。左岸の細逕に沿つて行くこと二十分。ゆら〳〵した土橋で右岸に移る。この橋は雨の爲めに、時々位置が變ると思ふ。雲は愈重く垂れて、蕭々の雨は冷やかに旅の衣を掠めた。ひたすら溪系に沿つて、南々西から西南に向つて彎曲する時、峽奥に當つて大黑嶽の急な下半身が朦朧たる雲の下から見ゑた。雨に烟つた黯い膚に、深く刻み込んだ長大な雪溪、Y字形をした赭い高い澗底などが、際立つて鮮やかである。晴れゝば大黑の頭が能く見えるさうだ。大黑嶽の前衞となつて、急峻に蟠つた繁山の山梁は、即ち二本松尾根。

鑣て右の方から、しつたか大澤が會流する。それの上流には高い山袖が幾重にも累り合ふて居て、果ては茫々とした雨雲にぼかされてゐる。あれを右へ登れば、屹度八方嶽に達し得られると信じる。この合流點から四分時の後に平川倉庫へ着いた。大黑鑛山の所屬小屋で、苫で圍んだ至つて暖かさうな所だ。休憩をさせて貰つてるうち、雨は纔に歇んで、雲に多少濃淡の斑々が現はれた。

こゝ迄は馬が通ふので、非常に歩き易かつたが、これから先は鑛山の人夫が、荷を背負つて通るばかりの逕を、漸く數年前に拓いた位だから、餘り平易な山逕とも云へない。小舍の少しく上方で、左から落ちる小い流れを丸木橋で横斷して、矢張り平川の右岸に沿ひながら溯つて行く。數丈の巨巖が流れを塞がんばかりに偃臥してゐると、清冽な水は是れに衝擊して雪かとばかり、ぐら〳〵と亂れ返る上二三尺を、藤蔓で縛つた丸木橋が覺束なく横はる。こんな風にして數回、谿谷を左右に渡ると、逕を壓し流に迫つて、ぢく〳〵した巨大な赭黑い巖石が二三基、水苔を被つて兀座してゐる。丈高い荷の上が、その出張つた巖の角に閊へるので、腰を弓のやうにして、やつと廣太郎が通つた後を、自分も腰を屈めて通り終ると、右手の山隈から可なり大い溪流が、韡韡と亂れ落ちて平川に會合する。これを岩小屋澤又は北俣澤といふ。自分はこの澤の方が本流の價値を具備してゐると思つた。北俣に對して左なるを南俣といふ。一縷の山逕は乃ちこの兩流を境する二本松尾根に掛つてゐるのだ。傍の岩下に、二三人なら露宿の出來る場所がある。澤の名はこれからと、廣太郎は鳶口のやうな杖で指した。

二本松の登りは三十度位から初まるのだから、先づ急な方といつて宜しい。鬱密陰森たる山毛欅の木下闇、山氣は雨を帶びて、しつとりした滅入るやうな、寂しい寂しい感が犇々と身に迫る。阪路の傾斜は漸々に加はつて三十五度に及んで來た。滿目の沈み切つた、濡れ靈くした綠の反射で、矗々と立ち連つた幹迄が綠に見える程、深い濃厚な色を呈はした、その木立を透して、遠い脚下から、遙の頭上に迄、深く閊裂した南俣の赭い溪系がほの見える。ところ〳〵と型にでも流し込んだやうな雪田が、斷續してその中に横はつてゐる。雲霧に薄れた高い急な峯は、不可思議な澁い色をして、是れを壓迫してゐる。私は此時、林間の透視の色合の面白さを熟々と感じた。

雨は又濃やかにしと〳〵と降り濺いで來た。木の葉から木の葉へ、ぱたり〳〵と大く滴る音が刻々と繁くなると、私は厭な壓へ着けられるやうな氣分になつて、この限りなき寂寥境の無極の底へ底へ、

果てしなく沈んで行くやうに思つた。そのうち木立の一と所、稍開けた地點に來た。南俣の雪溪と、壯大な黑ずんだ絶壁とは、金剛杖を雨中に突立てゝ、それを下瞰する私の頭を如何に爽かならしめたことか。無名の澤はそれの左から直下して、Y字形に會合してゐる。先きに平川倉庫へ行く途すがら、遙に仰いだY字形地點ではあるまいかと思ふ。

道は益急に、或は折線式、或は波線式、或は鋸齒線式にぐれ〳〵と、今の無名の澤を左手の脚下に、木の間から透視しつゝ登つて行く。雪の爲めに木が咸、山腹に偃つて、列を正して婉曲してゐる邊迄來た頃、雨は漸く稀疎になつて、右倚りの頭上高く、雄偉な山腹と長大な雪溪とが、雲の底から半分見えてゐる。崩壞したがら〳〵石を横這つたり、亂雜な木の根を踏んだり、四十度から四十二度の傾斜に屈折して登るうち、又々厭な雨が蕭々と私達を包んだ。不意とゴム引の合羽で身を固めた男が、荷持も連れずに、中學生一人を先に立てゝすた〳〵と下つて來た。頭巾の中からは光つた眼鏡と美しい髯。何者だらうといふ位で、別に注意もせず、その儘擦れ違つて了つた。

鳥渡登り切つたといふやうな形をした所で一服やる。○時五分前だ。雨は巨人の呼吸をするやう、一としきり毎に颯、颯と物凄く襲ひかゝる。霧は先つきの儘、暗灰の中に毒々しい色に密聚して。凝乎大黑續きの峯頭を壓へてゐる。こゝから再び現はれた岩小屋澤の奥には、私達が將に辿らうとする、その能く發達した雪溪が長く長く、とろ〳〵と何處迄とも知れず續いてゐる、自分は靜に煙草を吹かしながら、この荒凉とした、落莫とした、さうして凄壯な二本松尾根を見上げ見下ろして、何んとはなしに恁う太古の新山といつたやうな、變な形容の出來ない心地がした、辻本氏の何處かで云はれた處女の山、墮落の山といふ辭なども頻りに思ひ浮べて見た。――後に林並木氏と一緒に青木湖畔を辿つた時もこの話が出て、「處女の山」は實に痛快だ。然しまだヴァージナル、マウンテインなどいふ詞は出來てゐないでせうといつて笑つたことだ。

こゝから少し登つて、名稱の由來を明かにする亭々たる二本松の下を通り、岩小屋澤の雪溪を絶えず右手に見ながら山腹に沿うて、赭土の崩潰し易い危い逕を急峻に下ると、右手の岩壁を傳つて、雪解の寒水のさら〳〵と落てゐる所がある。蟲取菫の大いのが一つ、俛首れた紫の花を着けてゐる。自分は腰に捲き着けた新しい草鞋を、ぢく〳〵の岩に敷いて、その上へ尻を置いた。斯うやつて團飯を頬張つてる間にでも、時々微雨が斜に降り濺いで來て、甚だ困つた。

遽然、雨を帶びた深谷の底に當つて、遠雷のやうな響がした。續いて又一回。大きい底力のある山彦は、どゝろと長く谷間に唸りを殘した。

「神立かなあ」

「なーに、あれや雪の剝げて落ちた音だらず……。恐え響づらい。」

私の渾身はぞつと、譬へ難い恐怖の念に襲はれた。凄烈！

嗚呼絶谷の轟き。

一時五分、此處を立つ。深壑に臨んだ山腹を幾たびか登降して、軈てその雪溪の上に出た。幾尺あるとも知れない厚い雪と、黑ずんだ崖との殆ど相觸接せんばかりになつてゐる隙間は、恐ろしく暗黑で、そこから仄々とした湯氣が、うすく搖めき乍ら立ち騰つてゐる。崖面を滑る滴り水は、皆吸ひ込まれたやうに、その隙間から雪の底へ流れ落ちてゐる。初めの間は二十五度平均に登つて行く。但し是の雪溪はまだ〳〵ずつと下の方に迄及んでゐるので、全長どの位あるかは鳥渡測り知り難いが、先づ先づ白馬大雪溪の五分の三位かと想像する。然しその勾配の急なことは、到底比べものにならぬ。

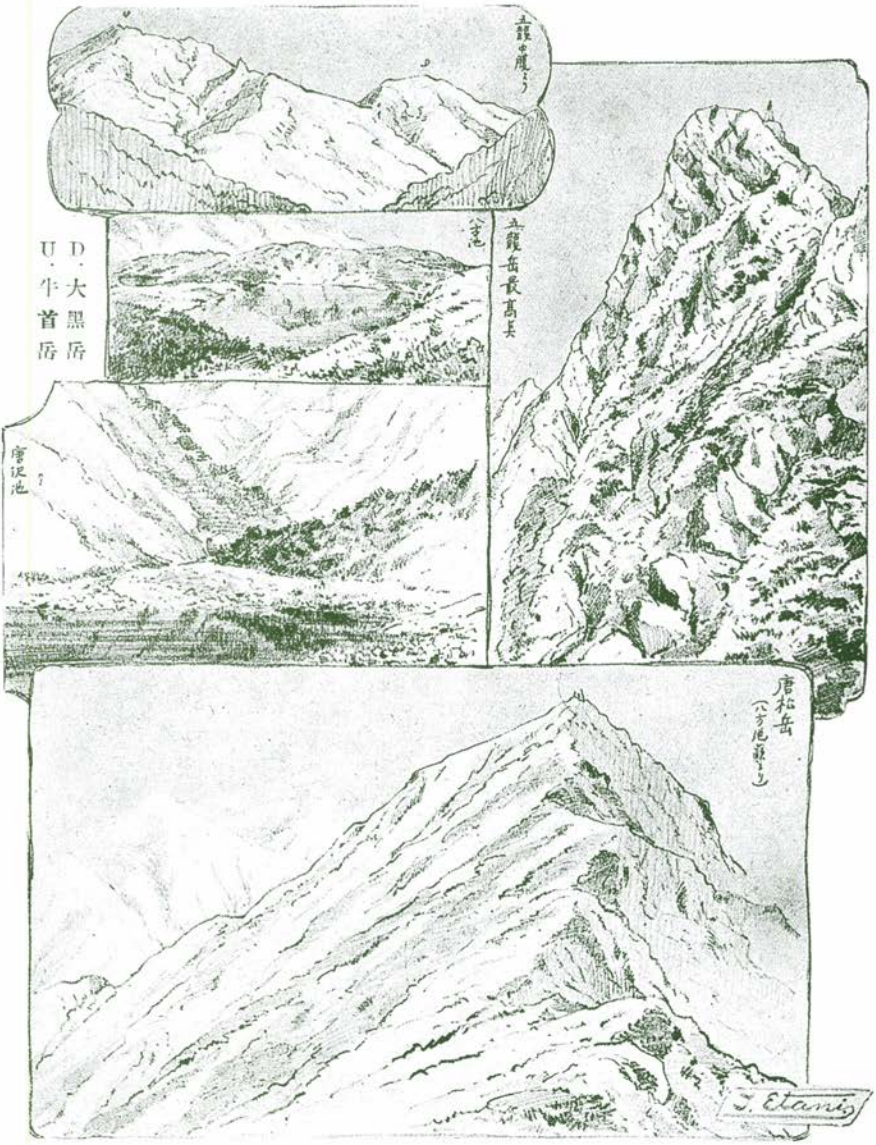
この時雲霧は大に薄れ、大黑嶽の絶巔が眞向に當つて峭立した。然し仰いだ所では左程立派でない。又實際に於ても。決して挺聳などの文字を冠せる資格が無いのだ。つまり國境脊梁の著しく低まつた間に、大黑天の畫像に似たやうな巨巖が屹立してゐるに過ぎないのだ。「山岳」第四年第三號口繪三枝

氏撮影の「大黑嶽」を參照して下さつたら解る。右手のぎざ〳〵した高い巖の右に一寸見えるのが牛首嶽、中央に當つて斜に懸る大雪溪が岩小屋澤の源流で、即ち私の辿つた所だ。早速スケッチをと思つて鉛筆を把らうとした時、颱颱たる寒風は雪を亘つて猛烈に旅衣を吹き捲くつた。と大黑の全容は見る間にかき消されて了つて、雨、雨、横擲りに襲ひかゝるその勢。殆ど直立の姿勢を採ることさへ困難な位である。仕方がないから少しく前屈みになつて、唯てく〳〵とその雪の上を登る。寒い風、冷い雨は間斷なくこの絶谷を疾走してゐる。私は一體こんなことで、あれ迄登り得るだらうかと危うんだ。全身は寒さに慄え出した。

雪溪の傾斜は、縱に大く波狀を爲ながらも、段々と角度を增して來て、二十七度から三十二度に迄進んだ。最も急な所で平均三十八度を測つた。大い一と蜿り毎に鳥渡息杖を入れながら、もう餘程登つたらうと思ふ頃、雨は歇んで、うす日がぱつと當り出した。すると背後の脚下、すつと向方へ落ち込んでゐる大雪溪を斜に截斷して、鮮明な艶やかな虹が大く半環を描いた。その刹那、私は烏水氏の「日本海の虹」から受けた印象を切實に再現し得た。海洋の虹と山岳の虹、そこには著しい相違があるのに、ことさらあの餘程古く讀んだ文章の味ひが、何の考へる餘地もなく、不意と頭へ上つて來たのは不思議だと思ふ。

二時二十五分、雪溪の盡頭に達して一寸一服。雲は復もぞす黑く舞ひ下つて來た。この間の大雨で荒らされた山腹の土砂とがら〳〵石とが甚しく崩壞して、どつと雪溪の上へ被ぶさり掛つてゐる所に足懸りを索めて、窩口の金剛杖を打ち込み〳〵蠢々として登つて行く。恐しく困難な所だ。この斜面平均四十二度。脚下の谷底に當つて遠く、何時とはなしにその石のがら〳〵と崩えて落ちて行く音がする。今踏んで居る所がこんな具合になつたら、どうだらうと思ふと、餘り好い氣持も爲ないものだ。

やがて高山植物の花の美はしい急峻な尾根にかゝつた。然し花期はもう七分過ぎ去つたやうである。


立山雷鳥
立山岳最高峯
八方池
D. 大黑岳
U. 牛首岳
唐沢池
唐松岳
(八方尾根より)
J. Etani

細雨を透して遙に、今の先越して來た二本松尾根や、それに通じたよろ〳〵した赭い細逕が、ずつと下の方に見ゐる。一千九百六十米突の地點で休憩。廣太郎は晝飯の殘りをやる。自分は濕り盡くした煙草を頻りに吸ふ。そのうち頭上も脚下も。茫々たる濃霧に包まれて了つて、夕闇の俄に迫つて來たやうな心地がした。

多量の露を含んだ丈高い雜草をがさ〳〵と分けて、暫くの間ひたすら三十五六度の急斜面を登ると、大いがら〳〵石の廣く撒布した、急な山腹のやうな所にかゝる、動搖つく石を危うげに踏み締め乍ら、頭上近く、濃霧の裡にぼつと薄れた大い雪田を見上げて、やがて短い草ばかりの綺麗に生育した所を登る。三千六度平均のこゝの登りが、漸次進んで四十度に及ぶと、堅緻な赭い巨岩の層が段々露出して、小い植物は仕舞にその皺の間へこびり着いたやうになる。

間もなく國境の山梁に達したのが四時二十分。つまり大黑岩の北の肩先に當る譯だ。何んしろ天候が主な原因になつて、恁うも多くの時間を費したんだらうと思ふ。もう此處迄出ると、唯氣分ばかりではなく、全く周圍の景象が一變する。今迄餘り見ゐなかつた偃松が。低く列を作つて谷間へ々々と一面に靡きかゝり、狹い山梁を境にして、西の片面には喬木帶盡頭に特有な裸の矮小な、がつしりした幹が、等しく枝を片靡きにしてみつしり並立つてゐる。それに西の谷底、白濛々の裡から、凍え付くやうな寒い風が、微雨を伴つて掠めかゝる。幽暗靈怪な木下闇へ、ぽた〳〵と雨の滴が佗しく落ちる。

大黑岩の頭へは、こゝから尾根を傳へば一時間も經たぬうちに、容易く行くことが出來るけれど、この濃霧の中を態々行つて見る程高峻な床しい所でもないから、九仞の功を一簣に虧くの憾みは聊かあるが、私は平氣で割愛した。この山脊を數十歩西の方に下つた所の、頽廢し盡くした、哀れげな野宿小舍の傍で休憩してゐる間に、遙か隔たつた谷底に當つて、又々二三回猛烈な雪渓の陷沒の響を聞いた。それから暫くの間、尾根のやうな所を下つて、右手の脚下、白雲の底に、大黑澤の幽かな咆哮を聞き

ながら、熊笹の間に拓いた細みちをてく〳〵とひた下りに下る。赭い石のごろ〳〵した所や、雨を帶びた雜草の丈より高い所などを幾十とも知れぬ程屈折するあたりでは、三十度から三十五度前後の勾配である。

一旦うす日を漏らした空は、軈て再び微雨となつて、霧は愈濃厚になる。厭なことだと思ひながら、殆ど無意識のやうに、この急阪を降つてるうち、ふと西南の空高く、際やかな雪渓を含んだ崇大な山の一角が現出した。

「五龍の巔上はあれから登つてくだ。」

私は限りなき大悅の念に充たされた。がそれも束の間、直ぐ復濃霧の併呑する所となつて、四顧混沌。霧の稍薄れた間から、汚い炭燒小舍を對岸の山腹に望見すること數箇所。そのうち西南の奥深さうな、暗い山隈から、雪の慘酷に崩壞した急峻な溪谷が、遙かの脚下で大黑澤に落ち込んでゐるのが見える所迄下つた。北五龍澤といふのださうだ。山梁からそれの會合點迄丁度五十分も費した。こゝから谿は餓鬼谷の名を得て北に向ひ、遥は縷々としてその荒怪な、灰色をした磧を縫ふてゐる。雨に濡れ盡くした磊石、霧に閉された峯々、磧には可愛い草花が、ぱつ、ぱつと霧の裡から浮き出てゐる。それに光線の微弱なことゝ云つたら、全で夕暮のやうだ。私はこの不可思議な、曹々とした自然の彩の美に撲たれて、幾び立ち止まつたことか知れない、さうして何時迄でも厭くこと知らず、恁うした恍惚の至境に彷徨ふ人となり度くて仕方がなかつた。

凄壯な深淵に擣下する瀑側の、巉しい巖壁の襞に足懸りを索め、巨巖の仄立する間を潛り、右手から粘土澤の會する數間の下流、高濶數丈に及ぶ九兵衛岩の側を通る、灰白色の明るい半面はほんのりと濃霧の中に浮き立つて、濕れた所がうす光をしてゐる。處々の山懷からは、大い針葉樹が朦朧と抽け出て、あたりは刻々と暗んで行く。木挽小舍を二三箇所瞥見すると、やがて細遥は餓鬼嶽の南方、

山肩の稍平かになつた所へ向つて、仕舞に大黒鑛山事務所の可なり大い建物に入るのだ。六時半といふ深谷の夕は、濃霧の爲めに何んとも云へぬ物凄い、人を悸えさせるやうな色をしてゐる、つい眼の前に突つ立つた一本の大い梅が、薄紙を透して見るやうに、ぼんやりと現はれてゐるその背後は、一樣の深い々々暗い狹霧。

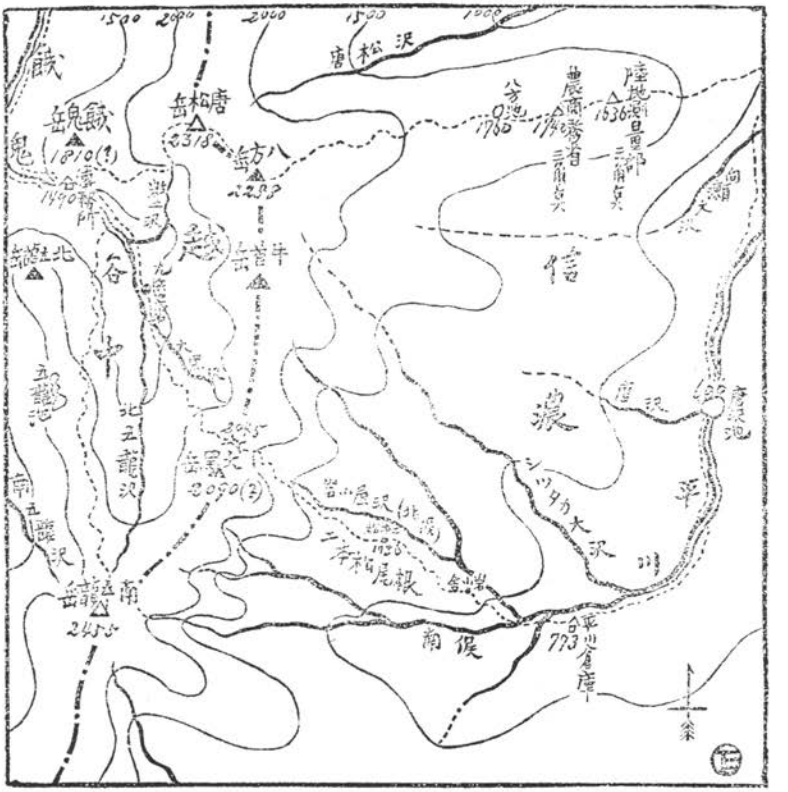
非常な厚遇を得て、二階の十疊敷程の室に導かれた。圍爐裏を擁して支配人高橋朝太氏と樣々な談話を交換してゐるうち、林並木氏のことが出て、氏は祖母谷温泉から一昨日登つて來られたが、けふ大黒越えに四屋へ下られたといふ。では先つき二本松尾根で行き違つた眼鏡と髯との美しかつた人は、てつきりそうだつた、其れと知つたらば、よし一と言でも何んとか言葉を交はしたものをと、限りなく口惜しんだ。

着丈四尺もあらうと思はれる大きい、洗ひ立ての浴衣と綿入との重ね着、新しいふつくりした夜具。仄かな燈火に包まれて、快く暖く眠ることが出來た。

## 二、五龍嶽

昨夜遲く激しい驟雨がこの荒削りの事務所を襲つたので、けふの天候を非常に氣遣つて居たが、午前五時半に起きて見ると、二十五日の空は麗らかに晴れ亘つて、羽毛のやうな雲の一と片さへ浮んで居ない。二尺四方程の窓を明けて、つい眼の下に横はる餓鬼谷や、それに臨む大黒。五龍續きの高い峯々の一部が、うるはしく朝日を浴びて樣々な綠の變化を見せてゐる面白い眺めを、暫く凝乎餘念なく見詰めた。昨夕の濃霧と今朝の旭、凄壯な絕谷と秀麗な峯巒。一つ所でも是れ程迄極端な變化を現示するものかと思つた。

限りなく爽かな胸を抱いて、此處を出たのが七時半。日はもう餘程高くなつて、新拓さの谿一面に、




五龍岳附近憶測概面

二〇

その煌かしい暖い光を浴びせてゐる。きのふの逕であり乍ら、全つきり別な世界へ辿つて行くやうな氣持をしながら、九兵衛岩の傍迄やつて來た。右手の頭上高く、劈たやうな峯の奥から、五龍嶽の一角、割菱岩の恐しく尖立した頭が、むく〳〵と聳えてゐる。もう今にあれも脚の下になるんだと思ふと、極端な譬へ難い豫期の快感が、胸も狹しと溢れ返る。所で廣太郎は大分以前、五龍の半腹迄一度行つたことがある丈けで、どふ逕が着いてゐるかを覺えて居らぬ。何んしろ尾根先を傳へば屹度、頂上迄達しられるといふことを

知つてるばかりなんで、甚だ頼りない次第だが、出がけに事務所で聞いた所によると、左程の遠距離でもなさゝうだし、天候もこの通りだから、矢鱈にその尾根と思はれる邊迄登つて行けば、何んとか分別が付くだらうと思つて直ちに右折、溪を離れて雜草、灌木の密生した急斜面を眞一文字。

強く彈ね返る枝、兩足に纏る柯、根からぼろ〳〵と拔けて了ふ草。隨分困難な攀登であることは云ふ迄もない。然し何にしろ滅茶苦茶に登らうといふんだから、この位のことは素より覺悟してゐる。二人は四周の眺望などいふ餘裕もなく、只管猿の如く搔き登るばかり。此の時私は如何に顰み面をしてゐたことか、隨分滑稽なことでゐつたらうと思ふ。やがて老樹のだらしなく倒れて、落葉でぢく〳〵になつた黑ずんだ土の少しく露出してゐる所に來た。千六百五十米突。大分息が喘んでゐるので一寸休憩した。東の空際高く、唐松・牛首・大黑續きの連山が、蜿蜒と鮮かに、そしてつい眼近に、その緣深い膚を以て迫つてゐる。

ふと三號坑に通じてゐる道に出喰はしたので、暫くそれを辿つて行くと、道は又々坑口で途絕えて、數百尺の赭い大絕崖が儼かに前進を遮つた。致方の無いから更に右側の急斜面を、無闇と攀登することにした。そのうち幽暗な栂の深林に掛つて、何にか恁う、足跡のやうなものを、覺束なげに認め得られる所迄登つた。

「これや熊の道だらず。」

四十度程の傾斜で極めて急峻だが、私達二人は唯登れさへすれば宜いのだ。熊の付けて呉れた道でも、深叢の中を無闇と搔き登るの困苦に比へれば、幾ら安樂なことか知れない。所が暫くして又行けなくなつた。熊の道がさう何處迄が續かない位は豫て承知だから、更に大に勇を皷して、又も深叢をがさ〳〵と分け登る。然しもう大分高い所迄來たやうだが、果して事務所で聞いたやうな逕に出られるだらうか、喬木帶の盡きる所迄は、なだ〳〵容易なことでないらしいが、若しも逕に出喰はすこと

が出來ないとすれば、何うしたら宜いだらうと云つたやうな不安の念ひが、漸次高まつて來た。

恁うして唯もう何彼なしに登り續けてゐるうち、やつとのことで本ものゝ人間の逕がよう〳〵と通じてゐる所に出遇つた。はつと思つた刹那、限りなき安定の念ひが遽に私を領じた。これからはもう至極安樂で、三十五六度の勾配の、その細逕を見失はないやうにさへして登つて行けば、屹度五龍の頂上に達しられるのだ。然し餘り多く人の通はない所なので、扇骨狀に出張つた樹の根や、ごろ〳〵と轉がつた石などには、陰濕な苔がぶつくり被さつてゐる。あたりには矮小な栂の並木が限りなく連つて、仄暗い空氣の裡から、その灰がゝつた澁い色の幹が、穩かな調子に浮き上つて、所々ほんの纔かな部分に、ぱつと目の醒めるやうな日光が、强く射しかゝる面白さ。恁うした色調は決して下界で得ることの出來ないものである。

幾分か屈折はしてゐるが、大體に於て尾根の通りにこの木下闇を縫ふて行くうち、忽然として喬木帶の果てかと思はれる邊に達した。行く手には目指す五龍の大岳が、その半身に美はしい偃松の綠を鮮やかに染め込んで、黑味を帶びた鋸齒狀の巖を、どつかりと頭上に戴いてゐる。あの容子ではまだまだ急なことで頂に達しられさうもないと思つた。東を見ると恐しく骨ばつた、硬い々々赭灰色の不歸嶽から、唐松・八方・大黑へかけて國境連脈が、先つきよりは一層美事に展開してゐる。

急な山側の赭い岩石を傳はつてから、復も喬木の間を登るやうになつたが、しかしそれは暫くで全く絕え、美しい偃松が殆ど一面といつて宜い程前途に當る。夏の高山でなければ味はれない特殊な日光が、快濶に滿身を包んだ。そのうち偃松の間に、赤い小石のごろ〳〵した數十坪の斜面に達したので、腰を下ろして一服やる。九時二十分。此邊から西南西に近く仰ぐ立山の偉觀は、實に譬ふべき何物をも看出し能はぬ。綠と紫と赭とを帶びた壯麗な、巉峻な巖固めの荒膚には、强い褶皺が微細に鏤刻せられて、見る目も爽かな大小無數の雪田が、きつかりと喰ひ込んだやうに、又ぱつちりと浮き上つた

五龍岳スケッチ

やうに、鮮明に懸つてゐる具合、能くもあんな立派な山岳が、此世にあつたものだとさへ思つた位である。「山岳」第五年第二號及び「高山深谷」三枝氏撮影の立山は、此邊からに違ひない。中央が別山、分けても右なる劍嶽の矗兀たる姿態に對しては、あたりの諸々の山岳が、如何に威武を逞うしようとしたところで、到底及ぶことでない。私は早速双眼鏡を執つて、華やかに照りそふ日光の爲めに、一入豪爽の趣を加へた劍嶽を、厭くこと知らず眺めた。

後ろ――北方に當つて、一小支脈を派出した北五龍の頭は、早くも我が眼の下になつて、その綠深き山脊の聊窪んだ邊りに、透明な暗碧の小池が三つ、連續してゐる。北五龍の東北、鐘釣連山の鮮麗な綠の膚や、不歸續きの嚴つい尾根に、しつかり壓へ着けられて了つたやうな餓鬼嶽は、東方斜面に白けた大い斷崖を削り落とし、南に向つた低い腹へ、事務所や精錬所や木挽小舍附近の人工的平地を乘せて、唐松尾根の大線へ縋り付くやう、眼の下に端座してゐる。まことに哀はれげな風采である。餓鬼といふ文字から來る連想と、その山容に對した直觀的象徵的連想とに、著しい懸隔のある

のを訝つた。鐘釣連山の向方からは、しつかりと日光に浴した、青々した越中の原野や、赭白けた黒部川の廣い磧や、微かに菫の氣味を帶びた富山灣などが、靖らかに、いと靜かに横はつてゐる。

行く手の頭上に聳ゆる五龍の偉容は、暗灰に染んだ岩石と、深綠の絨氈を敷き延へた偃松とで、益その雄々しさと麗しさとの趣を發揮してゐる。自分はひたすらその尾根を登る。先つき下の方から見上げた時に、あの岩だらけの頭迄は何んでもないやうに思つたが、實際歩いて見ると、中々さう容易に達しられるものでない。しかし周圍の展望は歩々に雄大、壯麗の觀を逞うして來る上に、崇岳の巨靈といつたやうな或物が、刻々とこの身を魅し盡くさうとするやうに、譬へ難い感を犇々と我が胸に壓し着けて來るので、豫期以上の肉體上の苦痛などは、全で頓着する餘裕がない。

恁うしてずつと登るうち、頂上と思はれる邊が、つい眼の先に迫つて來た。奇拔な形の巨岩が幾つも々々累々として頭上に簇立してゐる。巖面殆ど一帶と云つていゝ程に、石茸がぱり〳〵になつて密着してゐる。二人は何彼なしに脊梁ばかりを登つた。もう僅で巔に達し得られるだらうと樂んでゐる矢先、不意と奥の方から壯嚴な、美麗な大斷巖を基盤とした三角標檜が現はれた。それを見た瞬間、まだまだあれ迄登らんければならんかと云ふやうなプラクティカルな思ひよりも、先づその立派な氣高い、奥床しい眺めに限りなく撲たれた。流石五龍の地位を辱しめない丈けの資格を、あれが儼存してこそ眞に具備してゐると云つて宜いとさへ思つた。

巍々兀々の奇巖を暫くの間亘り、左手の脚下近く懸る雪田で、大い雪の塊をぞつさり手拭に包んで、やつとその最高點に到達し得たのは十時半。此處はまことに狹い處で、三角標の四本柱一杯丈けの平に過ぎぬ。南北兩面は稍淺、東西は何れも恐しく削り落とされた深大な絶壑で、全く屏風立と言つて宜しい。

早速廣太郎に持せた樣々の器具を取り出して仕事に掛る。暑い々々燒け付くやうな、刺すやうな日光、冷い微風。恁うした高山に特殊な膚觸りの限りなき味は、到底も言ひ表はし得ることでない。自

分は寫生をするより前に、先づ一とわたり四周の山容を展望した。南に當つて手も屆かんばかり近く挺聳した鹿島槍の、何物をも懾伏せしめずば歇まじとばかり、傲然と立ち弛開つた威風といふものは、慥に人をして懼然として拜跪せしめるに足りる。昨年甲斐駒の絶巔から仰いだ白峰北嶽には、より以上の森嚴と崇高とはあつたけれども、これ程勇猛な感じはなかつた。觀給へその褶皺の硬い強いことを。綠と赭と純白と、さうして暗灰とをしつかり織り込んだ荒膚には、左光線が烈しく射しかゝつて、兀々とした陰影が劃然と描かれてゐるのだ。

鹿島槍の向方、蓮華嶽の上から、槍と穗高との獨得な上半身が、稍うす色に罩んで傲兀したが、惜しいことにはその方面に茫々とした白雲が瀰漫つてゐて、ともすればその立派な姿を曇らせ勝ちである。尙この一團の濃霧は、意地惡く針木嶽附近に屯ろして、銀色の底光を見せた黑嶽の雪條や、うす桔梗に匂ふ五郎嶽の一角を、殆ど間斷なく靜に掠めてゐる。然し鳴澤の赤澤のがつしりした尾根續きから、一段隔たつた赭禿の端嚴とした赤牛の左肩へ、假想的に曳いた一線を境として、右手强いて云へば以北は、一帶に完全な山容の曝露である。水の姿の一部さへも見せない程深刻なる黑部の溪系を壓し、うす赭の大頭をむつくりと擡げて泰然と儼座した藥師嶽を、奧の方へ押し込めんばかりに、一列の鮮麗な大天壁を眼近く築き上げたのは、云ふ迄もなく立山・劍嶽續きの連脈である。

劍の後衞となつて、可なり崔嵬の巔を捧げた瀧倉から、東西鐘釣の深綠が、低いながらもかつちりと、引き締つた姿態を以て展列する向方、先つきよりは一段と廣さを增した越中の靑田、靜かな海灣、微小の白帆、ちか〳〵と小く浮き立つ能州の濱、穩かに橫はる半島の連山、雲乎海乎、見分けの付かぬ髣髴とした淡靄。恁うした强烈な前景と溫和な背景、激しい色調と柔い感じ、本當に面白い眺めだと思つた。

北に當つて、しようづ尾根から朝日嶽の頑健な肩先に組み付いた大複曲線は、更に一層高いかと思

はれる不歸嶽の、骨ばつた奥深い、偉大な躰軀の背後に隱れ、再び現出しては白馬の聖姿を高く虛空に描き、杓子・鑓の双頭をその輪廓内に容れてゐる。こゝから望んだ所で流石に白馬は、日本アルプス極北の鎭めといふ重大な責めを負ふてゐる丈けあつて、その君臨振りの美事さは、實に天晴れである。

何んしろ此處からでは、此の大山脈を縱觀する形になつてゐるので、不歸以南の複雜な峯影、細緻な皺襞の狀態は、中々適確に說明の出來ることでない。變に白けた唐松から八方、赤い牛首、綠の大黑、一旦非常に低まつた脊梁は、再び次第に高まつて、大く婉曲しつゝ我が脚下に連絡するのだ。中に就いても大黑の矮小さ加減といつたら、全く御話にならぬといつても宜しい。

廣太郎の口吻を眞似て、所謂「べた晴れ」の空ではあるが、唯つ惜しいことには、國境脊梁を境に、信州方面は一帶の濃霧に封じられてゐるのだ。それ故に八嶽・富士・白峰・信駒などの名山が全で見えないのは甚だ殘念である。しかし時々霧の隙間から、北城附近の山野が明瞭に現はれて、松川の橋を渡るがた馬車なども、能く双眼鏡裡に映つて來る。

自分は鹿島槍から右へ右へ、横長く連續した山容スケッチをやつたが、如何に朝の間快晴であつた空でも、さういつ迄も浮雲の漾はないといふ譯には行かぬかして、穗高・槍・白馬の主要山岳を逸して了つたのは返す返すも口惜しいことである。そのうち立山の巔にも蓬々とした霧が懸つた。鐘釣附近の低い頭にも、煙のやうな雲が塞がつた。谷底からも茫々と、夢のやうに、我が五龍の巔を掠めた。

自分は初めからゆつくり尻を落ち付けるつもりであつたから、霧の爲めにもう何處の山頂も見えなくなるといふ迄、此處を動かなかつた。携帶させた辨當も菓子も、殘る所なく喰ひ盡くし、菅笠の蔭に隱して置いた雪塊も過半嚙つて了つた時、いざと結束してこの想ひ出多き絕巔を後にしたのは午後二時十分。來路を辿つて下る途中、振返つて見上げた岩上の三角標が非常に面白かつたので、鉛筆寫生をやつて、大分下の方で又一つ、餓鬼嶽のスライトを試みた。こんなことで餘程時間を費したから、

奇岩の兀々を踏んで喬木帶に入る迄、頂上から五十分もかゝつた。此度こそは登りがけのやうな失敗を再び爲ないやうにと、充分注意して下つて行つたので、幸にして終始細逕を見失はずに進むことが出來た。灰白の幹の美しく並み立つ栂の深林の木下闇、急斜面に通ずる覺束ない、滑り易い逕をすたこらと降る。概して四十度から五十度位の急勾配ではあるが、最もひどい所では六十三度に及んだ。

顧ると五龍の峯頭には、濃霧が忙しく靡き掛つて、今辿つて來たのはどの邊であるか、全で見分けが付かぬけれども、八方續きの連山は、午後の强い日光を眞面に受けて、濃厚な暖い色に染んでゐる。脚下遠く精錬所や事務所の屋根が小く見えて、餓鬼谷の水は幽かに淙々の響を傳へてゐる。しかし乍らこの驚くべく急峻な細逕は中々長く續く。別に大い變化もなく。唯すた〳〵と降つて行くばかり。

到々餓鬼谷の狹い磧に出た。清冽な寒水を涉つて今朝の途に合し——九兵衞岩の下流——事務所に歸つたのが五時半。これで見ると九兵衞岩へ出る迄に、少しく下流の所で右岸へ移つて、急な山腹の雜草の間に、殆どそれとも見分けの付かぬ位な細逕を登れば、頂上迄は少しも迷ふ憂ひがない。然し磧からその細逕に入る迄が少々面倒で、どれを辿つて宜いか、鳥渡判斷が付くまいと思ふから、後に行かれる方々は、その邊の細かい注意を、事務所で詳しく聞かれるのが一番便利である。

夕闇の幔幕がおもむろに迫る頃、濃霧は混沌と黑部の方面から靡きかゝつて、後嶺の上半がすつぽり塞がつた。

## 三、唐松嶽

二十六日の朝も、きのふに劣らぬ申分のない天候である。秋のやうな爽かな旭が、快く溪山に射しかゝつて、深谷の凉氣は滿身の筋肉を確乎と引き締めた。今歲も亦此處で冬籠りをやる準備をして、昨夕登つて來られた鑛山主爲田文太郎氏と暫く山物語をしてゐるうちに八時を過ぎた、名殘は盡きぬ

が、けふの豫定行動が狂ふては甚だ面白くないから、廣太郎を促してこゝを立つたのが八時十五分。

けふは唐松・八方を乘越して四屋迄出ようといふ計劃だ。廣太郎はこの方面を能く知らないけれども、事務所で既に概略の狀況を聞き、きのふ五龍から充分地貌の觀察を試み、さうして空もこの通り能く晴れ亘つてゐるから、先づ々々行けないことはなからうといふつもりである。精錬所の前から東南に折れて、餓鬼谷に臨んだ山腹の細逕を緩く登り初める。西に當つて壯麗な劍・瀧倉の連山が高く紺碧の空を劈き、北五龍・餓鬼の深綠色をした兩山袖が、目睫近く左右から相迫つてゐる。北五龍の峯頭から南へ、更に一と際高く曳き上げた大線は、きのふ登つた南五龍の嚴しい絕巔に及んで、胸のわたりの深い窪みには、澤山の雪田が强い日光に煌しく輝いてゐる。

雜木の間の汚い細みちを暫く辿つてゐるうち、ふと左手、ばさ〳〵に伐り倒された幹や枝の間から、アイヌ人のやうな風貌の木挽老爺が、ひよつこり顏を出してゐるので、再び途の狀況を尋ねて東折、少しく登ると栂の老木の二本並み立つた下で徑は分岐してゐる。右は即ち粘土澤みち。私達は左に折れた。熊笹の露を拂ひながら三十五六度の勾配を、ひたすらに登つて行くと、逕は段々急斜して三十七八度を示して來た。丈の高い草、密生した熊笹、それ等が交る々々兩傍から迫つて、二人の下半身は暫くの間にずぶ濡れになつて了つた。餓鬼谷一つを隔てた五龍の全容は、愈雄偉高邁の觀を逞うし、極微の三角標、頂近くの峻々とした巖骨、銀白の雪田、さうして頂巔から一氣に、五龍澤へと曳き落とした美事な隆起線。如何にも頑疊な骨骼の山である。

なだ〳〵長い間、熊笹や雜草の間に賴りない一縷の細逕を索め乍ら、四十度内外の勾配にがさ〳〵と分け登るうち、西の空に高聳する劍嶽の胸へ、團々の白雲が千切れ々々になつて靡きかゝる。千八百十八米突の地點で休憩。餓鬼嶽の絕巔と丁度水平の位置であるが、極く僅かばかり此の方が高いかと思はれる。日光は益强く射しかゝつて、頭の心からぢり〳〵と燒き付かれるやうだ。逕は尙も同じや

うな調子に、やれ〳〵と通じてゐるが、大體から云へば、唐松●餓鬼を連繫する尾根に向つてゐることは事實である。葉末の露は頭から胸から、一歩毎にはら〳〵と濺ぎかゝつて、隨分厭な氣持がした。

そのうち栂の深林にかゝつた。五龍のみちに能く似た、幽暗な木下闇を急峻に登つて行つたが、所所に熊の新しい糞の落ちてゐるのや、熊の通ふ細みちなどを散見した。それにしても恁うして暑い雜草の中から、涼しい深林の裡に逃れると、勾配が如何に急であつても、そんなことは一向氣にならぬ。唯自分は歩々に天際に邇づくといふ嬉しさと、樹陰の爽快な涼味とのみに包まれてゐるのだ。

と又厭な雜草の急斜面にかゝつた。身うちは俄に蒸せ返るやうに熱して來た。東の脚下、幾千尺の深谷を隔てゝ、我が目指す唐松から八方の牛首の大黒の連脈が、高低參差樣々な變化に富んだ外廓線を、やれ〳〵と結んでゐる、大く圍く袖を廻らした五龍の高岳は、これ等と斜に相對して、私達の頭上を壓せんばかりに立ちはだかつてゐる。

粘土澤の源に達ひなからうと思はれる、がら〳〵石の、水一滴もない、狹い急な澤を斜に横斷するあたりから遲は益急に、四十六度に及ぶ所もあつて、攀登は中々容易でないが、やがて可愛い高山植物の咲き匂ふ邊りへ來ると、五龍の右の肩から、鳴澤の赤澤の赤牛●藥師などの累巒が、美しく鮮やかに現はれ出した。私は幾度びともなく振り返つて、その麗らかな大觀に憧憬れわたつたが、尙暫くの間、可憐ないた〳〵しい植物を踏んで登つて行くうち、大黒の絶嶺と正しく水平の位置になつたので、どかりとチングルマの澤山密集した上へ尻を置いて休憩した。二千九十米突。

まだ〳〵同一調子の攀登を長く續けて行くのだが、草のある所では縱令それが疎らであつても、多少の足懸りにはなるけれど、ざら〳〵の急斜面となると、殆ど足を踏張ることが出來ないので聊閉口せざるを得ない。それに這麼難しい箇所は決して尠いとは云へぬ。私達は鳶口式金剛杖の御蔭で餘程助かつたが、それよりも强い力を以て間斷なく私を壓し且つ牽き付けてゐるものは、即ち捕捉し難い

幽玄な或物である。此物の爲めに私は絶えず限りなき偉い快感に繋がれてゐることが出來るのだ。

二千百五十米突に達した時、柔い感じのする彩に富んだ偃松が初まつた。沁々と胸奥迄も傳はる程床しい其の香りは、穏かに幽かに滿山を包んでゐる。大黑越の道が拓けてからは、此のほとりに人の往き來が絶えて、徒らに荒癈の面影を止めるのだが、それでも北城わたりの獵夫が、たまさか八方嶽の峻を蹈えて、熊狩りに入り込むこともあるので、磊石の上や低い偃松の間に、嘉く擦れた足跡が覺束なく存してゐる。私達はそれを頼りに、只管登つて行くのだ。當面の頭上高く、目指す唐松嶽の巔は。烈日に照りそうて灰白色の澁い、乾び切つた怪しい色を呈はしてゐる。石英粗面岩の風雪に薫化された輝きだらうと思ふ。

さうからするうち、偃松も漸次稀疎になつて、尺に滿たぬ白けた岩石が、山の背とも云はず肩とも云はず、磊々として薇ひ被ぶさつてゐる邊りに來た。水氣などは全で無いやうに思はれるその石と石との隙間から、粉綠の細葉、淡紅の花葩。駒草が澤山微風に搖めいてゐる。北の方を見ると不歸嶽は、淡赭みを帶びた灰白の强いふう、筋ばつた雄壯な急斜面を殘る所なく曝露してゐる。信州に向つた豪壯な絶壁には、蒸し返すやうな白霧が徐ろに湧き立つてゐる。私達は唯もう一心に、美しい白色の尾根を登りに登つて、やつと唐松の最高點に達したのは十一時二十分。

絶巔には獸骨のやうに、怪しく白けた二等三角標の柱が、ぼり〳〵に乾燥し切つて、三本だけ、しかも地上二三尺の高さで、老人の亂杭齒のやうになつて、壞れて無くなつてゐる。私は中央標石の傍の窮屈な平に尻を下ろして、四方の山岳を打ち眺めたが、五龍の時とさう大して變らなかつた。時間も天候も、光線境遇も、さのふと凡そ同じ位だから、全的印象の狀態も亦著しい懸隔を認知し難い。唯暴慢な鹿島槍の代りに偉大な五龍が立ち塞がり、八方。牛首附近の春梁が、位置を逆にした位のことである。それに一つ殘念なのは、今朝立つのが遲かつた爲めに、不歸以北に重累する嚴つい白馬連嶽の

縦觀を、濃厚な積雲の爲めに、全で逸して了つたことである。

此處から八方の絶巓迄はまことに近い。さうして眼の下になつて了つて案外低い。例の白けた緩い岩骨が、偃松の綠を疎らに染め込み、ぐれ〳〵と脚の下からそれへ繋がつて行つて、更に濃厚な赭褐を帶びた片首の堅緻な巓に及び、少しく南へ倚つた所で、著しく峻恠な岩頭を刻んで、低くゝゝ、それの胸腹に緊搦かんばかりの大黑を結び、一たび大い婉曲を形作つて、五龍に掛つてゐるのだ。茲で緩い岩骨といつたが、それは西方斜面のことであつて、東方——信濃に向つた側面は、一帶に削り落としたやうな斷崖ばかりだと云つて宜しい。その恐ろしい斷崖に沿つて、底鼠の重くるしい色を帶びた濃霧が、間斷なく蒸し上つてゐる。

何時觀ても、何處から仰いでも、美事な立派な立山連脈の北の果て、鐘釣の山を越えて越中の靑田や、黑部の磧や、富山の灣水なども、きのふの通りの優しい、快い感を與へた。烈しく刺すやうな日光を滿身に浴び、空々寂々たる大氣に包まれて、限りなく譬へ難い感に撲たれながら、私は一時間餘り此處を動かなかつた。

「俺はいつも爾う思つてるだ。地獄極樂つてな岳のことだらず。全くよ。晴れゝや、へえ此の通り暢氣だし……」廣太郎はその山燒けのした赤ら顏に、充分の笑を含んで這麼ことを語つた。

## 四、八方獄

尾根傳ひに八方を指す。極めて平易な所で、しかも緩かな下りだから、東の間にその鞍狀の最低部に達した。二千二百七十米突。行く手に當つて八方の絶巓は、可なり大い白色の岩の累り合ふた上から微かに現はれてゐる。然し極めて遥い。廣太郎が山木の庭に植えるのだと云つて、色んな植物を根扱ぎにしてゐる間、自分は先きに登つて行つた。さうして何物の目標もないと云つて宜い位の、唯が

ら〳〵とした尺許の石が、亂雜に積み重なつてゐるその最高點に達したのは〇時五分。展望の狀況は唐松と大差がないから省畧するが、唯牛首以南の連脈が、一層際立つて脚下に縱列を布いたことゝ、東方から仰いだ唐松の、片靡さの貌の如何にも嚴かに見えたことゝ位が、顯著な相違である。

蒸し暑さうな霧は、段々翼を擴げて、東の間に立山から五龍迄の間に見える澤山の山巔をふつくり包んで了つた。信州へ落ちる唐松谷の大雪溪は、霧を透して何千尺とも知れぬ、深いふゝ絕壑の底に、ぽつと灰白い。止ること半時間。東の方、白濛々たる狹霧の奥、信州に向つて下山の途に就いた。その時、何んとはなしに恁う、烏水氏の云はれた「勝利の悲哀」といつたやうな念ひが胸に溢れた。

八方の裏——東面は、よし僅かの部分でも、惡絕比ひなしと云つて宜しい。唐松に向つた片面の温容に比べて、こゝは驚かれるばかり正反對に巉峻なので、足も手も決して忽緒にはならぬ。或は腰を屈め、或は手を伸ばしたりして、蟇々として躙つて行くのだ。鈍栗大の岩屑が、一歩毎にころ〳〵と轉がつて、無限の霧の谷底に墜落する。此時振り返つて打ち仰いだ八方の絕巔の雄々しさは、本當に人をして恍惚として思はず立ち止まらせる。うす鼠色に霧燒けのした、奇拔絕特なその大斷巖は、恐しく剝げて削られて、無數の岩石を亂雜に被ぶり、疎々の偃松を隨分汚く飾つて、矗然として、突立つてゐる。五龍や唐松から俯瞰した時には、與し易い山岳と蔑つたが、又實際與し易かつたが、こゝから仰視するに及んで、初めてその犯し難い傑物であることを識つた。自分は能くもあんな所へ登つて來られたことだとさへ思つた。

立板の背のやうな、眞に幅の狹い脊梁をば、蜿蜒と長く横はる偃松の枝を踏みながら降つて行く。霧は刻々と密聚して、やがて私達二人と、近くの偃松と、僅な山脊とを殘す外、一切の物象を悉くその不可思議な幔幕の裡に封じ込んで了つた。頭上も脚下も、四周皆霧。混沌とした灰色の世は、無限の閑寂と寥廓とに充たされた。此時私の頭には、　海拔何千米突といふやうな思想が皆目無くなつて、

志村寛氏撮影

大黒岳と五龍岳

唯賑やかな人間の世からまるでかけ離れた、一縷の連絡も保ち得ない、別な世界へひよつくり放り出されたやうな感が充ちた。際涯の無い大瀛でもなく、無極の空間でもない、この遙々たる恠しい天の一角のみが、我の存在し得る絶對の境であるやうに思はれて仕方がない。

ふと霧の聊薄れた岩の間に、雷鳥が三羽。廣太郎は何んでもあれをと、頻りに追ひ廻はしたが、到々皆逃がして了つた。それが爲めに餘程時間を費して、惜しいことをしたなど呟きながら、偃松に美しく圍まれた、鳥渡した綠草の窪地のある邊迄下つて少憩。二千百四十米突。晴れた時は屹度、白馬續きから立山附近の壯麗な展開を領略し得られるだらうと思ふ。

濃霧の裡に在つても、私達は大體に於て、東微北を指す、尾根筋を離れなかつた。そして又覺束ないながらも、絶え〳〵な足跡を失はなかつた。山梁の傾斜は餘程緩くなつて、二千六十米突迄降ると、寛大な山懷に抱かれたかい雪田の畔に達した。その時はもう二時を大分過ぎてゐて、餘程空腹を感じたから、早速團飯と雪塊とを齧ぢつた。と思ひもかけぬ邊に霧の隙間が出來て、平川や松川や、北城の田圃や、ごた〳〵した人家の聚落などが、鮮明な快い色をして、はつと現出した。早速双眼鏡を把つて四屋の邊を窺ふと、新築の小學校や山木旅館の汚い屋根などが能く見える。松川の磧を縫ふて、ちか〳〵と動いて行く水も、面白い程鮮かだ。

此處を立つたのが二時半。短矮な白樺の變に拗ぢくれたのがぽつ〳〵見え出した。雜草も大分深くなつて來た。殆ど見分けの付き難い程の足跡を辿つて、ひた下るうち、霧は少しく霽れて右手——南方——に鹿島續きの天ごう尾根や、その向方の鹿島谷や、一段近い平川峽谷や、それに臨む低い二本松尾根などが、昧い色に彩られて現出した。平川のずつと末で、白い磧が三つ四つに岐れて、淺綠の畑や、雜草の高原を蛇行してゐる邊には、うす日がぽつと射しかゝつてゐる。三時十分、一たび白樺を脱けて、赭らみを帶びた穏和な山袖に、柔かく擁かれた八方池の邊りに着いた。千七百六十米突。池

の水は暗灰の濃い々々雲翳を蘸して、何んとも云へぬ物凄い怪しい、黑ずんだ色をしてゐる。池畔を半月形に繞り、灰白の山梁を東に辿ること少許、農商務省三角標櫓の下で休憩。西北に當つて杓子・鑓の雄偉な下半身が、雲の爲めにしつくりと暗んで、太い數條の雪溪は、その雲の中から半分出てゐる。

寛容な、見晴らしの佳い山梁をてく〳〵と下る。短い草の葉末は赭に鳶に、黄に樺に、早くも秋色の絢爛を競はうとしてゐるやう。小い雪田を右に瞰下し、狹長な窪みの邊りに下ると、驚くばかり多量の蟲取董が、ぎつしりと云つて宜い位、一面に生育してゐる。それに雪割小櫻も亦頗る多い。その他どこの高山にでも能く見る高山植物は、このわたり一帶に滿ち充ちてゐる。概して信駒の農ヶ池附近と殆ど同一系統の種類を有つてゐるが、私のやうな素人眼では、あれ以上の好採集地だと思つた。但しあそこの行者尾根に掛る途中のやうに、あんな澤山の黑百合は認められなかつた。

緩く大波を打つたやうな、柔い輪廓の快濶な尾根を下つて、陸地測量部三角標のある所で又少憩。白馬登山みちの二俣附近は、北方の脚下に眼近く見え、靜かな青木湖面は東南遠く、低い山嶺の間に白く展けてゐる。一服やらうと思つて、綺麗な草の上に尻を下ろした時、毒々しい色の雲から、ぱらぱらと大粒の雨が濺ぎ掛つた。涼しい微風に連れて、土の香りが紛と鼻先を掠めた。

「今降られちゃ殺生だ。」

廣太郎が顰み面をして惶てゝ合羽を荷物に被ぶせてゐる間、驟雨の前驅に包まれた溪山の捨て難い味を痛切に感じた、私はそつと菅笠に手を添えてあたりを眺めた。東の方稍遠く連る群山の一部分にぱつと日が當り東北の碧空に浮ぶ幾列の積雲へ、うす紅の光線が蒸し暑さうに射しかゝつて、洒手な鮮麗な彩と、可なり强い明暗とを現はしてゐる。頭上の冥雲、うす昏い空氣。この陰鬱な裡から、清爽な遠景を透視する面白さの爲めに、私は眼のあたり襲來しようとする厭な大雨のことも忘れた位である。

幸ひ雨脚は割合に微弱であつた。それでも廣太郎の荷造りが出來上ると匆々、こゝを後にして、悠容な脊梁を緩く下り續けた。被ぶさる雜草を蒲の脛衣で蹴り除け乍ち、極めて辷り易い斜面をひよくり々々と尻で梶を取つて行く。下るに從つて草は段々丈高く、その上雨の爲めに益能く辷る。廣太郎は幾ら轉がつても關はぬ。股引が濡れる位で濟むが、自分は然うでない。大事の器具に影響を及ぼすもんだから、その心遣ひは中々一と通りでない。何んしろ霑れ盡くした草の葉が、足跡の存つてゐる所も何も關はず、どつさり掩ひ雍ぶさつてゐるので、足の踏み場が分らない。矢鱈に足を下ろしたら、岩のゐる〳〵した奴が、變てこな圓い頭を擡げてゐたり、じく〳〵の木の根が、苔を帶びて腕形に逼み出てゐたり、又は眞黑な泥土がぶく〳〵に柔くなつて、萠い落葉を薄く被ぶつてゐたりして甚い目に遇ふので、一歩毎に金剛杖でその葉を分けて見ねば、容易に動けることでない。所がその杖がもう葉末の水ですぶ濡れになつて了つたので、手に肉刺が出來さうに痛い。握つてる所には、小い泡がぐつぐつと溜つてゐる。掌は水氣を多量に含んで、厭に白けて皺だらけになつてゐる。先に立つて行く廣太郎は、呀とか阿とか云つて面白い程轉がる。大い荷物は横倒しになつて、背中で跳る。

暫くの間に二人は肩先から胸、下半身、殘る所なくびしよ〳〵になつて了つた。自分は例の獨特の登山服の前を締め上げて、ぎゆつと括り付けたので、ノートやスライトスケッチの入つたポッケットは、裏の防水布の爲めに、辛くもずぶ濡れの厄を免れた。脚下には遠く細野から四屋・飯田・神城あたりの人家が、うぢや〳〵と青田の間に横はつて、どす黑い亂雲が頻りにその邊を浮動してゐる。何處からともなく時々雷鳴が傳はる。

草を分け、枝を握み、何處迄も々々下りに下るうち、やつと臼場迄來た。夢のやうな霏雨を浴びながら、狹い淋しい草原に倒れた、巨きい朽木の幹に腰を掛けて一服。もう此處から先は、柴を運ぶ馬の通ふ山みちが付いてるんで非常に安樂だ。自分は暢々とした氣持になつて歩いた。細野の里落はは

んの眼の下に迫つて、殆ど軒毎に立てられた高い竿竹の先に吊るした白張の盆燈籠も、歷々と見えるやうになつた。さうかうするうち全く山を下り切つて、一昨日通つた大黑の逕に會し、軈て香りの高い深綠の麻畑にかゝる。佗しい人家、汚い農夫、信濃袴を着けた、尻の大い里の少女、洟垂れ小僧。左手に黑々と繁つた鎭守の杜を見て、夕闇の靜に迫る頃、六時過ぎ、廣太郎の宅へ着いた。

一服やつて直ぐ四屋へ。黃昏の空には厭な雲が漫溢り亘つて、向ふの低い連山は濃厚な暗い菫色に、稻田は微黃を帶びた淺綠に、疎ばらな木立は一入綠黝く、枯枝は凄い程白けて、一望の山野は實に奇妙な色調を呈はした。泰西山岳畫家の描いた、こんな風な面白い感じのする大作を想ひ出したりしてゐるうち、ぱら……ぱらと來た。それ笠だ合羽だと、野道に立つて騷いだが、まだ身繕ろひの終らぬのも用捨なく、驟雨、驟雨、大驟雨、實に凄じい勢で降り濺いだ。二人は少しく前屈みになつて進む。此時私は直ぐ林氏のことを想ひ浮べた。考へて見れば今夜は丁度、鑓温泉に露宿せられる勘定になるが、この猛雨をどんなにして凌いでゐられるだらう。至極輕裝であつたが、若しや健康を害ねられるやうなことはあるまいかなどゝ、頻りに胸を傷めた。

日のとつぷり暮れた頃山木へ。四屋の人家も廣い通りもこの激烈な雨に叩き着けられて、人の聲も聞こえねば、荷車の轍の音もせぬ。電光は間斷なく閃き亘る。

雨聲愈激しい。

靜に浴を終り、食事を濟まし、戸外の澎騰たる雨に對して、舒ろにサイダーのコップを取り上げた時の心地は實に譬へられない。

然し林氏が氣に懸る。

## 五、餘　瀝

この方面を數字の上から觀察して見ると次の如くになる。そのうち標高・氣壓はほんの見取りの儘でまだ更正してないことを斷つて置くが、一體に約四耗ばかりの高氣壓を示してゐたやうに思ふ。角度、略圖なども概略に止まる。時間は、休憩、スケッチ等を除いて記載したのだが、人夫が齒痒い程度々立ち止つて息杖を入れる僅か宛の時間、及びスライトスケッチの三分間以内のものなどは一切この中に加へて置いた。

| 月日 | 時間 | 氣壓 | 溫度(C.) | 地點 | 天候 | 雲量 | 標高示度(M.) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 八月二十四日 | 前九、〇五 | 七〇五 | 二七、五 | 唐澤池 | 曇 | 一〇 | 六〇六 |
| 同 | 同一〇、一〇 | 六九二 | 二四 | 平川倉庫 | 微雨 | 一〇 | 七七三 |
| 同 | 同一一、五五 | 六六一 | 二四、五 | 二本松ノ頭 | 同 | 一〇 | 一一三六 |
| 同 | 後〇、二五 | 六五八 | 二六 | 二本松ノ下 | 同 | 一〇 | 一一六七 |
| 同 | 同一、一八 | 六五七 | 二四 | 徑ト雪溪トノ會點 | 同 | 一〇 | 一一八二 |
| 同 | 同二、三五 | 六二四 | 一七、五 | 雪溪盡頭 | 同 | 一〇 | 一五九一 |
| 同 | 同四、三〇 | 五九〇 | 二〇、五 | 大黑山梁ノ項 | 同 | 一〇 | 二〇四五 |
| 同 | 同七、二六 | 六三〇 | 二一 | 鑛山事務所 | 同 | 一〇 | 一五〇〇 |
| 二十五日 | 前六、一〇 | 六三一 | 一〇、五 | 同 | 快晴 | 一 | 一四八五 |
| 同 | 同一〇、四〇 | 五六二 | 二一 | 五龍岳最高點 | 同 | 一 | 二四三九 |
| 同 | 後二、一〇 | 五六〇 | 三四 | 同 | 晴 | 局所的濕霧 | 二四七〇 |
| 同 | 同五、五〇 | 六三一 | 二五、五 | 鑛山事務所 | 濕霧 | — | 一四八五 |
| 二十六日 | 前六、〇〇 | 六三一 | 一七、五 | 同 | 快晴 | 一 | 一四八五 |
| 同 | 同一一、二〇 | 五七〇 | 二六 | 唐松岳最高點 | 晴 | 局所的濕霧 | 二三一八 |
| 同 | 後〇、一〇 | 五七二 | 二七 | 八方岳最高點 | 同 | 同 | 二二八八 |
| 同 | 同三、二〇 | 六一一 | 二三 | 八方尾根農商務省△點 | 同 | 同 | 一七四二 |
| 同 | 同四、〇〇 | 六二〇 | 二三 | 同　陸地測量部△點 | 曇 | 九 | 一六三六 |

## 方位概表

| 停點 | 對象 | 角度 |
|---|---|---|
| 五龍岳最高點 | 大黑岳頂上 | 北二八度東 |
| 同 | 八方岳頂上 | 北二三度東 |
| 同 | 唐松岳頂上 | 北一五度東 |
| 同 | 不歸岳頂上 | 北一一度東 |
| 同 | 白馬朝日岳頂上 | 北二度東 |
| 同 | 立山劍岳頂上 | 南八五度西 |
| 同 | 立山別山 | 南七四度西 |
| 同 | 立山本峰 | 南六五度西 |
| 同 | 藥師岳 | 南五四度西 |
| 同 | 赤牛岳 | 南四五度西 |
| 同 | 赤澤岳 | 南四三度西 |
| 同 | 鹿島槍岳頂上 | 南一八度西 |
| 同 | 北峰頂上 | 南一四度西 |
| 唐松岳最高點 | 八方岳頂上 | 南六七度東 |
| 同 | 牛首岳頂上 | 南四八度東 |
| 同 | 五龍岳頂上 | 南約六度西 |

## 傾角概表

| 停點 | 對稱 | 仰又俯 | 角度 |
|---|---|---|---|
| 五龍岳最高點 | 大黑岳頂上 | 俯 | 一二 |

同　唐松岳三角標　同　二
同　鹿島槍岳三角標　御　一

## 時間概表

大黑越　四屋山木——二二分——細野丸山廣太郎宅——五〇分——唐澤池—四七分—しったか大澤の會流點—四分—平川倉庫——二〇分——岩小屋澤の會流點——一時一〇分——二本松の頭——七分——二本松の下——二十三分—徑と雪溪との會點——一時五分——雪溪盡頭——一時二七分——大黑山梁の項——五〇分——大黑澤と北五龍澤との會流點——二〇分——粘土澤會流點——一五分——鑛山事務所

五龍岳　鑛山事務所——八分——九兵衛岩——二〇分——一六三六米の地點——四五分——一九〇九米の地點——二二分—二〇六一米の地點——五〇分——五龍岳最高點(三角標下)——五〇分——喬木帶盡頭—一時五分—鑛山事務所

唐松岳●八方岳　鑛山事務所——一時五分—一八一八米の地點——四五分——二〇九一米の地點——四〇分—唐松岳最高點(三角標跡)——六分——山梁最低部——七分——八方岳最高點——二五分——二一三六米の地點——四〇分——八方池——一〇分——農商務省三角標下——一五分——陸地測量部三角標下——一時一五分——細野村上方臼場——三五分——細野丸山廣太郎宅——二〇分——四屋山木

○五龍を後立とも書くさうだ。これは大黑鑛山主爲田文太郎氏及び同所支配人高橋朝太氏から親しく聞いた所で、氏等が該鑛山採掘願書提出の際、鑛區地圖作成の必要上、種々調査せられた結果、古くは立山背後の山といふやうな意味で、その邊一帶を後立と呼んで居たのだが、現今ではそれが一山岳のみの名稱になつたさうだ。それ故後立と書く方が正しく、五龍は後に誰れかゝ製造したんだらうとさへ言はれた。尙、北城附近の人から、割菰岳(當字)の稱があることをも聞いた。

○五龍から鹿島槍への縱走は、大分難應への爲さうな箇所が、五龍へ近寄つた所にあるが、自分の俯瞰した具合では、出來ないことはあるまいと思ふ。

○平川●唐澤會合點の唐澤池、及び五龍脊梁の五龍池は、いづれも便宜上、假に命名した迄である。

# 硫黄岳笠ヶ嶽登山記

古瀬鶴之助

四十一年の冬硫黄岳噴烟を始めしより、必ず之に登りて精細に其模様を觀察せむと思ひしが、最早夏の休となり、例の講習等もすみたれば、友人を誘ひ、一行八人、四十二年八月十五日夜を以て發程せり。

小八賀川の溪谷より荒城谷に越え、折敷地を溯り大山脈を横斷す、これは簑谷越とて、高原川溪谷に越ゆる捷徑なり、上りはさほどならざりしが、下りは甚急峻にして、平湯峠十三墓嶺の比にあらず、嶺の中腹なる簑谷に下れば、夜明く、笠ヶ岳、槍ヶ岳、穗高岳、眞正面に現はれ、予等を歡迎するものゝ如し、漸く下りて古橋に達し、高原川に架する一橋を越えて、長倉に出て、右岸の新道を上る、硫黄岳初めて前面の最奥に現はれ、山容鄕里に於て見しとは、甚だ異なり、峰頂兩分して、其間より盛に黄白の烟を噴く、其前方兩岸交互に山相迫り、恰も重ね着したる襟を見るに似たり、高原川其間を曲折して流れ來り、遠近山水の景、眞の畫圖なり、細越（地名）に至れば、河中に高四五十間の巖屹立し、巖上松枝ぶり面白く、高原川此に激して、兩分する所、實に奇景なり、俗に之を辨天岩と稱す。小坂を越ゆれば、人家數戸あり、友人大前松茂氏に逢ひ、一茶店に息ひて、舊を語る、此日快晴炎暑燬くが如けれども、凉風後より追ひ來り、時々笠を奪はんとする勢あり、田頃家（地名）を過ぎ、今貝（地名）に至りて平湯溪と蒲田溪との合流點に達す、程遠からざれば寶橋を渡りて、村上神社を拜し、退却して蒲田溪に入る、硫黄岳最早眼前に聳峙し、穗高、槍等の諸岳、天を衝いて、其左方に聯列す、午後三時蒲田温泉に着、松下旅舍に投ず。

舍主朝成氏は、稍文學ある壯年なり、此夜明日の登山に就て議す、予は此日槍、穗高、笠の淸姿を近く見しより、多年の宿望一時に湧き來り、何れか一岳に登らん念抑ふる能はず、遇々舍主朝成氏、切りに笠ヶ岳の奇と、其登路の易きを語る、此に於て先づ笠ヶ岳登山の說漸く勝を占め、遂に議決す。

十七日午前三時、輕裝して朝成氏を導者とし、闇を破つて勇ましく出發す、橋を渡りて左岸を行く事二三町、河岸より盛んに蒸氣の上騰するあり、之を蒲田の地獄と稱し已に此邊一帶火山の現象を示す、露深き草莽を押し分け、進むこと里餘、天漸く明く、硫黃岳右後に在り、穗高岳前に在り、槍ヶ岳尙其奥にあり、忽ち右岸の谷間より錫杖ヶ岳つと顏を出す、數本の杖を並べ樹てたる如く、草木生せず、全く奇石より成る、之れ笠ヶ岳に連りて、西に聳ゆるものなれども、遠方に見えざれば、餘り高からざるべし、右俣川の危橋を渡り、中崎小屋に達し左俣川を溯る、此二溪何れも槍ヶ岳より發源す、水量甚だ多くして徒涉すべからず、左俣川に架せる、長四五間の丸木橋を渡る、溪深く水急にして、橋動搖し、頗る危險なり、一人づゝ渡る、脚震ひ冷汗腋に溢る、幸にして一行皆渡り了するを得、初めてホット息をつく。

左岸に沿ふて林中を行くこと數町、川に下り、岩を攀ぢ。流を渡り、遂に一溪あなげ谷に入る、此谷は笠ヶ岳の直下にして、之より漸く奇景となる、兩岸の岩壁削立高く天を摩し、恰も家の軒の如く蔽ひ、岩燕其軒裏に巢を營み、數百羽飛翔する樣、蝶の舞ふに似たり、忽ち行手に方り、大雪溪を現す、千歲不滅の宿雪數町に連り、凝固して地盤を形成し、溪水其下底を潛行し、天然の隧道をなす、雪の厚さ十數尺表面凸凹波形をなし、粗にして滑澤ならず、傾斜急なれども、之を登るに思ひしよりも容易なり、盡くれば兩側の削壁益々高く、溪水數十階の瀑布となり、植物は全く高山性のものに變ず、仰ぎて笠の絕巔を眺むれば、壁上の梅樹を隔てゝ、半月將に岳頂に沒せんとし、冷風衣を透して、爽に、既に予等半は天界の人と化したる感あり、右側に削壁自ら洞孔を穿ち、中を透して天を望むべ

し、之を「あな岩」と稱す。又大雪溪二ヶ所を通過す、第三の雪盡さんとする所左側の岩壁に高三十餘間の瀑布あり、白玉を碎きて天より撒くが如く、佳景言ふべからず、登ること數丁、急峻なる叢を分け登り、左方の岩壁を一直線に攀づ、之を越ゆれば又數階の瀑水あり、其削壁を横に進み、尚登ること數町樹木既に盡き、草帶に入る、漸く溪水を上り盡し、傾斜稍緩なる山腹に達す、黄白紫紅百花滿開し其長ヶ數寸、全山を蔽ひ、天上界の花園に入る、其美其艶言はん方なし、之を踏み分つゝ上れば小池あり、清冽掬すべし、假りに御手洗池と命ず、假松一面を蔽ふあり、之を踏分け登る數町にして、第二絶頂に達す。

穂高、槍は一溪を隔てゝ屹立し、恰も予等を對坐して語らんとするものゝ如し、白雲忽ち來り、忽ち去り、奇態萬狀皆快と呼び、偉と叫び、壯嚴の感に打たれ、純潔崇高を仰がしむ、之より馬脊の如き嶺上を北西に進み、雪上を過ぎ亂岩を上り、終に第一峯に達す、測量臺下に座を占め、眼を四方に放つ。

西の方白山山脈東北に連亘して、能登半島となりて日本海に突出し、内に富山灣を抱きて、高岡平野を蜿蜒白蛇の如く流るゝ庄川を呑み、又其内廓には赤谷山系、或は低う或は高く、白山山脈と歩調を合せて、東北に走り、森茂・天生・三ヶ辻・金剛堂・白木峯等の諸山を連續して、終に本岳の北、双六の溪谷を隔てゝ、槍ヶ岳より連れる北ノ俣、鷲羽、有峯等の諸岳を相提携して、越中に突出して立山となり、東南に面すれば、槍、穂高の後に、大天井・蝶・霞澤の諸岳屹峙して、日本「アルプス」幅十里の山岳脚下に簇る、西南には盛に噴煙せる硫黄岳の後に、乘鞍の大岳御岳の峻嶺之を擁し、遠く信濃の諸山折り重りて、大波激浪の如く、我飛騨邦内の山々は、大小數十の脈を起して、縱横に走り、高山(タカヤマ)市街附近の平野、一一指點するを得、嗚呼予輩生れて朝夕此上の清姿を望み、一度登りて山靈に接せんとの宿志を遂げて、此頂巔より展望を恣にす、正に天界に生れたる心地して、爽快濶大、最早我身は神に化したるかと疑はる、傍に祀れる神祠を拜し、恭しく謝辭を述べ、各自氏名を記して、之れを祠中に納め、父母に別

るゝ如き想はしたれども、日の暮れんとするを恐れて、下山の途に就く。

行々植物を採集して、背嚢に藏め、もと來りし道を下る、杖を前方に投げては、兩手を岩に衝き、身を吊しつゝ亂石を下る、又杖を拾ひては投げ、全然手にて歩行するに異ならず、大雪溪に下りて、後を見上ぐれば、絶巓白雪漸く生じ、見る々々ムラ〳〵と殖え行く、雨の來らんことを恐れて、各全速力を以て進む、予は白川村に在りて、雪上を滑るに馴れたれば、試に杖にて滑り下らんとす、されど表面凹凸甚しきを以て、速力鈍し、依つて着たる莫蓙を敷き、之に乘れば直に走り出し、其速力自轉車も及ばず、一瞬數町を下る、快去りて恐懼の念生じたれども、騎虎の勢中止すべからず、運を天に任せて下る、莫蓙破れ雪片氷屑衣袂に入り、寒氣身を襲ふ、幸に岩に衝突せずして止り、毫も負傷せざりき、暑天雪中遊戯を恣にする、未曾有の擧なり、下り〳〵て左俣川に出で、急湍を徒渉す、水深く腰を沒す、冷濕堪ふべからず、夫より左岸を下ること里餘。右俣川と合する中崎小屋に到れば、日全く暮る。

茲に於て松火一、提灯二を點じて進む、忽ち電光閃々、雷鳴耳を劈き、暴雨瀑をなす、全身河中に在る如く、袖袂濡下る、松火滅し提灯破れ、再び火を點ずる能はず、僅に裸蠟燭を點じ、之を腋下に藏し、只脚下を照しつゝ進む、腹は減り、衣は濡れ、雨は益々甚しく、加之丈に餘れる草は、道を塞ぎて、頸といはず、面といはず、所えらばず摩擦して、痛言ふべからず、一行悉く死地に陷る、一友足を踏み外して、眞逆倒に谷に陷ち、辛じて救ひ上げたり、午後九時漸く宿舍に着き、餓鬼の如く食ひ、鯨の如く飲み、温泉に浴して、初めて蘇生の思あり、翌日は一日滯在靜養の議を發する者あり、依て午前は入浴、午後より中尾嶺を越えて、信州上高地温泉に投宿するに決す。

十八日正午、蒲田温泉出發、橋を渡り、蒸氣噴出口たる蒲田地獄を觀察し、明礬採取場を檢し、中尾に至る、中尾は硫黄嶽の一面なる、山麓に位し、一溪出づ、戸數十四五、畑地能く肥ゑ、桑麻菜豆粟稗

等に適す、某家に就き昨十一月硫黄岳噴出當時の狀況を糺すに、曰く著しき鳴動なく、降灰を覺らず、只例より噴烟非常に多くなりしを驚きたるに過ぎず、と直に急峻なる山腹を登る、古來の信州路なれば、道狹しと雖も、正確に一條の坂路を形成したり、上ること一里半、嶺上に達す。

此處硫黄岳の中腹以上に當り、其形別に一個の山形をなさずして、硫黄岳の一面凸起して。東北に延び、鞍狀をなす、古來燒山峠又は中尾峠の名あり、古昔は御番所を中尾に設け、通行を檢せり、路傍樹根腐朽したる所より、盛に水蒸氣を噴出す、試に其中に入り、之れを踏むに熱氣甚し、左方の小高き部は、三十餘ヶ所より噴烟し、水蒸氣のものは白く、亞硫酸瓦斯のものは赤し、一々近いて之を檢するに、大なるもの其口徑二尺、小なるもの蜂窩の如し、其硫氣口の緣邊には、硫黄華凝結して黄色を呈し、硫臭烈惡鼻口を衝き、近つけば昏倒氣絶するに至る、噴口の大なるものは、シュー〳〵の音を發し、烟氣の上騰二三間に及ぶ、一行試に岩石を運び、徑二尺許なる水蒸氣口を塞ぎ、更に土砂を以て之を密封せしに、其噴力之を能く排出吹き上ぐるなし、只小隙を求めて、漏出するのみ、硫黄岳北東二面を觀るに、數百ヶ所より噴烟し、就中三四の大なるものあり、絶頂の煙は其上昇百數十間の高さに及び、此處よりは其周繞の岩壁に遮られて、其噴出口を認むる能はず、明朝の探險に讓り、本日は信州方面に下山す。

急峻なる迫目の路を下ること一里平原に出づ、此所は梓川の沿岸にして、所謂上高地高原なり、落葉松栂の森林にして、草本植物皆高山性のもの繁茂せり、上流即東北を指して行くと數町、日暮上高地温泉に着し、投宿す、浴舍は平屋建一棟二階建一棟を連接し、浴槽二個あり、温度身に適し、清澄にして爽快なり、海拔五千七百尺、氣候春日の如く、梓川を隔てゝ霞澤山前に峙ち、硫黄岳右後に、穂高岳左後に、槍の高峰其北に聳ゑ、殘雪溪に斑々たり、黄鳥樹間に囀々たり、況や奇草珍卉の滿開、芬香鼻を撲ち、殘月曉露に宿り、凉風衣袂を襲ふに於てをや。

十九日天明、上高地出發、もと來し道を上り、午前九時中尾嶺の頂に達し、密生せる熊笹を押し分けて攀づること五六丁にして、兀砂燒岩の磊々たる急斜面となり、全山硫氣地を被ひ、惡臭天に滿つ、先なるもの誤て岩を踏めば、忽ち滑り落ちて、後なるもの累卵啻ならず、互に警めて一列横隊となりて、攀づること二丁ばかり、之より岩壁となり、偃松岩隙に生じ、禾本科莎草科の小植物岩面を蔽ふ、左右兩峯の中間より、遂に頂上に達す、山岳會員の樹てたる燒岳登山紀念と記せる、一小木標あり、數日前に登りたるものゝ如し、對面に一峯あり、三峯皆巖より成り、內側面の偃松は悉く枯死し、恰も白骨累々たる樣を成す、三峯の中央部泥灰堆積し、左右二溪に押し流す、噴煙口は峯頂にあらず、又三峯鼎立の中央部にあらず、各峯の腹にあり、噴氣悉く亞硫酸瓦斯にして、臭烈近つくべからず、久しく、岩蔭に隱れて風向を伺ひ、噴氣の直騰を待ち、烟下を潛りて中央部に走り込めば、此所に噴口に近きに關せず、地位稍低きを以て、硫氣に襲はるゝことなし。

此山の位置たる、信飛の境に峙ち、古昔より硫黃岳の稱あり、燒岳と稱するは、東北に延びたる鞍部、即中尾峠の稱にして、飛州志によれば燒山嶺の名稱を附せり、依て硫黃岳と稱するを以て、妥當とす、燒岳と記せる書多しと雖も、省實地を知らざる徒が、机上の想像にして、決して兩岳存するにあらず、硫黃岳一部分の名稱なり、北は吉城郡上實村大字中尾に傾斜し、西は同郡同村大字一重ヶ根に傾斜し、南は同郡同村大字平湯と、長野縣南安曇郡安曇村と國境をなせる、阿房嶺の方に傾斜し、東は同縣同郡同村大字上高地に傾斜す、飛驒山系の主脈に屬し、南の方乘鞍岳より延び來り、阿房峠の低部を經て、此硫黃岳を崛起し、口穗高、奥穗高の穗高岳山彙に至りて、急に高く、槍ヶ岳山彙に至りて最高峻に、漸く北進して鷲羽岳となり、二脈となりて越中立山山脈と、後立山々脈とを起す、硫黃岳の東方溪谷は、梓川たり、北方溪谷は蒲田川たり、西方溪谷は平湯川たり、蒲田川を隔てゝ笠ヶ岳に對し、梓川を隔てゝ霞澤山に對し、平湯川を隔てゝ平湯峠の山脈に對す。

更に硫黄岳の狀態を觀察するに、頂上三峯の內側面中腹に、三條の大裂隙を生じ、其長各二三拾間、裂目の中に、更に圓形の大噴口五六個つゞを生じ、各二三間宛の間隔あり、口徑大なるもの五六尺、噴出の硫氣勢凄まじく、峯頂五六十間の高さを沿ひて上騰し、尙中空に昇ること五六十間にして、煙四散す、其中央低部の堆積泥土、厚一丈乃至二丈、面積凡一段歩餘あらんか、試に噴口に走り近づいて、礫を口內に投入するに、孔內深く落ち行く音を聞く、又枯枝を口內に投ずるも、直に燃ゆることなし、其鳴動の如き、地下より響くにあらず、噴口邊に於て空氣と摩擦して發するものなるべし「シュー〜〜」と音してドン〜〜と發せず、世の新聞雜誌に記載せる探險記の誇大なる、人を迷はしむること少なしとせず、沈着熟察せば、餘りに恐るべきものにあらず、噴口に近づいて硫黄華を採り、口邊の岩石を割り、堆泥を集め、此處に二時間餘を費し、下りて中尾峠に至り喫飯、再び上高地高原に降り、梓川の沿岸硫黄岳の麓なる山腹を南に廻り、阿房嶺に達す。

平湯に宿せんとするものと、白骨に投せんとする者と、一行兩說に分れ、遂に白骨說勝を占め、之に向て發す、暴雨に逢ひ雨水莫蓙を漏りて、衣服全く濡ひ、冷濕堪ゆべからず、加之墟坶質の急坂、足滑りて仰向に倒れ、白衣を汚して見苦しく、毒蟲出で來りて頭を螫し、其苦しさ限りなし、漸く白骨に着し、湯元齋藤方に投宿す、出す所の葛湯に冷濕を忘れ、一浴爽快となり、室內の清潔と待遇の懇篤とに疲勞を醫す。

二十日午前八時出發阿房嶺に達し、一昨日來登山したる硫黄岳を望み、なつかしさに堪へず、暫時ながめたる後、嶺を降り、平湯溫泉に着、岡田旅舍に投ずれば、高山の知人入浴のため、數人來り居たり、一行無事登山を果したるを祝し小宴を開き、笑ひ騷ぎて夜を明し、四人は直に高山に向ひて歸り、予等三人は、尙入浴して、午後より平金礦山に向はんとす。

二十一日午後一時出發、平湯嶺を越ゆ、途中此行に同行を豫約して支障のため、予等に後れたる友

人志賀兄弟に逢ふ、依て經過の大要を語り、相別れて顧れば、笠ヶ嶽遥に予等を目送するものゝ如し、旗鉾より平金に至り、楢谷旅舍に投宿す。

二十二日私立學校を訪ひ、授業を觀、校長高橋氏の案内に依り、採礦精錬の事業、並に設備器械を巡視し、午後四時出發歸途に就く、小野橋にて日暮たり、夜行に決し、高山町に着せしは正に十時を報ずる頃なりき、鍛冶橋畔、瓢亭にて飲食し、各別れて家に歸る。

# 本曾駒ヶ嶽（大原方面より登る記）

鵜殿正雄

## 一、三十六峯八千谿

三十六峯八千谿とさへ云へば、愛山家は大抵木曾駒ヶ嶽を連想する位で、古來より人口に膾炙する處である。今其の高名の原因を探ぬるに、山光水色の良好―江山の絢美と位置が主なるもので、植物の豐富●良材の産出●展望の佳良等は、寧ろ近來の唱道にかゝり、其中に掲ぐる程の事でないと思ふ。で一概に江山の絢美を云へば同系統（花崗岩）の中國山脈●甲斐駒山脈●常念山塊の中には、中々勝景の個處がある。されど中國山脈は、位置こそ畧ぼ近畿で可也であるが、高原性で嵩高美に缺けてゐる、甲斐駒山脈●常念山塊は、反之嵩高美に富んでゐるも其他の美點に、遜色がある、且つ中仙道を遠く距つて居るので、往時あまり都人士の目に觸れなかつた爲であらう。是等の諸點により本山は、前掲諸山よりも一歩優越してゐはしまいかと思ふ。

かの三十六峯と號れとる雲を呼び風を截る奇怪な辭嶺は、南北に屏風を樹てた如く十餘里にも及び、

其山頂から絞り出る八千谿水は、岩間を傳へ木の根を潜ぐり、恰も梢の幹につくやうに相集りて、茲に七笑川・八澤川・滑川・伊奈川等數條の谿流となり國道を横つて遂に木曾川に注ぐ、其間水は雪の如き花崗岩に濯はれて彌よ清澄を增して來る。又山麓を畫く蔚蒼とした美林は、翠色が滴らんとしてゐる。其他涓泉・奔湍・飛瀑・白砂青松と相映ずる等、是悉詞人の寂しき心を振はしむる者である。

駒が根の峰のしら雲むら消えて
春は日まじにはひ廣ごれり　　青嵐

七八月の交、頂の谿間に越年の雪を望む時は、汗に苦み行に艱む旅客をして、歩を止めて覺えず快哉を叫ばせるであらう。

嶺の雪に麓の汗を拭ひけり　　壽角

伊那の溪蘇溪に比べては、溪流森林の美に乏しきも、猶田切の諸溪がある。山頂を望むの偉觀、裾野の壯景、亦捨難き風情である。

今假りに此連峯を取り去つて見たなら、どうであらうか、たとへ西に雄大な御岳があつても、高邁な赤石山脈が東境に扣へて居ても、南信の風色は頓に寂寥を感じ、復び癒すべからざるに至るであらう。此山が與かつて木曾路の風光は、幽壯に活躍するの趣を生じ、是が失せて伊那の勝は、甚しく其美を損すると云ふも、決して誣言でない事と思ふ。

是本山脈が呱々の初聲を擧げた當時から、動と靜との二者終始間斷なく相爭ひ、勝つもあれば負くるものもあり、爲に山頂には嚴めしき峰や堅き壘を築かれ、山麓には深壑迅湍等をと、漸次這般の大消息を持ち來したのであらう。三十六峯八千谿の由來、また遇然でないのを認め得るのである。

かばかりの名山であり乍ら、文學に科學に未だ一つとして精透適切の紀文を見ないのは、實に遺憾の至りである。是不肖を省みず駄文句を連ね、世の愛山家旅行家に向つて、切に登攀研究を望む次第

である。

## 二、登山路

曾て福島にゐた時の事であつた、上松(アゲマツ)よりするも大原(チーバラ)を經るも、頂上迄五六里位で、御日山(ひみさ)が出來る所から、上松から二回大原より一回登攀し、事故あつて内一回は赤穗(アカホ)に、一回は坂下(サカシタ)に下つた。昨年八月南信に遊んだ時、復第四回の登山を企てた、が毎度案内者無しで、大失策の無かつたのは僥倖とは云へ、本曾溪と伊那方面の地理を詳しく知つてゐた爲でもあらう。

夫れで駒の登路は、第一を上松道、第二を大原道、共に本曾谷よりするもの、第三を宮田道(ミヤダ)、第四を坂下道、共に伊那方面よりするものとある。其他赤穗からするものは、山麓で宮田道に合し、西箕輪から内萱(ウチノカ)を經て登るものは、八合邊で坂下道に合し、福島から直接八澤川に就きて登る道、是も八合邊で上松道に合するもの(此道は水に不便だから、近來登るものが絶無だそうである)などあれど、大體前の四條と云ふてよい。此内で宮田道は「山岳」第二年三號に、上松道は「山岳志」に說いてあり坂下道は自分も精しくないから共に省き、大原道を紹介しやう。

今各登路の難易優劣を表示すれば左の如し。

| 名稱 | 達頂里程 | 道路の難易 | 小屋の有無 | 水利 | 途中の展望 | 案内者の便否 | 優劣 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上松道 | 約四里八丁 | 稍易 | 有 | 良 | 良 | 得易し | 優 |
| 大原道 | 約三里半(七笑より) | 難 | 無 | 稍否 | 稍否 | 得難し | 稍劣 |
| 宮田道 | 約五里 | 稍難 | 有 | 否 | 良 | 得易し | 稍優 |
| 坂下道 | 約六里 | 稍易 | 無 | 稍否 | 稍否 | 得難し | 稍劣 |

◎木曾駒ヶ嶽　縞殿

以上は其大要を記せるのみ。登降は各別路を取るを、趣味多しとなす。標高は御岳より稍低きも、優に二千七百米突以上を算すべく。嶮は御岳の乘鞍(野麥乘鞍)に過ぐ。然れども少しく登山の經驗あるものは、案内者を要せずして登攀する事を得。但し特殊の採集家、未經驗のものは、必ず案内者を賃すべし。案内賃は。一日一圓と見れば充分である。

## 三、福島(フクシマ)——小澤(オザワ)——七笑(ナナワラヒ)

昨夏(四二年)八月一日西野から御嶽に登降し、翌日は味爽に出發する積なのが、遲れて六時。西野、地藏の二嶺を越えて五里あると云ふ福島に着いたは九時半。時間も體力も、もう大方は三分通りを耗(なら)した。懷かしき駒ヶ嶽の偉容に接すべく決心した。

もうこうなると、心はいつか頂上に向つてゐるので、足の、時間のなどゝ考へてゐる遑がない。友人の家で中食もそこそこに、西野から伴れて來た、團飯、麥稈帽子を其儘供に命じ、十時に程に登る。

十日も二十日も旱々と照り續いた上、鐵道工事で車馬の往來が頻しいから、絶えず土煙が立颺つとる。こんな道を一二里も歩いたなら、汗と土とで全身に灰神樂を浴びたようになつてしまう。路傍の草木も同樣の味をなめさせられてゐるので。吾々許ではないのである。折々洪水を出して、遠慮なく沿岸を荒して行く本曾川も、此旱天の折、埃鎭めに細流の一も頒ち、撒水をしてやらうともせで、ひたすら西南に向つて流れ行くのである。

反對に自分は、土煙の中仙道を東北へと指し、福島から三十町許の新開(シンカイ)村上田を過ぎ、間もなく小澤とて、二軒ある掛茶屋の前に來る。時節柄御岳行者の來往が盛んであるので、店頭が暗い程隙間もなく麼(マネキ)(講社の目印)が懸てある。先の家に立寄つて、埃を拂ひ乍ら主人に山の樣子を尋ねたが、一向

要領を得ない。朝夕眺めてはゐるものゝ、さて此附近から登つたものは稀であるので、知らぬのも道理なのだらう。草鞋を穿き代へ、こゝを立ち出づれば、すぐ小澤川、又七笑川とも云ふ。源は駒の北から出て西北に折れて來るのである。到る處花崗岩の中を通つて來るので、水は清澄碧玉のやうだ。殊に沿岸は風化水蝕の作用を劇しく受け、夕陽殘照と映じては純白に光り青松が其間を點々と彩どつてゐる。海道でない此山間にも、白砂青松と云ふ風景が現れてゐるのは妙である。黑く白く塗られた七笑の釣橋、木曾八景の一、駒ヶ岳の夕照は、この附近からの眺めである。後方には幽かに御岳の暮雪を望む事が出來る。橋を渡つて左側は、日義村七笑の部落、曾て此處に、銘酒味淋を醸げる翁媼があつて、よく駒ヶ岳の事情に通じてゐたが、今は世を去れるにや、影だになし。

## 四、七笑——大原

國道を離れ東南に向ひ、爪先上りに細逕を辿つて行けば大原とて櫛・赤松・枹なんどが疎らに立つてゐる（又前に陳べた七笑橋を渡るや否や、右に折れ、左りに折れ、田圃の小畦を二三丁して本道に合するもよし）平野。麓から西北に向つて開け、兩側は駒の支脈で限られてゐる。縱一里橫十丁許り、木曾路では一寸目につく平だ。仰げば前岳（伊那に向へるものとは別）は濃綠の偃松で、頂を飾り、背に長さ十間もあらうと思ふ大岩（土俗駒岩と云ひ、岳の名は是れに因めりと云ふ。『山岳志』の追補には、玉ノ窪の左側に駒石あり、山の名は此石形より出づと言ひ傳ふと。又其本文には、山東の方に馬の形したる大岩あるを以つて號くるとも云ひ、云々と記されてある。何れが眞か定め難し。今は之を考證するが主ならねば疑を存して後考を俟つ）を負ひて向ふ向きに低頭してゐる。其上方の主峯北岳（名稱自詮）は、銀色のメタルを胸にさげ、多くの猛將耆宿を從へて高く雲漢を突き破つてゐる。いかにも三十六峯もありさうに見える。原を通り盡して橋を渡ると新開村大原（海拔約七〇〇米）と云ふ十五六

戸の寒村。此處で山の模樣や案内者の事を聞かうと思ひ、行者某の家を尋ね、晝寢してゐた主人を起し「時間が少し晩いが案内者はあるまいか……」。「今は野良仕事が急がしいでないぞう、昨日は山開きの爲め、自分の處で二三人驅つて登つたが、未だ何處の小屋も番人が行つてゐねいから、其仕度でないと行けねい」と云ふ。此處で仕度を仕直してゐては、今日の間に合はないから行ける處迄行つて見ようとて、出掛けた時は、零時を少し過ぎてゐた。

## 五、大原——廢屋

村を離れ、汗を絞り乍ら急坂を登り、赤松の群立ちの間を潜つて數町行けば、小芝原がある、次いで兩側の山が迫つて、溪流は足下に來る、右側の山腰を廻つて出ると、七八丁もあらうと思ふ秣原、一面に四五尺の長けに萱が茂つてゐる。杣人の往復する小逕が幾條もあるが、先づ其右を採る、結局向つ端の眞ん中より稍右に偏つた處に出る覺悟で、行けば間違いはなからう。原を越ゆれば樅・栂・楓・花柏及び樺類の蔚々と繁つどる針濶混淆林。玉なす汗も忽ち治まつて、清涼を覺えて來る。

あたりの朽葉や鮮苔は、柔く絮の如うで、踏む度毎にブクブクする、其上には淡白にしてきさりよい稜葉草が、一ぱいに滿ち、後れ花が二つ三つ可憐に名殘を止めてゐる。こゝ數丁進めば、右方から來る流れに突き當り、是に沿うて登る道と、此流れを横ぎり、本流について木挽小屋に行く道と二筋になる。本流についても行けない事はあるまいが、また何人も通つたものがないさうである。間違はないように右方支流につきて、四五丁登り、前岳の偃松・殘雪の下から絞られてくる清冽の溪水に投じて、足の疲れを濯ひ、對岸に移り、四十度近くの急峻な林の中を葛蘿折りに登つて段々と南の方に向ひ、老木の朽ち倒れたるを打ち越へ、又は潜りぬけて、進む事凡そ半里、五合目と覺しき處に到れば見るから哀れな潰れ小屋がある、其昔は二間四方もあつたらう、今では全く朽ち果て、只往事の盛な

りし蹟があり、あちこと偶ばるゝのみで、一夜の宿を借りらるべくも思はれぬ。溪流の音はいつしか途絶え、木の間を漏れて來る異禽の鳴き聲が、寂寞を破つて響き渡るのみである。傍への杜鵑花・石楠などの木蔭より滲み出るのは、苦の雫だらうと思ひ、近よつて二口三口試むるに、渴いてゐるゆゑか實に甘露のやうである。かゝる旱天の折もなほよく此靈泉を給し、渴を醫して呉れた慈悲深き天の母公に向つては、感謝の辭を呈せざるを得なかつた。やがて破れ小屋に邉を告げ、猶も山深く分け登つて行く。

## 六、廢屋——八合目

一日に二十里餘の道も屢ば踏んで見た事があつたが、近來歩み馴れぬ爲めか、又は十時頃から御日山をせねばならぬと氣を揉んだ爲めか、御岳以來睡眠不足の爲めか、今日の八里の山道にいたく勞れたのである。だるいやら眠いやらで五歩行つては立ち止まり、十歩登つては休み、はてはたまらなくなつて、知覺もなく木の根枕に夢路を辿つたのである。

日は猶豫なく西に傾く、梢間を漏れて來る日光が强く我面を射たので驚き覺めて見ると餘程元氣づいてゐた。そこで勇を鼓し、漸馬背狀の處につく。海拔已に二千米突近くもあらう、梅・岳樅・白檜・唐檜などの高さが著るしく減じて來た。此處を拔け五六丁で前岳と本岳とに行く分岐點、以前は木標が植てゝあつたが已に朽ち倒れ字體も不明となつてゐる。前岳に行くには、是から右に岐れて七八町だ。途中岳樺や偃松が多い。頂には、前述べた通り、駒岩と云ふ大岩、其他大日本武尊を祀れる小祠と三角點とがある。寢覺・福島・七笑等手にとるやうだ。大そうの廻りにならぬから、初のものは登つて見るがよい。

分岐點の處から左に岐れ尾嶺を越して前岳の陰側に出る。今迄とはがらり變り、針葉樹は極めて稀

◎木曾駒ヶ嶽　鷲殿

でミヤマハンノキ、ミヤマカンバ●ミヤマナ、カマド●ミヤマザクラとて、坊主の大傘より、づつと大いミヤマを冠むつたやつらが主もになる。急な登りではないが、峻しい山腹を横に是等の樹枝に縋つて行くのだから、枝に跳られたり突かれたりして中々骨が折れる。絲立や庇の廣い冠り物は、邪魔になるだらう。辛抱して行くと峪に出る。いつにか高山植物帶に這入つてゐるので、車百合●オニク●等がある。前岳から本岳に行くには、頂を乘り越し此處で合ふて行くのである。峪を過ぎて小さき山腹を周れば、黝色に鏽びた大花崗岩塊の重疊してゐる磧。殘雪と偃松とが始めて目に入る。此處が八合目として一息する。どちらを見ても險しい岩山許聳え立ち、白地の肌が夕日を受け稍赤味がゝつて輝やき、空は藍色を含んで凄い程冴え亘つてゐる。いざ出發と時計を見ると、もう四時を少し過ぎてゐる。幾らあせつても絶頂迄は猶一時間餘かゝる、よく夫が究められたにもせよ、歸路は半途で夜に入つて頗る困難する、山宿りにしては小屋番は居らず、從つて糧食が缺亡すると云ふ破目になるので、遺憾乍ら再登を期して歸路につき眞驀に前路を轉げくだる。七笑に出た時は空が段々と薄暮れ行き、星二つ三つ輝いてゐた。

肝要の所で筆を止めるに忍びぬから、八合目より頂上迄は、三十八年十月八日登攀した時の概況を述べる事にする。

## 七、八合目——玉ノ窪——絶頂

前九時、前岳の頂上を辭し、八合の磧に出でゝ、山嘴一つ周ればそこが川の水源地だ、向ひはザクザクとした花崗岩の砂礫が斜に垂ら懸つた、いと峻しい崖、北に面してゐるので年々八月末日迄は殘雪があるさうであるけれども、中仙道では見えない。二三丁の間を匐ふようにして此崖を登り盡すと、九合目即ち玉ノ窪。此處に岩石を積み重ねて防風墻とした、可也の小屋がある。年々八月中旬から九日末日迄は、小屋番が居るさうである。上松から來る道も此處を通過する。是から絶頂迄八丁、登る

に從ひて偃松は益々減じ、頂に至つて全く盡きてゐる。

花崗岩の重疊してゐる間を跳り越え、又は之を避け、十時漸く絶頂に攀ぢ登つた。頂は一面に灰白色の爛砂に充ち、大體の形が鍋を伏せた通りで、麓で見るような荒羅漢ではない。北隅には駒ヶ岳神社の小祠、西北には腰をかゞめて這入り得べき小屋、東南には一等三角點、互ひに鼎足の如うな位置に建てられてある。

## 八、絶頂の展望——地藏ヶ岳——錫杖ヶ岳

折よくも快晴でわつて展望を恣まゝにするを得た。北アルプスの連峯は西北に方り、昂々然として半天に沖し、南乘鞍よりも北白馬に至る迄に、九千尺若しくは一萬尺を超ゆる豪の者十數個、各々得意の雄姿を振ひてズラリと聯んでゐる、北は松本平善光寺平を臨み妙高火山群に及びて盡く、八ヶ岳・淺間・岩菅の火山群は東北に濃く淡く起伏する、東は白根山脈・甲斐駒山脈・富士及び甲信境の傑物簇々群立し甲斐の盆地は其間に蹴れる、東南方は白蛇の如きうねりをなす天龍の巨川を距てゝ赤石山脈の峻嶺と相對して握手する、同胞の地藏ヶ岳・錫杖ヶ岳は南に迫り、是を越えて約二里己れと覇を爭ふべき無名の高峯（別に解く、或は宇都木岳か）が崛起する、西方は千尋の脚下に木曾溪に瞰み、一躍御岳に至り、其左肩には白山を見る、猶其左には美濃平原の一部、琵琶湖（？）等幽かに眺められる。標高の割合に展望のよい事は驚嘆に價する、或は御岳乘鞍の右に出はしまいかと思ふ。西方御岳を越えて來る風は肌を刺す如くに寒く、永く止まりかねて、此處を辭し、南東の窪地を目掛けて下つた。

絶頂から二三丁の處にある、さゝやかな水溜りは、昨今の冷氣の爲め、薄氷が張つてゐる、寒くて中々味わう處ではない。此處から東に下れば農ヶ池に行けるそうである〔池の周り四五丁、三方は岳に圍まれ、タケカンバ・ミヤマナ、カマド偃松等が岸に滿ち、水色は藍靛を湛へた如く眞青でものすご

く感じた（本項三十七年七月の實檢記）。南すればすぐ地藏ヶ岳の頂、山勢は東北から西南に延びてゐる。頂には六尺有餘の大劍と小さき地藏佛がある。頂より南麓に下る數百歩で、駒飼の小屋に達す。一名伊那小屋とも云ふ。玉ノ窪の小屋より小なれども優に十數人は宿る事が出來やう。此處から東北數丁で農ヶ池に行けるさうである。農ヶ池附近は有名な白鮮菁（ハクセンナツナ）の產地である。

駒飼の小屋の西南に逼つて錫杖をニューッと突つ立つたような恐ろしひ權幕の錫杖ヶ岳、山の名は形によつたのだらう、また寶劍ヶ岳・寶劍ヶ峯とも云ふ。近づいて探ぐり見るに、頂の廣さ三尺許、中央には石を刻んだ小祠がある。東の肩から漸く匐ひ登つたが、西方は絕壁、他の三方でも五十度近くの傾斜で、足が震へるやら目がまわるようで中々立つてゐるどころではない。是れを南安の槍ヶ岳とくらべて見るに、規模においては確かに彼の雄大を認むるも、劍においては彼に優るべう覺ゆるのである。午後一時此處を去り東方に突出する前岳を過ぎ、五時間を經て無事赤穗驛の旅宿穀屋に旅裝を解く。

附言　高山植物採收には適せざれども、秋の御山は晴澄で眺望は絕大、殊に途中色彩の變化に富める紅葉の美を、上下左右から眺める點に於て無敵である。蘇溪を解するもの此處に登臨せざれば、共に其美を云ふに足らない事を斷言するに難からぬ。

# 火山の探險と其研究

新潟縣高田中學校教諭　吉川純三郎

## 高田を發す

予は毎年夏季休暇を利用して、學術研究の爲めに旅行をなせしが、本年は特に火山の探險をなさんとせしに、予と同好の人にして、行を共にせんと望まれしは、高田中學生丸山德三郎、田中安治、丸山政治及び高田附近なる和田小學校訓導船崎重次郎の四君なり、依て予は五人の一團隊を造り、八月八日(明治四十一年)午前八時上り列車にて高田を發す、昨日は南風烈しく吹き荒さみ、夜來亦風雨甚しかりしが、今朝に至りて頓に快晴となり、夏季の旅行には屈强の天氣なりしを以て、皆躍躍して發程す。

## 信州の風光

妙高火山の東麓なる裾野を地藏ヶ原と稱す、其の裾野の關山驛邊よりは、早已に黑き火山灰の覆ふ所となり、田野は盡く黑土となり居れり、柏原驛に至れば、信越分水界の地となり、僅々一村の中にても、北部の溪流は走つて越後の荒川に入り、南部の河水は流れて千曲川に注ぐ、既に信濃に入れば、山岳の秀なる、河湖の麗なる、由來本邦の瑞西を以て稱せられ、且つ富士火山帶に當れるを以て、山は骨立し、野は裸出するの所多く、又雨量に乏しきを以て、森林少く滿目荒茫たり、故に又日本の砂漠地とも呼ばるゝ國にして、其の風光は全く北越と異れり。

長野市より少しく進めば、右方に鋸齒狀をなせる山あり、全山白くして常に雪の降りたるが如き狀をなし、炎暑の旅客も、尙、爲めに夏衣の寒さを覺ゆ、こは眞珠岩と云ふ火成岩の雲爛したるものにして、其の山麓なる安茂里村にては、之れを採りて磨粉、米搗粉を製し、盛に輸出す、而して又此の母岩中には蛋白石を含有し、時には「ノーブル」質のものをも採集せらるゝことを得べし、予は昨年此の地に至りて研究せしことありしを以て、能く其の狀況を知り居れり、次ぎに冠着山は立烏帽子の狀をなして千曲川の左岸に崎つ、海拔六千餘尺、之れが即ち世に稱する所の眞の姨捨山なり。

## 葛尾城

千曲川の右岸には阪城驛あり、こは村上義清の葛尾城址のありし地にして、我が上杉霜臺公と深き關係ある所なれば、上越の人士たるもの、須らく一遊を試みざるべからず。

葛尾城は前に千曲川を控え、後には鏡臺山を負ひ、直ぐ北には河岸に横吹の絶壁あり、南方鼠村には岩鼻の懸崖ありて、頗る要害の地を占む、城址よりは今尚、瓦又は武器を出だすことあり、村上氏の菩提寺なる圓滿寺には、義清の木像あり、驛の南端に其の墳墓あり、五輪の塔の墓石は、鎌倉に在る賴朝の墓に髣髴たり、予は又昨年態々此の地を探りし故に、坂城通を以て自任し居るも可笑し。

驛の對岸なる力石村には、摺鉢山とて擂盆を伏せたるが如く、圓錐形の愛らしき山あり、常に旅客の賞する所となる、讃岐富士なる飯野山に能く似たり、又鼠の岩鼻を超ゆれば、右方には恰も屋棟の如き長き丘陵が河岸に向て突出す、其の形は讃岐の屋島を見るが如し、予は此の地を過ぐる毎に、讃岐鐵道に乘りしが如くに思はるゝなり。

## 上田の見學

予等の一隊は見學の爲めに、上田に下車す、上田城は天正十一年眞田昌幸の築きし名城にして、德川秀忠が、ここにて苦められしことは、人の能く知る所なり、城は千曲河磧の左岸に在り、元と川の深き淵が城の下を流れしを以て、一名、淵ヶ城とも稱す、小さき天主閣は今尚崖上に在りて、鐵道は直ぐ其の下を通ぜる、本丸には藩主を祀れる松平神社、招魂社及び監獄あり、予等は之れを見、大手に在る中學校を參觀し、町の北東なる蠶絲專門學校敷地の方に至る。

北方には太郎山と稱する、高さ七千尺もあらんと思はるゝ圓き火山式の禿山あり、山上には太郎山

神社とて、當地の流行神を祀る、予が嘗て登りし際には僅に一祠字ありしのみなりしに、今は殿堂立ち、旅館備はり、登山者常に絶えずと云ふ、町の對岸、松本街道の方向に當りて屏風岳あり、南方には獨股山あり、何れも皆支那山水畫に於て見るが如く、突兀として聳え、能く行人の注意を惹く。

## 登山熱の盛なる信州人

一隊は上田を辭し午後三時半に上車し、小諸に向ふ、淺間登山者非常に多く、列車は何れも滿員にして予等は小諸迄立ち通はせり、蓋し明日は淺間登山會員の登山日に當れるを以てなり、予等は幸ひにも此の好機會に遭遇せるなり、又車中にて淺間登山會の發起者なる矢島筑水氏に遭ひ會の設立せられし所以を聞き、予等一隊も亦加入せんとを望みしに、直に快諾を得たり、氏は本年新に噴火せし燒ヶ岳の探險會に加入し、登岳を遂げて今歸途に就かるゝ所なり、氏は探險の際誤て崖下に墜ちしとて、身體各所に負傷し、繃帶を施し居られしにも關らず、仲々元氣盛にして淺間山の秀靈なる狀を滔々と辯じて止まず、予等は車中立ち通はしの苦痛をも打ち忘れて、傾聽し居れば、何時の間にか小諸に着し居れり。

## 淺間登山會

同會は豪壯なる靈獄を世に紹介せんとて、組織せられしものにして、廣く會員を募らる、彼の歐洲のアルプス登山會に倣ひしものなり、今年の發起者は長野新聞社を初めとし小諸町の有力者なり、經費は發起者の醵出と、町會の補助とより成る、小諸町が町の繁榮を謀るに如何に熱心なるかを見るに足る。

此の日、應募者の小諸に集るもの無慮三百人と注せらる、昨年は讀賣新聞社にて淺間登山者を募りしに百人餘あり、一昨年は中央新聞社にて募りしに百二三十人ありたりと云へば、本年は先づ良成績なり、上出來なりと謂はざるを得ず。

予等の小諸に下車するや、先づ登山會事務所に案内して茶菓を饗し、徽章及び洋桃引換券を渡し、登山注意書を配附し、會員をして名簿に各自の住所職業氏名を記入せしめたる後、指定の旅店に導かる、予等は小諸本町の蔦屋に投宿す、今、登山注意書なるものゝ大要を左に掲げん

一、會員は事務所につき徽章を受け取るべし。
一、旅宿未定の會員は事務所に於て案内す、宿料は雜費付にて六拾錢、茶代不要。
一、出發は九日午前三時に付、會員は二時半までに小諸小學校廳に集合すべし。
一、湯の平（ユタヒラ）の休憩所に於て會員へ水蜜桃と麥湯とを呈す。
一、淺間山頂に於て一同紀念撮影をなし希望者に頒つ。
一、應急手當の爲めに小諸醫會より醫師を派遣す。
一、團隊の解散は湯の平に於てす。

## 小諸の觀光

予等は直に旅店を出てゝ散策を試む、先づ第一に異樣に感ぜしは、裏町にある舊城の大手門を其の儘々用ひて民家となし、パン製造所、質營業、結城屋と云ふ看板を掛けわたしことなり、予も廣く各地を旅行せしが、城門をば直に商家に利用せられあるを見たるは、之れが始めてなり。

第二の大手門に至れば、懷古園と云ふ金字の大額を掲ぐ、藩老太田道一の筆なり、此の門は鐵路の直ぐ南に在り、又門の前に巨碑あり、藩主牧野康哉が此の地に於て始めて種痘を行ひし功德碑なり、其の傍に柳樹ありて樹下に一個の平らたき圓石あり、之れは關ヶ原の役、秀忠公が此の地を通過せし際、時の城主、仙石秀久之れを饗せしに、秀忠は此の石に踞し、此の柳蔭に憩ふと碑文に記しありたり。

城内に入れば舊規盡く存し、石垣の如きは其の儘々なり、本丸は公園となり居り、藩祖牧野氏を祭れる神祠あり、此の地のものは痘瘡神として之を崇むるなり、其の他小諸倶樂部、松風亭等の酒樓、茶

亭は數棟あり、園内松樹生ひ茂り、苔蒸し、綠滴り、頗る雅趣ありて夏時の清遊には最も適せり。

此の城は文安、享德の年間、大井伊賀守光忠の築きし所にして、鍋蓋城、穴城、乙女城の別名あり、城の左右には深き溪谷あり、南は千仞の斷岸絕壁ありて千曲川に臨み、碓井の關門と相待て要害の地たり、後、元祿十五年九月越後與板の城主牧野周防守重康がこゝに移封せられ、一萬五千石を食み以て明治維新に至る。

人口は八千五百餘あり、南北佐久二郡中の大都會にして、海拔二千六百尺、淺間登山口として著はる、町立小諸商工學校あり、生徒二百餘人ありて男子、女子の二部に分つ、此の地唯一の中等教育機關なりとす。

街頭にて當地の子供の歌ふ俚謠を聞けば左の如し、

小諸出て見よ、淺間の山に、今朝も煙が三筋立つ、
淺間山さん、なぜ燒けしやんす、腰に三宿もちながら。

## 淺間の登山

此の日晚食後、即ち午後九時より登山して明朝の旭日を頂上にて觀んと欲する所の百人許りの一隊あり、長野商業學校の生徒にして予等と共に長野市より同行せしものありしが、此の夜行を企て、予等にも夜の登岳を勸めたれども、予等は明朝の本隊と共に登ることゝし、登山の準備をなして寢に就きしは十一時ならき。

八月九日午前二時に起き、朝食もソコ〳〵に仕舞ひ、二時半に小學校に至れば、庭内に集まれるもの已に二百餘人に及べり、小學校長佐藤寅太郎氏先つ開會の辭を述べ、且つ淺間山に就きて觀察すべき事項の注意を與へらる。

午前三時半に出發す。嚮導者は唯々一ヶの赤き提燈を高く竿頭に揭げ、喇叭を吹奏して進む、衆皆之れに從ふ、時に東方なる淺間山頭より夜明けの明星、即ち金星昇り、光輝爛々として其の明、月の如く、一行の爲めに暗路を照らして案内をなし呉るゝもの丶如し。

山道は幅狹くして辛進すること能はざれば、一行二百餘人、單列となり、其の長さ十町に亘る暗中に裾野を進むこと一時間半にして、天漸く明く、こゝにて小憩し、又落葉松の大なる森林を通り拔け、小諸より二里六町四十七間にして淺間の第一合目に達す。

此の處は第一外輪山なる寶圓坊と牙山との割れ間の登り口なり、此の溪谷は所謂火口瀨にして之れを流下するものを蛇堀川と稱す、予等は此の川に沿ふて登るなり。

淺間山から出てくる水は、雨も降らぬに、さゝ濁。

と云ふ當地の俗歌あり、蓋し此の川のことならん、水は硫臭を發し、酸性を含み、微温を有して飲むべからず、左方、即ち寶圓坊には火山の層狀を顯はし、其の層間には方形の節理をなせる岩石の將に頭上に崩れ墜ちんとする所あり、之れを將棊の駒倒しと稱す、又其の上方に鐘狀の巨岩あり、之れをツリガヲ岩と呼ぶ、之れを仰げば將に轉落し來らんとす、右方には犬牙の如く尖りたる巨岩の數ヶ峙つものあり、故に之れをギッバ山と名づく、蓋し此の地の方言、牙をギッバと稱すればなり、此のギッバは火山岩が浸蝕作用の爲めに出來しものにして彼の不周山の天柱が缺け殘りたるものゝ如く、今にも倒れ落ちて一行を粉碎せんとす、予等は惴々焉として其の間を登る。

三合目にて昨夜の登山者の下るに遭ふ、頂上の消息を問へば、曰く曇りて不成効なりと、予等の一行之を聞きて誰かは失望落膽せざるものあらんや。

予等の一行中に女學生一人あり、眞に是れ萬綠叢中の紅一點にして、一隊二百人、四百の眼は絕えずこの女學生に集中せしに、今又下山の一隊中に女學生六人あり、朝露に濡れたる海老茶袴の雫をしぼ

もつゝ下るを見る、其の男子優りの勇氣あるには、誰か驚かざるを得んや。

四合目にて蛇堀川の火口瀨を渡り超え、牙山の方に移りて四合五勺の處に達す、之れが即ち湯の平なり、時に午前八時。

こゝは第一外輪山と、第二外輪山の前掛山との間なる第一火口原なり、小諸淺間登山歡迎所の札を揭ぐる家あり、茲にて水蜜桃と麥湯の接待を受く、此の家は本年始めて新築し、今は普請中なれども本月中旬以後には登山者の宿泊に充つることを得ん、其の榜に一小屋あり、食品を賣り、登山紀念スタンプを捺す、一捺一錢なり、之れより東四丁、牙山の下に天狗の露路（ろぢ）と云ふ所あり、時間迫れるを以て之れを割愛す、この湯の平より頂上まで廿五丁廿一間ありて、小諸を去ること二里卅丁十八間なり。

昨夜予等に夜行を勸めし長野商業の一隊中に病人出來、途中より下山せしむるの騷ぎをなし、今漸く、こゝより予等と共に登ることを餘儀なくせらるゝに至れり、又こゝにて急に鼻梁骨が痛みて迚も登られぬとて下山せるもの一人ありたり、高山にては頭痛、眩暈、動悸、息切れ等の病を起し、能く此くの如きの騷ぎを演ずることは屢々之れあり、是れ俄に空氣の稀薄となりたるが爲めならん。

之れより道は湯の平の火口原を進む、こは南北に長き新月形の平原をなし、一面に天鵞絨を敷けるが如き芝生あり、其の間に熔岩の突兀たる所あり、矮樹の簇生する所あり、皆排置宜きを得て、わざと造りし庭園の如し、而て其の原の廣さも亦大にして優に二聯隊位の兵舍を建築せらるべしとも思はる。

小諸より茲迄は北方にのみ向て進みしが、前掛山の登り口なる七合目よりは、俄に東方に向ひて登り、前掛山の急斜阪を上ぼり詰むれば九合目に達す、海拔八千二百尺なり、此の九合目は前掛山と中央火口丘（即ち第三次の噴火丘にして世人の所謂淺間山なり）との間なる火口原（ムケンチゴク）の最北部に當るなり、之れも亦南北に細長き火口原なり、（即ち第二の火口原なり）其の南部を無間地獄と稱す、內側は懸崖をなし、柱狀節理をなせる熔岩あり、集塊岩の累層あり、前掛山上より下瞰すれば斷崖絕壁をなし、若

し一歩を誤らば、直下萬仞の谷底に墜落し、四肢五體は粉碎せられても、尚且つ足らざるが如し、實に無間地獄の名に背かざるなり、地獄の南の低所を銚子口と云ひ、南方なる追分地方よりの登山口となす、尚其の南に寄生火山なる石尊山あり、其の海拔は五千六百尺なり。

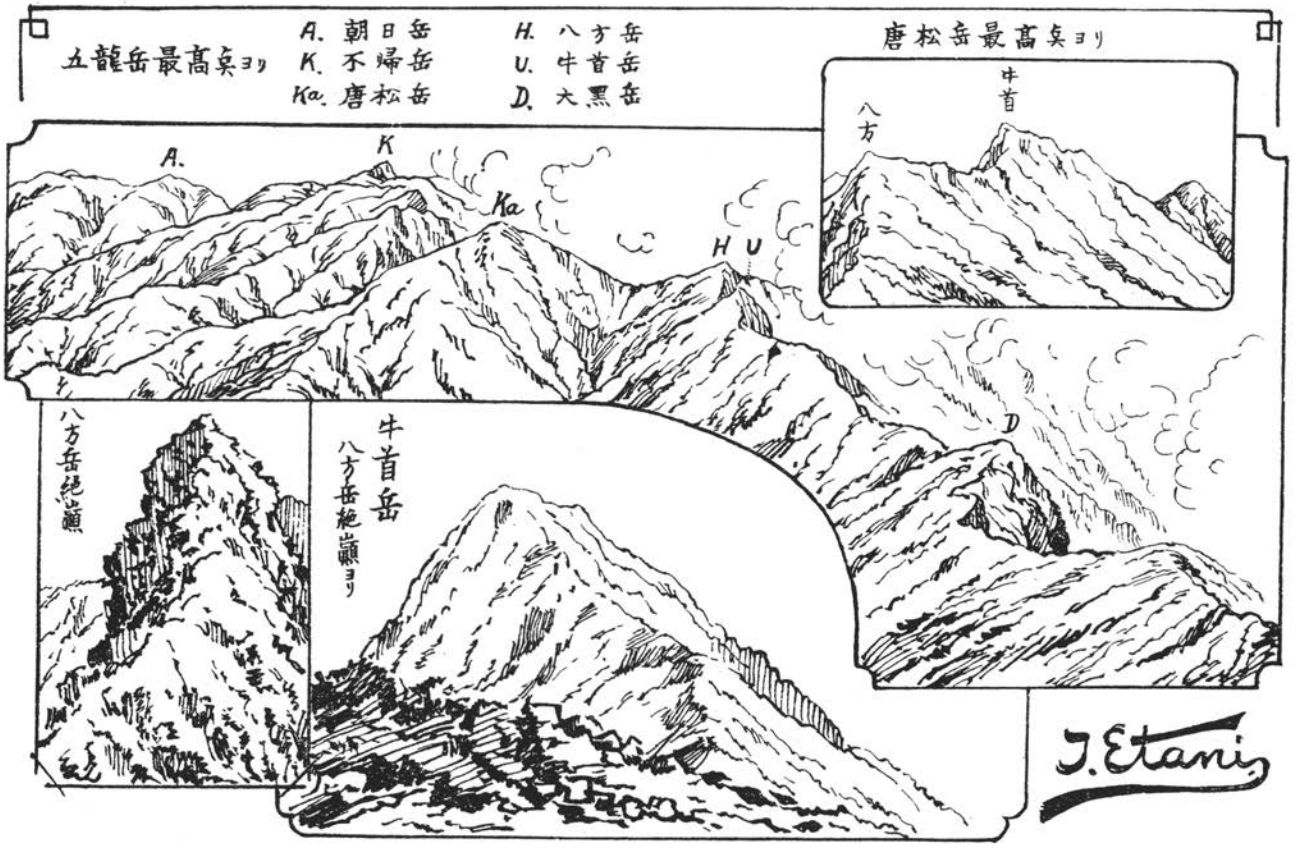
而て七合目より以上は、褐色、黑色の熔岩塊は磊砢として積み累り、灰色、赭色の火山礫は其の間に散布し、地上には寸草、尺樹の青を見ず、全く其焦膚燒骨を露出したるの所は、實に新火山たるの眞相を現はせるなり。

九合目よりは雲立ち籠め、數歩の先きをも辨ずべからず、南風烈しく吹き上げ、時に又細雨を交ゆ、但し高山の風は下界より山下に向て吹き昇り、雨も亦上に向て降る、故に洋傘と合羽、笠と着御蓑の如きも其の用をなさゞるなり、之れ亦知らずんばあるべからず。

辛うして十合目の絶頂に達すれば、噴火口、即ち俗に御釜と稱する所の周囲十町餘の巨穴より、噴火するの狀は、雷霆の轟々たるが如く、又數千百の機關車を一處に集めたる音の如し、殊に烈風が巨穴に向て吹き下ろす時には、一層激烈なる鳴動を發す、若し予等が火口邊に立たば、烈風の爲めに吹き落とされて、生きながら阿鼻焦熱地獄に入らざるべからず、死生の機、間一髪のみ、其の危險なること言ふべからず、予等は雲の切れ間、風の小止みに乘じ、匍匐して火口の緣に近づき、伏して孔内を窺へば、岩漿の熔沸する所、赤焔の迸發する狀、白煙が噴騰するの底まで、歷々として見ることを得、誠に、壯絶快絶に堪へざるなり、此の中央火口丘こそは吾人が小諸、輕井澤間を滊車にて馳するの際、常に仰望する所の高大なる圓き山にして、實に海拔八千三百尺なりとす。

## 途に迷ふ

予等の淺間絶頂に達せしは午前十時なりし、火口より南に向て人の入るべき大の龜裂あり、天明三


五龍岳最高点ヨリ
A. 朝日岳
K. 不帰岳
Ka. 唐松岳
H. 八方岳
U. 牛首岳
D. 大黒岳
唐松岳最高点ヨリ
牛首
八方
A.
K
Ka
H
U
D
八方岳絶巓
牛首岳
八方岳絶巓ヨリ
J. Etani

年大噴火の際に出來しものなりとぞ、人々此の龜裂間に入りて進まば噴火口底の大活動の狀態を窺ふことを得べし、東方にも亦長き罅隙あり、其の裂間をば輕井澤よりの登山通路に充つるなり、予等は絶頂にて而かも烈風飛雨の間に於て、團隊と袂を分ち、輕井澤の方に下らんとすれば、雲益々深くして方向を知ること能はず、不知案内の者のみにては頗る危險なりとて、淺間山研究會長なる田中直次氏は、特に予等の爲めに嚮導の勞を取られたるは深く謝する所なり、依て同氏に導かれ、下ること少時にして、剛力即ち案内者を先頭にし、白雲を衝きて東方より登り來るもの四人に遭ふ、乃ち予等は其の足跡を尋ねて下らば大丈夫ならんとて、強ひて田中氏の嚮導を辭退し、氏に分れて東方に下れば、火山灰は風の爲めに吹き拂はれ、足跡消へ去りて、また方向を知ること能はず、無暗に下れば一大火口原に達す其の平地に水を湛ふる所あり、尚ほ進めば東方に在る第二外輪山に達す、こは前掛山と同種の一部分なり、この邊、火山灰中僅に足跡の印するものあり、之れに沿うて下らんとすれば非常の懸崖なり、峨々たるな巖り進まんか危險なり、退かんか方向を辨ずること能はず、地圖を展し、磁石を按ずるも亦知るべからず、進退維れ谷まれりとは實に此のことならん、是に於てか田中氏の嚮導を辭退したるを大に後悔すれども、今更如何ともすること能はず、斯かる時の用意にもと、予等は食物を十分に用意し居たるを以て、寧ろ白雲を褥とし、燒石を枕となして山上に露宿せんとまでに決心したり、而るに先きの四人の者も亦予等の足跡を踐でこゝまで迷ふて下だり來るに遭ふ、地獄で佛に會ふたるが如く盲龜の浮木を得たるが如く、予等は皆躍て萬歳を三呼す、其の喜び實に如何ばかりぞや。

而るに多年經驗ある剛力と雖も、今日の濃霧には道を踏み迷ひ、誤りて予等の方に至れるなり、剛力は予等より茲に至るまでの經路を聞き、流石の案内者も翻然として悟る所あり、元と來し路に引き返へし、熔岩の割れ間まで戻り、茲にて暫く勘考し、漸く一條の活路を尋ねて南方に下だれり、そも

此の案内者が道を迷ひしことは予等に取りては、もつけの僥倖にして、而も亦予等の爲めには命の親なり、救ひの神なり、深く謝せざるべからず、然れども亦、多年經驗ある案内者に對して、予等の如き不知案内者が道を敎へ、やるとは甚だ可笑しく、こは予等が山上に於けるの高名手柄として大に誇りとすべき所ならんか。

南方の急斜面を下だることとて、足止まらず、飛ぶが如くに、てく〳〵と辷り下だり、小淺間山（海拔五千五百尺）の南を廻りて草津街道と、淺間登山東口との分岐點に達すれば、已に午後二時なりき。

茲に至れば天晴れて驕陽燒くが如し、分岐點に在る怪しげなる茶屋に憩ふ、此の邊には淺間葡萄として小さき灌木に葡萄と同じき紫黑色の實を結ぶものあり、里人は之れを採りて酒を釀すとぞ、予等も之れを摘みて渴を醫す、茶屋は不潔にして蠅の多きこと滿洲を旅行せしときと同じければ、長く止り居ること能はず、そこ〳〵にして出で、北西を指して草津街道に向ふ。

## 淺間山の研究

抑々火山の構成に、塊狀と成層との別あり、塊狀火山の例には三河の鳳來寺山、讃岐の飯野山等あり、又成層火山を分て、單式、二重式、三重式等となす、富士山の如きは單式にして、我が妙高山は二重式なり、而て淺間山は三重式火山の立派なる標本なり、今回は此の三重式火山の活動を研究せんと欲して、辛苦を厭はず態々茲に登岳せしなり、之れ世の所謂、登山熱に浮かされ、附和雷同して、無闇に登山を企つる者とは大に異なる所以なり。

扨て予等が小諸より最初に登りし寶圓坊、及び牙山（キツスヤマ）は第一次の噴火口壁にして、之れは唯々西部の一廓を存するのみ、前掛山は第二次の噴火口壁にして之れも亦西方にのみ存在す、中央火口丘即ち吾人の所謂淺間山は第三次の噴火の際に出來し山なり、而て南北二方面に在るべき第一次、第二次の火口

壁は或は缺壞せられ、又は熔岩、降灰の爲めに埋沒せられて、此の二方面に在る外輪山は全く見ること能はず、故に西の方は複雜にして外輪山は盡く具備すれども、東面には第二外輪山の一部分の小隆起あるを見るのみ、而て南面と北方とは單調にして一ッの圓形の山たるに過ぎず、其の南麓に突兀たる石尊山と東麓に孤立せる小淺間山の如きは、寄生火山にして所謂乳房山なり。

淺間山爆烈のことが始めて歷史上に見えたるは、天武帝の白鳳十四年三月（今より千二百廿五年前）にして爾後屢々噴火し、殊に天明三年七月五日より七日（今より百廿七年前）までの大噴火の如きは、熱灰、燒石を飛ばし、熔岩を流し、泥水を下だし、特に北東麓なる上野國六里ヶ原に流下して三十餘村を埋沒し、死者三萬五千餘人の多きを出だすに及べり、斯る多數の死者を出たせるは天明にはあらで、天命なりと洒落るどころではなく、其の慘害の甚だしきことは、伊太利のヴェスヴィオ山が西曆七十九年に突然破裂して、ポムペイ、ヘルキユラニアム、の二大都市を埋沒し去りたると同じきは、實に酸鼻の極と云ふべし。

富士のねは、絶えぬと聞くを淺間山、こゝろ高くも、たつ煙かな。　小澤蘆庵

山頂噴煙日夜燃。石焦木黑認當年。晩來猶看西風起。吹送東天一道烟。　龜田鵬齋

火山より噴出する煙と稱するものは、多くは水蒸氣にして之れに鹽酸、亞硫酸、炭酸、硫化水素、等の諸瓦斯を雜へ、時には岩石の燒けて細粉となりたるものを混ず、故に、其の噴煙は日中に淡くして朝夕に濃く、夏時には稀くして冬季には厚し、蓋し暖かなるときには發散し、寒むければ凝縮するを以てなり、則ち吾人の竈より立つ煙、烟突より出づる煙とは全く其の質を異にす。

淺間と云ふ地名は各處に在り、富士八峯の一つに淺間嶽あり、富士の南北兩麓に淺間神社あり、松本市の北、一里に淺間温泉あり、箱根の火口丘に淺間岳あり、但馬に淺間郷あり、淺間とは蓋しアイヌ語ならん、アサマとは底の義なり、即ち火口底を指せし語ならんか、富士の火口を內院と稱し、霧

島山の火口を御鉢と呼び、淺間山の火口を御釜と云ふ、何れも皆アサマの義ならん、又アは燃え、サマは横はるの義なり、尚、阿蘇山のアは燃ゆる、ソは岩石の謂ひにして、富士山のフジは火のことなると皆同一義ならん、小諸の北に諸と云ふ村あり、モルとはアイヌ語、小阪の義なり、此のモルより轉訛せし地名ならんか、故に本邦の地理を研究せんと欲するものは、アイヌ語をも亦必ず知らずんばあるべからず。

## 六里ヶ原

淺間山の裾野は南北の兩麓に能く發達せり、其の南に在るを信州の追分ヶ原と云ひ、北に在るを上州の六里ヶ原と稱す、予等は分岐點の茶屋より北に進みて六里ヶ原に入る、天明三年に流下せし熔岩は路傍に堆積し、火山灰、火山礫、火山彈の如きも亦一面に散布して、當時の慘狀を坐ろに廻想することを得べし。

原は見渡す限り、短き萱が生ひ茂り、ポツ々々と松樹を雜ゆれども、稍々下れば楢、栗の木の散點するを見る、茫漠たる無趣味、單調の廣野の中央に、只一軒の茶屋あるのみ、之れを「分かされの茶屋」と呼ぶ、蓋し六里ヶ原の北端なる草津街道の應桑村と、淺間の北麓なる大笹村とに通ずる路の分岐點に當るを以てなり。

此の寥びしき原野は一人にては迚も通ることは能はざるべし、原中に吾妻牧場株式會社所有地と記されし標柱あり、此れは元と北白川宮殿下の御所有なりしを、拂ひ下げを得て今は盛に馬を放牧せり、又附近に孀戀村共有牧場ありて之れ亦盛に牛馬を産すと云ふ、又道路の處々に白き綿屑の點々遺棄せられたるものあり、予等は思へり、こは草津入浴の癩病或は梅毒患者が、其の膿液を拭ひし綿を棄てしものならんと、若し茲に入湯せば予等の健康體に、是れ等の病毒が感染することあらんかと心配し、

之れより草津温泉に對しては愈々益々不快の感を懷くに至れり。

こゝを通る旅客は、駄馬の鞍の左右に炬燵櫓を倒に一ツづゝ縛りつけ、之れに一人つゝ入りて乘るか、或は一人して駄馬の鞍に跨るか、又は贅澤のものは驛駕籠に乘るなり、丁度、舊幕時代の旅行者を見るが如し、予等の地方にては迚も見ることを得ず、一行中年若きものゝ如きは珍らしく一種異樣に感せしならん。

予等は行程四里の燒野、渺茫たる無人の荒原中を徐々に歩し下だり、應桑村に着し、白雲館と云ふ旅店に投ず、時に午後六時なりき、本日は淺間山を上下し、又此の曠野を過ぎしを以て皆身體疲れて殆ど綿の如くになれり。

應桑村は五、六十戸もあらんと思はるゝ寒村なれども、輕井澤より草津に至るの中央に當り、元と關所を置かれし地にして、碓氷の關所と表裏相俟て重要なる關門の在りし宿驛なり、又馬の產地の集中點としても著名なり、こゝより輕井澤までは六里にして、駄馬を通ずるのみなれども、草津まで五里の間、一日に二回發着の馬車あり、應桑は實に輕井澤と草津との連鎖點なるを以て、夏季に際しては浴客の此の地を過ぐるもの頻繁なれば、隱然田舍の一都會なり、近頃此の間に輕便鐵道を敷設するの計畫あり。

## 草津に至る

八月十日朝、應桑を發す、旅店白雲館の名稱こそ實に不吉なれ、昨夜來雨降りて霽れず、白雲濛々として四方の山岳は皆其の形を匿し、予等の行くべき道さへ分らねど、一行は皆山河の跋涉に馴れたる者、爭でか撓むべき、篠衝く雨を物ともせず、進み行くこと勇ましけれ、北に進むこと一里にして吾妻川の上流に達し、濱岩橋と云ふ吊り橋を渡り、羽根尾村に至る、こゝよりは吾妻山、白根山の裾野と

なる、之れを三原と稱す、三原とは蓋し此の裾野に河原、長野原、鎌原と云へる三村落のあるを以てならん、建久四年八月三日、源頼朝が此の三原の野に於て狩りせられしことありしに、生憎丁度今日の如くに空かき曇り、雨さへ降りければ扈從の士、梶原源太景季取り敢へず、

きのふこそ淺間はふらめ、けふは又みはらしたまへ夕立の神。

と詠みたれば、やがて空は晴れ渡りたり、頼朝感賞して碓氷の麓に於て五百餘町の田を源太に給ふとぞ、予等も亦よき歌を詠みて雨を晴らさんとは思へども、夫れも協はず、雨を突き雲を踐みて進み、立石村（タツイシ）にて小憩し、之れよりは稍々小降りとなる、尙北を指して行くこと二里、三原の裾野をうねり廻り、漸く草津に着せしは正午過ぎなりき。

先づ此の町の樣子を見て後、宿を求めんとて雨の降るにも構はず、足に任せて全町を經巡り、大體の狀況を知りたる後、眞保と云へる繪端書屋にて學生の泊るに便なる所を問ひしに、長養館とて此の程も或る中學生が多數泊れりと聞かせくれければ、長養館こそ目出度名にてよからめ、昨日の白雲館にて懲りたれば、こゝに投宿することゝはなせり。

## 草津の觀察

草津は白根山（シラネヤマ）の西麓なる草津川、一名湯川（吾妻川の支流なる須川の枝川なり）の溪間に在り、海拔四千五百尺ありて避暑には好適地なり、戸數百八十、町の中央に熱湯の沸騰して出づる所あり、之れより四方に湯を引けり、故に其の周圍には三階造りの浴樓、相連り居れり、浴客は目下千五百人と稱せらる、他に西洋造りの浴館も亦二三棟あり、溫泉の湧出する所四十ヶ所に及び、湯川の源流なる殺生川原、賽の河原よりも熱泉滾々として流れ來り、全く湯の川となる、故に湯川とは名づけしならん、溫泉量の豐富なることは本邦第一と稱せらる。

温泉の性質は强烈なる酸性にして、硫酸、鹽酸、最も多く硫酸鐵、硫酸礬土、硫酸石灰、硫酸曹達等を交へ、且つ高熱なり、始めて入浴せし時には四體にしみ、若し眼に入らば飛び立つ程に刺擊するなり、故に入浴すること一週間に及ばゞ、四肢殊に兩腋、股間の如きは最も糜爛して歩行し難きに至る、斯る時には脱脂綿を當て、繃帶を施して褥中に呻吟するに至る、之れを毒が吹き出づると稱して喜び居るなり、尙浴すること一週間にして糜爛も稍々直り、都合三週間ならば如何なる痼疾も全治すと云ふ。

此の湯に入るのは丁度稀硫酸の中に入るが如く、試みに之れを嘗むればほとんど醋の如くにして迚も飲み下だすべからず、而て一浴毎に頭痛眩暈し、予等の如き健康體には適せざるなり、故に浴客は梅毒患者にあらざれば、癩病患者なり、但し近來癩病患者だけは、町の北端なる河原湯に於て別に一區劃をなしたる浴槽に入らしめ、普通の浴客に接することを得ざらしむるなり、予等は若しや兩股が爛れて旅行することあたはざるか、將たまた梅毒、癩病に感染せずやと、杞憂交々起り、不快の念に堪へず、故に一日に一回入浴するが關の山にして、一行は一日も早く此の地を去らんことを欲して止まざるなり。

## 時間湯の浴法

草津温泉の熱くして一人、獨孤にては入り難きものあり、其の浴槽には時間を定めて入浴す、故に之れを時間湯とは稱するなり、即ち熱の湯、松の湯、白旗の湯、地藏の湯、千代の湯、及び鶯の湯の六つは所謂時間湯なり、午前に二回午後にも亦二回の時を定め、而て其の一浴時間は三分時を以て限とす。

先づ入浴時間來れば、喇叭を吹きて各浴槽に集らしむ、衆皆裸體となり、長き板を以て熱湯を攪拌す、歌に合せ拍子を揃へ、ザンブ、ザンブと湯煙り立てゝ搔き廻すの狀は、舟子の櫂を漕ぎ櫓を推すが

如く、勇ましき所もあり、又優しき所もあり、藝者の手踊りを見るよりも餘程面白し。

斯く攪拌すること約三十分時間にして止め、湯長先づ右手を入れて湯加減を試む、加減よければ三度拍手す、次に湯長は擊柝して入浴の準備をなさしむ、衆皆白布にて頭を包み、熱き温泉を柄杓に汲みて頭にのみ被ぶること百杯、終て猿股を穿つものあり、足袋をはくものあり、やがて湯長、一聲高く號令して曰く。

サガリ、マショー、
揃て三
改正の二分、
チョツクリ、ジンボー
辛抱のシドコロー
サー、宜しくば上り、マショー、

衆皆顏をしかめて辭に湯槽中に沈む、
オー、イー、（衆の答聲）
オー、イー、
オー、イー、
オー、イー、
衆皆一齊に上がる。

身體は丸で淪でたる章魚の如く眞赤になりて上がる、湯女より、拭さて貰ふものあり、脫脂綿を、腋下や、股間に當てゝ貰ふ者もあり、仲々騷ぎなり、斯くて勇氣ある第一次の男子浴隊が出づれば、之れに代て第二次の强き男子の一隊が入浴す、但し攪拌せずして直に入る、湯長の號令は前の如し、第三次には女子の一隊となす、湯長の號令は男子の時の如しと雖も、女子はオー、イーと云ふ答をなさず、只靜に沈み居るのみ、之れにて一回の入浴が了る、斯くすること一日に四回なり。

一次の浴隊は大抵六十人位なり、而て此の內に五、六人の西洋人をも交へ居るなり、湯長は每浴槽に一人づゝあり、一隊と共に湯には入らず、湯の温度を計りたる後は、高き臺の上に在りて號令を掛くるのみ、別に給料なしと雖も、浴客よりの謝禮金を以て之れに充つると云ふ、此くの如く軍隊的の規律を以て湯治するの溫泉は、おそらく世界萬國其の例を見ざるべし、予等の如き始めての者には實に

奇々妙々に感せしなり。

先きに六里ヶ原に散點し在りし綿屑は、是れ等浴客の湯爛れに當てしものなることを知りて、少しは安心することを得たり、湯爛れの爲めに歩行すること能はざるものあるを以て、浴客にして町を散歩するものゝ如きは至て少く、況んや公園の設けありと雖も、之れに散策を試るものゝ如きも亦極めて稀れなり、偶々市中を遊歩するものありと雖も、兩股を廣げ、杖に縋り、漸く徐行するの狀は、恰も家鴨の歩むに似たり、實に不愉快千萬なり、甚しき者に至ては室内と雖も杖をつかざるを得ず、故に市中には杖を賣る店比較的に多し、奇と謂はざるを得んや。

## 草津の起原

くさつとは臭處の義にして硫氣の異臭を發する處なるを以てなり、又臭水の謂ひならん、硫臭ある温水の出づる地なればなりとも云ふ、温泉は遠く日本武尊が東夷征討の時に已にありたりと云ひ、又養老年間に僧行基之れを發見せりとも云ふ、建久四年八月三日右大將頼朝が三原狩倉の際、病氣に罹れる足利駒王丸をして試に此の湯に浴せしめしに、七日にして平癒す、依て右大將も亦自ら浴湯せしに、必氣快然是れ海内無雙の温泉なりと云ひしより、遂に著名となり、本邦第一と稱せらるゝに至れり、右大將の浴せし湯は、現今、白旗の湯、一名御座の湯と稱するもの即ち是れなり。

文祿四年豐太閤も亦入浴の意ありて、沿道諸侯に令書を發せしが遂に果さざりし。

上杉謙信が近衛前關白龍山公を奉じて上州へ伐て出でし時に、此の地にも立ち寄りて入湯せられたり、今尚、龍山公の歌とて當地に傳はれるもの二首あり、左に掲げん、

むすぶてふ此の谷影のひで湯こそ、　むべも老せぬくすりなりけり。

里はまだ、もみぢの秋を時知らぬ、　白根に今朝は雪ぞふりける。

徳川幕府に至りても絶えず此の湯を將軍に獻上せり、之れを御汲み上げの湯と稱す、今の白旗の湯が即ち之れなり、此の地にて拵へし温泉の番附を見るに、東の大關を上州の草津とし、關脇を下野の那須となし、西の大關を攝津の有馬とし、其の關脇を但馬の城ノ崎となす、少しく我田引水の嫌ひあれども、兎に角著名の温泉なること偖にして、遂に

お醫者さんでも草津の湯でも、馬鹿の病氣は直りやせぬ。

と迄に俗謠にさへ盛に歌はるゝに至れり。

## 雨の草津

草津は前にも云へるが如く、白根山の中腹に位し、北には苗場山・三國峠の峰巒相連り、四方高山を以て周らすが故に、雲かゝり易く、晴天少なし、本月の初めより毎日雨降り續き、昨日來も亦終日小止みなし、草津村の字に小雨と云ふ所あり、而て又應桑の白雲館に泊るなど、仲々雨に緣多し、予が腰折れ一つを左に、

綠なす草津の里に、來て見れば、白雲深く、小雨のみ降る。

氣候も亦冷なり、袷とフランネルのシャツにても尙ほ寒く、恰も秋末の如し、しかるに應桑及び草津の小學校は他の眞似をして皆暑中休みをなし居るとは、ちとハイカラ過ぎるに非ずや。

予等が草津滯在は一日の豫定なりしが、降りこめられて三日延長することを餘儀なくせり、物價は高く、座敷料のみにても一日一人に付參拾錢が並等なり、米一升貳拾五錢、而て此の地の全體は皆湯の出づる所にして、飲料水に乏しきが故に、水の代まで取らるゝなり、依て予等は自炊をなすことゝし、先づ、炊事長に船崎君を推し、其の獻立には何人も容喙せざることゝして全權を委任せり、一行の死活は實に君が手中に在り、其の權力仲々大なりと云ふべし、而かも君が經濟の上手なると、鹽梅

の巧みなるとには、一行のもの皆悅服せざるはなし。

此の家の番頭重原重吉氏は、予等の鄕郡なる黑岩村のものにして仲々に如才なき人なり、時々予等の室に來りては面白き話しをなして慰め呉れたり、土產の種子に時間湯に一浴せよと勸められたれども、流石に一行の勇士も、湯爛れを恐れて誰も應ずるものなかりしは誠に殘念なりき。

時には彼の繪はがき屋の小僧に案內させて、賽の河原殺生河原、動き石、虎石、獅子岩、さては公園などに至り見るに、雨中の散策何等の興味なく、斯く雨降りて更に止まらざるは、一行中に必ず穢れたるものありて、山神の祟りをなせしに由るならん、投票を以て之れを決せんと發議するものあり、皆之れに贊成して投票せしに、愈々開票の結果、予が最高點となりぬ、さてそあらめ平生不信神なる某

斯る不愉快なる三日の滯在は、恰も三年も居りたるかの如くに感せられ、勇氣勃々たる予等一隊の迚も堪ふる所に非らず、愈々明朝こそは晴雨に關はらず、斷然此の地を去り、待ちに俟つたる白根火山に登ることゝはなせり、喜びの餘り予が例のざれ歌一ッ、

白根山、いづれの方か、しらねども、雲ふみ分けて、いざや登らむ。

## 温泉と火山との關係

火山とは地殼中の一部に貯溜せる熔岩が罅裂を沿ふて地表と連絡する所なり、而て其の活動の狀態に盛期、中期及び衰期の別あり、燒け灰を降らし、岩漿を流すこと淺間山の如きは其の盛期なり、湯氣を噴き、硫氣を吐く所の小盤梯山の如きは其の中期なり、而て三瓶山の鳥の地獄の如く炭酸瓦斯をのみ噴出するものは抑も其の衰期なり、又火山の活動する所は必ずしも山上に限るに非らず、突然平地に爆發することあり、阿蘇の新火口なる千里ヶ濱の如きは之れなり、忽焉海中に破裂することあり、

新硫黄島の噴出の如きは則ち之れなり、故に山上に於て水蒸氣を噴き、熱水を飛ばせば火山となり、平地に於て湯氣を吐き熱湯を出せば則ち温泉となる、蓋し温泉は火山の中期なればなり、世人の悠然として温泉に入浴し居るは、恰も噴火山の爆裂火口中に坐するが如く、之れを卑近の例にて譬ふれば鍋蓋の上に坐して、下より火をたかるゝが如し、豈に危險千萬ならずや。

地殼内に在る岩漿より噴出する瓦斯に種々あり、若し水蒸氣瓦斯のみが迸出して地下水中に入らば單純の温泉となり、亞硫酸瓦斯が入らば酸性泉となり、炭酸瓦斯が入らば炭酸泉となるなり、温泉と火山とは其の實同一體なり、予等の好で温泉場を尋ぬるは、其の熱泉噴出の狀況と、其の地質とを研究せんが爲めなり、世人の所謂消夏の爲め、又は遊山の類とは全く其の趣きを異にする所以なり。

## 愈々白根火山に登る

八月十三日朝愈々草津を出發す、幸ひ朝來雲收まり、霧霽れ、久し振りにて天日を拜むことを得たり、予等は北西に向て登る、白根山腹より顧みて草津の溪谷を望めば、湯氣は全市を包み、白煙濛々として揚がるの狀は、尚淺間の山巔より噴煙すると其の觀相同じ、則ち温泉は平地の火山なりと云ふ所以なり。

登ること一里にして小白根山に達す、こは蓋し東部に在る外輪山の一部ならん、中腹より以上の栂林は盡く枯死し、見渡す限りは白き枯木になりて挺立するのみ、之れは明治三十五年白根山大爆裂の際硫煙の爲めに此くの如く枯るゝに至れるなり、尚登ること一里にして葭ノ平に達す、こは白根火山の火口原ならんかと思はる、此處に一軒の茶屋あり、一人の老婆が幼女と二人して住み居れり、斯る深山幽谷無人の地に於て能くも住みしものかな、安達ヶ原の一ッ屋も斯くやと思はしめたり、茶屋の前に道標あり、何人の惡戯にや、道慾婆々と墨くろぐゝに書き置けり、行人は皆笑て過ぐれども文字を

知らざるの老婆、之れを解せざるこそ無邪氣なれ。

葭ノ平の稱は、源頼朝公が草津入湯の際、此の處を過ぎし時、紀念の爲めにとて其の杖にせし葭を立て置かれしに、自然に生ひ付きし故に此の名あり、此の附近には今に至るまで逆さ葉の葭が生ずることありと云ふ、こは我が中蒲原郡鳥屋野の、逆さ竹と能く似たる話なり。

## 白根山の火口

道慾婆々の茶屋より西に入り、枯木の間を通り、燒石を踏み、火口原を行くこと半里にして中央火口丘の下に達す、予等は尙磊砢たる燒石と熔岩とを、以て築かれたる、赭褐色なる火口丘の壁頭に登り詰むれば、之れぞ白根火山の絕頂にして實に海拔七千四百尺となす、絕頂より爆裂火口を下瞰すれば、孔穴三ヶあり、中央の大なるものには熱湯を堪へ、其の左右東西に各々一ヶありて、之れには水を滿たせり、中央なるを湯釜と稱し、西に在るを水釜と云ひ、而て東に在るを涸れ釜と呼べども、現今は水を湛へあるなり。

予等は火口の絕壁を辷り下りたるに、硫泥歷脚を沒する所あり、火熱足蹠を焦す所あり、思はず六根清淨と叫ぶに至る、戰々兢々として湯釜の畔に達すれば、熱湯はクワラ〳〵、ゴー〳〵と音しく煮え立ちあがり、一歩を誤らば陷りて、石川五右衞門となるべく、又蒸氣が內壁の竅孔より烈しくフー〳〵、ヒー〳〵と鳴動して噴出する所あり、若し之れに觸れなば、身體は忽ち糜爛して死すべし、其の飛沫の爲めに予等の洋服は盡く變色し、又眼は刺擊して開くべからず、是れ强き酸性の蒸氣なればなり、又硫化水素瓦斯の烈しきが爲めに、眼鏡の緣は勿論、懷中の銀銅貨までも悉く黑色となれり。

而て此の火口は楕圓形にして周圍は半里もあらん、其の內壁、殊に湯釜の周圍には硫黃が夥しく堆積し、小き蒸氣孔より生ぜしパイプ狀のもの、沸湯中より生ぜし內空豆狀のものゝ如きは最も珍しく、

種々の標本を手早く採集し、危險なればソコ〳〵にして這ひ上がれり。

水釜は只酸性の冷水を湛ふるのみ、而て湯釜の火口壁を穿ちて隧道を設け、其の熱湯を南方に排出せしめ、以て釜内を涸らし、硫黄を採掘せしことありしも、大爆裂後は之れを止め、今は只熱湯が湯煙りを擧げて空しくトンネルを流下するのみ、其の下流は小白根の中腹に至りて道路を横ぎる、路傍の碑石に此の水毒あり飲むべからずと刻まれありし、嘗て此の溪流を飲みて死せし旅人ありしとぞ、予は試に湯釜のものを嘗めしに強烈の酸性なることは草津の湯の如くなれども、人の死せることを事實として考ふれば、恐くは砒素の化合物が混じ居るならん。

中央火口丘の西に硫黄製錬所の家屋二棟あり、大爆裂の際に皆破壞飛散せられ、鐵軌は捩ぢ切られて散亂し、而て各所の立木は飛石の爲めに半ばより折られたるもの多し、當時激烈の狀以て想像するに足る。

## 白根山の爆裂

白根山は二重式火山なり、中央火口丘の周圍には一樣に廣き火口原あり、硫黄製錬所の西に弧狀の湖水あり、之れを弓池と稱す、其の南に小き池二ヶあり、此れ等は皆火口原湖ならん、外輪山は東北西の三面に能く發達し居れり。

白根山爆裂の初めは史上に見えざれば知るべからずと雖も、今より九十年前までは絶えず噴煙せり、其の後休止したれども、明治十五年八月六日に雷鳴の如き響きと共に再び活動し、三十年、三十二年にも亦爆發し、最後に三十五年七月十五日午後一時に於て大爆裂をなしたり、所謂道慾婆々の談る所によれば、當時突然大砲を發射するが如き響き、頻々と聞こへ、大石降り、大木折るゝの音烈しく、天地も亦忽ち闇黑となれり、以て天狗の激怒して暴ばるゝの所爲となし、大に恐怖し深く戸を鎖ざし

て潜み居り、明朝出で見れば、豈に圖らんや、白き灰泥の爲めに、滿目總て雪降りたるが如くになり居らんとは。

其の翌日より火山探險者は日々二三百人も登山せしを以て、こゝに飲食店を出せしものゝ如きは意外の利益を占めたり、而て此の大爆裂前には一週間も强雨降り續きたれば、硫黄製錬所の役員及び工夫等は、作業出來ず、之れより一里西に在る萬座の温泉に入浴し居りしを以て幸に危難を免れたりとぞ。

茲に注意し置くべきことあり、我が邦にて白根と稱する山は二ヶ所あり、上州と野州との間に跨る山を日光白根と云ひ、上州、信州の間に在るものを草津白根と呼び、以て之れを區別し置くなり、白根葵と云ふ植物は、此の草津白根にては予等更に之れを認めず、蓋し日光白根の產なり。又淺間葡萄は此の山にも亦多し。

## 火山爆裂の方向

茲に又大に注目すべきことあり、火山の降灰、或は泥流、又は熔岩流の方向は、概して北東の方に於てすること之れなり、富士の熔岩が猿橋驛にまで流下し、小盤梯の泥流が檜原村を埋沒し去りたるが如く、或は淺間の六里ヶ原に於ける、白根の草津溪谷に於けるが如く、而て我が妙高山の裾野が關山の方面に能く發達するが如きは、何れも皆北東の方向を取れるなり、こは是れ地球自轉の方向に從ふか、又は反對貿易風に由りて然るか、將た卓越せる定風の方向に從ふか、或は是れ等三原因の合成によりて然るか、學者の必ず須からく研究すべき事項ならん。

## 澁温泉に至る

予等は已に白根火山の觀察を終りたれば、再び道慾婆々の茶屋に戻りて午食し、こゝより又栂林を

以て覆はるゝ所の白根の外輪山を登ること一里にして、それより信州の方面に下だる、草津より登りは三里にして、下だりは四里なり、之れを澁峠と稱す、此の長さ峠の間に於て只僅に三軒の茶屋あるに過ぎず、故に冬季に當りては往々此の通路は杜絶することありと云ふ。

信州、角間川の上流なる左岸に幕岩とて澁名所の一に數へらるゝものあり、峠の中程の路傍の左方に在り、懸崖萬仞、縱横に柱を重ねたるが如き絶壁なり、之れを仰視すれば將に落ち來らんとするが如く、頗る壯觀なり、之れは柱狀節理をなせる角閃安山岩にして、此の景は教科書にも出で居り、地文、地質の學科には時々引き合ひに出さるゝ所の岩石なり、尙峠を下れば又澁名所の一なる琵琶池を右方に見る、尙下りて其の名所なる澗滿の瀧を見んとすれば、折り惡しく夕立の雲かゝりたるを以て之れを割愛し、歩を速やめ澁に着せしは午後六時なりき。

## 澁の概況

澁溫泉は一名横湯とも稱し、白根の北麓より流るゝ天川の東岸に在り、町の背後には高丘を負ひ、僅に河岸の狹き平地に立てられし所なれば、人家密接して細長き一市街をなせり、故に一朝、天川が漲溢するあらば全町は其の水害を蒙ること大なりと云ふ。

此の町に接して北に安代の湯あり、尙少しく原を隔てゝ湯田中の溫泉あり、川の西岸には沓野・上林の湯あり、之れ等を連絡する橋梁を和合橋と稱す、沓野の西に角間の湯あり、尙、澁峠の方には發補熊野及び萬座の湯あり、此の地方には都合九ヶ所の溫泉相集り、其の泉源も亦豐富なり。

澁の北西の方は遠く善光寺平に連り、遙に高妻、乙妻及び戸隱の高峰を望み、山水の景にも亦富めり。

湯は鹽類泉にして鐵を含み、少しく澁味を帶ぶるを以て、澁溫泉と稱するとゞ、其の質は至て單純にして草津の如く强烈ならず、しかのみならず、物價は安く、旅舍は清潔なり、空氣は乾燥なり、風

色も亦美なり、故に健康體には至極適當なる浴場なり、然れども此の地は海拔僅に千六百尺なれば、氣温の暑さを缺點となせども、日々夕立ありて炎熱を洗ふが故に、時には凉風樓に滿ち、衣袂を拂ふて快哉を呼ぶことあり、併し雷鳴の爲めに毎夜電燈の明滅するには實に閉口なり。

此の湯は夏時のみ浴客の群集するにはあらず、冬期にも亦氣候温暖にして雪なく、入浴に適するを以て四季ともに來浴者多し、目下盆休みなり、又豐作なりとて、浴客は何れの旅舍にも皆滿員なり、予等は所々明き間を探がして漸く延壽館と云ふ浴樓に投宿せり。

長き旅、足もにぶりし、杖をつく、手もにぶらして、しぶに着きけり、

にぶ(二分)とにぶ(二分)とは、しぶ(四分)、即ち、澁なればなり。

## 澁の歡迎

予等一隊の澁に到着することを知りて、我が校友の來浴せるものが多く出で迎ひ、且つ諸氏よりは特に一行に菓子を贈りて長途の勞を慰められしは誠に謝するに堪へたり、又安代(アンダイ)には我が校の萩原、春山、及び若林の三先生が各々家族を携へて入浴せらるゝあり、之れ亦一行の爲に茶菓を供して歡迎せらる、而て特に予を招きて晩餐を饗せられ、當地名產の鯉のあらひ、其の羹(アツモノ)、偖ては雞肉索麵などの美羞珍膳に、數日間の飢腹を滿たし、幾旬の枯腸を潤し、爲めに體重も亦俄に增加し、始めて人間界に出でたるが如きの感をなしたり異鄕他國の地にありて、斯くの如きの熱誠なる歡迎を受けんとは、實に思ひ設けざる所にして、各位の厚意は一行の深く肝銘して永く忘るゝ能はざる所なり。

## 澁温泉の活動

澁地方は温泉の湧出各所に多く此の附近の村落、到る所皆湯ならざるはなし、而て澁の南、天川の

溪谷なる東岸に針の山と稱する所あり、燒石、熔岩の崩壞して一見噴火したるかの如き所あり、こゝにも溫泉散出し、殊に此處の大古岩と稱する巨岩は、惠比須神が鯛を小脇にかひ込むが如きの狀をなして面白く、尙進で其の上流に至れば地獄谷と稱す、兩山相迫りて河谷となり、其の河底の中央に巨大なる圓き礫岩あり、此の岩の頂に徑二寸位の圓孔あり、之れより蒸氣の噴出すること烈しく、眞直に高さ三丈もゴー〳〵と鳴動して昇騰し、其の勢ひ、仲々凄まじく、試に其の孔上に徑一尺大の石を置かば直に跳ね飛ばす、而て若し日光が其の蒸氣に當らば、忽ち虹蜺を現出し、言ひも云はれぬ程美麗なり、此の地方の地質は中世紀の御阪層に當り、此の巨巖も亦御阪層の礫岩なり。

若し此の大噴出の蒸氣を吸氣に應用して、呼吸器病の治療に供するの裝置を施さば、其の人生を益するの利必ず大なるべきに、只空く河中の裝飾物となし、迸出するがまゝに任かし置くは、甚だ惜むべきことなり。

尙天川の溪澗より登ること二里にして燒け額（ヒタイ）と稱する所あり、其の上に湯の池あり、隣近に大沼池あり、是れ等は皆舊噴火口ならんかと、宿の主人より云はれたれども、時日なきを以て之れを探らざりし。

之れを要するに白根の北麓一體は、火山活動の餘波が今尙盛に其の激烈なる動作（どうさ）を持續し居る所なりと云はざるを得ざるなり。

## 本邦のバーデン

獨逸聯邦の一にバーデン國あり、蓋しバーデンとは獨逸語、浴場の義にして、溫泉各地に湧出するを以てなり、而て此のバーデン國に、又バーデン、バーデンと稱する所の一大溫泉場ありて、十三ヶ所より湧出し、湯の豐富なること世界第一と稱せらる、山水の景も亦美なるを以て、夏月は特に遊人

多し、故に予も亦云はんと欲す、信州は本邦のバーデン國にして、澁地方は我が邦のバーデン、バーデン、なりと、今所謂、本邦バーデン國の温泉を分て五六群となす、參考の爲め左に掲げん。

第一群は八ヶ岳、蓼科山、火山地方の温泉にして、巖、澁瀧、唐澤、明治、上下の諏訪、及び本澤の湯之れなり。

第二群は御嶽、乘鞍、燒岳、火山地方の温泉にして、葛の湯、白骨、中房、中ノ湯、蒲田、平湯は之れなり。

第三群は妙高火山彙地方の温泉にして、松本市の淺間、山邊、小谷、別所、白絲、河原、鹿教、靈泉寺、沓掛、田澤、戸倉、及び越後の燕、關、赤倉の湯は之れに屬するなり。

第四群は淺間、白根の活火山地方の温泉にして、澁附近の九ヶ所を初めとし、中野、七味、山田、鹿澤、隈久保、古瀨、小瀨、及び草津の湯は之れに屬す。

第五群は苗場山附近にして野澤、和山、切明、及び越後の逆巻、湯澤の温泉は則ち之れなり。

信濃一國の温泉多きこと本邦第一なるは、以上擧げたる所によりて見るべし、而て其の數の最も多きこと澁附近の如きも亦本邦第一なり、之れ予が澁地方を指して、本邦のバーデン、バーデン、と名づくる所以なり。

尙世人の知れるが如く、伊豫の温泉郡に道後の温泉あり、肥前の温泉岳に雲仙温泉あるが如きも亦、獨逸のバーデン、バーデンの名稱と其の起因を同ふするならん。

## 中野町の高梨城

予等は愉快なる澁に滯在すること三日、一日東京高等師範の田中氏尋ね來らる、氏は斯學の專門家なれば、仲々談興盡きざりしも、長き滯在は事情の許さゞる所あるを以て、惜き澁をば八月十六日の朝出發して豐野驛に向ふ。

高社山は道を壓して右手に聳ふ。海拔六千五百尺、此の邊にては一ト際目立ちたる富士式の高山にして、一名高井富士とは稱するなり、夫れより天川の下流なる夜間瀨川の橋を渡り、盡より二里にして中野町に達す。

此の町は下高井郡第一の都會なり、其の古城趾を高梨城と稱す、彼の天文二十二年、信州の亡將、村上義清、須田親滿、島津規久と共に、我が謙信公に來り投せし所の四人の一なる高梨政頼の居城なり、城址は町の東岡に在り、一名小館とも稱す、越後三島郡高梨村も亦其の領地なりと云ふ。

德川の時には幕府直轄領五萬石の代官地たり、維新の際には中野縣を置かる、其の時に中野暴動とて、社會的主義の大騷ぎを起こせし地なることは、人の能く知る所なり。

中野より二里にして信濃川に架せる竹ケ鼻の長き船橋を渡り、尙一里を行きて正午に豐野驛に着し、これより乘車して柏原驛にて下車す。

## 野尻湖の成因

予等は尙進で野尻湖の出來方をも究めんとて、柏原より步して湖畔に至る、湖の東岸には海拔六千尺の富士式なる斑尾山聳え、其の北の袴岳は海拔四千八百尺なる圓錐形の山なり、こは蓋し斑尾火山の側火山ならん。

野尻湖は嘗て斑尾火山が破裂して其の西麓に深き溪谷を造りしに、次で其の西方に當る黑姬山が爆發して裾野を造り、斑尾の溪流を堰き止めしが爲めに出來し湖水ならん、近くは明治二十一年に小盤梯山が破裂して檜原、秋元の二村を泥中に埋めて、檜原、秋元の兩湖を作りしと同作用なり、之れを堰塞湖とは稱するなり、予等が今到り見るに、明かに當時の爆裂、泥流の狀を歷々指示することを得べし。

予等は舟を儀ひて湖中の琵琶島に渡り、こゝに祀れる宇賀神社を拜し、舟を廻して鳴の樅ヶ崎に至る、こゝは宇佐美定行が長尾政景と銅舟に乘り共に溺れし所なりと傳ふ、然れども、それは此の湖にはあらずして、越後南魚沼郡土樽村の野尻池なりと云ふ、此の後説或は眞ならん、予等は尙舟を進めて、湖岸なる金山の二王岩を見龍宮の淵、ゴーロー（五郎か）の大石、嘗て信越の爭點地なる水穴村の隧道の跡、さては琵琶ヶ崎等を廻り、湖を一週して歸り此の地の名物なる蕎麥を食して、越後の關川村に向ふ。

## 信濃では月と佛とおらが蕎麥　一茶

一茶は有名なる俳人にして柏原の者なり、月は姨捨にして、佛は善光寺なり。

此の湖水の落ち尻と、苗名ノ瀧（瀧は妙高山と其の南方の黑姫山との間に在り）との水は相合して上越の中央を流るゝ荒川となり、且つ川の東方に在る中江用水とて流域百三十ヶ大字、耕地四千町歩を灌漑する所の溝渠の水源ともなるなり、而るに明治二十三年愛國社なるものが湖の水を長野方面に引かんとせしを、越後にて抗議せし爲めに中止し、降つて二十六年に又後藤猛太郎氏が再び此の水を引きて水田を起さんとせしに、之れも亦越後の反對ありて工事を止めしことあり、中江水利組合、百三十ヶ字の死活問題に關する湖水なり、其の水を引きし所は前に云へる水穴村にして、其の湖畔に隧道を穿ちしなり、予等は今信越係爭點なる隧道を塞ぎし跡をば、舟上より始めて見ることを得たり。

## 信越の國境

予等は信濃尻村字野尻より下りて關川（荒川の上流なり）の右岸なる信越の國境に至る、偶々こゝを通りし老人に向て境界線を尋ねたるに、老人歩を止めて談て曰く、

關川の東岸は信州の信濃尻村字赤川なり、西岸は越後の關川村なり、之れを連結する橋梁を一之橋と

名づく、元とは之れに三小橋を連ねて架せしに、其の第一のものが現今存在するを以て斯くは稱するなり、而て河の東岸に幅十間位の狹長なる越後の飛地あり、此の細長き地に於て河に併行し國道を横切りて十字形をなせる細道あり、之れが則ち信越の國界なり、之れに就て面白き話しこそあれ、そは東岸の狹長なる地に在る赤川村の高橋安之助氏の如きは、其の本屋は信州の地に建てられあるも、其の土藏と納屋とは全く越後の土に在り、故に其の庭園も亦信越に半分づゝ跨り居れりと。

僅々一軒の家にして二ヶ國に跨り居るなどゝ云ふことは、餘り世間に例なき珍しき話しなるを以て、茲に記し置く、

これよりは、アチヤと、ソンマの國境、　一茶

アチヤとは信州の方言にして、ソンマとは越後の俗語なり。

## 高山に登るの利益

學術研究の爲めに高山大嶽に登るの有益なることは云はずもがな、只普通の人々の爲めに一言せんと欲す、低地の空氣は常に塵埃を含有し居るが故に、之れを吐呑する所の吾人の肺臓は恰も塵埃の貯蓄場の如し、而て高山の空氣は純粹にして而かも亦新鮮なり、故に時々高山に登りては、吾人が下界に於て常に吸收せし多くの塵埃を吐き出だし、以て全く肺腔を一洗せざるべからず。

蓋し低地の空氣は濃厚なるが故に、肺に入ること少量なるも、尚且つ能く其の働きをなせども、高山の空氣は稀薄なるを以て、肺に入ること多量ならざれば血液を新鮮になす底の酸素を攝取すること能はざるなり、こゝを以て吾人が高山に登らば、從て多量の大氣を吸ひ入れて、肺内を擴大にするの効あればなり。

且つや低地に住する人の肺は小にして、高地に居るものゝ肺は大なり、故に西藏（チベット）の高原、又はアン

デス高地のごとき一萬尺以上の處に住居する人々の肺は頗る大なり、故に常に低地に住する所の吾人が、偶々高山に登らば、縮小せる肺も爲めに擴大せらる、而て純粹なる空氣を多量に吸收し且つ呼出せば、其の効たるや全く肺を洗濯すると同じきなり、若し夫れ高山大嶽に登りて千萬里の外までも展望するが如きは、志操を高潔にし、度量を寛大にするの氣象を自然に養成するに至らん、且つや朝たには雲表に聳ゆるの大山を跋み、夕べには蛟龍跳るの巨流を渉り、平生務めて艱難辛苦に堪ふるの體力を養ひ、以て一朝有事の日に方りては、國家の爲めに十分盡し得らるゝの元氣を蓄ひ置かざるべからず、是れ予等が學術の研究を兼ねて登山する所以なり。

## 歸高

予等は一之橋を渡り、關川村の入り口、即ち南端なる元と關所の在りし前を通り、妙高山の黑き火山灰の裾野を歩して田口驛に至る、此の裾野は大鹿煙草の産地なり、此の驛より乘車して午後九時に高田に着せり、長途の旅行も無事に終りを告げ、停車場前にて日出度一隊の解散式を行ふ。

歸來机上に堆き來書、又は名刺を見れば曩きに予等の高田を出立せし後にて同行せんことを申込みたるもの數人ありたれども、間に合はず、誠に遺憾なりき。歸後又早々本縣博物調査會の爲めに妙高山方面に出張し、又鑛山鑑定の依頼を受けて中藩原地方に旅行し、四十有餘日の夏季休業も、東奔西走して少しも寧日なく、全く奇麗に殘りなく、此の永き休みを使用し了れり。

# 陸中駒ヶ岳に登る記

千葉悦彌

## 一、盛岡駒

駒ヶ岳と云ふ山程、同名の多い山は、またとあるまいと思ふ、現に我が陸中にさえ、二つある、一は陸前、陸中の境上にある須川岳、栗駒山などの異名を持つ駒ヶ岳、一は秋田、岩手の境上、日本脊髓の一片なる駒形山即ち駒ヶ岳で、盛岡を距る、西方十一里餘の所に在る、岩手山の中腹より逶迤として南へなびく山脈に、双頭を聳かしてゐるのは、それである、前者を仙臺駒と云ふ人があるから、予はそれと區別する爲め、後者を盛岡駒と呼ぶことにした。

## 二、出發

時は名にし負ふ二百十日の厄日、前日までも、降つてなか〳〵恠しい雲行である、翌朝一時と思しき頃には烈しく降つて、雷樣が鳴つてゐる、あゝ駄目だと思つてうつとりとした所を、友に起され、はつと起き出で見れば、空は名殘なく霽れ渡つて、月さへ漏れてゐる、もう五時近くである。

## 三、雨の秋田街道

盛岡を出でゝ秋田街道を進む、この街道は厨川、雫石、橋場などの村々を貫ぬいて、仙岩峠を飛び越えて、秋田縣に通じてゐる松並樹の街道である、小岩井農場へも、これを行くので、農場用の電話柱が道に沿うて立つてゐる、雫石川は左手に近くなり、遠くなり、流れて右方一面の稻田には、チヨ

イ〳〵茅屋が挿まつてゐる、友は頗る元氣な話をしては、ぱく〳〵喜んで歩く、振り返へると、雨後の曉色夢の如く、河邊の柳も、葦原も、田も家も、碧み勝ちの一色に塗りつぶされてゐる。

某刀劍工の家も過ぎ、諸葛と白字を掲げた板橋も通つた、火の見櫓に木片を垂れた部落へかゝる頃、背後には晴れた空を控え乍らぽつぽつ水玉が落ちて來る、「今に霽れるぞ」と力んで見たが、灰雲は西根からずん〳〵零ちて來て、山又山を順々に包み終つて、つい近くの黒ずんだ森までも、呑んでしまつた、東のおつ果に、僅かに晴色を殘してはゐるが、もう本降りになつたらしい、それでも未練があるので莫座著て通る四十男に聞いてみたら「甲子だから降ります」と云ふ。

四方八面は濡れ色に變つて、雨の世界となつて終ふた、路傍の松陰で外套を頭から被つて、握飯を食ふた、食ふて終ふてもなか〳〵息みさうもない我蠢も少しく落膽をしたもの、よく考えて見ると、若し此行を止せば、今年はもう駄目になる、併し、予は兎も角として肩心の相棒は十五の少年だ、此鹽梅では遠き前途を慮らざるを得ない譯だ、「おゝ非度く降る、止めやうか」と口を切つた、ところが向不見な彼は「濡れたつてかまはない」「よしそんなら行かう」米や何か重さうな物は予が持てやることにした。

降る、降る、隨分降る、雲の漏、松の雫が遠慮なく打つかかつて來る、こんなふうでは、一町と行かぬうちに濡物みたやうになるのは知れ切つたことだが併し我等の決心を翻へし得べくもない、路傍の茶店から、先の坂を下ると、仁澤瀬といふ部落がある、盛岡より二里、予等はこゝへも休まずに進んだ、前途まだ九里はある、蕭々たる秋雨を衝いて、淋しい、淋しい松街道を歩るく、さんざ時雨か——と一節唸りたいやうな氣持になる、軍歌を唱へば軍歌が面白い、俗歌を唄へばそれもまた好い、實に雨の音ばかり調和のいいものは又とあるまい、一寸騷々しいやうで、じつと聞くと、云ひやうのない好い感がするから妙だ、兩側は若松の小芝原、十町も行くうち人一人の影も見ない、霧の中から

松山が現はれる、七ツ森官有林と標木が建てゝある、山が背後になると田が見える、田の向ふには杉叢が見える、其處が雫石村である、仁澤瀬より二里、村に入る頃は幸ひ雨も霽れた、人家は不規律ながら並んでゐる、駄菓子屋もあれば呉服店もある、酒屋が一軒、大鏡のない理髪床が二三軒見えた、家からの草鞋を此處で換えた次手に、梨、桃なぞを買ふて町端から食ひつつ行く、目を遮ぎるものは粟、稗、豆などの畠である、タラタラ坂を下ると葛根田橋とか云ふ橋がある、それを渡ると黄ばんだ稻田の間に坦途一髪長く曳いて、春木場といふ部落に入るのである。新築の學校の樂書一つない廊下の壁に、恭しく掛け連ねてある、蓑、菅笠、赤ケットなどが目につく、春木場を出ると、山が近くなりて自然に山の中に吸ひ込まれるやうな氣持がする、友はまた空腹だと云ひ出したので、松の切株に腰を下ろして、飯を食ふた、次第に雲が剝げて、滿身に日光を浴びて、此處を立つた、是よりは人家稀に風光も頗る單調だ、二里許り云ふものはウツボ草、ツルフヂバカマ、キンポーゲなど見答のない草花に送迎せられた、友は足が痛むと云ふので、砂地の所を撰んで、大道の中央に腰を据ゑて菓子をムシャムシャやり出した。

「何時だらう」「さうさ、もう正午近い、「あと何里」」「さう、二里前後だらう、歩けるかね、歩けないやうなら橋場へ宿まつて明朝早く出立つことにしやう」「――なあに、歩ける――」家から此所までは六里だから縣境まで實際は二里前後、縣境から我等が今晩宿泊る豫定の國見温泉まで半里、計二里半の前程を有すること、途中には川岸に温泉の湧くことなど話して彼を慰めた。

痩田を見ながら橋場驛に入る、十戸にも足らぬ小村、家毎に麻を乾かしてゐる、郵便箱をかけた家の向の茶店で晝飯を食ふ、先が四里あると聞いて友は大變落膽した。

## 四、仙岩峠

橋場を出て橋を渡ると、突き當る處に「右山道、左秋田往來」と、お家流の筆うるはしく刻せられ

た尺五寸許の、自然石が建つてゐる、左すれば褶曲の波紋美はしい崖を、左手に見乍ら、小川に沿うたり、離れたりする、山は三方より迫り、蛾々空を摩し、一歩は一歩と木立が深くなつて、林間にトリカブトの濃紫の花が咲いてゐる、山葡萄の蔓がはびこつてゐる、太い根から徑五寸位の幹が五本も十本も出た桂や實のついた七葉樹の林を行くと、奥の方から這つて來る涼風が温泉の香を送つて來る、温泉の香は沈み切つた友の元氣に一衝動を與へた、「硫黄臭い」と目的もなく大急ぎで大文字草の咲き亂れた崖の下を通つて、土橋を渡つて林に入り、林を出でゝ、陽の崖の下を通ると、川岸に温泉が湧いてゐた、「あれ」と指したら彼は駈け降りて嗅いだり、手を入れたりして冷たいのに驚ろいてゐる、はやく温泉に往つて休まうと云ふと、賛成して歩き出した、予等はこれより上り三里の仙岩峠の羊腸を攀ぢなくてはならぬ、第一の荒小屋から上は、雜草が兩側から路を包んで、路幅が一尺位しかない所もある、朽株が轉げ出てゐて熊かと驚くこともある、隨分屈曲が多いから、比較的勾配が緩い、その代り四五丁は登つたと思ふても、鋭角三角の底邊よろしくで、曲り目と曲り目とを結び付けた近路が、十間ともないこともあるのだ、一と曲りしては憩ひ、何か見えると云ふては休む、枝にミヤマノキシノブなどの附着いた古木が、森々と繁つてゐる、「こんな處へ熊が出たらどうする」と揶揄うたら、頓かに腰の邊を索がして「ナイフがある」と力んだ、然しこの元氣は冒險談などから得た、的にならぬものである、その證據には一と曲りか二た曲り目には屹度「まだか」と太息を吐く、そこで曲り目になると予の方から「やれやれ」とか「あ、こらこら」とか悔しい拍子をかけては彼を笑はせるのだ、「一曲一体」と云ふ約束が無言の間に交はされてしまつた、こゐる澤の處で某鑛山からの歸りだと云ふ人に逢ふ、(夜逃げして峠を越ゆるうつぼ草)など駄句つてみた、下の方にも人聲がすると思つてゐるうちに菅笠の三人組の男に追ひ付かれた、早池峯山に近い村の者で、麻糸買の次手に湯治に來たと云ふ、二三の話をした切り先になり、五分とたゝぬ内に、見えなくなつた、峠の萱山はスグ上に見えながら、な

かなか以て登れぬ、鹽竈菊、ジャコーサウなど咲いてゐる。

ほうと呼んで見ると、先の連中もその通り答へる、左程後れもしないと思つて、大急ぎで追つかけて呼んで見ると、矢張り先位の距離からほうと云ふ、不圖見上げたところが、茅葺の荒小屋が見える、それ小屋だ、もうあそこが頂上だと云ふと、友は無矢見に喜ぶ、我等が大分長い一と曲りを終へた時、彼等は徑の中から小屋の前に現はれた、目も鼻も省いた畧畫式の三人、僕等の方を瞰下ろしてほうと呼ぶ、捷徑を見つけて一散に進んだら、二十分餘で小屋へ眞直な逕へ出た、畧畫連はもう見えなかつた。

友と我とは、小屋の板敷に有り丈けの道具を拋り出して、どつかり腰を下ろした、暫し無言のまゝ、隙間もなく肉迫する、飢、渴、疲なぞ字書の解釋以外、眞の苦味を味ふた、疲れに疲れたる可愛き友は、如何に痛切に感じたであらう、小さき胸の中に畫いて置いた、美はしき空想は如何に慘めに破壞されたであらうよ、母戀し、家懷かしの念が胸一杯になつて、美しい草花にも、偉大なる山水の風致にも、まぎれぬ彼は、この永劫忘る能はざる神の心づくしの洗禮を如何に思つてゐるだらうと、力なき彼の横顏を見遣つた。

「もう行かう」と彼が云ふのでいざとばかり荷物肩に投げかけて立つ、黃花の鹽竈菊の小逕をゆけば、忽然北方に駒の雄姿が飛び出した「見よ、友よ、雄たけびの駒の姿を」と云へば、彼も、あとばかり見上げた、東に高く西に低き頂上から、並び落つる谷々が、黃勝な午後の日影を飽くまでも吸ふてゐる、我等の立つ峠よりやや低く見る駒の中腹に、國見溫泉の小屋が、マッチ箱程に見える、峠の絕頂近くに縣界の木標が立つてゐる、頂を越せば、少々の下りになつてゐる、北は小高い岡沿ひ、南は足下に千仞の斷崖をかけて、南方へ縱谷を形作る、一方の壁になつてゐる、水淺葱の空氣の沈んだ谷一面は、隙間もなく生え繁つた大木が、藍玉を並べたやうに見える。

## 五、温泉路

「潟はまだか」と三四回も聞かれてから、やつとその潟が樹間から透いて見えた、冷潟（ヒヤカタ）（當字）とか云ふ徑三四十間の淺い沼だ、このまゝひた降りに降れば、秋田縣仙北郡の生内村へ、我等は右手の温泉岐をとつた、怪しい追分節の聲張り上げて、ジメジメ草鞋を喰ひ込む、湖畔の逕を東から北へ廻つて、笹や柴等で覆はれた空溝を登る、ツバメオモトが實になつてゐる、登るかと思へば下り、下るかと思へば登る、暫く無趣味な逕を餘儀なく繰り返へすうちに、やつと明るみへ出た、もう暮だらうか、向ふ山には雲がかかつた、五寸角三尺許の花崗石が路傍に建つてゐる、舊秋田街道ださうだ、碑面に「從是北東盛岡領」の文が鐫つてある、「從是北東盛岡領」と繰り返へして朗讀する、裏日本から吹き上げて來る夕霧に、打たれつつ、懷舊の情にうたれて佇んだ。

向ふを見ると、遙かに下つてまた上る、大弧（カーブ）の逕の端の處に、略畫連が見えた、急いで弧を行き盡すと温泉の邊が見下ろされる、頗る滑る坂を、温泉の小屋を見上げるまで降つた、小川を渡つて、笹の坂を登れば、漸く温泉に着いたのである。

## 六、國見温泉

運よく三人男と同室に宿ることになつた、知らぬ同志乍ら蛙で呼び馴れた勢かなつかしかつた、外に明朝出發すると云ふ伯樂（はくらう）と、二間四方の室に都合六人だ、草鞋を脱いで、石に腰をかけて、五分刈頭の男のやうな婆が、炊事の手傳をしやうの、草鞋がけを洗つて進げやうのつて、お饒舌をするのを聞いてゐる間に、氣早の連中が布團二枚借りて來る、無くなるかも知れぬからと云ふので、聞いたら有丈け借りて來たのださうだ、夜分は寒いだらうに、濡れ外套一枚で、今宵の夢を包まねばならぬか

と、不安の心地がしたが、物は相談とやら云ふこともあるから、足を洗ふた次手に、炊事小屋に寄つて、婆殿に話したら「なあに、お前樣方に借す分は、爺樣が別に藏まつて置いたから、聞いて見なされ」と平氣な顏だ、早速行つてみたら「私が著るのだが」と云つて、少し體裁のいい四巾ものを、一枚かしてくれた、夫れを携つて戻つたところが、三人男は己達には無いと云ふたとて、一寸不平さうな顏付をした、握飯やらパンやらがあるから、晩食には支障(さしつか)えないが、前例に懲りて、鍋二個と膳椀など、二人分借りておく。

入口の方に、三人男が陣取つた、次が我等、最も奥は先取得權を持つ伯樂の爺殿だ、「お前樣方は、何處から來ました、どうぞ宜敷く賴みます、ハハハハ」と人の顏を見ながら云ふ、此方で談を持ち出しても、返事をしない、あまり馬鹿にされたやうな氣がして、聲高に話しても一向返辭がない、「明日は歸ります、ハハハ、私はこれが聞えないで」と耳を指す、聾だとわかつて見ると、腹の立てやうもない、餘程高く叫んでみても、通らぬので、頗る張合が拔けて終う、三人連はもう湯から歸つて、燒酎を酌み交はしてゐる、我等も飯を終つて湯に出かけた。

外に出て見ると、宿舍は二間に六間ある、これと同じ大さのが三棟、外に炊事小屋がある、小屋の前を通つて、十歩の小坂を降れば浴槽がある、其處からまた少し上つて、一つある、都合二個所に在る、西南は溪河を隔てて、山又山が望まれる、東と北とは草深き崖が、綠の塀を立て連らねてゐる、そのお蔭で駒の姿が見えぬことになる、崖には北へ偏つて空澤、中頃のは清水の湧く澤、その東のは樹間隱れに可成の瀧があつて、鍬を造つてゐる。

下の湯は屋根はあるが、四周を圍んでない、冬襯衣でも隨分寒いのに、眞裸では寸刻も猶豫なり難く、ざぶんと湯槽に飛び込んで、乳色の溫液に身を沈めた、友も續いて飛び込む、黃昏時の濃霧がさつと吹き入る度に、頸より上が寒い、あつと叫んで口の邊まで沈む、ものの十分ばかり經つてから「疲

れたつたね」と予が口を切る、「潟の邊からでも一里以上だ」と彼は合槌を打つ「明日の天氣はどうだらう」「大丈夫だ」「天氣なら駒ヶ岳へ登らう、君行けるか？」「行けなくつて！ちつとも疲れやしないもの」。

六七年前に來た時は、此の湯槽は小屋の床下に在つたものだ、小屋だつて二棟しかなく、上の湯などは湯槽が据はつたのみで、透明な炭酸泉をなみ〳〵と湛えたものであつた、深山の秘密を私語やく星月夜に湯槽の中から銀砂子の天上を仰いで、お星樣の品評めなどやらかしたのも、つひ昨日のやうな思がするが、今來て見れば大分變はつてゐる、群星の凝視の中に、永久に若やぎ歸へるこの湯槽の内にも、暦があると感じた。

「暖かい、もう上らう」と云ふ、「さあ上がらう」と眞先に上がつた友、「寒ひ寒ひ」とまた跳ね込む二人でどつと笑ふた、予が先に上ると、彼も仕方なしに上がる。

予は炊事小屋に寄つた、山の婆嬢は榾火に暖まつて御座る、火を焚きながらムシロに胡座して、種種の談をやる故郷は盛岡なさうだ、不幸なる彼女の一代記を聞かされた、八十歳だと云ふが六十位にしか見えない、年中、山中生活ばかりして、神樣と同なじ空氣を吸ふてゐる故か、男の樣に活潑な婆樣だ、他臺に十年、秋田に何年、奥羽の温泉と云ふ温泉なら、知らない所はないと云ふのと、法螺吹岳に筍採りに行つた際、親子の熊に唸られた話などは、御自慢であつた、就中、冬の間、峠の小屋に二十七年間、守番を勤續したと云ふには一驚を喫せぬ譯には行かなかつた、大低に切り上げて、歸つて見れば、カンテラを灯して皆布團へ潜ぐり込んで、寢物語の最中だつた、大分疲勞してゐるから、萬事を明日に讓つてねて終ふた。

翌朝は未明より、三人男はカンテラを灯して、入浴の準備をしてゐるらしい、我等の方を見て「盛岡の兄樣達はよく寢ること」「此の位の時はよく寢るものだなあ」など云ひ合つて居る、如何にも友は

昨日の疲れにぐつすり寢入つて、夫れこそ、盜まれても知らぬ位、よく寢入つてゐるが、實の所、乃公は板の床や、速成枕の窮屈さに餘りよくは得睡らぬのであるが、今から起きて騷ぐでもあるまいと思つて狸寢入りをしてゐた、誰かが雨戸を開けた、身に泌む冷風がすつと入る、瀧の音が「いい入口を見付けたぞ」と云ふ風にどつと高くなる、一人はもう外に出たらしく「あゝ今日はいゝお天氣だ」と云ふ聲が、四邊へ散れて、手答へなく聽えた、出て行つたのは二人らしい、あとはまた靜かになつた。

駒の頂上までは二里だと云ふから、誰も行かなければ、獨でも出かけやうなぞ考へて見る、友はウツ！と云つて寢返を打つて、僕の方へ向くと、いきなり僕の枕を引張つて自分のにした、御自分のは何處へか拋出して、夢心ちに取去つたのらしい、詮方なしに片端を拜借して、頭を凭せてゐた、今度は布團も取らうとする、是を奪られては一大事だから、よい加減に捕へてゐた、こんな出來事が持ち上がつてゐる頃、湯から一人歸つて來た「宜かつたすか？」と留守居君が聞く、「あゝ、よいも、よいも、何ともいい湯だなし」また小聲の會話が始まるところへ、他の一人も戻つた、二人は一齊に上の湯はどうだつたと聞く、極めて眞面目な返辭が面白い、「今しがた、上の湯から大きな裸人が一人出て、藥師樣の方へ上つて行つた――」五秒間許の沈默は嘲笑の一語で破られた、「嘘だんべ」「いやほんとうだ」と益々まじめになる「男か女か」「聞くてわからねい」「藥師樣かも知れねいなあ」嘲笑先生も釣込まれて「網張の湯には天狗がゐるさうだ、天狗の這入つた跡へ這入ると大變効くものだと云ふこつた」「はあ――」皆眞面目になる。

僕は故と欠伸をして起きた、次で友はほんものの欠伸をして目を醒ます、伯樂殿は「私等の方へ來たら是非に訪ねて下だされ」と夫は夫は丁寧な辭を殘して立つ、何となう離別がつらいやうな氣になる、彼を送つてからタオール片手に上の湯へ行つたが、もう天狗樣はござらなかつた、下の湯からは、盛んに秋田節が朝の清淨な空氣を搖がして聞こえた。

## 七、登山

豫想通の好晴に乘じて、愈々駒登山のことに決す、同行三人、我等と今一人は三人男中での元氣者だ、湯の上の崖で莓が熟してゐたのを、手のとどく限り平げた、下を見ると小屋の邊で見送つてゐる顏が二個つばかり、その畧畫君が、頻と手まねをして、澤まま登ぼれよと云ふ、崖の上は根屈竹と雜木の林である、僅かに人の歩いた跡が認められる、遲らしい遲のないことは百も承知の上だから、驚ろくまでもないが、さりとて三人とも不知の處を漫然と出立つた無鐵砲には我ながら驚くの外がない、一寸の油斷を見出しては踏みつけた竹が、彈ね上つて股に引つかかる、伸び上がつて脫ぐさうとすると頭の用心が必要になる、二た折になつて進むより外、妙策がない、木の枝や草に縋りついて、溪に下り岩傳ひに上つて行く、水が、流れる丈無いから踏み外づしても大事はない、草や柴やが兩岸から蓬々と蔽ひ被ぶさつて、空のコバルトが折々指先でズイと引いたやうな無造作な線をかけてゐる、無論西も東も見えないから、果して是を辿れば駒へ登れるかどうかは疑問だが、三人とも「是だ」と信じてゐるから仕方がない、磐間の溜水に黑くて小さい山椒鰍とやらがゐる、紅花の大文字草が咲いてゐた、初めて見るのだが自然にそれと知り得て嬉しかつた、暑いから上衣を脫ぐと何かに腕を螫された、仕方なしに水を飲んで暑を凌ぐ、一時間許と云ふものは變化のない飛石傳ひである、一寸澤を出て林に入る純黃の菊科の花が咲いてゐた、又、澤に入る、鞋の紐を整へてゐる內に、半町も先になつた二人が出た、出たと叫んでゐる、急いで行くと成程出た、澤の岸二間四方許り切り拂つた、恰度椀のやうな處に出たのだ、空瓶、古鞋なんかが捨てゝある、つい近頃やつたものか、草も生えてゐない、先頃駒草採が二三日滯在して、採り去つたさうだが、それか知らん、或は獵師などかも知れん、兎まれ急ぐことにしやうと、また籔に潛ぐる、殿りの予が上り口の坂へ足をかけた途端、滑つて思ひ切り、彈みを

打つて轉倒した。採集鑵は、有らん限の音を立てゝ鳴る、雜靈は背上で無遠慮にバウンドを打つ、やれれや非度い目に遇つたと膝の邊を擦つてゐる間に、數を分ける音にまぎれて聞えぬとみえて二人はさつさと行つて終う、併し雜靈の體操を演じた處なぞ、見られなかつた方が、餘程增だつた、仕方なしに急ぐ、竹を切つて道しるべにした所もある、林は大分淺くなつた。

「峰に出たよ、今度はほんとうだ——」明かに二切になつた音波が笹原を滑つてくる。

彼等の立つ所に出た、見ると足下が噴火口ではないか、あまり面喰つて三人とも云ひ合はしたやうに沈默して佇んだ。まづ深綠なる双子の火口丘が、東極りて高い外輪山に、襟の如くに圍まれて、火口原は一體に竹や木やで、ぎつしり埋められてゐる、大きなのは雄岳、小さな方は雌岳なることは、宿の樂書によりて、自明の積である、さうして予等の立つ處は、外輪の襟の、低く低くなつたその一角であつた

外輪山を東に登る、竹原はまだ盡きない、木の幹を越えたり、竹の折れ株などを除けなんかする、歩き惡くさに友は後くれ勝になる、待つべく立ち止まつた、先の男は「渴が見える」と云ふ、徐ろに彼の視線を辿つて行くと、向側の外輪山と此方のとが低く沈んで、火口原と合ふた處で、眼鏡のやうな二つの水溜に突き當る、「ぴう、二つだなあ」と答へて、目的ともなく視線を遠く放てば眼鏡の湖邊を辷り落ちて、山三つ四つ、越え越えて、遙か西に蟠まる群嶺が見える、今し群嶺の峽を離れんとして、叢立つ雲がある、「美しい雲が見えるよ」と云ふと「ああ、さうだ」と云ふ、スケッチ帖を出さうかとも思つたが、待てよ、前途程遠しだ、時間と云ふ大切なものが惜しさに、もじ〳〵しながらも、熟々見惚れた、神や予が目に接れ給ひし、突如、予は奇しきあるものを感じた、さうして見た、ああ湖！湖！まがう方もなき山中湖だ、雲と見たのは空の投影であつた、藍色の湖岸よ、紫色の蘆影よ、あゝ何たる美しい湖だらう、周圍四五里もあるべき巨大の玻璃鏡　「湖だよ、潟だよ、田澤湖とは確かにあれだよ」と叫んだ「何が？何處が——あれは雲だらうが——」と目をみ張る、そのうちに後れた友も來て何

だ何だと騒ぐ、予は極力設明の勞をとつたが二人とも容易に信じてくれない、併し、併し、無理もないこつた、且な夕なに巨人駒の身粧する夢の鏡だもの、結局もうすこし登つたら解るだらうと云ふことにした、漸く竹が無くなつて偃松になる、枝を踏み〳〵歩く苦しさは、竹のそれに劣るところがない、コケモ、、岩高蘭などの實が熟してゐる、可成の登りだつたので一息す、振り返へる、湖面微風や渡る、鏡の空は銀の細線に縫れてゐる、微風の緣因を得て、彼等も漸く湖水なることを知り得て、今更のやうにその美に醉ひ始めた、「あれは田子潟だべい」「田澤湖だらうよ」「さうだ、田子潟だなあ、何にしてもいゝ景色だなあ」。

五千尺の山上から、あんな湖水を瞰下したのは始めてだから、愉快で堪らない、胸の中が沸り始めた。邪魔になるからと云ふので、菅笠を松の下に隱して行く、磽礫になつた、新らしいやうな熔岩の碎片が、散ばつてゐる、右は須走り、八月末まで殘雪がゐるところで、盛岡から見える諸山のうちで、最も遲くまであるところだ、故郷に産聲をあげてより、二十餘年の間、お駒は雲漠く岳よと眺めた、その盛岡駒の天邊を、今歩いてゐるのだ、盛岡駒、八の世の尺に目を刻むこと五千に過ぎない、けれども、けれども、虛心我が立つ駒の巨頭を擡げて、大空に肉迫する眼前の偉觀を、そも何者が詐り得べきぞ、指顧すれば、音に聞く鳥海も、仙臺駒も、早池峯も、森吉も、唯だ天の一隅なる數寸を埋める一抹の色彩にすぎない、これ等夢の巨人に憧憬るるよりは、我等をして脚下に磅礴する、活きたる自然の心と相融和せしめよ、活きたる自然、駒より南にかけて重り合つてゐる群峯、どれも〳〵、兜のやうな尖頂の數限りもない山々が荒瀨の浪を打たして、滔々ではない、轟々でもない、無音の調を合はしては、隙もあらば大虛の青幕を跳ね飛ばさうと覬つてゐるではないか、見詰める、個々が爪立をし合つて、筋肉の引締つた裸體の肩を聳かして、聳かして雀躍する、これこそ日本脊髓の稜々たる金剛骨よと、みじろぎもせず見入つた。

◎陸中駒ヶ岳に登る記　千葉

喘ぎながら登つても汗は出ない、それかと云ふて寒いでもない、こんな天氣は高山には稀だわいと、三人寛いで歩いた、もうこの邊は雄岳と畧同じ高さに見えるが、外輪の北部は、まだ高く峻はしい所がある、田澤湖は雄岳に隠れて見えなくなる、崖を背に、日をまともに受けて休んだ、パンを食ふた處が、水分が乏しくて、頗るまづい、友は桃の鑵詰を攻擊する、これは餘程疲れた證據だ、この先は馬の背越えの峻嶮だから、萬一なことがあつてはならぬと思つて友をば此所に待たすことにした、偃松を渡つて行けば、岩角一面にミヤマダイコンサウの生えた處がある、高みへ登れば、右手へ三角標の立つ山が現はれた、左を向けば雄岳のお頂が撫でられ、右を振り向けば三角標の額を拭ふによい、淺い水溜のある谷一つ隔てて立つてゐる、遠見の双頭は、これなりけりと、漸つとわかつた、噴火口に臨む方は、褐色の火山岩が垂直に屹立つて、下を覗くと畧丸が釣上つて、ゾッと惡寒を感ずる、落ちたらもうそれ切りだから、大事に樹の枝や岩根に取付いて、愈々大丈夫と云ふ時に足をはこぶ、なかなか捗取らないので、こんな鹽梅だと日暮までにも、崖を越せまいかと心配した、とある岩角に天下の通寶が三文、恭しく供へてある、其處に立ち止つた彼は、ほとほと尋ねわぐんだ樣に「石の祠があると云ふがどこだらう。」若し石祠でもあるとしたら雄岳だとは思つたが、別段祠には用がないから、默つてゐたら、三角標のあるのへ上つて見やうと云ふから、外輪の崖を右へ下りた、たうやくりんだうや、梅鉢草やの短かい草原を踏んで、水溜の邊を通つて休み〳〵二十分許で登り詰めた、三角標の邊は、少し許り平地で、黄花の駒の爪が咲いてゐた、此處からは田子潟の全面が、眼下に展開せられた、鳥海山と岩手山とは、今日程の天氣にも、雪の綿帽子を脱がない、北側を瞰ろすと、四五十間下方に、偃松に圍まれた洞がある、松の標番は合點として、中央の畝々した褐色がわからない、行つて見やうぢやないかと、そろそろ降りて行つた、ところが松が密生してゐて、なか〳〵歩けさうもない、彼先づ入り、予は別なところから這入つた、足下に小豆大の粒々を集めた七八分徑の苺が、ルビーのやう

に熟してゐた、「苺があるよー」と呼び立てた、「此方にもあるよう」と云ふ、道理で音がしないと思つた、辛じて洞へ拔けたら、掘りかへした跡にいぢけた、草に交じつてミヤマトリカブトが咲いてゐる、藁を敷いた所もある、炭屑……、多分測量師一行の天幕を張つた所だらう、それはそれとして此の洞は何だらう、或は小噴火口かも知れない、さうすると駒には西向の大噴火口と此處のと二ヶ所に在るわけになる、昔々、駒が二條の火柱を吐いた時、べつこんと陷沒したのが田澤湖ではあるまいかなど、愚にもつかぬ事を考へた、歸りには、ほんとうの途を見附けて頂上へ戻つた、岩手山の西裏に當る葛根田（カウコンダ）温泉へは、山三つ四つ越えたら行けるやうだ、時計を見たら止つてゐる、急ぐに如くはなしと、此所を降りて外輪へ這ひ上つた、雄岳が背中向けをしてゐる、友を殘して置いた崖も、遙か東に見えてゐる、我々は第一着に眼下の崖を下らなくてはならぬ、鳶色の岩角を廻つたり、草に縋つたりして降りた、鮮麗な紅紫色の花が咲いてゐる、花時を過ぎて、蝶も飛ばず駒鳥の歌さへ聞こえぬ、高山の淋しさを身に染めた予の目には、何とも云へぬ美くしさだ、赤沼フウロサウに違あるまい、途すがら其處にも此處にも見える。

崖を半分以上降りた頃であつた、僕よりは三四間先に降りた連が、それ兎だ、それ〳〵と草の動く方を指す、石の上に立つてゐると、草は上方指して動いて來る、忽然、褐色の動物が、僕の足前に顯はれた、竹の杖を振り上げて三四擊喰はしたら倒れた、殺す積りではなかつたが、勢に乘じて尙叩いた、びくびく蹶いてゐるが、肝心の後肢が折れてゐた、捕へた捕へたと生温い獲物を擧げて見せた、彼は「もう行かう」と云つて僕の方を向いて立てゐる、草の上の兎はまだ足を顫はしてゐる、……おお、忘れてゐた、今日は、氣を付けるやう、母上から云ひつけられて來た、亡き父上の忌日、はしなくも記憶を喚び起せし悲しき動機に胸中は哀憐と悔恨の情が堪え難くなりて行く、あゝ、今日は二日であつたと心の中で叫んだ、見遣ると眼はまだ濕を以て黑く光つてゐる、碎けた脚と耳端は折々微動する、もう此

の小さき屍を脱け出でた可憐の精霊は、崖を越えて、空をも攀ぢて、常樂の野邊に逃れん淡夢を辿つてゐるであらう、可愛さうなことをしたと泌み〴〵思つた、下の方を見たら連は矢張り下の方を向いて佇つ、路筋でも見つける積だらう、「持つて行かうか」と問く、「どうでもいい」餘り乘氣にもならぬらしい「それでは、置いて行くよ」と云ふと、彼はもう胸の邊までもある薊の中へ下り立つた、予も歩かにやならぬ、坂を上るたよりの杖のこんなこと仕出さうと誰が想つたであらうなど、毒と考え乍ら柔かな草の上に屍を横へた、そして手近のフウロサウの花を摘み集めて手向けてやつた。

心を殘して下り初めた、薊の葉に觸ると痛い、そうかと云つて下を見ないと石に躓く、全たく谷間へ出たら短かい草原になつた、振り仰ぐと崖はまるで屏風だ「僕の方へ來なくてもいいこと、馬鹿な奴だ」など語りつゝ歩く、此處は雄岳の裾である、雄岳の裾を廻り盡くして、雌岳の裾へかかると、刈り取つたやうな草原、まるで天鵝絨を敷き延べたやうだ、チングルマが敷き詰めたやうに生えてゐる、花時には如何にこの裾模樣が麗くしからう、それから岩手山では三四尺もあつた、シロバナノタウチサウは僅かに五六寸可憐な穗を拔いてヒョイ〳〵咲いてゐる、裾を廻ると、窪地に疊三枚許の水溜がある、折箱みたいに淺くて、少しも凄みのない池だ、お日樣は岳に落ちて、陰になつた、水面に空が碧く映つてゐる、予は重傷に沈み切つた心を抱いて、とぼ〳〵と冷たい影の野を歩いた。

もう友を殘しておいた崖の根に來た、暖かい日光を浴びた、崖を見上げて二三度呼んでみたが、顔を出さない、斜に上つたら友の居る處より約一町ばかり下に出た、また大聲に呼んだら、漸く立つて駈けて來た、そして待ち遠かつたこと、寒かつたことなど、不平を並べた、草の葉包にした苺のお土產を渡した、三人一例になつて下りて行く、松原の盡きる邊で、雄岳の寫生を試みたけれども、思ふやうにゆかなかつた、連の男は笠を忘れて來たのに氣付いてとりに行く。

松原から竹藪に移つるころであつた、烏海より北方の地平線上、黃に輝やく線を連の男は八郎潟だ

と云つた、外輪山を降りつくして、もう溪へ入らうとして、三人云ひ合はしたやうに立ち止まつて眺め廻はしたとき、鳥海もとう〳〵雲を脱け出た、溪へ潜り込んでからは夢中で歩いた、温泉の上の崖へ出たら、二三人僕等の方を見上げてゐた、宿に歸つたら四時だつた、「餘り遲いものだから、心配してゐました、いつかも、書生樣達が迷子になつて、　塲へ出たことがあるものだから――」と云はれた。

夕食が濟んで湯に行つたとき、鳥海山や八郎潟など見た話をすると、「ああ、それでは明日は雨だ」と云ふ、豫言は適中するかどうか、今晩は星月夜、受合ひ上天氣と決めて寢た。

## 八、雨の國見温泉

夜半過ぐる頃目が醒めた。――降りも降り、大降りらしい、風に吹きつけられて板圍を打つ音が、ざつ、ざつと、間斷なく聽える、瀧が滿身の力を瀧壺に集中する響が、凄まじく鳴り響いてゐる、困つたことになつた、是では切角準備して來たことも、むざ〳〵失敗に終る、今日は下の溪川へ下つて寫生したり木の葉石を採つたりしやうと思つたに、それは兎も角だ、この雨では出水の爲に歸路を斷たれてしまう。

明るくなつても止まない、槁の實のやうな荒い雨が太い線を作つて、ざああ、ざあと音調をつけて降り注ぐ、「兎を殺した罰だ」と云ふ、食ふことと、湯に入ることで今日一日を暮らさなくちやならぬ、友人へ出すべく繪葉書二枚作つた、壁板に登山案内略圖を畫いた、それから來年の登山準備に早池峯山の樣子など質いておく、夜に入つてもやむ氣色もない、雲は小屋を包み、風と雨との總攻撃だ、家も山も破壞れさうな高山の暴風雨の夜。

## 九、雨を衝いて歸途に就く

今日もまだやまない、窓を少し明けて見たら、向の岳から盛んに、霧だか雲だかなだれ落ちてゐる、「これでも歸りますか」と云ふ、「降つても照つても」と答へた。

豫定通り歸途に就いた、内へ手紙を出してくれと頼んだ男が、下の川が危ひとて、送つくれた、幸ひ出水は少なかつた、例の路は今日はほんものになつて濁水を流してゐる、潟の邊で雨は止んだ、往く時見つけておいた黄蓮もつい通り越してしまう、だんだん峠を下るにつれて、下界は天氣だ、橋場を端づれてから振り向いたら、國見はまだ雲に埋もれてゐる。

# 日本北アルプス風景論

小島烏水

## 一　日本北アルプスの遠望及び其成生

我が日本群島を一家と見做すと、北海道や四國九州は離れ座敷で、母屋は無論本洲である、本洲は日本國の主體であるから、その中央部は文化の中心、文明の大座敷であるかと思ふと、高山深谷で區劃せられてゐて、人類絶無、又は稀少、殆んど足の踏みやうも無い深秘の境域である、狹長なる島國としてかゝる地點に、かゝる大山脈を有するといふことは、先つ我が日本の國土構造の異常を思はせると共に、その大山脈、所謂日本アルプスの印象的な性格に、着眼せずにはゐられなくなるのである。

その日本アルプスで、最も長大なる山脈は、言ふまでも無く、北アルプスなる飛騨山脈である。

併しながら荒寥と寂寞は、空白無意ではない、一杯の土も歴史を含むといふ京都や奈良が、建築美術等の人事方面に於て、貴重すべきものである如く、我が日本アルプスは、氷雪雲霧岩石森林溪谷の天然方面に於て、最も珍藏せらるべきものである、日本では奈良京都と同一地積に於て美術的に匹敵する土地が、他に無いやうに、日本アルプスに同一地積に於て、自然の彫刻を拮抗し得る土地は、何處にも無いのである、日本アルプスが京都奈良の開放的なると反對に、本州中央に深秘に閉鎖せられて、今日まで自然に對して、鑑賞力の發達した人間の出るのを待つてゐたのは、決して無意義では無かつたのである。

諸君は本誌の卷頭に挿まれた、一葉の山岳畫を見られるであらう、これは會員中村清太郎氏の作で、此年の冬一月、飛騨山脈の鑑畫的觀を、信州松本を距ること、東三里許の武石峠から、描寫されたものである。（本號雜錄「口繪說明」參照）

見らるゝ通り、この山脈は長大である、高いところは雪と、それから無論畫には見らるべくもないが、破片岩(Debris)で覆はれてゐる、こゝは一年の内僅に數週間のみ、近づくことが出來る、その上この山を組成する岩石は、熱と冷の極端なる變化から、又は壓迫から、破碎せられ、屈枉せられ、緩曲せられ、斷續せられ、立たうとしては俯み、俯んでは反り返つてゐる、その屈伸から屈伸に續くところに、無限の變化を有してゐる、能く言ふ言葉だが、山の波濤である。

併し波濤といふよりも、私は山の群集といひたい、モウパッサンは「水の上」と題した紀行文中であつたかと、たしか記憶してゐるが、「群集は別に一個の性格を作る」と言ふ意味の言葉があつた、これは人間の心理狀態に立ち入つた言であるが、山岳の性質としても、アルプス的型態に群集をすると、一箇の何山としてよりも、一鏈の何山脈として見るところに、纏まつた性格が出て來るのである。

この長大山脈は、如何にして作られたのであらうかと、いふことは、地質學者の領分になる、さう

はいゝが、建て物からしてすでに小屋で、天井の低い、建てつけの惡るい、寢室と名づけたのが、二階に六つばかりあるだけで、グリンデルワルトから、日歸りに遊びに來る客はあつても、大降りにでも出會さなければ、泊り込むものは殆んど無いさうで、宿帳を開けて見ても、知つた名前はとんと見當らない。取りあへず、二階の片隅みの一室に這入り込んだが、傘の下でにも、潜つてゐるやうな雨の音が氣になつて、また、食堂に下りて來る、入口に出ると、南の風がなか〳〵強く、夕立のやうに小屋を目掛けて、土砂降りに降つてゐるが、空はいくらか明るくなつて、アィガー、グラートのヅィクザックは、この時、明らかに仰がれた、トレーガーの爺さんは、明日登つて來る約束で、村に引きかへす、刻煙草をもう一鑵買つて來て貰ふことにして、扨てストーブを圍んで、落ちついてふかし初めた。倫敦でもさうだつたが、何が面白いつて、國にゐる山連の噂ほど、面白いものはない、小島君や梅澤なんかが、こゝにゐたらどうするだらうなんて、質問は極めて簡單だが、想像の結果は大それたもので、やがて手紙になつて本人の手許に舞ひ込む時分には、こつちではとうの昔に忘れてしまつて、それからとんでもない頃に、素敵に憤慨した返事が來たりして、何を一人で怒つてるんだらう、大方神經衰弱にでもかゝつたんだらうなんて、また先生方は憤慨の種が增える。またそこが何とも云へぬ面白ろさで、幸ひ今日も、もとより用事はなし、相當に面白ろい材料がそろつて、御茶がすんだら、手紙でも書いてまた一つ口惜しがらせて見やうぢやないかなんて、怪しからん相談が成立する時分には、天氣もよほどなほつて、雲は厚いが、雨はもう小降りになつて來る。

そのうちに、外ががや〳〵して、やがて登山家の一行が下りて來た、春負つてゐるロープや、リュックサックから雫がぽた〳〵たれて、見るから佗びしい濡れ姿、グリムゼル、ホスピツから、ウンテラールグレッチェル（Unteraar Gletscher）を溯つたが、シュトラールエックで病人が出來て、雪の降るのに二日半も滯在した上、病人をのこして今朝小屋を發つたが、雪があまりひどいので、シュワル

このやうに赤石山系も、飛驒山脈も、褶曲と斷層との相違はあるといふものゝ、要するに地球の收縮に基づける地殼の運動に因つて、生じたもので、兩方とも他の地球上の大山脈と同じく、日本無双の構造山岳の、立派な典型をなしてゐるのである。

殊に兩方の山岳ともに、之を連嶺として觀るのに、岩石の硬軟、水量の多寡、その他の原因に依つて、山頂は殊に多く削磨を受け、あの畫に見るやうに、凹凸高低を作り、山の波濤、山の群集を生じて起到屈曲するところは、我々をしてその山岳成生の原因如何を問はず、畧ぼ同樣の觀念、即ち長大なる山脈に對するときの觀念を、起させるのである。

私はそれ等の意味からして、飛驒山脈中の個々として特立する立山なり、白馬岳なり、槍ヶ岳なり、御岳なり、乘鞍岳なりに對する意見を述べるより、飛驒山脈といふ山岳群集を、一箇に串通せられたる大鎖として、考へて見たいと思ふ。

同じく斷層といふも、其狀態は種々雜多なる方式を作り、殊に大山岳の斷層の如きは、至つて複雜なるものなれば、本章に述べたる如き、簡單無造作なるものにあらざること、勿論なり、只だ詳細なることは、專門學者の考究を俟つて知らんのみ。

## 二　日本北アルプスの境域及び飛驒山脈なる名稱

その前に日本北アルプスなるものゝ境界は、何處から始まつて、何處に終るか、日本北アルプスに包含せらるゝ重なる山は、何々であるか、又何故にこの山脈を、飛驒山脈と呼ぶかといふことに就いて、一寸述べて置きたいと思ふ。

飛驒山脈は、南端を美濃の東北部、飛驒の南部、及びそれと接觸する信濃の西部、即ち木曾御嶽附近に起し、北から少しく東に偏して、槍ヶ岳まで進行し、それより殆んど長く南北の方向に延びて、詳しく言へば全脈西南々より東北々に連亘して、遂に日本海に入るので、本州の半分以上を、所謂

屏風立に横斷してゐる、境界線は木曾川谷によりて木曾山脈と分離し、姫川谷及び松本平で信州中部の山岳と隔てられ、南は益田川（飛驒川）と、木曾川の合流點で盡きてゐる。

更にこの山脈の分離集合を見て、私は假に左の如き六線を作りたいと思ふ。

第一　御岳火山帶
第二　槍ヶ岳山脈
第三　常念山脈
第四　立山火山帶
第五　黑岳山脈
第六　後立山山脈

即ち序を逐うて言へば（第一）南の方東俣岳、槌谷山、繼子岳（二、八五九米）繼母岳、御嶽（三、〇六五米）乘鞍岳（三、〇二六米）十石山（二、五二五米）池ノ上岳（二、二一九米）硫黃岳（二、四五五米）割谷山（二、二二四米）を經て、穗高山に接續するものが、御嶽火山帶で。

（第二）御嶽火山帶に接觸するところより霞澤岳（二、八四五米）穗高山（最高點奥穗高三、一〇二米）槍ヶ岳（三、一八〇米）の峻峰となり、鎌尾根、樅澤岳、左俣岳（二、六七四米）雙六岳（二、八六〇米）蓮華岳（二、八四一米）に延亘する山脈で、この中、左俣岳邊より笠ヶ岳（二、八七九米）が飛驒方面へ突出してゐる、笠ヶ岳のみは西へ一支脈として、深谷を擁しながら、岬角のやうに出てゐるが、他は槍ヶ岳より蓮華岳まで、殆んど南北の走向をしてゐる、之を槍ヶ岳山脈と稱したい。

（第三）槍ヶ岳山脈の東に當り、これと畧ぼ同じ走向を以て、一の俣二の俣の横谷を挾みながら、並走する一山脈は常念山脈で、有明山、燕岳（二、七六三米）大天井岳（二、九二二米）奥常念岳（三、〇〇〇米？）蝶ヶ岳（二、六六四米）德本峠（二、五二二米）に連なり、第二線の霞澤岳に合してゐる。

（第四）槍ヶ岳山脈の終點蓮華岳（この山岳が飛驒山脈構成上、甚だ必要なる役目を帶びてゐることは後に說く）から三山脈が、壯大なる狀態を以て、東西に分岐し、孰れも北へ々々と進行してゐる、先づこゝに擧げるのは有名なる立山を有するところから、立山火山帶と名づけて置く一脈で、即ち蓮華岳からやゝ西へ偏つて、西俣岳（二、五一九米）黑部の五郎岳（二、八四〇米）北俣岳別名上ノ岳（二、六六一米）より、頓に高聳して薬師岳（二、九二六米）の高峰となり、又次第に低下して、ザラ峠（二、五三三米）大橫手（二、六二二米）より立山（二、九九二米）の最高點に達し、別山（二、七七七米）を經て西は奥大日岳（二、六〇六米）に偏り、北は劒岳、毛勝岳（地圖の所謂瀧倉岳（本號南日文學士の紀行文參照））に至るのである。

（第五）再び蓮華岳に戻つて鑓羽岳（二、九四四米）より赤岳を經、黑岳（二、九七八米）の最高點を作り、赤牛岳（二、八六四米）となつて、黑部川と東谷（ヒガシダニ）の間に斷絕する、これは北日本アルプス中、最も短かい支脈で、或は次に擧ぐる後立山々脈中に、附屬させる方が宜いかも知れぬ。

（第六）は黑岳山脈の最短なるに反して、北アルプス中、最も長大の脈で、私は總括して後立山々脈（ウシロタテヤマサンミヤク）と呼んで置く、勿論越中方面からいふ「後（うしろ）」で信州方面からは立山の前に當るのであるが、立山が最も古くから知られ且つ開かれた名山であるのと、後立山（ウシロタテヤマ）なる名が、早くより往々地理學者に呼ばれてゐるのと（その癖、後立山といふ一箇の山體の存在は、未だに何處だか、確には解らないのである）に敬意を表して、さう言つて置く。

三たび蓮華岳に戻つて、その附近から東に偏して野口の五郎岳（二、九二四米）を起し、三ッ岳（二、八四五米）烏帽子岳（二、六二五米）不動（二、五九五米）七倉（二、四五三米）蓮華岳（二、七九九米）針木岳（二、八二一米）牛小屋岳別名赤澤岳（二、六七八米）岩小屋澤岳別名西岳（二、六三〇米）祖父岳（二、六七〇米）鹿島槍岳（二、八九〇米）後立山（ゴリウサン）（五龍山二、八一四米）（本號榎谷徹藏氏の紀行文參照）唐松谷（二、六九六米）祖母谷（二、八一三米）鑓ヶ岳（二、九〇三米）白馬岳（二、九三三米）と南北の方向に延亘し、白馬岳から二派に分

れて左は才兵衛岳（二、六一一米）雪倉岳（二、四一八米）となり、右は小蓮華（二、七六九米）乘鞍岳（二、四三七米）より二、〇〇〇米突以下の彌平頭、吹風等の諸山となつて、日本海に入つてゐる。

之を幹線支線の關係にすれば、左の樣なものになるであらう。

標高は疑問點を附したるものの外に凡べて高頭仁兵衛氏の供給を受けたるもので、同氏は山岳會のために、參謀本部陸地測量部の測定を寫し取られたのである。陸地測量部の好意と、同氏の勞とは、最も多とするところである。

日本北アルプス飛騨山脈分岐圖

私は以上假定六線の中、第一線では御岳と乘鞍岳を登り、第二線では笠ヶ岳と穗高山とを除いて全部、第三線では有明山を除いて全部、第四線では藥師ヶ岳と立山とを登り、第五線では赤牛岳を除いて全部を登つたが、最も長大豪壯なる第六線は全部未踏の地であるから、飛騨山脈の論者として、最も資格に乏しいのである、本論はその積りで讀まれたいことを希望する。

そこで飛騨山脈なる語は、明治二十一年に世に公にせられた、理學博士故原田豐吉氏の有名なる日本群島地質構造論で、初めて新稱として命せられたのである、本邦には四國山系、關東山脈、蝦夷山系等、

汎稱的山脈の名はあるが一國、の名を冠されたのは、唯一の飛驒山脈があるのみである、今日では飛驒國は、その春慶塗と一位細工を有するが故に、傳はつてゐるのではなくて、日本最大最高の飛驒山脈を有するに依つて、我々の耳に痛切に響くのである、私は飛驒の新聞に寄書して、飛驒の國都なる高山町、古川町、船津町が假に亡失したとしても、日本國全體には格別の影響も及ぼすまいが、もし飛驒山脈が消滅したとしたら、日本國土の上には測る可らざるほどに重大な結果を來すであらうと言つたが、日本北アルプスの全部に、その國名を冠せられたのは、飛驒の大なる名譽と言はねばならぬ、もし日本北アルプスを措いて飛驒を不朽に傳へるものが、現今在るといふ人があつたなら、私は先づ其人の眼瞼を檢査してもらひたひのである。

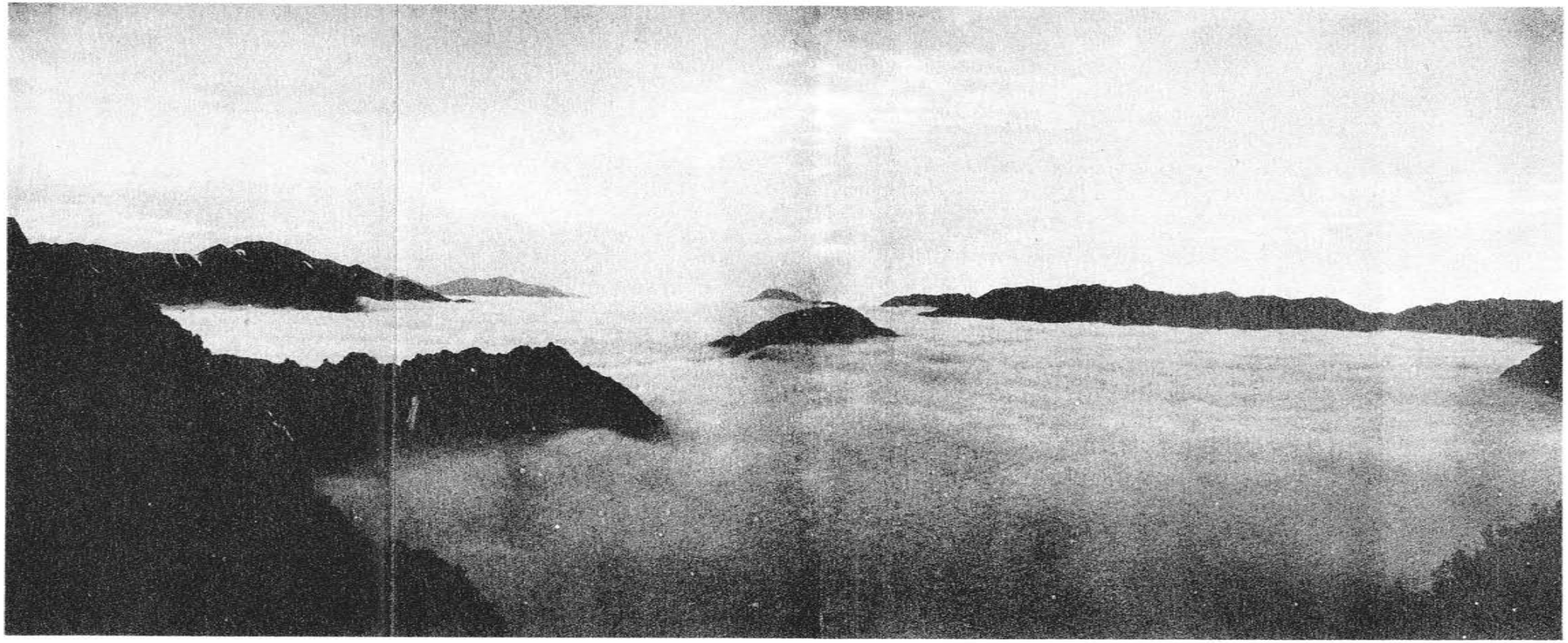
併しながら何故に飛驒山脈といふ名を命せられたかといふ事に就いては、私は未だ誰人よりの說明を聞かないのである(或は說明する迄もなく解つてゐるからかも知れぬが)脈中の最高峰が、飛驒に最も多いためであらうかと言へば、槍ヶ岳、御岳、乘鞍岳等は、標高に於て此山脈中第一位に列するが、信濃飛驒の境界にあつて、飛驒の山岳とのみ言はれない、のみならず御嶽の四分の三は信州に屬し、四分の一を飛驒に有するのみである、乘鞍岳は半分々々としても、槍ヶ岳は三分の二を信州に、三分の一を飛驒に有するに過ぎぬであらう、況んや穗高山の如き大岳は、全部信州に屬するをやである、實際純粹に飛驒の領土にある高山は、北日本アルプスを通じて、僅かに一の笠ヶ岳を有するのみである。

然らば飛驒山脈の大部分が、飛驒の國境に屯ろするためであるかと言へば、これも寧ろ反對で、同山脈の東緣は、日本海に近い一角を除いて全部信州に屬するにも係はらず、西緣は美濃、飛驒、越中、越後四國に分屬してゐる、それだけ飛驒に屬する範圍は狹小なものである。就中常念山脈の如きは、全部信州の獨占に歸してゐるのである、もし此山脈に領域廣狹の意味から、一國の名を冠らせて宜ければ、西信濃山脈こそ、最も適當な名稱であらう。

併しながら、學者が飛驒山脈を呼び、我々も此名を快く承認するのは、恐らく次の理由からではあるまいかと思ふ。

（第一）飛驒は、美濃の北部を含んで、地球の褶曲作用から隆起した高臺が、浸蝕作用のために、次第に削磨されて、今見るやうな高原を作つてゐるので、一方に於て、その西南なる美濃尾張の平地に臨んでゐるから、飛驒高原と尾濃低地とは好箇のコントラストを作つてゐる、斯くして飛驒高原は、我が阿武隈高原などゝ同じく、地質上始原代古生代の山脈が、浸蝕を受けて、今日の容貌を呈したので、主として花崗岩及び片麻岩等の大古の岩石より成つてゐる、行政上の便宜區劃から、今日飛驒と呼ばるゝ一國のみに限らず、越中、加賀、越前、近江の一部を包括してゐる、その飛驒高原の東緣を屏風立ちに衍けてゐる大山脈だから、恰も阿武隈高原に峙つ山を、阿武隈山脈といふ如く、飛驒高原に峙つ山を飛驒山脈と呼んだのであらう、試にこの高原の如何に高大なるかを知らうと思へば、高きより低きに就く水を見ると解る、水は越中平原、加賀越前平原、美濃尾張平原の三方に落ちて、その南北の分水嶺は、錯雜不規律な屈曲線を作つてゐるのである、その飛驒高原は、かの火山噴出物より成れる堆積高原即ち東信濃の一部にある高原のやうな規模の小さいものでは無い、一方に日本第一の高原があれば、一方に日本第一の大山脈が必要なわけである。

（第二）前に述べた通り、此山脈は北に於て、立山火山帶、黑岳山脈、後立山々脈の三支線を有してゐるが、此三支線を一本に結束してゐるのは、蓮華岳である（故に蓮華岳は一名三俣（ミツマタ）岳の稱がある）飛驒國に屬する日本アルプスの最北は、この蓮華岳から初まるのである、それと共に南に於て御岳山脈と常念山脈とを合併して、締め括りをつけてゐるのは、槍ヶ岳附近である、蓮華岳から槍ヶ岳までの間は、私の所謂槍ヶ岳山脈で、短かい山脈ではあるが、實に日本北アルプスの中樞である、飛驒山脈の幹線である、この中樞と幹線との包括範圍にある、國は、飛驒であるから、此山脈を本位的に呼んで、



槍ヶ岳山脈より望める雲の海

（高野鷹藏氏撮影）

飛驒山脈といふことは、適當な稱呼であると言はねばならぬ。

（第三）土地分量の上から言へば、飛驒山脈の絶對過半數山岳は、信濃に占領せられてゐるけれど、地質構造上から見ると、飛驒山脈は飛驒高原と同じく、太古の片麻岩を以て基礎としてゐるのに反して、信濃臺地の基礎は、生新（なまあた）らしい第三紀の岩石を以て成つてゐるから、系統上西信濃山脈の如き稱呼は、飛驒山脈の稱呼の正しきに如かざること等である。

こんなことは風景論に、格別關係の無いことであるが、先づ北アルプスの境域と、この大山脈の位置（Position）から決めるのを順序とするから、言つて置く。

## 三　岩石及び山形

飛驒山脈は、赤石山系と同じく、北日本南日本の境界線に立つてゐる、今附近の山脈と、此山脈の對比を見るのに、赤石山系の東に、秩父山地と稱する關東山脈がある、此關東山脈は武藏野平原を隔てゝ、阿武隈山脈の南端と相對してゐるので、武藏野平原陷沒以前は、同一山系であつたらうといふ想像が容れられる。飛驒山脈の東には、千曲川と犀川との間に突入する千曲山脈がある、此山脈は三國山脈（苗場山、吾妻山、清水越、三國峠、碓峠）の南派とも見らるべく、即ちこれも同一山系である。

是等の低卑なる古き諸山脈が、大體に於て東から西へと走つてゐるのに相反して、赤石飛驒兩山脈は、畧ぼ南北の走向を作つてゐる、實に日本アルプスと北日本の諸山脈とは、地形の走向も、地層の走向も、相反して、何等の連絡が無いから、此間に地帶の大斷裂があつたと認められてゐる。多くの所謂富士帶に屬する火山即ち日本アルプスの前景を作つて、日本アルプス帶の尖れる山とは違つた、優美柔和なる圓錐形をなせる諸火山は、後章にも述べるが、此地殼の弱線から、競うて噴起したのであるといふことは、諸學者の說くところである、ともかくも赤石飛驒の兩大山脈は、日本の山岳史上

拔群の器を以て、獨歩の位置を占め、日本國を横斷してゐるので、他事ではあるが我が戰國時代に南アルプス（赤石山下）の武田氏と、北アルプス（飛驒山脈）の庇下の上杉氏とが、威武を以て兩々南北に相對し、海内を横斷したのは、一つは此土地の走向に隨つて、發展したものであると言はねばならぬ。

赤石山系は、赤石白峰の二大山脈が成生の起因を同じうし、時代を同じうし、走向を同じうして、兩々相下らず、駢走するところに、大なる山の行列と、群集とを見られるのであるが（拙著『日本アルプス』第一卷參照）飛驒山脈の幹線は、必竟するに一本の連鎖である、素より北には立山々脈と、後立山々脈とを分岐し、南には常念山脈が、槍ヶ岳山脈と暫く駢行の姿勢を取つてゐるが、併しながら要するに、飛驒アルプスの幹線は、一本の槍ヶ岳山脈に合するのである、故に飛驒山脈は假令 Single chain（一本鎖）で無いまでも、Simple chain（簡單鎖）であることは、否めない、赤石山系のやうに複雜した、出入の烈しい、連鎖構造は有して居らない、只だ其れ簡單なるだけ、それだけ壯大である、槍ヶ岳山脈は、凡そ世の中の一本筋の最も壯大なるもので、此連綿たる山稜は、莊嚴なる山岳風景眺望の廻廊である。

飛驒山脈を信州方面から仰ぐと、一本の直線を描いて、そこ〻に標的を置いたやうに峰が屹立してゐる、此峰の形狀は、飛驒山脈の高山に畧ぼ通有する同一形貌、即ち槍狀を作つてゐる。

それか、あらぬか、北アルプスは、及物の名を有する峰（劒岳、鑓岳、鹿島槍ヶ岳、鑓尾根、槍ヶ岳、鑓ヶ峰）が多い、就中峰頂の槍狀に尖れる山を擧げると、槍ヶ岳以外に、白馬の杓子及び鑓ヶ岳、鹿島槍ヶ岳、黑岳、常念岳、藥師岳、南方の一嶺、會員三枝氏が針ノ木槍ヶ岳と命名せられた一峰などは、孰れも峰としては、鋭い槍狀を作れる山で、槍ヶ岳は飛驒山脈を代表する特性山岳（Characteristic mountain）と稱すべきもので、岩石構造は違うが、歐洲アルプスの針峰（Aiguille）に取つて代るものである、就中槍ヶ岳は、角稜岩狀の斑岩より成つて、岩質の硬脆なること、三千百米突に近き高處にあつて、

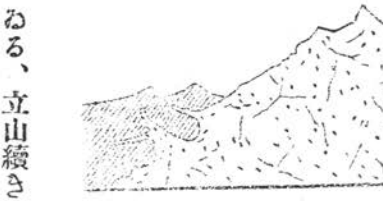
温度の變化が劇しいためと、雪多き北アルプスにあるから、氷雪が岩石の內部に入つて、破壞作用を逞しうするので、岩石は鑢樓のやうに寸裂して岩石の洪水を、あの邊の山稜一帶に流布してゐる、槍ヶ岳續きの鎌尾根の如きは、この槍の崩壞最中にあるものだと言つて宜い、槍ヶ岳の岩石は、實に「痛酷にして赤裸なる威嚴」(Severe and naked dignity)を天外に露はしてゐるのである、恰も埴輪が人類學上の、古器物で、その製作者なる人間の歷史を語つてゐる如く、この崩壞岩石は、地質學上の古器物の破片として、創造主の意匠を暗示してゐるのである。

北アルプスが、このやうに槍狀の岩石に富むのは、必竟堅硬にして抵抗力强き、花崗岩質から成り立つてゐる故で、花崗岩の山岳に尖れる峰の多いことは、金峰山の五丈石、鳳凰山の地藏佛、木曾駒の實劍岳の如き、その一例で、實に顯著なる容貌を作るのである、或る意味に於て飛驒山脈を論ずるは、頓て地球上の深成岩なる、花崗岩を論ずることになるのである。

多くの大山脈には、低き側待山(Lateral Range)と、最も高き中央山塊(Central Peaks)とを有するその中央山塊は、地球の深秘なる內部(地心)より噴出する花崗岩のやうな深成岩、又は片麻岩のやうな、太古の岩石から成るのが、最も多く、之を中軸に介んで、銷磨した古代の低山か、又は成生の新らしい第三紀層の丘陵的前山などが、中央山塊の兩側に、傾斜の緩やかな厚い緣を銜けてゐる。

その例を擧げると、天龍河畔の坂下(伊那町)から赤石山脈を望むと、その西側なる膝下には、太古紀の前山が、緩徐な傾斜をして、鈍圓形の小丘となつて集まつてゐる、その背後に驚くべき標高の相違を以て、赤石の水成岩山、延いては甲斐駒山塊が、白堊の岩壁のやうに、燦として新花崗岩の光を輝かしてゐる、これは太古の側待山に對して、比較的新らしい古生紀層が、中央山塊となつて聳えてゐる好例である。次に之に對比すべきは、飛驒山脈で、その東側なる膝下には、第三紀の新火山岩、第四紀以後の新らしい岩石が、或は蜿蜒し、或は斷續してゐるが、新火山岩の或る山が、二千米突以

上に達するのみで、他の山々は巨人脚前の侏儒の觀を止め、小さな皺を折り立てゝ、匍伏してゐる、これは花崗岩骨の中央山塊に對して、新らしい側待山の關係が覗はれる、即ち側峙山（最古又は最新の區別あるにもせよ）を挾んで、南アルプス北アルプス共に、中央山塊（水成岩、火成岩の區別あるにもせよ）は仰がるゝばかりに峻高なのである、殊に花崗岩は火成岩の特徴として、地心から溶融して、迸發したり、表層以下に止まつて、凝結暴露したりするのであるから、不規則の塊的形狀をして、中央山塊としても、奇怪な容貌を作り易い、之を圖に示すと、第二圖の如くである、即ち眞中のが花崗岩塊なる中央山塊で、岩脈となつて他の最古の片岩に挿入し、兩側の比較的脆弱なる片岩は、その後次第に浸蝕作用のために、低卑に削減せられて側峙山となつたのである。




第二圖

翼へつて飛驒山脈と兄弟の關係ある飛驒高原を見れば、その外緣を繞れる古生層は、花崗岩の噴出で、支離滅裂になつてゐる、實際廣さに於て高さに於て、飛驒ほど花崗岩が迸發したところは稀であらう、廣さに於ては飛驒は勿論、美濃遠江の高原から、五畿內瀨戸內海にまで此系は延亘して、本洲の大花崗脈を作つてゐる、高さに於ては日本無双の北アルプス最高點に、屋棟を架してゐる、之を知らうと思へば、飛驒山脈中央の穗高山は花崗岩、槍ヶ岳は石英斑岩（微粒花崗岩）より成り、双六、蓮華、鷲羽、黑岳の諸高山皆花崗岩である、常念山脈も常念岳（後に論ず）を除いて、大天井、燕、皆然りである、後立山々脈は、踏査以外だから解らぬが、立山々脈北端の越中立山でも、雄山と別山とは、花崗岩から成つてゐる、立山續きの小火山小鳶山は、聞くところに依ると、爆裂のために摺鉢狀の窪地を現はし、小鳶山を構成する火山岩は飛散して、花崗岩の地骨を露出してゐるさうである、その噴氣孔內に花崗岩の

突出してゐるのは、山岳飛散のために、下部の地骨を暴露したもので、飛騨山脈の碁盤が花崗岩であることが解る、同一の現象は木曾御嶽にも見られる、一の池火口の東壁、劔ヶ峰といふ火口底より、百米突も高い御岳火山中の、最高點で、熔岩に包まれた花崗岩樣の岩塊を、往々見ることがある。

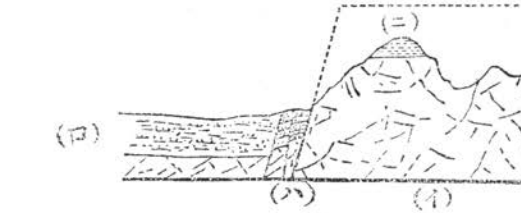
南アルプスなる赤石山系の駒ヶ岳、地藏岳、鳳凰山、その他金峰山、笹子峠等、甲州に多く花崗岩の連嶺を見るけれども、これ等は個々獨立に點狀をなして噴立してゐるのに過ぎない、花崗岩の迸發に於て、飛騨山脈と匹敵するものは、只中央アルプスなる木曾山脈のみである、この花崗岩山は、日本で最も多く、最も普通に見受らるゝ黑雲母花崗岩(斑狀の長石を有する)で、木曾川の寢覺の床を始め、木曾地方の勝景を作つてゐるが、惜しい哉、山岳としては飛騨山脈の高大に及ばざること遠い。

常念山脈の盟主は、常念岳であちう、海拔三、〇〇〇米突に達して、槍ヶ岳ほど尖削してはゐないが、遠望すれば、殆んど槍ヶ岳と擬ふばかりに、ピラミッド狀を作つて、高聳してゐる、これ恐らく日本全國中、片麻岩の最高點であらう、最下層に沈澱すべき筈の岩が、北日本アルプスの最高屋棟にまで、推し上げられてゐるのだから、自然が造山働作に使役する力の、如何ばかり絕大なるかを嘆せずにはゐられない。

槍ヶ岳を作れる石英斑岩に至つては、此岩通例脈狀をなして、他岩石を貫通するので、生れ方が窮屈だから、孰れかと言へば、日本全國中に分布の至つて少ない方である、地質圖を按ずるに中國殊に吉備山地、越後山系の東南部、日光四近のやうな內面山岳に發達して(最も紀伊の東海岸にも發達してゐるから、內面山岳に限るとは言はれない)ゐるに過ぎない(日光の白根山は此石英斑岩の碁盤の上に噴出したのである)併し最も多く、且つ最も高峻に飛騨山脈、並びに同高原に露出してゐて、低山性の侏羅層を貫ぬき、北アルプス第一の高山にして、形貌に於ても代表山岳なる槍ヶ岳を崛起し、一期の面目を施してゐる。

本年の夏、飛驒高山（タカヤマ）で、書伯高嶋北海氏（文部省日本書美術審査員）と同宿したとき、氏は高山町の四圍なる山岳、輪廓の單調沒趣なる咎を、斑岩性の岩石に歸せられたが、幸ひに唯一の槍ヶ岳あり、凡べてを贖うて餘りあることゝ、私は信ずる。

飛驒山脈が斷層山脈であることは、前に述べた、斷層山脈の特性として、陷落した方の一側面が、峻嶮な代りに、他の一方の傾斜は、至つて緩漫であらねばならぬ、斷層山脈の標式として、第一圖に示すものはその一例である、飛驒山脈も陷落方面、即ち東方信濃に面しては、概して峻嶮なる絶壁を作つてゐる、殊に槍ヶ岳東面の垂直的斷層に至つては、戰慄に値ひすべき峻急を有してゐる西の側面即ち飛驒方面は、比較的緩徐な傾斜を有してゐることも、事實であるが、それは東方の峻急に比して言ひ得ることで、決して此標式圖に見らるゝ如く、悠々緩々なる傾斜では無い。



第三圖

それはどういふ理由からであらうか、或は一方のみならず、兩方側面の地體が陷沒して、中間の地塊だけが殘留して「山壘」(Horst)（ホルスト）となり、あのやうに劍戟の如く、特立してゐるのであらうかと疑はれもする。

抑も山壘なるものは、第三圖のやうなもので「イ」は所謂山壘を作れる花崗岩片麻岩の類、兩方の「ロ」「ロ」は比較的近代の成層岩にして、「イ」の岩石上に載せられながら、陷沒したるもの、「ハ」「ハ」は陷沒線、「ニ」は成層岩の花崗岩上に載せられて、舊位置に殘留したものである、飛驒山脈はこの種の「山壘」なりやといふに、恐らくさうでなく、寧ろ斷層時代の太古紀岩石の高臺は、今

日の岩石露出から推して其山脈を二千米突位の高さと想像して、その上に更に是等の火成岩が噴出して、三千米突以上の高峰となり、それが風雨に抵抗して、硬度高い岩石は、硬度の低い岩石より取り殘され、あのやうに狹長逼迫なる山稜を作つたのではあるまいが、其證として今日飛驒山脈中に見らるゝ、海拔六千尺より八千尺に至る高原、例へば立山の彌陀ヶ原、藥師岳の太郎兵衞平（辻本工學士の藥師峠）祖母平（ババダイラ）（志村烏嶺氏の雲の平）黑部の五郎岳より蓮華岳下に到るまでの大高原、双六岳下の双六平の如き、今では表面を安山岩や、或は成生新らしき泥土で覆はれてゐるにしても、當時の緩傾斜なる高原を想はせるのである、就中尤も著るしいのは、祖母平と太郎兵衞平との間で、今は黑部川の浸蝕谷のために、一千米突位な絶壁を作られてゐるが、素は連續して越中有峯附近（その間に又眞川（マガワ）の浸蝕谷あり）まで、茫漠高大なる高原を作つてゐたのでは無からうかと思はれる、之を繼ぎ合せて考へれば、畧ぼ標式圖第一圖のやうな、概念を得られるのである。

これ等の高原は、山岳に圍繞せられてゐるが、餘りに山頂に近いために、山岳風の載來する濕氣を奪ふほどの乾燥に至らず、濕潤として偃松の下、高山植物が被陰する、日光を遮蔽して溫度を低下する、自然濕氣の凝結を促がして、雲霧を屯集するが故に「雲の平」なる名を有する程である、斯の如き大高原は、他の日本アルプスの、如何なるところにも、見ることが出來ないのである。

飛驒山脈の標高が、他の日本アルプスに比して、最も奇異なることは、北から南迄、標高の徹頭徹尾、畧ぼ同じことである、赤石山系も木曾山脈も、北は峻高であるが、南へ行くほど、目立つて遞下してゐる。

今日槍ヶ岳山脈、黑岳山脈、後立山々脈等を通じて、均一の標高を保つてゐるのは、太古は今日の高度以上に、高く拔いてゐたのを、氷雪の風化作用に削磨されて、頂上は速に切截せられ、竟に氷雪が爆裂に從ふよりも、寧ろ保護を與ふる程度の、高さに止まつて、今日の平均高度を見たのでは無からうか、槍ヶ岳も、あのやうに尖削せられ、且つ破石を衣てゐては、氷雪も却つて妨げられて、働く餘地も少なく

なり、破壞の程度は遲くなりはしまいかと安心せられる、加那陀ロッキイ山が、今日平均一萬二千尺程の同一高度を保つて、著るしい凹凸昂低を見無いのも、之のためだと信ぜられてゐる、白馬岳の氷河の遺跡なるものが、事實氷河の擦痕なるにもせよ、又他の氷雪作用の傷痕なるにもせよ、偶々その痕跡を今日に現存したのは、氷雪の造山力が、如何にこの山脈に活働しているかを、覗はれるのに充分である。

併し飛騨山脈とても、もし北に立山火山の噴出と、南に御岳火山の噴出が無かつたなら、恐らく中央なる槍ヶ岳山脈のみが、凹形に高くて、南北は見る影もなく、削斬せられたであらうが、この二大火山脈の噴出があつたゝめに、三千米突内外の標高を、北端南端にも均齊に保留して、日本無比の大山脈となつたのである。

以下火山論に移る。

## 四　日本北アルプスの火山

飛騨山脈に立山、御嶽、乘鞍岳のやうな本邦最高の大火山が、噴出したことは、この山脈に行列する峻峰が、概して三角形で、闇黑忿怒の相貌を呈してゐるのと相對して、悠揚にして迫らざる富士式圓錐の美貌を配置して剛柔を相濟してゐる。今北アルプスに分布する火山を見るのに、それは富士山附近に見らるゝやうに、群集(グループ)をなして寄合世帶的に存在するものでなく、一定の方向を以て行列(シリース)を作つてゐるのである、所謂一定の方向とは何かと言ふと、其立脚地なる飛騨山脈と同じく、北より南へと走つてゐることだ。

私が乘鞍岳、立山、御嶽に登つたのは、可なり古いことで、それも至つて散漫な見方をしたのに過ぎないから、是等の諸火山を構造する岩石の、重要性質が、皆同じさものであるか無いかは、明言出來ないが、例へば乘鞍岳噴火口排列の方向が、御嶽火山と乘鞍火山とを連絡する線の方向、及び御岳火

山の四個の噴火口の排列方向と共に、凡そ南北の方向を取れるのを見ても、是等火山噴出の基底地盤の弱點なり、罅裂なりが同一の地殼構造關係を有して、ゐたのを知ることが出來る。

私の知れる限りでは、此大火山線は、御嶽より乘鞍岳、十石岳、硫黄岳(燒岳)白谷山、割谷火山を崛起して、笠ヶ岳附近に到り、高瀬川に出でゝ、硫黄岳(燒岳の硫黄岳とは別山)を作り、鷲羽岳腹に小火口を出だし、藥師岳より立山群峯に來つてゐるので、御嶽、乘鞍岳の頂上、鷲羽岳の山腹には、火口湖を有してゐる、就中御嶽及び乘鞍岳の火口湖は、日本に於ける最高の位置を占めたる火口湖であらう、歐洲アルプスの風光が明媚優美を以て誇るのは、この多數の湖水にあるが、一つの火口湖を有してゐないのに比べて、我が北アルプスに寸珠ながらも明淨なる火口湖を載せたる御嶽乘鞍岳があるのは、多として宜からうと思ふ、その上乘鞍火山彙の中に算へて然るべき硫黄岳が、兩三年以來、猛烈に噴烟を開始し、一個の舊噴火口と二個の大なる舊爆裂口から、數十の大小硫汽孔を生じ、朝日に夕日に此附近北アルプスの諸高山の巓を、或は紅に、或は紫に染めて行く變幻に至つては、北アルプスの山色は、地球上の多くの大山脈(火山を缺ける)に、恐らく見られぬところであらう、私は立山、御岳、乘鞍の大火山が、揃つて紅蓮大紅蓮の焰を、北アルプスの大嶺に這はせてゐた、古い古い時代を、今日硫黄岳の噴火に依つて、小規模に於て、想像が出來はしないかと思はれるのである。

中で聊か異なつてゐるのは、立山であらう、此火山の骨髓は、片麻花崗岩に屬してゐるらしいが、火山岩の噴出夥だしく、蘆峅寺登山方面にある材木阪は、柱狀節理をなせる安山岩で、雄山別山の峰頂少部分は片麻花崗岩の露出を見るが、淨土山は全山安山岩より成つてゐる、小鳶山が火山なることは言ふまでもなく、藥師岳は從來想像せられたやうに、火山では無かつたが、同じく新期噴出火山岩なる石英粗面岩で頂上を被覆されてゐる(此岩は石英斑岩の如く、細粒乃至緻密質の石基に、石英の結晶を散布し、玻璃質を混じて、外觀が頗る石英斑岩と似てゐるから、一寸區別し難いことがある)

唯こゝに疑問なのは笠ヶ岳で、此山は大笠、小笠、奥笠など、笠狀に隆起する峰（ピーク）が群がつて、此邊では槍ヶ岳に次いで、尤も目立つ山である。從來の地理書は、笠ヶ岳の圓頂が、火口丘のやうに見える故か、多く火山として記載されてゐる。此山の脚下には蒲田の地獄谷や、材木岩（玄武岩？）で有名な双六岩を控へてゐるので、山の形貌の火山的なるに思ひ合せて、火山視せられてゐる、淺間火山帶にも笠ヶ岳（信州下高井郡海拔約二、四〇〇米突）といふ孤立した圓錐形の火山がある程であるが、元來山貌で岩石を決定するのは危險な話で、信濃富士の名を有する有明山は、富士式の山貌を呈しても、花崗岩であつて、火山岩では無く、加賀白山の別山（二、二二九米突）は、富士式の山貌を有して、しかも火山彙の中に屹立してゐるのであるが、實は砂岩及び蠻岩等の水成岩で構成されてゐる例もあるから、笠ヶ岳を火山に編入することだけは、暫く疑を存して、登山者諸君の高敎を待つことにする。

以上を總括すれば、飛驒山脈の內側に、同山脈の走向と同じに、大火山列が噴起して、北アルプスの風光に變化を與へたことが解るであらう山貌に於ては勿論、その谿谷に於ても、木曾御嶽の陰鬱なる谷となり、硫黃岳の火口より放出した泥流を以て、純美なる雪解の水の流れを堰き止めて、上高地の田代池となり、岩山岩屑を布いて彌陀ヶ原て裾野的花野（但し此原の植物の種類は割合に少ないが）となり、同じ立山の壯觀無比な地獄谷となる類はこれで、そのために山腹山麓の地幅は擴大せられ、南アルプスには到底見ることが出來ない、景象を作つてゐる。

今試に本洲の火山を地質圖で見ると、北日本に最も多いのに反し、南日本には九州を除いては至つて、少ないのである、が飛驒山脈の大火山線は、この少ない方の南日本に噴起して、本邦最高の火山線を形成してゐる、富士火山帶は、南北日本の中央を突き切つて、天城、箱根、愛鷹、八ヶ岳、立科山、戸隱山、飯綱山、妙高山、燒山等を、畧ぼ一線上に崛起（フォルストハーダー）させてゐるが、富士山を除いて皆第二流（セコンドオアダー）の山岳である、飛驒山脈はその繼子扱ひの火山をすら、第一位に推し上げなければ止まないのである、

只だ山脈として注目すべきことは富士火山線の方向と、淺間、四阿、白根(草津)岩菅、高社、毛無、苗場等を有する淺間火山線の方向と、飛騨山脈の火山線の方向とが、孰れも並走してゐて、日本諸火山脈の縱縞を横縞に貫ぬき又は振分けてゐることである、さうして北の一列(淺間火山線)最も低く、中央の一列(富士火山線)之に次いで高く、南の一列(飛騨山脈)が最も高い順になつてゐるのが、美觀上、高度の秩序列に作つて、飛騨火山脈は最高の奥殿になつてゐることである。

こゝに注意すべきことは、富士火山線は、富士山は素より、茅ヶ岳、金ヶ岳、八ヶ岳、戸隱、飯綱、黑姬、妙高の諸山、皆立派な裾野を有して、その殆んど凡べては、圓滿な發達を遂げてゐるが、飛騨山脈の火山には、それが無い、有ることは有るが至つて狹少である、これは富士火山線が、抵抗力の微弱にして、且つ障碍物の少ない陷沒地に噴起したのと違つて、飛騨山脈のそれは、脚下に古世紀の皺曲山脈などに支へられて、充分に發達が出來ない故である。猶一つ異なりたる現象は、飛騨山脈の火山には裾野の發達しない代りに、山腹又は山頂近くに、噴原が多い、御岳の田ノ原、乘鞍岳のワタシガ原(?)立山の彌陀ヶ原等はこれであるが、富士火山線の火山には、殆んどそれが無いと言つて宜しい、低地より噴出した火山と、高臺の上に噴出した火山との、性格の相違が、このやうなところにも見られはしまいか。

そうして北アルプスは、縱に於て、南アルプスなる赤石山系と、南北に對抗する如く、北アルプスの火山は、横に於て白山火山脈と、東西に相對峙してゐる、白山火山は御岳乘鞍火山が飛騨高原の東緣に噴起する如く、飛騨高原の西端なる高地に峻聳してゐる、そこには飛騨山脈の基盤と同じく、片麻岩、花崗岩、石英粗面岩より成れる千四百米突乃至二千米突の山があつて、白山火山彙の最高點御前岳(二、六八一米突)は實にこの石英粗面岩を貫ぬいて噴出してゐるので、一般の地質は立山々脈のそれに近いのである、併しその以西の火山線は、丹後の青葉山、但馬の大岡山、間鍋山、菅山、伯耆の

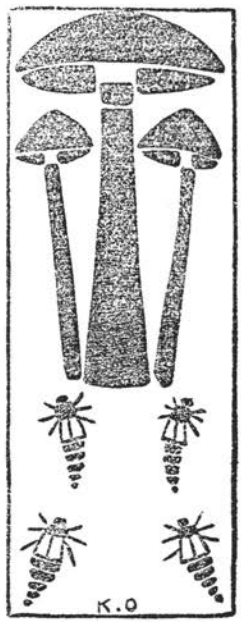
大山、石見の三瓶山などゝなつて、內面的に走つて行くので、白山そのものだけが、我が飛驒火山線と、暫く並行の走り方をしてゐるのに止まる。

槍ヶ岳山脈以北の連嶺を、縱走するときに、當つて、東に富士火山線が、その前景となり、西に白山火山彙が、晴れたときは瑠璃色の秘色に、雪の白縞を透き入れて、雲の表に立つてゐる美くしさは、忘れられぬものもあるから、飛驒山脈の版圖以外であるが、こゝに併記して置く。

## 五　剩筆

北アルプス風景論をするのに當つて、最も重要なことは、氷蒸氣と山岳との關係である、狹義に言へば氷蒸氣の變形なる氷雪が、後成的に造山力となつて、此大山脈に臨んでゐることである、それと共に、この氷雪から融解した水が、高瀨川、黑部川の如き深谿(gorge)を作つてゐることで、雪山論と峽谷論は、最も重要な題目になるのであるが、私は北アルプス氷雪の解釋に、最も有力なるべき後立山々脈を、跋涉してゐないことゝ、北アルプスの代表的峽谷なる黑部川は、その上流の一局部しか見なかつたこと等で、遺憾ながら、考究の材料に乏しく、之を他日に讓ることゝした。

おもふに歐洲アルプスの如きは、伊太利、佛蘭西、獨逸、墺太利、瑞西等の諸國に延亘してゐるために、各國自らのアルプス山に就いては、詳密明細なる地圖や、記載を有してゐるが、之を統合した全アルプス圖、全アルプスの記載となると言語を異にし、領域を異にし、文字を異にしてゐるために、各自長短精疎の跛足(ちんば)となるを免がれないで、結局頭は頭、手は手といふ部分的研究に偏してしまふといふ、虞れが無いとは言はれぬと聞いたが、日本アルプスは、彼に比して小規模ながら、一國にして全體を具備してゐるのである、言語、文字、版圖の問題で、苦しめられるやうな心配は、毫頭ない、然り毫頭無いが、今まで研究の進み方は!!!　本篇所挿の木版圖は悉くゲイキィ教授「土地彫刻論」(Earth Sculpture)より採れり




# 雜錄

## 口繪說明

本號口繪は、本年一月初旬、信州武石峠に於て望みたる、日本アルプスの目錄なり。

武石峠は信州の中央に連亘せる千曲山脈を横斷して、北佐久地方と、松本地方とを連絡する山路に當る、高距一八一五米を有す（地質調査所二十萬上田圖幅による）佐久方面よりするものは武石より入るべく、松本方面よりするものは山邊或は淺間温泉より入るなり、而して佐久方面が、その表口なるが如し、道程凡七里、即ち峠の頂上は武石を西に距る四里、松本を東に距る三里と概算せらる、峠の頂上より西に少し下りたる所に、一軒の茶屋あり、側に蠶室ありて、冬もその番人、この茶屋に住み居れり。

峠は固より左程高からずと雖、千曲山脈の峠の中にては第一番なり、その南に當る有名なる、和田峠も、之に比しては高度大に下れり、且峠といへば、多くは山間の低處を通ずるものなれども、この峠は山脈のかなり高き部分を通ず、故に峠本來の役目よりいへば、餘り香ばしきものに非ず、從てあまり人氣なき峠なり、されどこれ等の特色に加ふるに、その位置は信州の殆ど中央を占め、西に日本アルプスの大山脈連走し、東に淺間四阿白根等の火山相接するその中間に當るを以て、山岳觀望上、特に日本アルプスの觀望に於ては、比類稀なる地點なり、從て吾人にとりては見逃し難き峠たるなり。

峠の道は、佐久方面は主に澤を通じ、松本方面は大部分尾根の頂上を通ず、佐久方面の道程を記

せば、汽車沿道より發足點武石村に到るには、大屋よりするを最便とす、即ち依田川に沿ひ、丸子腰越沖等を經て至るものにして、大屋武石間凡三里餘なり、之を細別すれば大屋停車場長瀨間二十七町、長瀨丸子間二十七町、丸子沖間一里、沖下武石間三十町とす、下武石は武石、緣籤石等を產するを以て知らる、寒村なれども旅舍は二三あり、叶屋可なるべし、又御代田より岩村田を經、和田峠の道を進み、笠取峠を越え、長久保新町より岐れて、武石へ至る道もあれども、前者に比し迂路なり、下武石より上武石、下本入、上本入を經、一里半にして築地原といふに到る、こゝにも一軒の宿屋あり「さかえや」といふ、之より人家稀少となり、スグリといふに到れば二三の人家あり、これより峠の茶屋まで人家なし、附近一帶、山間の小高原をなし、落葉松、白樺など疎落として樹つ、千曲川その北を限りて東流す、路は川の右岸、高原の中を西やゝ南に向ひ通ず、背に淺間を負ひて進めば、道左に山神祠あり、やがて南より來る一澤を越え、本流につきて右に曲り、(即ち西を指し、左には官林に入る道あり)山腹の道となり、漸次澤に近くなり、終に之を越して、左岸の山側を登り、尾根道となり、築地原より二里半にして峠の頂上に達す。

松本方面の道は、山邊又は淺間溫泉を經て通ず、道程は甲乙なからん、峠頂迄三里と稱すれども里人の言に依るも、三里半は確かにあるが如し、山邊よりするものを予は知らざれば、淺間よりの路を記さんに(松本より玆迄一里弱)初め少し澤を登り、尾根道となり、右より來る路に會す、やがて澁池といふ小池あり、その上に測量標立てり、之より少し下り、又右に岐るゝ路あり、山邊に赴くものならん、稍急なる上りとなり、又三角標あり、之を右にして北に開けたる山側を行く、この邊を袴腰といふ、松本にて望めば恰かも袴の腰板の如く見ゆるが故なりと、途中絕えず北より西南にかけて、南北日本アルプス、八ヶ岳、戸隱、妙高等の廣き眺望を貪り得可し、やがて茶屋に達し直ちに峠の頂上を得べし。

峠の頂上は附近に眺望を遮ぎる程の樹木なく、唯矮小なる樹木と針葉樹の立枯が處々に立てるの

み、展望東、西、北の三面に開け、東微北に千曲川の谷佐久平を隔てゝ淺間つゞきの連山、北に妙高、戸隱、飯綱の諸山を眺め、北より西にかけて、日本北アルプスの列岳を犀川の流域松本平の上に望むべし、されど南方は近き小高き山背に遮ぎられて見えず、(之に登らば眺望は無類なるべし)、最眺望よき部分は、峠を松本方面に少しく下りたる處にして、前記の茶屋の猶少しく下方なり、茲よりは、日本アルプスの大部分、及び不二八ヶ岳等をも望み得べし、即ち口繪の圖はこの地にて作れるものなりその山名の判然せるものは悉く圖に附しあり。

要するに峠の西面は道に變化なきも、眺望に勝り、東面は之に反して、道に變化あれども、見渡しの狹きを免れず、而して難易は萃かに決し難きも、東面の方、比較的困難なるべきか、されば東京方面より茲に至るには、大屋よりするも松本よりするも可なれども、單に日本アルプスの眺望が目的ならんには、松本よりする方都合宜しかるべし、松本乃至淺間温泉より、峠の頂上附近迄、一日に上下するは至つて樂なり、峠越をなすも、松本武石間ならば一日にて充分ならん、時間の都合上、又は早朝の眺望を欲さば、峠の茶屋に一泊するも可なるべし。但碌な設備は無き樣なり、尤も眺望は廣き代りに、稍遠き恨あるを免れず、又春より夏にかけては、中々完全なる眺望は望み難かるべく、晩秋より初冬にかけてが、最好の時期ならんか、予の茲に遊びたるは一月上旬なりしが、當時雪は比較的少なく、毫もカンジキの要を見ざりき。

遊は格別案内を要する程には非ず、唯武石より登る時、山神祠の上にて、左に入らず、右に行く事さへ心得居れば、大丈夫ならん。

以上は予の粗漏なる觀察を記したるものにて切に會員諸君の是正を俟つものなり。(中村清太郎)

## 山岳地の迷信を餘り多く破壞する勿れ

この夏　アメリカのボストンから、ロッス教授が來られて、文明の影響を受けない日本を見たいといふので、私の友人が案内となつて山陰道の旅

◎雜　錄　山岳地の迷信を餘り多く破壞する勿れ

行をした。其時ロッス教授は、日本の田舍の到る處にある、道しるべ、石燈籠、地藏などを見て、頻りに感心され、恁ふいふものは其土地の風景を美はしくさせる上に非常に助になるものである、自分の國には殺風景な銅や石の立像は建つてもゐようが、こんなに形の變化の多い趣味のあるものは一つもないといはれたさうである。

私はかねてから思つてゐる、日本に神社佛閣が無かつたなら、日本の風景はよほど詰らぬものにならう、若し人に信仰といふものが無かつたなら、丁度朝鮮のやうに、樹木などは無くなつてしまうであらう。私は田舍へ往つて鎭守の森を見るたびにさう思ふ、あれが神を祀つた處でなかつたなら、あの晝も暗い生ひ繁つた立派な森は、いつか伐り出されて畑にでもなつてしまつたらう。凡そ社があれば、それがいかに小さくとも、屹度樹木がある、寺があれば、それがいかに貧乏寺でも、必ず林や森がある、森や林や、それ等が風景を美しくさせる上に、非常に力のあることは言ふ迄もない。

私はかつて岩代の檜原へ旅行した時、湖畔に立てる一本の巨木を見た、その樹は東に面した一方が、かなり上迄枝が切られてあつて、西の方は自然のまゝに枝が延びてゐる。樅に似てゐるが、村人も何の木だか知らぬ、此處に來る旅人も、まだ誰れも樹の名を知つたものが無い。ある年若松から來た商人が、此木を二百金に買はうといふので、伐り出すことになつた、柚人は段々枝を落して往つた、二日目に誤つて高い木の上から墜ちて死んだ、別の柚が木へ登つた、これもまた墜ちて命を失つた、さらぬも神木を伐るので、心に幾分の恐怖を抱いてゐた村人は、この樣を見て、いよ〳〵神の祟りであると信じ、終に伐木を中止した。そのおかげで檜原湖畔の風光は、永しへに此一本の木のために光彩を放つてゐる。私はこの話をきいた時、迷信の難有味をつく〴〵感じたのであつた。

私は私の敬愛する山岳をして、いつ迄も神聖に、いつ迄も神秘のものにして置たい、登山を易からしむるために、道路を拓くのもよからう、野宿の苦を免るゝために、小屋を建てるのも結構である。然しながら、山に於ける名所、たとへば某々行者

の祈つた石だとか、主の住むでゐると言傳へられてある池だとかの現狀は、永久に保存して置たい。山麓に住む案内者は、このやうな物に對して、非常に恐怖と尊敬とを拂つてゐる。然るに、生若い登山者の或る者は、こんな話を一概に迷信と罵つて、石を投げれば風雨が起るといふ池へ、わざ〳〵石を投げて見たり、神聖視して手も觸れない神と崇められてゐる岩などを、土足で轉がしたりして、快を叫ぶ血氣の連中があるさうだが（吾山岳會々員には決してそのやうな方は無いと思へど）迷信といふた處で、近來のやうに、神通力だの千里眼だのと、人間の智惠で一寸判斷の出來ない事の實在する世の中であるから、昔しから言傳へられた事には、どんな秘密があるか分らず、また全く迷信にせよ、そのやうなることを、無智の案内者などに示して、神を恐れぬやうにすると、終には神池の水を干して山葵でも作るやうになつて、山中の名所を無くしてしまふ恐れがあるから、文明とかいふ方面から論ずることは別として、山中に於ける迷信だけは、いつ迄も此儘に保存するやう、會員諸君に御願するのである。

（大下藤次郎）

◎雜　錄　爺々岳及羅臼岳を見る

## 爺々岳及羅臼岳を見る

私はある用事のために、北海道根室から千島の中で一番近い國後に渡つた。夫は四月の末であつた。私の上陸したのは太平洋に面した、島の丁度中頃の東沸村字古釜布（フルカマフ）であつた。

根室を出帆したのは夜半頃であつた、丁度客が多かつたので。寢むり難き一夜は、どうやら明け初めたらしいので、私はデッキの上に出て見た。時計を見れば四時少し前である、北國の夜の明け易き、太陽はもう東の水平線に出ようとして居る、空一面になすつた樣な眞紅の色。

昨日迄の風は全くなぎて、油を流した樣な海面を、大きなウネリに船は時々ねむさうに上下しつつ、靜に靜に進んで行く、鴨の群が船に驚ひてバタバタと舞つて行く。

四月末とは云へど、未だ冬の最中のオコツク風を浴びながら、私はジッと舳に立つて、今しも明

け放れ行く國後の山々を眺める。向つて左の端からズッと北に長く連る山脈、其山脈は高きも低きもおしなべて、皆銀色の雪を裾迄被いで、日の出も知らずに睡つて居る。

國後を初めて見て、而も地圖も何もないので、どれが何山であるか、私には分らないが、一番北の端に、椀を其儘倒置して、鹽を一寸小高く盛つた樣なのは、『山岳志』で見覺のあるチャチャノボリに相違あるまい。其チャチャノボリを先登として蜿蜒と連つた一脈の銀山は、空の色のうつりかはりで、色々に染まつて行く。美はしい哉北國の冬—と云ふよりも千島の冬—

鴨や鵜が驚いては、いくらもいくらも飛んで行く。

私は此時すつかりチャチャノボリを好いてしまつた。古釜布に上陸してからも、天氣の好い日には吃度裏の熊笹の枯原に立て、平原—一里四方位あつて、之が國後第一の大平原である—の端にトヾ松の上にノッソリ立つ嶽を眺めては一人で喜んだ。

羅臼岳、は古釜布灣の西部に屹立して、三里と離れて居ないので、之は毎日でもよく見えた、雲が低くて、チャチャ嶽—此あたりの人はかう言つた—は全く見えなくとも、此山はよく見えた、そして此處の人から、あの山には硫黄の池があつて、絲を垂れては硫黄を釣ると云ふ話を聞いた、硫黄山があつて、大分硫黄を掘ると云ふ話も聞いた、此山には熊が多くて、國後でも上等の皮だとも話された。一方から緩く上つて、一方に急に下つた其山形が、朝な夕な、雪の晝、月の夕べ、私の目に入つた。水路部の海圖で見れば、此處から一番高く見えるのが島登(シユマノボリ)で、其蔭に一寸頭を出して居るのが羅臼(ラウス)と云ふ事だが、此邊では一般に硫黄山(イワウザン)と呼んで居る。

羅臼の麓に温泉があつて瀨石(セキ)と云つて居る、何でもアイヌ語で温泉の事をセーキと言ふさうだ、海岸に所々蒸氣を噴いて、浴場の設もあるが、格別感心した所ではなかつた。(古釜布から一里半)

其内、國後にも春が來た、熊笹の中には菫が咲き初めた、トヾ松林の中には福壽草が、金色の花をさゝげた。と山の雪は段々減つて來た、チャチャ嶽さへ其頭上の白い物を取つた、夫でも又五月

に入つてからは度々寒いかして、又被つた事もあつた、海岸にも雪が降つた。が、其胴には縱にいくつも、いくつも、線が見えて來て、其ひだの多く、且深い事を思はしめた。

或時一日泊りで、七里許北の留夜別村の瀨石（ルヤベツ　セキ）—之を奥の瀨石と云つて居る—に行つた事があつた、其行路に船の上から、鮮明なるチャチャの姿を一瞬間見る事が出來た、大分近よつた丈に、凡てが明白に見えて、其上にのせた冠が、殊に威嚴がある樣に見えた。

此一瞬とは云へ山を見たのが、爺々に遭つた最後であつた、根室近海で有名な濃霧期に入つたのだ、さあガスとなると、近い羅臼は愚か、十間と離れた、隣の漁夫の家すら、見えないのだ。

毎日毎日ガスと云ふ内に、櫻が今四五日で咲かうと云ふ五月の末、國後を立つて、内地に歸つた、ショボ降る雨の中を、羅臼岳に一寸輕く送られて。

（岩佐定一）

◎雜　錄　朝日岳登山案内

# 朝日岳登山案内

東北第一の高山朝日岳は、人が言ふ程登りにくい山でない、自分は、山形縣西村山郡立木村朝日温泉（參謀本部二十分萬の一地圖に無し）より此麗峰に登山を企てたが、風雨の障碍の爲めに、遂に頂上をきわむる能はず、前朝日岳より大井澤村字小寺に降つた、前朝日より奥は知らないが、兎に角此登路に就いて稍くわしい事を聞いたから、取敢ず會員諸君の御參考迄に書いて置く。

山形縣西村山郡東五百川（イモガワ）村に宮宿と云ふ、一寸した村がある。彼の有名な浮島のある大沼は、此地を去る僅一里半の所にあるのだ。

宮宿より最上川を渡り、太郎村より朝日川に沿ひて溯る、一里半（宮宿より）にして立木（タテキ）に達する、朝日温泉は此處を去る、尙四里半の所、立木より、十丁程行くと、白倉の人家が道の右に見える、是より奥は朝日温泉迄、僅かに木切りの小家一二軒ある許り、道は始終朝日川の左岸に沿ふて、山の中腹を上下して行くのだから、注意さへして行け

ば、間違ふ氣づかひはない、只途中「右湯殿山道」とある所を左へ入つて、小流を渡つて、行けばよい、宮宿より立木迄は至極よい道、一時間を要すれば行ける、夫より溫泉まで道は細くなる、而し、之とても嶮しい道ではないから、立木より四時間もあれば、溫泉に達する、溫泉には家が二軒あつて、二軒ながら宿屋だ、手前の家は何と云ふか知らないが、先きの家を古川屋と云ふのだ、登山客には、古川屋の方が便利だらう、何れも汚い事御話にならぬ、古川屋の宿の息子が、朝日岳へ案內してくれる、往復七拾錢である。

朝日岳は此溫泉より五里、頂上は、三峰に別れ、東端なるを前朝日、中央なるを中朝日、西なるを奥朝日と呼んで居る、前朝日最も低く、奥朝日最も高い、參謀本部の地圖(二十萬分の一)に小朝日とあるは、中朝日かと察する。

前朝日迄二里、道は大してよくもないが、熊笹や、大虎杖で、苦しめらるゝ樣な事もない。又餘り嶮峻な場所もないから先づ樂だ、宿の後より、直に登りとなつて、森林を行く事一時間で小川がある、夫よりは多少林も疎らになる、尙五十分で、前朝日の頂なる、鳥谷原に至る、無數の小池がある、御洗水と云ふ美しき小瀑布の所を經て、五分餘りで、前朝日の祠に達する。三疊敷ぐらいの小屋で、泊れない事もないが、宿泊用に出來て居ないから、火などをたく事は出來ない。

夫より頂上三角臺のある所迄約十五分あれば行ける。

尙ほ之より中朝日迄一里半、奥朝日迄三里ある、前朝日から半里の間、頗る急な降りで、又中朝日から奥朝日に至る十丁の降りは、當山第一の困難なる道である、中朝日より約一里の所に雷岩、又奥より十二丁下に小祠がある、前朝日より奥朝日迄、往復約七時間を要する。

小國町より登山せんとせば、先づ五味澤に至り、夫より三里でヨリキの小家で一泊して、翌日登山すればよい、ヨリキの小家より、五里位あるそうだ。

越後の國、三面(ミチモ)に到るには、道がないと云ふ話だ、而し行ける事は確かだ。

前朝日より、大井澤村小寺に達せんとせば、先づ頂上鳥谷原の大田池の所から、澤を降るのだ、約十分降ると熊笹の道となる、此道は傾斜は緩やかだが、手入れをしないものだから、笹が茂つて居て、比較的歩みに困難だ、約一時間と十五分（大田池より）にて、幅二間程の小川が、右より左に道を横切つて居る、それを渡れば大井澤越えの里道に出る、此邊一面の山毛欅林で、山毛欅峠と云ふ、夫より五十分で小寺に達する、家は僅に二軒、勿論泊めてくれる家もない。それから、地藏峠（登約十五分）と云ふ一寸した阪を越えて三十五分で始めて稻田に接し、尙二十分にして大井澤村の字に入る、それより道は平坦となり、寒河江川に沿うて、四里で本道寺、若しくは志津に到る、大井澤迄行けば、泊まれる家もあるだらうと信ずる。

（景　翠　生）

## 白馬岳の人夫賃銀と好案内者

「山岳」第四年第三號に、甲州駒岳人夫賃銀の低廉なことを載せて貰つたが、今又茲にそれ以上のを紹介する。既に登られた方々は御承知であらうが、白馬岳方面のは、人夫賃銀一日五拾錢、食料を込めてなら七拾錢と定まつてゐる。これは山麓四屋村山木旅館主松澤貞逸氏が本會會員であつて、特に自ら斡旋の勞を採つて確定された結果である。氏は私に向つて、今後如何なことがあつても、この賃銀は斷じて變更しないつもりだと明言せられた。勿論物價の騰貴に連れて、食料などの實費が高くなるのは致し方もないが、勞働報酬としての賃銀は矢張り不易だと云はれた。それ故に、白馬岳から五龍迄の諸山岳登山を、信州方面から試みられる方々は、總て是の割合で濟む譯である。但し越中方面の事は知らない。

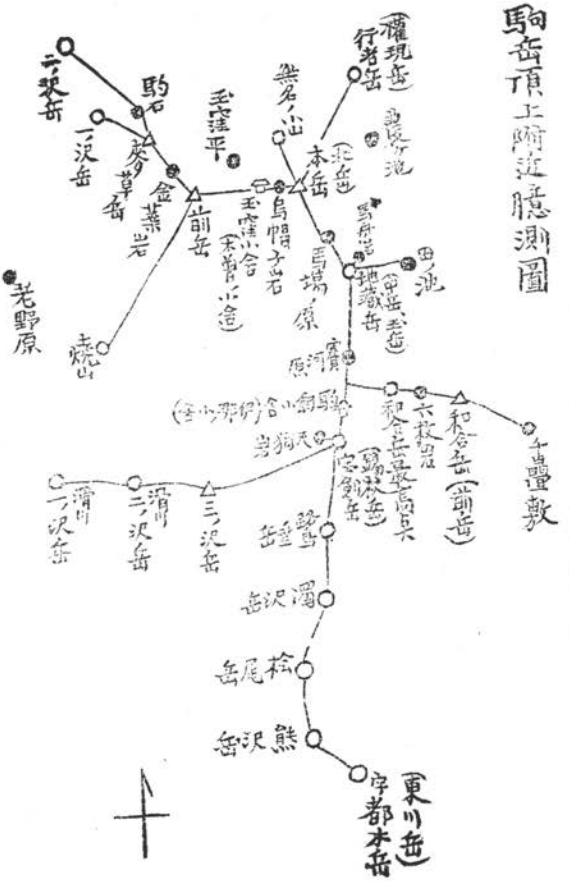
尙茲に。白馬●杓子●鑓●乘鞍●雪倉●朝日●シヨーズ尾根方面の最好案内者として、細野村丸山角次

郎(五十)を是非共紹介し度い。彼れの長所はその特殊的な性格にある。白馬附近に於ける高山植物の名稱を、先づ先づ一通り知つてゐることや、體格の頗る强健なことなどは、他の多くの者と左程の懸隔を認め得ないが、その溫厚な、寬容な恭謙な、さうして、親切な點に於ては到底、他の何者も企及し能はぬ所である。彼は阿堵物以外に、その心性の根底からして、强い々他愛性を具有してゐる。この先天的特性が、鰾て彼の案内する有らゆる登山客をして、限りなき快さと、充分な滿足とを得させ、さうして感謝の念を、よし沈默の裡にでも捧げさせる所以である。このことは、あの方面に於ての輿論であつて、私一人の偏した考へでないことを信じる。

(榎　谷)



駒岳頂上附近臆測圖




## 木曾駒岳に就て

「山岳」第五年第二號の雜錄欄に、鵜殿氏が木曾駒岳頂上の略圖を載せて、それに說明を加へられたが、自分は甚だ僭越ながら、あれを少しく補つて見度い

と思ふ。しかし寧ろ蛇足たるを免れないかも知れぬ。

## 方位概表

| 停點 | 對象 | 角度 |
|---|---|---|
| 和合岳三角點 | 寶劍岳頂上 | 二五六 |
| 同 | 鬱垂岳頂上 | 二三四 |
| 同 | 濁澤岳頂上 | 二一八 |
| 田ノ池 | 地藏岳頂上(間接) | 約一六八 |
| 地藏岳頂上駒岳神社南側 | 和合岳三角點 | 一〇六 |
| 駒飼小舍屋上 | 寶劍岳頂上 | 一七三 |
| 同 | 和合岳最高點巨岩 | 七六 |
| 本岳三角點 | 行者岳頂上巨岩 | 二六 |
| 同 | 前岳三角點 | 二七二 |
| 同 | 地藏岳頂上巨岩 | 一四八 |
| 同 | 寶劍岳頂上 | 一六四 |
| 同 | 三ノ澤岳三角點 | 二〇四 |
| 同 | 和合岳三角點 | 一二〇 |
| 同 | 宇都木岳頂上 | 一七二 |
| 同 | 御岳劍峯 | 二九五 |
| 同 | 乘鞍岳劍峯 | 三三二 |
| 同 | 阿房山 | 三三七 |
| 同 | 大笠岳 | 三四三 |
| 同 | 西穗高岳 | 三四七 |
| 本岳三角點 | 北穗高岳 | 三四九 |
| 同 | 槍岳 | 三五一 |
| 同 | 大天井岳 | 三五七 |
| 同 | 常念岳 | 三五九 |
| 同 | 立山 | 二 |
| 同 | 甲斐駒岳 | 九五 |
| 同 | 富士山 | 一二六 |
| 同 | 赤石岳 | 一三三 |
| 同 | 惠那岳 | 二一七 |
| 同 | 飯盛山(木曾) | 二二八 |
| 同 | 髮剃山 | 二三八 |

## 傾角概表

| 停點 | 對象 | 仰又俯 | 角度 |
|---|---|---|---|
| 本岳三角點 | 行者岳頂上巨岩 | 俯 | 五 |
| 同 | 前岳三角點 | 同 | 七 |
| 同 | 地藏岳頂上巨岩 | 同 | 三 |
| 同 | 寶劍岳頂上 | 同 | 一 |
| 同 | 三ノ澤岳三角點 | 同 | 二 |
| 同 | 和合岳三角點 | 同 | 一、五 |
| 駒飼小舍屋上 | 寶劍岳頂上 | 仰 | 二〇 |
| 同 | 和合點最高點巨岩 | 同 | 四、五 |
| 和合岳三角點 | 寶劍頂上 | 同 | 四 |

◎錄　雜　鳳凰山所產ホウワウシヤジン

御目に掛ける略圖の位置や距離の比は、決して正しくない。殊に檜尾・熊澤は甚だ賴りない、それに伊那方面は、餘り詳しく探らなかつたから、木曾方面程、細かしい記載の出來ないのを憾みとする。角度は、手製の粗惡な器具に據つて測つたんだから、是れも元より正確とは行かないが、先づ大體の標準が立つことゝ思つて、玆に提供する譯である、高度もと思つたが、當時丁度大低氣壓襲來時期に際會したが爲めに、自身のノートには、記載して置いたけれど、どうも甚しく信を措けないから省略する。尙、行者岳・麥草岳・三ノ澤岳等は、今回の登山に甫めて聞いた名稱である。しかもその山容は、いづれも甚だ崇高雄大であるが故に、今後の登山者に向つて、特に見落としの無いことを切望する次第である、農ヶ池とは全で別な田ノ池といふのも、確に在ることを實見し、且つスケッチに收めた。極めて小い涯水ながら、地藏岳の東方、灰白色をした大絕崖の直下、缺月狀雪田の近くに在ることを、併せて記して置く。（榎谷）

## 鳳凰山所產ホウワウシヤジン

一三六

明治三十九年八月十三日、余が始めて甲州鳳凰山にて採集せるAdenophoraの一種（本誌第四年第一號一一三頁參照）は、其後武田久吉氏の研究に依り、全く新種植物なること確定せられ、學名Adenophora hôwôzana Takeda和名ホウワウシヤジンと云ふことに定まりたり、產地は目下の處、鳳凰山のみに限られたる如くなれども、附近なる甲斐駒、仙丈、白峰等に產するやも知れず、登山家は注意ありたきものなり。

武田氏が植物學雜誌第二百八十號（四十三年五月）に發表されたる本植物の記載を、左に轉錄す。

（辻　本）

### ADENOPHORA HOWOZANA. TAKEDA.

Perennis, 4—15 cm vulgo circa 10 cm. alta, toto glaberrima, rhizomate crasso elongato multicepti caules multos paucifloros emittenti. Caules cæspitosi graciles simplices subflexuosi fuscopurpurei. Folia sparsa petiolata fusco-viridia, inferiora lanceolata interdum late lanceolata in petiolum brevem atten-

uata acuminata dentato-serrata, dentis apice callosis incurvis, supra glabra vel rarius leviter puberula subtus glaberrima pallidiora, media et superiora elongato-lineares sensim acuminata 5—7 cm. longa callose dentata. Flores 1—5 in spica simplici alternatim dispositi nutantes, bracteis filiformibus parce denticulatis integrisve, pedunculis capillariis florem fere æquantibus, sæpe bracteolatis, bracteolis minutis. Calicis laciniæ filiformæ reflexopatulæ callose pauci-denticulatæ vel integræ circa 10 mm longæ. Corolla tubuloso-campanulata vix 18 mm longa fere 10 mm lata violaceo-cærulea quinqueloba, lobis angusti-deltoideis. Stamina 5, filamentis inferne dilatatis ovato-lanceolatis dense ciliatis. Stylus inclusus sed corollæ tubem paulo superans apice haud multus incrassatus. Nectarium brevissimum vix 1 mm longum crassum.

**Nom. Japon.:** Hôwô-shajin.
**Hab.** *Nippon:* in regione alpina montis Hôwôzan, prov. Kai (M. Tsumuroto! 13 VIII. 1906; H. Takeda! 26. VIII. 1906).

## 鳳凰山及地藏岳に就て

鳳凰山及地藏岳は日本南アルプスの雄鎭にて、甲州屈指の名山なること、今更喋々する迄もなく、愛山家は先刻承知の事なるべし、然るに本誌前號及小島烏水氏著「日本アルプス」に挿入されたる高頭氏の白峯山脈憶測圖には、鳳凰山なる山二つあり、又た地藏岳には括弧して、觀音岳と註入りなること、近頃不思議の出來事なれ、抑も此地圖は高頭氏が或る確かなる筋より、三角點の位置と標高とを寫し取られ、夫を土臺として造り上げられたるものにて、此の二つの點に就ては「今日にありては最も正確なる」こと疑なきものならんも、何故か右の筋なるものは、駒ヶ岳南方なる無名の一峰(高き山には相違なきも)に鳳凰山なる名稱を與へ、一方に於て我々の地藏岳と呼ぶ山を、觀音岳となせる由なり、高頭氏の忠實なる、此新鳳凰山を地圖上より除外せざりし爲め、さてこそ二つの鳳凰山を生ずるに至りし次第なり。

余は未だ此新鳳凰山に登りしことなく、又た確かなる筋が、如何なる深き根據を有することかは知らねば、余は厭迄從來知られたる鳳凰、地藏の位置を以て、正當なるものと信ず、即ち高頭氏の地圖に就て云へば、鳳凰山は地藏岳に近く、其北北西にあるもの、又た地藏岳は本圖の位置にて差支なく、括弧内なる觀音岳は删除すべきものなり

（「甲斐國志」、「山岳」第一年第三號、第二年第三號參照）確かなる筋は多分現今の鳳凰山を、地藏岳と考へたるものゝ如く、彼の「甲斐國志」中の一節「州人多くは誤り認めて、是を地藏岳と云ふは非也」を實演する積りに非らざるか、余は前年柳澤より登山の際、三本木にて鳳凰山と扁額せる鳥居を見、又た頂上なる地藏佛下には「鳳凰山天照皇大御神鎭座」「鳳凰山大神」など記せる石碑あり、故に此山の鳳凰山なること、疑を挿む餘地無からん。

鳳凰、地藏の如き著名なる山岳が、不注意なる調査の爲めに萬一見當違ひの山に、其名を奪はれては一大事なり、余は確かなる筋の爲めに誤を後世に傳へんことを恐る。

（辻　本）

## 白根附近明細圖の辯解
### 附白根臆測圖に就きて

△前々號雜錄欄に『間の岳より北』と題する記事中、第四年第三號掲載の白根附近明細圖に關する某氏の批難が載せてあつた。此れに對する御答は當然前號で發表す可きであつたが、或る事情から僕が前々號を拜見したのは此の八月の初めであつたもので、失禮した譯である。原圖は名取運一氏の作であるが、此れを縮寫したのは僕であるから、僕に於ても責任は免れ得無い。彼の御批難に就いては、僕としての辨解もあり、又名取氏の詳しい說明も受取る事が出來たから併せて次に記す事とした。

△もと〳〵、彼の地圖は高頭氏の熱心して居られる樣に、寸分も隙の無い覺悟で書いた圖で無い全く目分量によつたと云ふ事は豫め御承知を願ひ度い。只、一部分の地理上の質疑を名取氏に送つたところ、御苦勞にも彼の圖を作つて送つて呉れられたので、無論自分は意外の幸に悅びはしたが、名取氏も忙しい暇を割いて書かれた丈に白根一帶、野呂川のあたりは詳細を盡してあつても其の範圍以外は只斯う云ふ川、斯う云ふ山があると云ふ位置上の關係を示される爲に、極、大まかに記されてあつたので、其れを幾分丁寧に縮寫するに際し

て、僕の手加減から、某氏の非難を受けたのは主として僕の罪である。此れは第一に名取氏に對して濟まぬ事と思つて居る。と云ふて某氏の批難が皆、彼の圖の弱所を突いて居ると申す譯では無い。一般の山人とは違つて幾度となく山にも上り、殆んど白根の地理其の物と云はれ、測量部の役人達の唯一の力となつて居た古老の筆になつた圖が、單に見當を定める丈の用に足るのみと云はれたのは、失禮ながら過言であらうと思ふ。決して此れを以て從來の地圖に勝ると思はれぬと仰せられたが、彼の地圖以前に、白根一帶、野呂川の水源、本流、貫流などに就いて、彼れの十分の一丈にでも値する明細な地圖があつたら拜見したいもの。又、此の以後に於ても恐らく彼れ程の圖は無かつたらうと思ふ。高頭氏の白根山憶測圖から、彼の名取氏の圖に導かれた知識を差引いて見たら、憶測圖の生命は少なからず失はれるだらうと思ふ。

△先づ圖中のにぶ川即ち三峰川の折れ方が違ふと云はれたが、此の邊は、作圖のついでに只斯う云ふ名の川があると云ふ丈の事實を示されたので、水源や、屈曲の塲處などに就いては少しも重きを置いて居無い。大武川と小武川が合流する樣に書いてあるのは此れは僕が縮寫の際の誤りで、原圖に下書の細い線があつて、小武川と合して居たのを、矢張り大武川の本流を描いたものと信じて寫して仕舞つたので、山脈の向ふから川が出て居るのも、下書の細い線を、正直に寫した結果からだ。此れは僕の目が線の取捨を誤つて居た事を、又、白根一帶に力瘤を入れて、此の方面は、にぶ川方面と同じやうに、閑却したし又多くの人々も熟知して居られやうとも思つた所からつまらぬ誤寫を爲した次第である。此れに就いては、名取氏から、「大武川、小武川は途中にて合流する事無し。大武川は駒ヶ岳より、小武川は地藏鳳凰方面より出づる溪流を集めしものにて途中は强固なる山尾根を以て隔てられ居る故合流など爲し得る餘裕無し」と云ふて來られたのを掲げて置く。

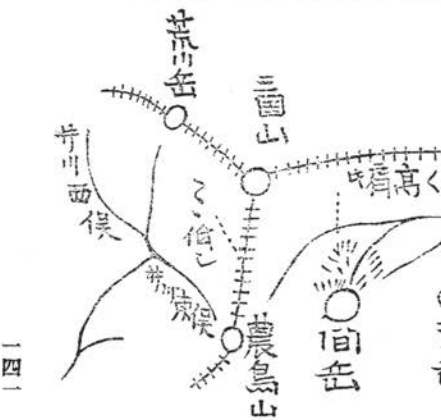
△一番重い問題は野呂川、田代川の水源に就てである。此れも貧しい經驗を基として此山に就きては尊ぶ可き古老の言を一圖に破壞し去らうとす

るはちと氣が早からうかとも思ふ。殊に上から見つぶした爲の誤りだらうとか、荒川岳と見違へたものだらうとかの憶測は此の古老の經驗に對する文辭とも思はれ無い。但し此れに就いて、僕の意見として述ぶ可きものは無い。今年野呂川の水源を極めては來たが大風雨。冥濛たる中に白根をも下り、野呂川をも下つたので殘念ながら、其場處を踏みつゝ一言も挾む事は出來無い。茲には名取氏の說明を揭げて御參考として置く。單に名取氏のみならず、山人の一般も、又其の昔山人として白根の表山、裏山をかけて足跡の至らざる所も無かつたと云ふ清水館の主人も、皆異口同音に野呂川、田代川、荒川の水源が農鳥山の表と裏とから出て居ると云ふ。彼の高頭氏の憶測圖を見た獵師や樵夫も皆此れを非難の中心とした。『山計りはちつと計り廻り歩いた計りぢや分ら無い。測量部の役人達は、いくら能く數へてやつても野呂川の出所をもつと北寄りと思ひ込んで居る』と二三人の樵夫の言を今年も聞いた。三國山即ち三峰岳と某氏の云はれたのも、ちと變だと思ふ。三峰岳とは山貌よりの命名、三國山とは位置からの名で、此れが同じ山の異名か如何かは一應穿鑿の必要があらう。名取氏は三峰岳の存在を認めて居無い。位置からの名である以上、明細圖に三國山と云ふ山名があつても、其の山が必ずしも高い山とは推定し得ぬ。三國の境界にあると云ふ興味から必要から重く見られて、高さとしては取るに足らぬ山でも、山人の口に上り、彼の圖にも入つたに相違無いと信ずる。別に三國山の高低に就いて名取氏は說かれた事も無い。故に顯著なる荒川岳を誤つて三國山とし農鳥と結付けたのだらうとは、此れも憶測の甚敷もの、現に名取氏は三國山の上に立つて、其の低さを知る人、しかも山の名を附し得る丈の昂まりを有して居る事は認めて居る。左に其の意見を紹介して置く。甲駿の國境問題も此れに次ぐ。

『三國山は尋ねる程の山ではありません。甲信駿三國の境界線の燒點となる所に位せる山にて、其形は笊を臥せたる如し。北奧仙丈岳より續く山々南東に亘りて橫川越へ、猶南東へ亘りて夫れより南西に轉走し荒川岳（信州駿州の境）に續く山脈

中、又甲州よりは農鳥山より西北に走る脈つゞき此の三國山に至りて信駿の境界線に集中す。故に三國の境界の集合點に位せる山と存じます。此の山は信州の荒川岳より遙に低く、横川越にて其の高さを試みるに、枝脈中に頭を出して、其の頭だけ高きものと思はれました。又三國山へ上りて見ると、白根(北岳)や農鳥、又荒川岳もずつと丈高し、然れば其の低き事も押して知られます。經驗からの思考では三峰山と云ふ如きはお尋ねの地域には無いやうに思はれます。獵師たちが三國岳と云ひ、三國山と云ひ又は三峰岳などゝ色々の事を勝手に唱へし結果、遂に立派な三峰山や、又は三國岳といふ、樣な山があると誤說する基となりましたので、先年東山梨郡へ遊んだ時、其地の獵師が矢張白根の奥に三峰山と云ふ「なか〳〵高山」があると申して居りました。三峰山の名は慥かで無いと思ひます。三國山と荒川岳とは全く違ふ山で、遙かに小い山です。第一の略圖を御覽なさい(圖略す)

△甲駿の國境に就ては左の說明がある。『甲駿二國の境界は前年申上げた通りでございますが、奥仙丈ヶ岳の頂上にて甲駿の境界を御覽なされば、第一、間の岳の西の肩が高く出て野呂川の水源となる流が奥白根澤の肩で塞りたるやうに見え、又其の奥に深く南東に入りたる谷があります。此れは奥仙丈ヶ岳では見えませんが、此の谷の水の源が即ち野呂川の水源で、其の南べりの低い山脈が即ち農鳥山の西北より起り三國山へ續きて居る分水點の境界をな



して居るのであります。

故に野呂川の水源は農鳥より起る枝脈の北、間の岳の南西より起る。又、井川の水源は二つあります。一は即ち農鳥の枝脈三國山へ續く分水嶺より南に起り、涓々たるもの集りて西に向つて流れ行く。此れを井川の東またと申します。一は赤石岳より出で東に向つて流れ幾多の溪流を集めて井川の廣川原に出て東またに合す。此れを西またと云ひます。」

此の間の岳の突出て居る高い肩は、白根附近明細圖にも描いてあるが、奥仙丈岳から見ても、此れが野呂川の水源を途中から隱蔽して、分水嶺は農鳥山より北にある樣に思はせるのであらう。さすれば駒ヶ岳あたりから、見つぶしたならば、經驗の無い者の目からは殊に誤解を招くのも無理は無いと思はれる。荒川岳から見て、東またが農鳥より北に入つて居たと云ふのも、小口の方向だけを見て其の源もなほ北に寄つて居るものと憶測したので無からうか。獵師の言も俄に信ず可きで無いが其の多數は野呂川の奥へ山入して居るし、其の水源が農鳥山の裏から出て居る事は強い信念である。此れと三國山をも踏まれて居る名取氏の右の説明とに對し、一刀兩斷の處置に

出づる事は難い事と思ふ。先づ白根憶測圖の訂正の第一は甲駿國境を舊狀に戻す事であるまいか。

△序に荒川岳に就いて云ふが、名取氏は極力間ヶ岳即荒川岳説を否定して農島の峯續きに此の山

澤は農鳥山より、南澤と稱するもの、――本澤に次ぐ流――は名取氏の呼ばるゝ荒川岳の横から出て居る。此れによれば寧ろ荒川岳は荒川の主幹を出す農鳥山の別名なりと云つた方に理を認めるが事實は如何云ふ譯だか南澤の岳が其の名を帶びて居る。樵夫は「荒川の岳と云へば荒川の上の山を皆云ふ事になるから農鳥や、中岳の名だと見りや見られる」と云つて居た。故に荒川岳の荒川と云ふ文字に力を入れると、多少山の位置に無理があるが、他に事情があらうし又さう考へ込む樣な物でも無いかも知れぬ。又、荒川は決して馬鹿にする樣な小流ぢや無い。奥へも餘程深い。

△地藏、鳳凰一帶の位置も、手ひどい攻擊を蒙つたが、目分量から出來た地圖である以上多少一方に偏つても居やう。高頭氏の憶測圖では白根山脈の線を北へ伸し觀音、地藏、鳳凰を連結した線を同じく北の方へ伸すと兩線は互に交叉するが、名取氏の圖では砂拂岳、藥師岳、觀音岳、地藏岳を繫いだ線は、白根一帶と全く南

を指して居られる。雜錄中に「野呂川の一支流荒川は間ノ岳あたりに主幹が入つて居るのではあるまいか」とあつたが、荒川は三つの水が一所になつて流れるので其の北澤は間ノ岳あたりより、本

北に向つて並行し、地藏岳からは斜に東北に折れて暫くして鳳凰山がある。そして本線は天狗岳から急に方向を變へて西へ連なつて行く。大體斯うだと云はれて居る。例の圖も此の考へで作つてあるので、北岳の頂上から東方を望むと北によつて一番高い所が地藏岳、その左に寄り折れ込んだ處に少し低くある峰は天狗ヶ岳、又其の西へ續くのは高根と云つて青く高く見える。而して鳳凰山は地藏岳の北で天狗岳の南と云ふ此間は大きな石塔を立てた樣に見えるのが鳳凰山であると說明が付いて來た。此れも多年經驗家の談として載せて置く。圖の缺點を補つて下され度い。

△白根山脈憶測圖に就ては、第一に疑を措くのは前述の國境問題であるが、何日か判明する時があらう。廣河原より以下荒川口までが野呂川で、夫れより以下は早川と云ふのが至當だと思ふ。廣河原より上流を多少詳記すると左の樣である。但しその澤が、その山から流れ出るかに就いては未だ聞き正す暇が無かつた。

野呂川の右又は伊那郡に向ふ國境から出てる相だ。小太郎澤は此の前の圖とは違つてミヨシ澤より下流に流れ入ると云ふ。何れが正しいか、新說によつて置いた。アツカリ澤とか無明の澤とか云ふのも夫々いはれがあるが此次の紀行の節に讓る。

△荒川の直ぐ下流、アユケシの所迄は彎曲が甚し過るとの事である。荒川方面と併て獵師に聞いた儘を圖にして置く。山の位置は疑として殘して置く。（N生）

## 赤石の荒川岳に就て

第五年の一號を讀んだ時に不都面白いと思た事がある、それは一五八頁の惡澤岳の記載の內に「木札には荒川大明神と書せるものわり」とある數語である、尙注意するとその前一五〇頁に「惡澤岳は此邊にて荒川岳と稱し」と云ふ語もある、處で日本山岳志本編六六八頁を見ると「…赤石山ハ、絕頂三岐シ、荒川岳・鍋伏山・赤石岳ノ三連峰ヨリ成レル故ニ、舊名ヲ三ツ峰トイヒ、絕頂ニ祀レル山神ヲ、三ツ峰神トイヘリ、或ハ曰ク、舊トハ總

稱シテ、荒川岳トイヘリト、今土地ノ人ハ赤石岳ト呼ビテ、赤石山ト言ハザル如シ」とある、それを聯想したからなのである。偖尙日本山岳志の六七〇頁を見ると「……廣河原ニ出ヅ、荒川岳ヵ井戸川岳を仰グ」又「……大聖寺平ヲ經テ、突起ノ一峰、鍋伏ヲ上リ、北端赤石山ニ到ルマデ、約三十町アリ」と云ふ記載がある而して山岳の一六三頁の大聖寺平の記事の後には「……可なり高き峰二つ越ゆれば、突如赤石山の絶頂一等三角標の側に出でたり」と云ふ文言もある、これだけで考へると赤石の本山の内に鍋伏と云ふ峰がある事は確かで、尙其他に可なりの峰がある上は、それが山岳志にある荒川岳に相當するものではあるまいかと考へられる、左すればこの僅な範圍にて赤石の荒川岳と、惡澤の荒川岳と二つの荒川岳が鼻をつき合せて立つ事になる、この赤石山系の北部にも二つの荒川岳がある事は同號の二五一頁に書てある樣の次第であるが、それと比べて何だか頗面白い對照の樣に思はれる、然し赤石遠望のスケッチ（同號一七六頁に掲したる愛鷹山よりのもの及び二四六頁の本會駒よりのもの）を見ると、赤石の主峰が三分して居ると云ふ事は殆認められないので、魚無河内と西河内も殆くつついてしまつて、惡澤岳、西河内岳、赤石山の三座が一群となつて、北の白峰三峰に對して居るが如くに見える、而して又自分は行て見ないからまるで分らぬが、三枝君や高野君の云はれる處によつても、赤石主峰に、特別の名があるほどの支峰はないと云て差支へないらしい、すると自分の考へだけでは惡澤岳即荒川岳で西河内が鍋伏に當つて赤石と合せて三つ峰になるのではあるまいかと感じられる、處が西河内の形はどうも鍋を伏せた樣には思へぬ、何も名は體をあらはすを極端に主張するのでもないが、この事はちとこの想像を妨げる樣な氣がする、又日本山岳志五七六頁を見るとこの邊らしい處に西俣嶽、荒川嶽、千牧嶽、地藏嶽などゝ云ふ八千尺以上一萬尺に迫る峯が併立して居るらしい記載がある、この荒川岳は或は即惡澤岳でもつて、千牧岳は千枚澤岳西俣岳は西河内岳のことなのではあるまいかとも思はれる、で惡澤岳なる名は、故荻野音松氏によつて

はじめて紹介された名であるが、信州方面から赤石に登られた人の紀行にはその名のあるのを見ない樣である、主山に近く殆それに比肩しうるほどの高さにある山に氣の付かぬと云ふ事も一寸考へにくいが、又日本山岳志にもその名は見えて居らぬこと等から推して考へると信州方面では、或は惡澤岳を荒川岳とよんで居るのではあるまいか、田代の谷の人夫も左樣よんで居るといふし、頂上の宮を左樣よんで居るらしい形跡があるし、自分はその山は或は荒川岳と云た方が聞えが廣くはあるまいかと思ふ、又西河内なる名は紀行によるに新稱らしい、然し地圖によつて案ずるに小西俣の谷がそれに近い處から出て居るらしい（山岳一三六頁に面したる地圖參照）而してこの附近とおぼしき處に、その邊の人が西俣岳と呼ぶ一座があるらしく思へる、或は西河内は西俣岳なる名をもつておるものなのではあるまいか、とに角一寸思ひ浮んだゞけの事を書て他日その地に遊ばれた人の精探を煩はしたいと思ふ。

（苦瓢生）

## 冬山の色

日の昇るには未だ間がある。農鳥山から間の岳、甲府から仰がるゝ雪の白根連嶺は一帶に微明るく、黃味を帶びて、中腹より下はぼやけて黑く「夜」を殘して居る。背後の空もなほ濃い藍色である。

夫れが漸く頂の方から目に立たぬ樣に淺黃を染めて來る。尋で空の色がすつかり淺黃に變る頃には、山は黃味を奪はれて、全體にやゝ鮮かさを增す。雪は純白に、山の膚は濃く黑い藍に、前の雪の少い山々は褐色に、京都の或る畫派の好んで使ふ色彩を思はせる。山際から二竿計りの空から上は、いつか紅を加へたと見えて淡い紫を含み初める。夫れが暫くはよそ〳〵しく、下の狹い淺黃の空と色の差別を保つて居たが、やがて次第に下へ擴がつて、すつかり紫に浸して仕舞ふ。が、夫れも僅の間で今度は空一帶が鈍い光澤の無い淡紅色に變る。此の色が未だ極めて淡い間は山は、まるで色と云ふものを奪はれたやうな、單調な、ぼやけた、

見榮のしない姿となる。然し空の淡紅色が次第に濃さを增すに連れて山も何所かに其の色を帶びて來る。そして其の一二分間は、光澤の無い淡紅色の前に、切り拔いたやうに薄い、硬い輪廓の山脈を現出する。――今迄とても山は凸凹の明暗を現はさ無いが殊に此時は最も平面だと云ふ感じを觀る者に與へるので、又此時ほど山のかつきりと空に描かれる姿を仰ぐ事は無い。

此の狀態を暫く持ち耐へて居ると、空は明るい、光澤のある紅を塗り初める。山も紫に紅の勝つた色、夫れに金を含んだ强い色彩を頂から染め下す。忽然、山の此處彼處がもく〳〵と蠢く。荒い、太い線が凹凸を劃して深い蔭を描く。山は一杯に朝日の光を浴びて益々燦たる紫金色を放つ。雪もためらひ乍らに此の色を冠る。朝日が全く其の座に直ると、山の金色や紫色は薄れて來る。そして、あり ふれた黃色い明るさと變つて、陰影も淺くおとなしく成る。斯くして山は全く落付いて朝を迎へるのである。　（N生）

◎雜　錄　信濃高原の秋

## 信濃高原の秋

殘暑の鳥瞰を蟬が喘いで穩湖が夕日にきらめき朝寒の靄しげき庭にコスモスの苔ふくるゝ頃、秋の使命は高き山々の七八合目に下りて遠くから眺めても霜葉の黃や赤がコバルトの空氣を透して紅勝の紫色に見ゆる、信州の秋はこれから始まるのである。

怒濤を見る如き山と高原、絹糸をのべたやうな流、市、町、村、森、田甫、畑皆その附近にあつて白き蕎麥の花、黃なる稻田黃綠の、桑畑、立ちのぼる烟、人家附近の秋は、これから始まるのである。

輕井澤の避暑客は、箱根よりも早く引拂ひ、高原を彩る草花の錦色に呈すると、櫻、カルシ等は、紅を點じて、天高く馬肥ゆといふのは、これからであらふ。

蕭々たる秋の雨は、自然の畵家である、美はしき色彩もて乾坤を彩りぬ、五彩七彩野も山も空も水も……

少し冷たいと思ふ雨が降ると、もう日本アルプスの連峯は白砂の衣を纏ふ、少し色づいた位の野山を隔てゝ、遠の奇しき光景を望むのは、他にあまり見る事の出來ない信州の初秋である。

谷々の流れは、水量減じ、水は澄明して、その清澈激流は、譬へば水晶の解けて流るゝかの樣である、この鮮美の流れの集まり集まつたのが、千曲川の清流、河原は廣濶で、そこには河原チヽコ野菊等咲てゐる、河中島より飯山附近に亘りて、平地を迂曲して流るゝ河畔に沿ふて、楊柳あり、蘆荻の穗は風に波打ち、日にきらめき白帆その間を上下してゐる穩流、平地は展けて四面に錦の山と、コバルトの山を望む、秋の畵題として又他に無き信州特有の

◎雜　錄　高山地圖の速成を望む

光景である。

蘆を畫題としたるものは多いが、荻を畫題としたる者は少い。荻の美は風にあり、日中にあり、夕日にあり、その穗の日にきらめくは銀色を呈して、人に深き印象を與へ、澄める月夜にきらめくときは、百千の鎗の穗先かと思はる、古戰場なる川中島に對して趣き深きを思ふ。

秋末の野の花は野菊龍膽を自分は愛す。野菊の黃と白とが、日向き佳き堤や山ふところ等に咲き亂れたる趣きは、位置調和も何も無い、そのまゝの一部分に、額縁をはめるとそれが美はしき自然の繪畫である。千草の錆びた間から、丈高く伸びて、筒形の碧花天に向つて開いてゐる、これが龍膽である、葉も莖も含みて、花との釣合よく、黃勝ちの秋の變化色として、特に眼立ちて美しい、光琳や四條派の畫家は、鶉等を添へて畫題としたが、自分はこの花を高原に置き、そしてその背景には、自妙の日本アルプスの遠望を現はしたい。

霜葉の美はいふまでもない、殊に信州の霜葉は特筆すべき價値がある、處地や暖國の霜葉は、一とつ一とつ手にとりて見れば、美しいが、自然そのまゝより見ると常綠木樹と入り亂れてゐるから、色の調和の上より壯美にして人の眼に強く印象する、そして時期が長いから、厭氣を起す、信州即ち高原地にありては常綠樹の針葉樹はあるも、霜葉の美はしき落葉樹は、凡て林叢をなしてゐるから、霜葉の美彩はよく調和してゐる、そして十二分の眺めにならんとする頃になると、大霜が下るから、一夜のうちにパラパラと落葉して、冬の光景を呈する、この短かい眺めに美は存して居るのである。

大霜が下りて落葉すると、霜葉の秋はこれで終る、これからは柿の秋である、柿…一個の柿にも趣味はあるが、百千萬の熟柿が赤々と枝に着いて、夕日に照らされた柿村の光景、これ又信州に於ける秋の美彩として趣味津々たるものである。

パチパチと刈豆のはじける日和に、二たつ三つ殘んの熟柿の目白鳥の集まるのも小品畫題である。

秋の天は高い南歐の空を見る如く、深青である、空氣はすつきりとして、凡てが判明に見える、丁度高山の頂上の樣である。が、然し秋には、春と等しい霞がある、晴天が幾日かつゞくと氣候が曖かになつて、薄い霞がこめて、山も森も、春の趣を見る如く、霞の中より霜葉を見る山々は、千草燒く煙立のぼり村々よりは收穫の煙りのぼる、これ又高原の秋の特徴である。（丸山晚霞）

## 高山地圖の速成を望む

山の中なんか、あまり用がないから、地圖はなくともよさそうに思ふけれども、なかなかそうでない、よく考へて見ると却つて必要を感ずる、平地で人間の澤山ゐるところならば、誰にでも聞けるが、山の中はそうはゆかぬ、樹に聞いても石に聞いても、はた猿でもそう深くわかるものでない。衣食等は別問題として、登山者の最缺くべか

らざるものは地圖でわらう、若しも地圖に理想的のものがあつたなら、貳圓も參圓も高い日給を出して、案内者を傭ふ必要はない、たゞ荷持ちでもあればよいのである。目下の處此望みに相應する地圖は、皆無と云ふてよい、陸地測量部で出版した輯製二十萬分の一圖――は曾て秩父山附近で學生を凍死せしめたと云ふ、有名の歴史を有つてゐる惡地圖、最初は比較的よいと人も信じ、自分もそう思ふてゐたのに此始末、不良地圖の社會に害を流してゐる事は夥しい、農商務省四十萬分の一地形圖は、誤謬は少ないが小に失する、陸地測量部五萬分の一圖は、丁度よいけれども、無人の境なんか近い將來に刊行になりそうもない、其他社會に流布してゐるものは澤山あれど、確かで信用を置けるものは一つもない。御同樣最も必要を感ずるものが此有樣とは遺憾千萬の話しだ。根本の測量さへ出來てゐれば、地圖調製なんかわけもないが、國家事業としても至難の測量、個人としては思ひもよらぬ事だ。そんならどうすればよいか、こゝが即ち鄙見を述べて諸君に諮る所以である。山岳會も生れてから已に四年餘り、稍基礎も固まりかけたらしいから、會の方で一つ可及的得安い測器を備へ測手をして必須部の簡測をさせたならばどうか、併し是は多大の費用を要するから、取り付くに困難だらう。然らば備器を以つて、會員中の篤志家に實費支辨とでもして、依囑しては如何に、多數の會員中には、應ぜられるものもあるかしらん、是は甚姑息の手段かもしれねど、打捨つて置いては何事も成就すべきものでない、會では旅行の期間・區間・員數等を豫定し、之を廣告して、同志を募り目的地で夫々得意の仕事を負擔研究すると云ふやうな事をしてゐらるゝか、どうか、若しそう云ふ事が出來たならば、其方の一部の仕事としてやつたなら、備器の受拂ひ（個人貸與の如く事務の繁雜を來す事少なく、破損紛失の際にも團躰で責を負ふべき特質がある）案内者を備ふ等にも、便利が多い。是等で及ばなかつたなら、都合よき手蔓を求め、其筋の複寫圖でも借覽する事が出來れば、仕事は一番簡單である。以上の内、どれによつてもよい、其一小部分でも成効したならば、本會

許りでなく廣く益する事が甚大だらう。尙ほ他に御名案があつたなら、是非高敎を煩したい。

（鵜　殿）

## 「飛驒案內」と「淺間山」の出版

飛驒は、飛驒山脈を以て東部を、白山火山彙を以て西部を、包擁されたる山岳國なれども、從來交通不便なると、土地比較的遠僻なるを以て、多く世に知られず、且つ飛驒を知らむと欲するも、此國に關する載籍は、極めて乏しく、嚮に「飛州志」の飜刻を見たれども、現在の飛驒は、未だ傳へられたりと言ふ可らず、即ち飛驒を遊覽せむとする人々のために、風土氣候の狀況、山岳溪川の案內、名所舊蹟を紹介せむため、飛驒、有力者の補助を得て同國の岡村利平氏編纂の下に、「飛驒案內」は將さに脫稿印刷に附せられむとす、第一編は山岳、河川、鑛泉、氣象、物產、道路、郡及町村、沿革概說を總叙し、第二編は、各地の名所舊蹟、幷に順路にして、總計十六章、明細なる案內記にして、本篇の主眼と言ふべく、美濃（南）信濃（東）越中（北）加賀（西）諸方面に向へる沿道の山川風物を、洩らすことなく包括したり、附錄として旅舍の名、宿泊料、里程、人力車賃錢表をなで添ゐたるは親切と言ふべく、今その稿本を見るに、半紙七百枚許の多量に達したり、印刷頒本は、多分明年の春頃なるべくや、定價未詳なれど、廉價を以て頒付すべしとなり。

又信州の活火山、富士帶中の名山、淺間山を傳へむがために北佐久郡小諸學校（前校長）佐藤寅太郎氏、現校長田中直次氏、職員林勇氏、同書家茨木猪之吉氏外一同で、數年前より編纂に着手せる、「淺間山」なる書は、編纂諸氏の苦心にて完全したり、同町會にては此の擧を贊して、數百圓を補助せる程なれば、其の內容は改めて云ふまでもなし、今回東京田中書籍出版部にて發刊することゝなれるが、菊版クロース製の美本にして、寫眞石版繪十八種附登山案內地圖入り四百五十頁の大冊九月末日發行の豫定、特價壹圓なりといふことなるが、一山岳のために、此の如き大冊子が刊行さるゝこ

とは、頗る悦ぶべく、此種の著作續々出でむことを希望するあまり、記して愛山家諸君に紹介す。

（小　島）

## マテルホルン雪中登山紀行

本年五月、米國のアウトルック誌上に一女性のマテルホルン峯雪中登山紀行が掲載せられた、自分は之を讀んで山岳に對する觀念、彼土の山岳に對する設備など、開發する所尠くなかつたので、此を山岳誌上の一端を藉りて、世上同感の士の一粲に供したいと思ふて茲に譯述した次第である、譯述元より誤多く、意を成さぬ所尠くなくて、諸士の叱りを得んことは、覺悟して居る。（以下譯文）

（一）、出發、一千九百九年十月七日、未だ夜を罩めたる曉二時、ザーマットより二時間程なる高原の黑海旅館（シュヴァルツセーホテル）をば、余は二人の導者と共に出發せり。此時、月光隈なく、夜氣靜かに冷かに、周圍の溪谷を走る白雪の連嶺は沈默壯嚴の美、夜に非ずんば見る能はざる壯大雄麗のものなりき。三週日の間、余等が其頂を極めんと出立せる偉大なるマテルホルン峯は三日を置いて飛花を降し、其最嶮峻の山稜すら完く皚々たる白雪に了せられ、ザーマット潛在の登山者は、此峯よりも比較的積雪薄く、嶮峻ならざる斜面の登山を以て悶々の情を醫せざるを得ざりしなり、斯く、登山の困難增加と、時期不適のため、數日の快晴を俟ち幾分積雪の溶解を見る迄は、此峯への攀躋は尙危險なりと思惟せられたる也。近日の大降雪の翌日、一登山者は、登山を企てたりしも頂上に向ふて進む事一時半許にして、困憊の極歸來せり、彼は吾經驗ある導者が宿泊を勸たる此小旅館（黑海旅館）より一時五十分程なる一茅屋より午前三時導者と共に出發したりし也。

我は午前零時三十分、人の呼ぶに目醒む、暖き牛乳と麵麭とにて朝餐を認め、騾も行き得る程の比較的平旦なる一小逕を二時間餘進めり。余は導者の先頭に進みしかば、七色の陸離たる光彩を現ずる遙かの氷河、余等の周圍を圍繞する白雪の山巔、綺嵒の頂等の極美を娛むを得たり。攀るに從ひ谿谷に閃く二三の燈火は一點の星となり、吾等の

志ざすマテルホルンは面を壓して聳ゆ。

美しき曙光の徵、漸やくほのぐゝと顯れ來たる。前記の茅舍に到着せる時、網繰るために立止まりし時より、午後八時再び茲に歸來の時迄は、各自、網を腰部に捲き附け、吾は兩導者の間に介在(はさま)りて歩まざるを得ざりき。吾等、各二人を繫ぎし三十呎の網は吾等に攀ぢに便なる風壓を與へたり、三十呎を要せざる時は、弛みたる網は導者の兩肩又は片手に捲き附けたり。

此茅舍より登ること數歩にして、道は忽ち嵯峨たる巖岫の間を行く、此時―午前四時―より此茅舍に歸來せる午後八時迄、難路の前進を罷めて休息せるは總計三時を算するのみ、是れ食を喫し、撮影をなし、光景を瞥見するに必要にして缺く可からざる最少限の時間なりき。午前六時日出づ。余等は他の隊商に遂ひ付き之を後にせり、蓋し山上の此小隊を稱して隊商となすは、曠漠たる無情の纔崑氷雪は、彼の寂漠たる無言の沙漠に類似せるが故なり。登山隊の進行は只、望遠鏡によりてのみ眺むるを得、而して吾等の成功せる登山は終日山麓の各地點より囑目せられ、其翌日、吾等の辿りし路を登らむとする七組の登山隊、例の茅舍に群集せるを見き。

吾等の朝食せし茅舍―(今は使用に堪えず)より尙ほ嶮しき山路を登ること三時間牢にして午前十時、只、「肩」―長き峻しき氷雪の斜面を名づく―に到着せるのみ。平時即ち積雪なき時ならましかば、吾等は、此時迄既に頂上に達すべかりし也。斯くの如く難を冒し意を用ゐて雪に蔽はれし險阻なる岩嶂を登りしも、常に危誤の念に襲はれしには非ず、山稜を傳ひしも其一側にて、眞向の北風を避くるに足りぬ。

午前五時十五分、美はしかりし薔薇色の曙光は去りて陰影鮮かなる雲無き快晴となり、綠色の谿谷、黑色の岩、及び澄みに澄みたる深碧の空と對照して、氷雪は登るに從ふて奇絕の度を增せり。六時吾等は第一回の食事を爲せしが、「肩」に到つて、驚嘆すべき美―の光景を賞し、雪に甚しく、罅隙を生ぜし岩石に座を占めて第二回の朝食を喫せり。茲より道再び困難を極め、支柱は長距離の間

隔を保ちて岩石に打込まれ、一本或は二本の時綱（インチローブ）即ち鐵鎖は「肩」を横ぎりて支柱の間を繋ぎ、頂上に到る垂直岩に達せり。併かも此綱は脚下二呎の（ステップカッティング）雪中に埋沒せし故、吾等は「肩」にては全く歩痕と細心の注意に依らざるを得ざりき。茲にて又北風の凜烈たるに吹かる。遂に最後の身經（ミダメン）たる雪の積れる岩石と頂上の一端とを被ひて垂下せる雪棚迄、綱を手頼に、九十度の傾斜面を一時十五分程攀ぢざる可からざるに會せり、其綱を命の綱と登りしもマテルホルン峯は獨逸人の所謂「絶えざる努力」大忍耐の試なりき。長身者ならんには突出せる種々の岩屑、岩點に手足を把持し得べし。導者頭は支綱に身を委しつゝ此嶂壁の表面に登れり、其綱の終端に達せる時、安全の足場に身構えんとせり、此間吾は彼の跡に從ひしも上ること僅々五呎にして上り得ざる所あり、一二回引擧げらる、斯かるも尚旦つ難事にて女性の性情も全く乖離せるを以て、屢々慄ひて呼吸を調べずんば弄りき、漸く端より端へと、引上げられて登りぬ。

（二）、頂上、綱に緊がること僅かに三十分時、絶巓標高一萬四千七百八十呎に達せり。吾は過る五日前、白角茅舍（ウアイホルンヘウト）に通ずる峻路四千八百呎を僅々三時半にて登りしも、今や、黑海旅舍より六千三百尺を登るに休憩時を含みて九時間を要せり。マテルホルン峯及白雪懸崖の難斯くの如し。吾等は此の二週間に登山を果したる最初の人たるなり。光景に蠱惑せられ、飢渴疲勞の餘り、山上に止り得しこと只十分時のみ、何となれば、時正に午下一點、下りは上りと同じく終始同樣なる注意を足構に要するを以て、同樣に時間を要すると、且、身を切る許りの寒風は獰猛なる勢を以て來り、撮影不可能、地位又危險となりたればなり。寒威骨を刺し食をとるに堪えず、多大の困難を冒して數葉の寫眞を得、思は後に殘れども、山巓より下山の途に就きぬ。

（三）、下山、下りは上りに比して呼吸に力缺かざるを以て苦痛少きも、より大なる注意を要し、頂上並に頂上の下なる「肩」の峻嶮なる積雪傾斜に於ける下山は、恰かも教會の尖塔を匍匐下るが如く（ハラバヒ）、全く天地只我一人の感を生じ、更に大なる落着（おちつき）、

冷靜を要す。午後三時、再び「肩」を辿つて始めて一地點に着し、身を温め十分間の休憩をなし食事をなすを得たり。更に下る二時間、目的を達せず意氣沮喪して歸降せる一隊を追越せり。午後五時半に到り、本朝六時余等の朝食せし所の地点即ち朽壞せる茅舍に食を執れり。寒益甚し、余は更に一裘を重ぬ。七時頃光は漸く薄すれそめ吾等の點せる燈の外四顧漸く蒼茫たり。

七時半余等の歩は漸く遲々、八時夜の帳、全く垂れて天地皆暗黑、兎角して岩石の間に道を探りて遂に例の茅舍に歸着す。茲には余等の叫聲に應へたりし明日の登山者ありて、衷心余等の歸着を迎へ祝し、或は茶を供し、或は質問を連發せり。休憩半餉、吾等は提燈の光を頼みに降ること一時間にして午後九時半、當夜の宿泊地たる黑海旅館に歸着す。九時半の齋圍後僅かに七時半の下り續けなれば、疲勞は甚しからず、只腰部に微かに覺ゆるあるのみ。翌朝午前六時半、此の不可測なるマテルホルン峯頭に、絶倫せる白雲を時々顧望しつゝザーマットに下りぬ。

（四）、登山の教訓、登山の愉快は奈邊に生ずるやとは人の屢々余に發する問なり。抑々愉快は驚嘆の恐怖心を惹起せしむる光景、即ち壯大、孤獨、調和の感覺、吾人の微小を支配する絶大力の知覺にあり、特に、登山に依らずして得る能はざる天來の感興にあり。是れ登山の愉快を得んとして、爲す所の總ての苦痛を償ふて充分剩りあるなり。身體の强健を來たすも亦之を補ふて餘りあり。若し余が疲勞を來さざりしならば、其はザーマット一ケ月の滯在に於て既に麻刷角、下蔓角、波頂、チナール赤角、リンブイッシュ角、及、第一級山嶺たるローザ山、廣角、白角等の諸峯に攀ぢたればなり。道德的並に精神的向上は其の効力の大なる身體的方面の夫に讓らず。此の光景、大活畫を數時に亘り殘りなく目擊せば人は將に新らしき宇宙を現實にし、自然の奈何に偉大に且絢美なるかを新らしく認識し、人生の瑣事を超越せんとの刺戟、及、崇高の一端を窺知するを得ん。恰かも浮世の冀望は報ゐられ、長時の努力によりて天國を目睹せるが如く感じ、新生命之世界を指示せられて、

神に對する新しき奉仕の決心、醉生夢死せざるの努力、及人生に對し細心省慮、細節も苟且にせざるの覺悟を起さしむ、而して這般の感覺たるや一に唯、登山に於ける奮鬪之報酬として生ずる也。高地に登りて感ずる欣喜之情は努力によりて、到達せし時、並に時間、體力、勇氣之或物を費せし時始めて生ずる也。更に言はんに、新世界突進之興奮、當然豫想準備すべき危險等困難を豫想せしむ。登山者は事を考ふる密に、事を決する敏ならざるべからず。人の總ての資性は出でゝ全人格は發展し、且つ障害に克ち、忍耐、勇氣、細慎、不撓の氣を增し肉躰的愉快の比較的重要ならざるを知るも重大ならずとせざる也。

登山は彼の蹴球（フートボール）と同く道德的性格を發展せしむ。長途の惡路を攀躋するには、總ての場合を通じ、一瞬に弛怠を許さざる危惧、難難苦楚を供ふ、途は杳かに、泣ひて自然に訴ふるも自然は聽かず、巖石は無情也、而して手頼るべきものを何等四周に有する微し、然かも此間、尙、只僅少なる士人のみ到り得る地に到達せり、余が此の全自然に憧憬嘆美して領有享受し、默想沈思するに何者の妨害者（な）微し、との感は、亦、登山の一愉快也。

（五）、導者及導者の制度、事變之起發は比較的稀なり、只多くの場合、導者を伴はざりし人に起るに過ぎず、或は道を失して墜落し或は未知の境に險惡なる天候變移の特徴を知らざりしがため也。人若し導者を能く選みて行かば、導者は安全なる場合にあらずんば出發せず、又危險の際には下山するを以て、實際危險發生の憂なき也。導者は其團隊の安全に關して法律上の責任を負擔す、端西アルプス倶樂部（ぶ）によりて、一定の年齡、經驗ある導者に荷運夫（にもつ）として伴はれ、一定の經驗を積み、風土學、天候學の初步に就き、試驗を受け後、政府よりの推薦狀、特許狀の記錄を有す。此特許狀たるや、登山隊を導引すべき道路、各峯への案內率、及其他の規定を記載す、加ふるに彼等は嘗つて導者を務めたる前團隊の推薦狀を有す。過失あれば直ちに特許狀及、推薦狀は沒收せらる、而して、特許狀は每年、之を書換へて交附するものとす。端西導者の階級は十分信頼して、自己の生命

を托し得べき强健なる、信憑すべき才智ある者なり。加之、良好なる導者は、判斷肯綮を得、精神確固迅速なる攀躋者たり、又、小心翼々たると共に勇敢ならざる可からず。此等の諸點に於ては導者の如何により、大なる軒輊あるを見る。導者は殆んど墜落することなく、岩石を攀づる際は、其登山者に結べる緊張せる綱を保ちて、如何なる瞬間も、客の滑落に備へ、困難なる地點に達すれば、導者頭は自ら安全なる足場に達する迄は、客をして待たしめ、自ら留まれば身構して、上方より呼聲にて旅行者の動作を指揮す。下降の際は、導者頭は殿を務め、身を構へ綱を强く把持して、奈何なる地點にても登山者其綱より墜落するを防ぐ。

(六、小屋の構造、熟練の導者は細工に器用にして、登山者稀にして困難なる山にては旅舍の設備なきを以て、更らに一通の料理法をも辨へざる可からず。されど斯かるアルプス連峯にては、端西アルプス倶樂部の設立經營せる小茅舍あり、一の番人なく戸窓は開放せられ、使用せる薪の代價だに支拂はゞ、何人も該小舍を勝手に使用するを得べし。其茅舍は、騾の達せられ、又飲料水を得らるべき程の谿谷の上にあり、即はち小逕より二時間乃至五時間程の地にて、氷河又は纔崖の難路は是より始まり氷河又は山巔の雪解け水に邇し。或る榜標及矢ありて該小屋より何れの方向に水の存するやを示し、其滸りに山を下り來れる人の、滿す樣に造られし一個の大鑵ありて、其夜の最初の到道者の使用すべきものなり。小屋は其地位を利用し、又は土留壁にて上方よりの雪崩を防禦せり（但し雪崩の起るは只冬春の交のみなり）。小屋には別に薪を入るべき石造小屋あり、毎年子供一人は、夏季の充分なる薪を添へ、騾一匹と共に此小屋に遣はさる、登山者は各自、小屋の壁に懸れる鐵箱に薪一束の使用代價貳拾錢を投入す。小屋は約十五平方呎の本造建物にして、導者の寐所には梯子を架せり、其一室には、通常、小暖爐一、料理道具一式、卓子一及寐臺代用の藁を敷ける棚ありて、其一隅には婦人のため幕を垂る。桶に懸れる毛布は充分にして、救護用繰繩、亦、桶に懸れり。赤十字箱吊臺、信號用赤燈及事變の際にとるべき告示あり、

導者は其團體に必要なる少量の食物を携帶するを以て、登山者の携帶すべき用具は書籍、筆（ペン）、墨汁（インク）、晴雨計にて足れり。普通この小屋に到着するは、午後五時頃にして各團體順次に食事を調理して、濟ませし、午後八時迄には靜肅となる。早發（普通午前二時）は頂上に到る迄、道路、尙、氷結せる間に行かん爲なり、蓋し午前九時以後は白雪陽光のために溶解し、行路の進捗更に遲々として困憊を增すべきを以て也。

（七）、食物、小屋より頂上迄の攀躋及下山に要すべき二十時間の內、休憩時六時間に攝取すべき食物は、出來得る限り減少し、且つ、滋養あり、渴を生ずる乾質の食物なる可からず。されども此は人によりて異なるべし、余の常に選ぶものは。鹽漬ならざる魚の鑵詰一個、チョコレート半封度（ポンド）、梨子數個、水一クォート、にして又時として、卵をとることあるも、麵麭と肉とは乾質なるを以て、決して携ふること無し。而して此麵麭と肉とは、只小舍に於てのみ食し、肉汁、乾酪を以て補ふべき也。

（八）、總括、米國、特に、加奈太ロッキー山、セルカークス山、ハーイ、シーラス山等に於ては、奇絕妙絕、アルプス嶺に讓らず、然れども導者に乏しく、小屋は皆無なるが故に、登山は多く一日の中に登り、且つ下る程のものに屬し、然らずんば豫め多額の金を費やし、露宿準備を爲さゞる可からず。亞米利加アルプス倶樂部は、設立後五年を經、熱心なる會員六十四を算するも、加奈太アルプス倶樂部は設立後只二年を經たるのみ、加奈太に於て、這般の趣味の增加につれ、導者及小屋の出づべきは疑ひを須ゐざる所なり。且つ、アルプス山の初期に於ける如く、二三の開拓者（パイオネール）は刻苦、奮勵、以て最初の登山—導者無きの登山を爲しつゝあり、之に比すれば現時マテルホルン登山の如きは、耐忍以外何等他に困難ありと言ふ可からざる也。

（鈴木春郊）

◎雜錄　日本アルプスと甲州人

## 日本アルプスと甲州人

▲小島烏水氏の近著に「日本アルプス」第一卷がある、主として日本南アルプス、其の中にも吾等甲斐住民と骨肉の關係あり、又「甲斐が根」の秀でたる名を以て歷史的に甲斐唯一の誇りと仰ぐ可き

◎雜　錄　日本アルプスと甲州人

◎◎◎白根山登攀記が大部分を占めて居るので、此れを此著の別名とする事は著者も認めて居る所である。

△都會に住んで激烈な生存競爭の怒濤に漂つて居る者が、餘りに繁雜な刺激の爲に神經の鋭さを磨滅されて時折出來する電車の衝突と云つた樣な飛び離れた事件によつて今更の樣に、瞬時も油斷のならぬ周圍を見廻す樣に、山國の住民が朝暮眉に迫る山また山の刺激に驅らされ、日々流れ入る變幻との應接に暇なき所から只山岳の變幻を極むる折のみに足を慄かせて天の一方を仰ぐ樣に成つたのも無理も無い事であるが、夫れにしても富士山にあらず、富士川にあらず、水晶にあらず、瑞雲にあらず、甲斐の自然として先づ第一に指を屈せざるを得無い白根山が、餘りに甲州人に閑却されて居るのは如何にも遺憾に堪へ無い。よし、芦安村の著名家名取氏が白根山の爲に資財を拋つて、通じた山路が果無くも再び荊棘の裡に沒した事は此れを許すとしても、白根連峯の三山を指して、其の名を尋れた時。多くの人が極めて曖昧な答をしたと云ふ此の冷酷には歎しかれる。此の際他國の人によつて白根山に關する大著の發行された事は多少の遺憾を感ずるけれ共、然し吾等の名山を紹介して呉れた事に感謝を表すると共に、都會の人々が吾等の山岳に對する感想を味ふもよし、單に文藝として味ふもよし、更に高山癖を以て狂へる人は、此れによつて特別な恩惠を感ずる事であらう。

△甲斐人は甲斐八景の一として「白根の夕照」を擧げ、大に白根に恩を着せて居る樣である。然し八景乃至十景と云ふ樣な陳套な範疇を應用するには甲斐の自然は餘り複雜過ぎる、夕照から云つたら寧ろ立派に此れを富士に讓るが當然だと思ふ、但し吾が甲斐人も或る特殊の光景のみを以て限られる樣なそんなケチな山で無い、離れて仰ぐ白根連嶺の美は不用意の間にも味つて居る人はあらうが連嶺の奥深く秘せらるゝ美は登山した人にせよ、「日本アルプス」を讀んで初めて切實に感歎し得やう。



△斯う云ふ自分も又高山熱に惱む患者の一人である。本年七月廿三日將に第二回白根登攀に就かうとする前日著者より「日本アルプス」を送られた。待ちあぐんで居た書である丈に出發準備に多忙の際にも白根縱斷記のくだりを卒讀した。白根絶巓で恐しい廿六日のあれに出遇つて「死」の劍き出した冷い齒を眼近く見せつけられた時にも、「日本アルプス」の中から得た印象は樣々の形を帶んで再現せられた超ねて八月初め或朝、自分は處用で横濱正金銀行の立派な石階を昇つて居た。烏水氏は此の銀行内のデスクで平生は非常なる敏を扱ひ乍ら、ペン先を眼鏡越しに透す人である。然し此の時は遠く北アルプスに攀ちて信飛の境に彷徨つて居る留守であつた燒付硝子の大天井を戴せ、コムポジツト、オーダーらしい夥多の柱を繞らした白く冷い角張つた宏大なる樣式的建築。茲に住む人から奪せられた「日本アルプス」一卷。代赭色の煙を噴く都會の騷擾、壓迫から遁れて東の間を山岳の奥深く、頂高く呼吸し乍らも、目も遙かに市街の電燈や、海を行く汽船の影を望んで胸を躍らせる(「農鳥山に上る記」)切つても切れぬ惡緣。何れ數日の後には、白さも冷さも高根の雪とは變らぬ乍ら、些の濕ひも無い此の石階を昇りに歸る痩せた人を想ふて、異樣の感情が込み上げて來た。

△凡そ世に郷土を有せぬ人々程、考へて淋しいものは無い。吾れに郷土ありと誇り得る平原高原の人の足許にさへ枕木が横はり、セメントの樋が轉がる世の中だ。此等郷土を有せざる人々、而して日毎に生存競爭の喧聲に繋せらるゝ人々が、一時の遁れ場所として求む可きは當然「自然のフレッシュネス」「自然の勢力」「自然の自由」を萬古千秋の雪と共に保つて居る山岳である。斯く市街の屑塵殺壁に堵へすして執念くも腰にまつはる鎖鎖を曳き摺り乍ら遂に無二、岩角に攀ぢて、雪と花との絶頂に大息を吐く人に取つては山岳は血肉の關係がある。「好き嫌ひ」と云ふ樣な贅澤な物では無く弱い人間の「必要」物である。烏水氏は「白根山脈の記」の後に、京濱間より白根三山の見ゆる事を記すに數頁を費して居る。恐らく當人には筆きを置かれ無い記事であらうも知れぬが、遠く白い山影、夫れも一年の或る短い期間にのみ見遂かされる山影に刹那の滿足を貪ると云ふ都人の心根を思へば無然たるものがある。

△タンタラスの樣に渴いて居る此等の人々の目には斯く遂い山影すら目に輝きを與へる、況して不斷の雪の冷かさを含む谷川の水を渡つて白百合の清い肯きを見る時は雲を拔く一萬有餘尺の絶巓に疲せた足を突立てぬ迄も、自然に對する懷しい、優しい情が底たぐつて止途も無く溢れ出てる「白根山脈に入る記」は「燕」（小室妙法寺）より（大井川の谷、最も感興を惹きし山水）まで五節、主として此れである。更に「白根山脈縱斷記」になると。

川湯（大井の上流）白花石楠花と高根躑躅（白峰山の一角に立つ記）。風色の印象（暴風雨前の富士山及び白峰山脈）。石、苔、偃松（白河内岳に登る記）。汽船、電燈（農鳥山に登る記）。山の肌（間の岳の雪田に到る）。羚羊、長之助草（北岳の絶巓に登る記）。信濃金梅、木賊（大樺谷に下る記）。

の諸節は皆泡立つ計り鋭敏に成つて居る官能を活々しい瑞々しい自然の刺激の中に投り出して、岩より、苔より、花瓣より、葉より、雲より、霧より、大空より、下界より、逆しり上り逆しり下る神秘を籠めた美しさの懷に抱も纏はぬ感情を任せて仕舞つて、干乾びた「眞」を送り通して居た己れを忘れやうとする者の情調が至る所に味はれる。郷土と云ふ文字の意義の取りやうでは、斯る人人には斯る山岳こそ眞の郷土で、斯る山岳文藝こそ眞の郷土藝術と云はれはすまいか。

△そして明間々々に餘裕の頭を持ち上げる知識は、此の現實の奇蹟の奥深く、沈醉の折にも又活動の折にもまじり〳〵と底の底から睜いて居る大自然の生命を出來得る限り光澤を變へすして提みださうとする。此れには赤裸の儘に知識の頭が見える時もあり、或は描かれた情調を隔てゝ薄皮の下の白樺の幹のやうに、水底の石のやうに窺ひる可くして窺はれぬ時もある。

△然し氏は「自然と作家」の中にも云はるゝ通り自然の「眞」を泛骨、泛線、泛色で浮上らせたいと云ふ希望であるらしい。此の努力の痕も「日本アルプス」と、「雲表」其の他の前著とを比すれば歴々として認められるであらう。從つて前途に多大の期待を抱かせる。

△「日本アルプス」一卷、其の創作の部は全く白根巡礼に就いての文學である。そして前半の論文、寧しろ附錄とも見る可きものに

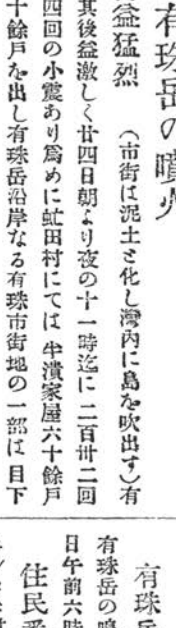
◎雜　錄　日本アルプスと甲州人

「自然描寫の藝術」、「自然と作家」、「ラスキンの山岳論」、「富士山保護論」、「谿谷の水」等がある。「自然描寫の藝術」最も讀む可く、氏の山岳描寫の態度も判かる。「ラスキンの山岳論」は山岳家たる氏の眞摯なる研究の結果として尊敬す可きもの、「富士山保護論」に至つては昨年山梨日々紙にも轉載されたもので痛切を極めて居る。吾等富士山に就きて一部の利害關係を有する國民が看過し得無い論文である。

△此等の論文だけを以てしても、忌憚なき妄評を加ふれば多くの紙數を費す事と思ふ。然し茲には甲州人に切實の因緣を有する白根連嶺を鋭活なる筆致を以て骨髓より描寫した此の大著が、特殊の感謝を以て甲州人に受取られ、冰はれん事を只管に望んで止まざる　第である。

（野尻正英）

# 雜報



## 有珠岳の噴火

### 有珠岳益猛烈

（市街は泥土と化し灣内に島を吹出す）有珠岳の鳴動其後益激しく廿四日朝より夜の十一時迄に二百卅二回の大震二十四回の小震あり爲めに虻田村にては半潰家屋六十餘戸全潰家屋三十餘戸を出し有珠岳沿岸なる有珠市街地の一部は目下泥土に化しつゝありて昨朝の激震と共に有珠灣内に大なる島を吹出し市街の處々に龜裂を生じ周圍十間位深さ三四尺の泥沼數ヶ所に出來せり。

附近村落の避難者續々蹤を接し婦女子を扶け老幼を背負ひ家財を運搬して四方に逃げ惑ふ混雜名狀すべからず其混雜に乘じ無人の村落に立入りて家財を盜み帆船に積みて逃走する者あり是等取締の爲め札幌警察署より三名岩見澤警察署より五名函館警察署より十一名の巡査を派遣し目下十九名の巡査危險を冒して無人の村落を警戒しつゝあり虻田村にては決死隊を組織し財産の保護中也

大井上技師の談に依れば大爆發よりは寧ろ大海嘯の來る前兆ならんとも云へり然れども現在の所にては大鳴動大激震の爲め避難すと云ふに止まり種々の風説あれども俄に信じ難し。

### 有珠岳大鳴動

（一晝夜の激震洞爺湖の減水）北海道蹈振國有珠岳の鳴動は其後益甚しく時々火柱天に沖し一天朦朧たり廿四日午前六時より午後六時迄に十八回の大震二百廿回の小震あり。

### 住民悉く避難

壯瞥村の七十六戸六百五十人は字メンケヘニシコベ村百五戸五百二十人は向ふ洞爺へ虻田村二百六十八戸千四百十人は辨邊へ、有岳村二百四十二戸千三百五十五人、長流村二百三十三戸千四百〇五人及び伊達村の一部はアザオ黄金業ユマソウに何れも避難せり其後風向の變りたる爲虻田方面は更にレアフオコンボシに立退きたり。

### 歩む能はず

廿四日　朝來虻田の郵送業者は業務を停止したる爲同地に向け出帆せる汽船の郵便物を陸揚する能はず唯電信の連絡を保つ爲郵便局員は激震鳴動中に執務しつゝあり室蘭警察署よりは火難盜難取締の爲巡査數名を派遣したるが震動の度益激しく婦女子は歩行する能はず。

### 大爆發か

又洞爺湖は一尺程減水し附近の井戸は悉く枯渇し

たり大爆發近きにありとて人心惶々たる有樣なるが若し爆發するとせば噴火口は最後の噴火口壁なる南屏風山北屏風山の內部なる可く文政五年の噴火は西南の方面破裂して虻田のトコタンに熔岩を流し多大の悲慘事を演じたりしが嘉永六年の噴火は少しく場所を異にせるもの丶如く其何れの部分が最も危險なるやは豫知し難し兎に角警戒區域は山の南方なる有珠村、東麓なる長流村、北東なる壯瞥村の小部、西麓なる虻田村の小部並に洞爺湖の南岸なり尙札幌農科大學教授は廿四日午前室蘭より同地に急行したり(二十五日札幌特電)。

札幌遞信管理局長より遞信省へ達したる公報左の如し

▲第一報　膽振國有珠山昨朝來數十回鳴動地震烈しく岩石崩落し爲めに附近居住者は昨夜半より他方面へ避難するもの多く同地警察署長支署長村長等目下視察中の旨電報ありたり(二十三日午後二時四十五分發電)。

▲第二報　有珠山鳴動今尙驚まず遠く此地に迄響き家屋震動す西紋鶯壯瞥虻田洞爺の各地住民皆避難し當地方面より援助者も陸路にては右各地に近附くことを得ず僅に船便に依るのみ　(當地より西紋鶯へ汽船一時間虻田へ二時間辨過へ二時間半)局は電信無き壯瞥洞爺は立退かせても時々情報の爲め西紋鶯虻田は最後迄維持せしめんとす書記技手工夫等を派遣す有珠山は海拔約二千尺　(廿四日午後十時五分發)。

▲第三報　狀態益危險虻田遂に立退き西紋鶯も又立退き準備中(廿四日午後十一時十四分發)

## 北海道第一の風光明媚

有珠の活火山は室蘭を西北に去る直距離七里餘、噴火灣の東北岸に幾ゐ灣を隔てゝ遙に駒ケ嶽の活火山と相對し風光極めて明媚を極む、有珠嶽の北に隣りて洞爺の湖あり湖面は海面より二百六十四尺高く周圍約十里殆ど圓形なり湖の中央に高さ千三百九十尺の島あり其附近に散在せる二個の小嶼と共に靜雅なる風景を作れり此附近一帶北海道中最も著名なる勝地とす有珠岳は東經百四十度四十九分半北緯四十二度三十三分の地點にして最高點と雖も海拔千九百六十四尺に過ぎざれども此地方に甚だ高き山岳無きと其形の奇拔なると歷史時代に於て甚だしき爆裂作用ありし爲有名なる火山となれり。

### 往時の爆發

有珠岳の爆發に付舊記を列記すれば　寬文三年七月二十二日有珠岳噴火し天地暗冥、山峰崩頹して千海に墮し海二千六百二十丈立地に變じて陸となり七月末まで鳴動せりと諸記にあり多分南屏風山爆裂火口は此記事に相當するものならん。文政五年閏一月十九日有珠岳火を噴き傍地大に震ふ。爆裂は十九日に始まり翌月初旬まで盛に活動せり其記錄を通讀すれば大泥南麓に向つて流れ來りアブタ村有珠村等燒土によりて被はれ廣々たる野原の如くなりたりとあり即ち此破裂も亦南屏風山に起りたるものにて南屏風山泥流は寬文三年の爆裂と文政五年の爆裂との產物なり南屏風山二の窪みは即ち此の二度の爆裂に依りて生じたるものなれども何れが寬文年中のものなりやは明かならず。

嘉永六年三月十五日有珠山噴火しサス土人は同場處の內エマレマレブ邊に虻田土人はペンペよりレブンゲへ退去せしめたり。

以上は不完全なる舊記中の主なるものより抄錄せしものにて今日明に其活動の跡を調査するを得ず、立岩爆裂に關しては年代明

かならんどもアイヌの傳ふる處によれば六七十年前なりと云ふ或は嘉永六年の爆裂に該當するにはあらざるなきか。

**損害少かる可し**　有珠岳例令大爆裂をなし熔岩流出すとも損害は左して大ならざるべし元來有珠岳は海拔僅に二千尺に足らざる小山にて北に周圍十里の洞爺湖を控へ南は直に噴火灣に臨み東西は或は河或高地によりて限定せられ其間の地域は周圍十里に足らざる稍長方形に近き土地にて人家稀薄田園從つて少く只僅に有珠、虻田、壯瞥村の一部、クマンツボ等にて數ふるに足らざれば多大の損害を生ずべき樣なし然れども有珠はアイヌ時代に熔岩の爲土塊を埋沒せられしとあれば今回も驚愕甚だしきものと思はるゝ某博士は語れり。

**有珠岳大噴火**　（熔岩熱湯の噴出、降灰三里に及ぶ）二十一日より鳴動止まざりし有珠岳附近は二十五日午後十時二十分トコタン背後の大有珠より熔岩塊を噴出し續いて小有珠岳より大音響と共に火焰噴出し三里四方に灰を降らせるも住民は避難後にて人畜損害なし。

△岩石崩壞交通杜絶　各地の情報を綜合するに虻田地方震動最も劇しく辨邊街道各所に龜裂を生じ黙したる泥沼を現出したり誤ち陷らば身體糜爛して燒死すべく虻田を距る約十町の左側斷崖岩石崩壞して危險一方ならず壯瞥街道も亦危險にて交通杜絶せり有珠岳南山麓を距る數町の島には二十五六個の裂口を生じ砂及び水を噴出す二十六日午後二時大有珠岳と小有珠岳との間を流るゝ小川に熱湯を湧出し今尚奔流しつゝあり。

△決死の書記　虻田地方より夜間有珠岳を見れば紅火黑煙濶卷上る山麓に接近する部面は砂礫岩石の崩落飛散するあり又壯瞥虻田紋鼈役場は書記二名を殘して住民と共に避難し二名は生命を賭して奔走し居れり虻田郵便局は辨邊に移轉し電信不通となれり西紋鼈局は稀府に移り電信通ず室蘭より技師工夫急行す。

**一萬餘人の避難**　伊達村地方は人民に强制立退を命じたるため一萬餘人稀府黃金薬に避難し其の混雜名狀すべからず馬小屋さへも滿員の狀態にて親子離散糧食缺乏慘狀甚だし室蘭より登別に至る地方は昨日まで日に十數回の地震ありしも害なし愈之より虻田に行く（二十七日午後零時三十五分室蘭鈴木特派員）。

當廳派遣の吏員實地調査の結果廿五日午後十時廿分頃有珠山の西北方トコトン市街地背後高さ六百尺餘の無名山五百尺の處にて爆發せる事を發見せり新噴火口は南北に長さ約五十間、幅約十五間にして瓢簞形なり附近二三百間の樹木枝折れ葉は凋落し降灰西北方向三里に及び深き所にては三寸位あり草木爲に色を變ず途中龜裂あり又道路一尺餘陷落せし箇所あり本日午後二時三十分再度の噴火ありて黑煙昇騰し爾後引續き噴煙し今尚盛なり住民は避難し居るを以て死傷なし又本日强震二回弱十八回にして震動大に減じたり（廿七日午前零時北海道廳長官發內務省着電）。

**震動減ず**　有珠岳の震動廿五日は强震廿一回稍强震十三回弱震四十二回に減じたり海面と畑地に噴口を生じたる爲ならんか又報告遲延するは交通機關危險なるに因る（二十六日午前十一時北海道長官發電）

**大森博士出張**　大森理學博士は北海道有珠岳震動實況視察の爲め同地に出張を命ぜられしを以て一兩日中に東京出發同地

に赴く由

**噴煙鳴動頗る強烈**（有珠山麓の大恐慌）北海道有珠山の大噴火は益々強烈の度を高め飛報續りに其慘狀を傳ふ、二十五日夜現場へ急行せる我社特派員は今や其大噴煙大鳴動の危險區域内に在りて或は震天動地の大觀を目擊し或は住民避難の狀況を視察しつゝあり、以下記する處は其第二特電となす。

**調査員の登山**　廿六日有珠噴火調査員の一行は二十五日の噴火現場に臨み坑口を測量したるに深さ六百尺發裂の長さ五十間幅十五間にて位置は洞爺湖畔を距る五丁トコタン市街地より三丁なり右一行が調査を了り歸途に就くや僅か二十分にして再び噴火口爆發し降灰は四五里四方に達し附近家屋の屋根は降灰の爲に絲の巢の如き有樣を呈せり。

**噴火口の變化**　廿七日午前三時又も大震動と共に有珠岳の壯麗に西したる山麓(俗にクマンツボ)俄然噴火し灰を吹き上げ瓢箪形の穴をなせり其深さ三十尺ありこれが爲に噴火口の變化を來し小有珠岳噴火は從來遠方より見ざりしが二十五日の爆發以來絶えず煙を上げ同時に大有珠岳の噴火は見えぬ樣になれり。

**人心恟々たり**　虻田全村の家屋は何れも崩壞し爲に噴火灣汽船會社の定期船は西紋鶴と虻田に寄港せず東紋鶴と辨逸に假上陸所を設けたり岩見澤より警官十名函館より十名室蘭より十名總援に來り危險區域に出入を禁じたり廿七日の大鳴動は七回にて僅の震動は幾回なるを知らず今尙爆發の樣あり人心恟々たり(廿七日午後四時四十分紋鶴鈴木特派員發電)

**調査員の報告**　登山調査せる大井上技師一行の報告に依れば噴火口は有珠岳の西北方なるトコタン市地街背後の無名山(高さ六百尺餘)にして位置は五百尺の所にあり坑口は唯一ヶ所なるが南北の長さ五十間幅十五間あり深さ十間程の瓢箪形にて二三百間の間樹木折れ葉燒け降灰深さ三寸あり降灰區域は西北の方約二三里に及べるもの〻如し山脈は到る處に龜裂を生じ道路の如き一尺餘も陷落せる處あり噴煙尙止まずトコタン被害民は全部避難せりとのことなるが廿七日午前二時五分又々大鳴動あり噴煙益猛烈にして同三時より更に强烈となり廿五日の噴火口附近に更に二三の噴火口を生じ壯警村を距る約十八丁の西洞爺湖附近にも新に爆裂せる處あり三里四方に降灰し再び危險の狀態に入りたるを以て道廳より更に長官代理として上田事務官小松警部及び關官を現場に急派したり。

**被害數十萬圓**　同日虻田村に全潰家屋三半潰數多ありトコタン村民は目下避難中なるが已に避難せる者の中救助を要する者廿名あり二十六日午前十時虻田村長より室蘭市長に向け一人一日平均五合の割にて五日間二百名分の救助米支給方を申請せり尙實地調査せる者の談によれば損害の大なるは是等村民避難の爲放棄されたる作物にして本年は收穫皆無と見るの外なく少くとも數十萬圓の損害ある可く鳴動の音響は恰も汽車のトンネル内を通過する際の如く室蘭に於てすら震じき音響とともに障子を震動しつゝありと(廿七日午後八時卅分札幌特電)

**楕圓形の龜裂**　伊達分署長は巡査三名を率ひ廿七日未明に爆發せる箇所を踏査せるに有珠山西北無名の高地に長さ百五十間幅三間の楕圓形の大龜裂を生ぜるを發見したるが歸途に就かんと

する際再び爆發し百五十間程高く砂と水蒸氣とを噴出したり、猶昨夜八時四十分未曾有の大震動あり二十八日午前八時大井上技師一行實地調査の爲登山したり、二十七日調査せる處によれば新たに生じたる二個の噴火口は有珠岳北屏風山の麓にあり火煙盛にして火口に近づく能はず伊達村は全部警戒を解き虻田村は一戸一人宛歸宅せしめたり(二十八日午後二時廿分札幌特電)。

鳴動强烈　有珠山は本日午前二時五十八分より噴煙猛烈となり鳴動强烈極まれり　(二十七日午後一時二十分北海道長官發内務省着電)。

## 噴火口の視察

(本社特派員の實地踏査噴煙鳴動共に盛)

△危險區域　調査員の一行大井上東北大學教授、根沼札幌測候所長、豐倉同技師、飯田室蘭警察署長、池田道廳屬等は熱心に火山系を調査したる結果廿八日西紋鑑は危險なしとして出入禁止を解除せりされば稱府ガコンポンに避難せし同所の人民は荷馬車に家財を滿載して歸宅し車馬往來繁るが如くなりき然し長流川より西北即ち長流有珠虻田は依然として危險區域に屬し壯警も亦安心する能はざる形勢にあり。

△無人の境　予が實地踏査の結果は左の如し、長流に於て震動の爲め壁の崩落戸障子の外れたるものあれど民家に損害なし壯警に於ては道路に龜裂を生じ震動絶に間なく爲に今尚危險區域として通交杜絶し同村字西湖畔、ソンカイ、クマンツボ、ナンセン、フカバ、タケノシタ、東湖畔、ガロト、ホシノ、アワコク、ヌツカンナイ、クボナイ等此戸數四百七十四、人員二千四百四十七は强制立退きを命ぜられ字中崖の東二里外に避難し居れりされば長流より壯警に至る間は恰も無人の境を行くが如く住民は家財家畜を其儘に避難せしを以て其跡には豚鶏など寂しげに鳴き居れるのみ壯警人民は東口に避難せし故糧食運搬の途無く止むを得ず北方の山路より駄馬一疋に米二袋味噌などを乘せて危險の道に依り辛くも露命を繋き居れり。

△一大奇觀　西湖畔に至れば目下地響き絶に間なく第二の噴火口即ち廿七日午前三時爆發の場所は俗にカザリン山の麓洞爺湖の水面より三百尺の高さにて東西に亘り約百間の間にて立木は六町四方赤くかれ噴火口よりは時々僅かの煙を揚げつゝあり第一の噴火口即ち二十五日午後十一時の爆發場所は本日午前十一時大鳴動と共に再び大噴火を爲し口孔百五十間四方に擴がり盛んに灰及び煙を揚げ尚鳴動毎に噴煙益盛なり風向に依り虻田方面にも時々灰を降らしつゝあり西湖畔に於て之を望めば恰も蒸氣の噴出するが如く物凄き音響と共に噴煙渦巻き上り一天漠々たる光景は天下の壯觀なり虻田有珠は前報後何等の變化なし本日は大震動四回調査員は尚爆發ありと云ひ居れり　(廿八日午後八時五十五分鈴木特派員西紋鑑發電)

## 大森博士談

有珠噴火に關する地震調査の爲め出張せる大森理學博士は助手一名を隨へ地震計其他の器械を携へて廿八日午後六時上野發青森直行にて出發せり博士の語る處に依れば實地踏査の上ならでは明言し難きも旋に溫泉ヶ嶽にては三箇月間も活動を續けたる末俄然大崩落を來したる例もあれば有珠岳も今後大破裂なしとは斷言するを得ず海嘯に就ても溫泉ヶ嶽布哇等に岩石崩壞によりて海嘯起り又は其他海中噴出の爲め海嘯を起したる

◎雜　報　有珠岳の噴火

◎雜　報　有珠岳の噴火

の例あり又地震に就ても淺間の如く隨分强震を起すものあり有珠岳に於ける今回の爆裂に當りて五六回局部の强烈震を起し其五回は東京の微動計にも感震せり然し目下頻々小破裂をなしつゝあれば却て比較的安全なるやも計られず若し今後猛烈なる大破壞的の地震或は海嘯の如きものありとするも其附近の海灣の狀勢より推して大に恐怖する程の事はなかるべしとも思はる云々。

**新噴火口發見**　道廳派遣員有珠山踏査の結果廿七日夜大震動の爲め噴火口新に三口を現出し合計六個となれるを發見せり避難民中遠距離にして危險なしと認むる一部には歸宅を許せり（廿九日午後零時五分北海道長官發內務省着電）。

**有珠山噴火踏査**　（本社特派員大森博士と共に登山實地を踏査す）廿一日晴天なるを以て大森博士は土木監督署の技師一名を案內となし、警官二名附添ひ予と合せて五名實地踏査をなす午前四時と六時とに有珠山の大鳴動を聞きて七時出發す、屋去に至れば西湖畔の方面に當り。

**大噴煙起り**　火山灰を飛ばし風向によりクマンツボ方面一圓に落下する如く、尾去地方も亦煙に包まれ硫黃の臭氣甚だし、フシコベツより尾去別に至りしに八時十分又々爆聲を聞くと共に高さ六百尺の大噴煙の揚るを見る宛然雲峰を望むが如し、九時廿分風は北西に變じ灰は紋別街道に落下するを見たり、有珠に至り土人に就て聞くに、二十三日正午十二時大音響を聞き、有珠灣內の地藏前五十間の所に

**海中に泥水を噴出し**　高さ三丈に達したる故海嘯を恐れて何れも避難したれば、其後の模樣を知らずと、十時十分大有珠神社前にて又も鳴動を聞き、十一時廿五分センコウジ前にて再び鳴動を聞く震動甚だし、夫より虻田地方の慘狀を眺めつゝ俗にノットコトムと稱する山に登る、時に午後二時なり、前面には第一回爆發の所謂金刀比羅市街上の噴火口二ヶ所あり、今は噴煙絕にて只數町

**四方樹木枯れ**　居るのみなるも、市の背面には實に廿七日午前二時三十分爆發したる三回目の噴火口と、同日午後三時爆發せし第六回目の噴火口あり樹木燒けて赤土と化し、約百間四方の穴より盛んに噴煙を揚げ、同日六時半爆發せし第八回目の噴火口は丸山の後に當り、洞爺湖畔に近き北屏風山の山腹なるに拘らず黑煙天に沖し遙に大有珠山頂を越ゑて

**灰を降らしつゝ**　あり其光景眞に凄慘を極む、更に詳細に調査するに、噴火口は大小十一ヶ所あり、本日噴煙せるは其中三ヶ所なり、三時四十分又々大震動に逢ひ急ぎ山を下る。

**大森博士の意見**　博士は調査の結果を述べて曰く、有珠山活動の中心は深く山の中にあるも、其高さは水面より高く而して活動力は有珠山全體を吹き飛ばす程大なる力なきものなり故に幾度か噴火せんとして震動を起し有珠地方に砂を吹き上げ各所の道路に龜裂を生じたるも元來、有珠、尾去、虻田沿岸は大有珠山の頂より傾斜甚だしからざるを以て寧ろ傾斜の急なる洞爺湖畔、即ち金比羅より西湖畔に至る一里の範圍に幾多の噴火をなしたるものなり、尙噴火の場所は何れも此屏風山の麓を圍る極めて低き山腹なるが水面より其高さを同じくするを以て活動の中心點を想像し得るなり、而して噴煙は繼續せず、又今後これ以上の發爆なしと

信すとなり(三十一日午後九時二十八分西紋鹽鈴木特派員發)

**有珠山の鳴動後報**　(噴火口十三箇所)有珠山の附近丸山口に二ヶ所の新噴火口を生じ噴煙濃にして泥土を洞爺湖の方に飛し居れり、是れにて爆裂噴火口十三ヶ所となる、内噴煙するもの七ヶ所間斷あるもの二箇所、數日來噴煙せざるもの四ヶ所なり、西湖畔の避難者一百戸は當分復歸の見込なく、隣近は一帶に荒廢の爲農作物の收穫皆無ならん(三日午後札幌發)。

**立退人民の慘境**　(噴火山の麓に在る有珠郡古老の近信)左は北海道膽振國有珠郡伊達村西紋鹽に居住する今年八十の古老田村顯光氏より有岳珠噴火の狀況に就き在京なる江守緑輔氏へ宛たる近信也

(前略)廿一日朝より二三十分間毎に微震ありしが午後二三時となりては震動漸く強く夜に至りて激震あり有珠山に故障を生ずべしと懸念せしに翌朝に至り有珠の山根長流村に居住する懇意のもの震動甚だ數山崩れも計り難しとて老少引纏めて移り來りたり廿三日夕刻に至りて震動最も甚だしく危險を極めしかば其筋より有珠岳より三里以外の地に

△強制立退　を命ぜられ其の混雜名狀すべからず廿四日夕より廿五日にかけて強震頻々虻田市街に及び候拙老は舊君臣一團となりて北門の警備に任じ以て宗藩(仙臺)が戊辰の際に方向を誤りたる汚辱を雪がんとの志望を以て明治初年北海道移住開墾を出願し幸ひに當局の容るゝ所となりて明治二年有珠郡支配を命ぜられ更に室蘭平郡虻田一部の增支配を命ぜられたるものにて其の十月には舊主伊達邦成出張土地の授受を了り候其の際有珠山は慶長以來五六十年毎に噴火有之候事古記に相見に候間燒石飛散の模樣取調べたる處長流川以南は噴火の害なく厚地肥沃なるを認めて移住の根據地に選定し明治三年四月二百五十人を此地に移住せしめたり去れば有珠虻田二郡は拙老草分の地にて其後移民四方より麕至して火山の周圍に切迫し開墾し盡くしたれば其の危險を慮かり居り候處果して今回の事を見るに至り候紋鹽市街は有珠岳を距る一里半餘の所なれば燒石飛ぶ事はありとも灰降る事はありとも人命に危險を及ぼす事は無之と存候間懇意の誼運りに避難を勸め候へ共草分の拙老の事故一寸も此地を去る事は成り難く

△斃死するも遺憾なし　と頑固に踏み止まり居り候處廿四日夜より廿五日朝に至り震動益强烈となり伊達男爵(非成)より馬車を以て迎へられ東紋鹽なる家令兵頭氏宅に避難するの已むを得ざるに至り候同日午前十時半頃劇震あり若くは破裂せしに非ずやと有珠岳を望見候處洞爺湖の西岸に白煙を噴出し漸次黑煙に變じつゝあるを見たり廿六日の調査の結果によれば新噴火口の深さ殆ど八百尺、幅十五間長さ十五間程のものなる由二十七日朝は噴煙止み午前十時頃又劇震あり此の際生じたる第二の新噴火口は前日の所より南方二十町位と思はれ候二十八日午後劇震三回あり有珠郡の立退戸數は千餘戸に及ぶべく各人路頭に迷ひ

△揺籃一つに有付餘　候ものも多々有之哉に候辛ひに降雨無之人家の新下に佇みて一枚の敷蓆をだに得ざるものありとの事途中にて出產せしものも有之由聞及び候田畑の損耗未だ相分り不申候へども土用入後水田の景況は至って宜敷候此の震動のため菜種及び麥作の收穫期相後れたる事遺憾の至りに候云々。

## 有珠山の災害

（震動は激しきも被害は少し）有珠山噴火に關し河島北海道長官より内務省に左の詳報ありたり（八月八日）。

▲震動の狀況　震動區域は極めて廣く有珠郡伊達村同郡壯瞥村虻田郡虻田村は上下動にして且震動に先ち一種の凄絶なる鳴響を發し去月廿二日以來鳴動止むことなく漸次增加し廿五日以降は回數詳かならざるも前日に比し減少せり然れども强震は其度を增せり同夜十一時廿分の爆裂噴煙後は其震動の度數大に減じ爆裂噴煙の箇所を增す毎に漸次減少し今は一日二三十回に上り且つ强震二三回に過ぎざるに至れり鳴動の最激しき所は虻田郡虻田村次に有珠郡伊達村字有珠村次に同村字長流村次に同郡壯瞥村同郡伊達村字西紋瞥にして龜裂も亦此順に伴ひたり龜裂の最も甚だしきは虻田村より壯瞥村に通ずる字床丹（第一に爆裂せし箇所）の西方約十町以内にして此所には縱横に無數の龜裂あるのみならず深一丈餘及び一尺以内の陷落箇所二ヶ所あり其廣袤は詳かならず震動の最も激しかりしは虻田村字床丹無名山爆裂の際にして之が爲めに虻田村は土藏五棟の壁崩落し虻田小學校御眞影奉置所及戰役記念碑倒壞し家の戸障子破壞せるに至れり。

▲避難の狀況　鳴動比較的强裂なりし虻田村壯瞥村の洞爺湖畔及び伊達村字有珠村民は廿二日其附近の部落に避難し壯瞥村の一部虻田村伊達村字長流村の過半は廿三日其他は廿四日に避難せり虻田村伊達村字有珠村民の多數は辨邊村伊達村字長流村同村字西紋瞥村民の多數は同村字稀府黃金澤及び東紋瞥の東方に壯瞥本村以西の部民は同村字久保内ベンケ、パンケ及虻田村字中洞爺同村二の原に避難せり避難區域は有珠山を距る直徑三里以外にして爆裂前には三里以内に更に人影を認めず故に數回の爆裂も一の人畜を害するに至らず

▲爆裂前の狀況　二十四日午後四時頃より伊達村字有珠村の畑地宅地及有珠灣内に無數の混沙水を湧出せり其砂は地層六七尺以下にあるものにして震動の結果湧出したるもの〻如し其水量は些少にして僅に附近數尺を濡すに過ぎず砂量も地面より高きは一尺内外低きは二三寸にして其廣さ大きは直徑一間以上小きは二三尺にして其形狀恰も陣笠を伏せたるが如し有珠山には更に異狀なき震動に伴ひ岩石墜落して今は從前の形狀幾分失ふに至れり。

▲爆裂噴烟狀況　第一回の爆裂噴烟は廿五日夜十一時廿分にして悽絶なる音響と震動之に伴ひ降灰西北約三里に及び噴火口附近數町は灰積三寸内外に達し直徑八九寸以下の熔岩飛散しあり噴火口は虻田村字床丹俗に金比羅市街地と稱し附近の戸數（數戸）洞爺湖を距る六七丁の無名山（湖水面より約六百尺）の山腹（湖水面より約五百尺）に在る窪澤形を爲る所にして噴火口の周圍の樹木は枝折草葉燒落せり出張員實地調査の際は噴烟なかりし爲其口を能く觀察するを得たり口の形狀は瓢箪形にして長さ約四十間幅約十五間なり廿六日午後二時廿分再度同口より噴火し黑烟昇騰盛にして灰及び砂石を噴出せし其後又同口は變動（或は更に口を增したるやも知れず）あるもの〻如きも噴烟の爲め近くを得ざるに依り未だ判明せず引續調査中なり廿七日午前三時二十分頃前噴火口より約廿町東方にして虻田村字洞爺西湖畔より約七八丁湖水面より約三百尺高き外輪山麓に水平に約百間龜裂を生じ其中廿間位の間より更に噴烟し周圍の樹葉等は前口の如く燒落せるも附近には灰

及石の噴出なく噴烟亦第一噴火に比し少なし第一噴口は噴烟後は殆烟薄少となりたり。

△避難の復舊と災害　震動漸次減少し噴火口二ヶ所に生じたるを以て爾後大なる變動なからんと思料せられたるに依り廿八日早朝伊達村字四紋鼈以東の避難民を復舊せしめ又虻田村市街地の主宰者に隨り歸村し得ることゝせり又災害の程度は直接に損害を受けたるものは前記土藏等及び戸障子の破壞と畑地に於ける降灰なるも其降灰區域は重に山間の樹木地にして耕地少なく且つ耕作物を害する程の降灰の區域は調査未濟なるも其最少部分に止まり被害少きが如し(七日内務省着)。

## 北海道廳長官公報

▲第一報　廿四日午後零時より午後十一時迄に震動百八十三回内強震十三回、漸次強震の度を增し危險の兆あり附近住民の殘部千二百戶を避難せしむ有珠山は震動毎に頂上の岩石幾分づゝを崩壞するも山體に異狀を認めず噴煙も平素の如し人畜に死傷なし(廿五日午前十一時内務大臣宛)。

▲第二報　本日有珠山西南麓畑地に廿六ヶ所の小噴口現出し砂と泥水とを噴出し又有珠灣内に無數の小噴口現出し又有珠村道路宅地に前同樣の小噴口數十ヶ所あり虻田海岸にも小噴口二三あり其他大なる異狀なし(廿六日午前零時廿五分發内務大臣宛)。

### 有珠山鳴動

(札幌)　膽振國有珠郡有珠岳は一昨朝より鳴動を初め本日午前十一時迄に十四回の地震あり鳴動は漸次激甚を極め今にも破裂せん樣樣なるより附近の民家は大に恐を抱き目下立退中にて大井上監督署技師豐倉道廳技手警部等取調の爲め出張せり尙歷史に依れば同山は寛文三年七月より嘉永六年三月迄四回の大破裂あり内二回は死傷者を出し七十年目に一回の例なりと。

### 有珠山鳴動別報

(室蘭)　有珠郡有珠山は昨朝より本日に亘り十四五回の鳴動あり本日午前十一時過ぎに同山の一角崩落し人心倘々避難者多し。

### 尙ほ危險を免かれず

(札幌廿七日午後特電)　今朝三時半有珠山麓九萬坪と稱する箇所大噴火し鳴動甚だし△道廳派遣員一行は危險の虞れあり昨日午後辨邊に引上げたり△洞爺湖西湖畔附近は廿七日未明更に大爆裂し噴烟を認む△今後の變化期し難しとて上田道廳事務官は本日屬一名警部一名を從へ視察として有珠山へ赴けり△第七師團長より必要に依り衛生部員糧食等相當求めに應ずべき旨道廳に通牒せり。

### 有珠山鳴動の其後

(鳴動止まず山麓の村落は戰場の如し)廿四日夕刻より刻一刻激動を增し何時大破裂あるか知れれば四紋鼈居殘り者に對し强制立退きを命じ十一時迄に東紋鼈に避難せしめたる故車馬提灯續るが如く斯くて市街地は無人の境となり鳴動の間に濤聲蛙聲の物凄きのみ大井農科教授の一行は二十四日夕刻宿舍を引揚げ役場前に集合警戒したるも危險の恐れあり十一時半約二十町を離るゝ東紋鼈學校に避難し校庭に野宿せり壯觀、虻田方面は恰も隔戰地の如く何れも家屋を釘付にし寢具と數日間の食料を携へ避難せり伊達無逢各字に屬する村民のうち差當り救助を要するもの十戶五十餘人稱庶、黃金部、澁内の家屋約二百五十戶に對し避難者八千收容の見込にて餘れるは天幕を張り收容すべし古老の言に依り大涙ありと聞く有珠山附近のアイヌは鳴動を聞

くと共に虻田其他に遠く逃れ去れり西紋鑑郵便局伊達村役場は稀府に避難し事務を扱へり(札幌發電)。

**有珠山鳴動激甚**　(室蘭)有珠山の鳴動は昨電の知くなるが其後昨日午前六時より午後六時迄の間に大震動十八回小震動二百卅回あり漸次激甚となれり震動區域は三里四方にて其激しき箇所は壯瞥長流、有珠の三村にして住民殆ど避難し去れり壯瞥戸長役場は危險の爲め他へ移轉し有珠、西紋別の二小學校に安置せる御眞影は昨夜他に奉遷し虻田各村の住民は辨邊小學校に避難し辨邊村役場は避難民に炊出を給與し居れり尙ほ室蘭警察署長は巡査數名を率ひ昨日現場へ向け急行せり。

**有珠山噴火後報**　二十七日午後一時北海道長官發内務省着電左の如し。

有珠山本日午前二時五十八分より噴煙猛烈となり鳴動强烈となりたり。

**有珠山の激震**　(全潰家屋卅餘戸半潰家屋六十餘戸)有珠山鳴動公報に曰く虻田村は昨日午後三時五十分の有珠山の激震にて人家半潰六十餘戸全潰三十餘戸を出し伊達村は附近の山時々崩潰して危險云ふべからず今や千二百戸の住民は諸所に向け避難せり今朝の激震にて有珠灣深さ四尋の處に砂を吹き上げ水面四尺餘の砂山を作る之と同時に同市街は凄じき響を爲して周圍十間深さ三尺餘の龜裂を生じて泥沼た處々に噴出せり附近村民は今日にて全部他に避難して人影を認めず(室蘭廿五日特電)。

**有珠山の異狀**　(札幌)(震動百八十三回八千人の避難　有珠山は廿四日午前零時より午後十一時迄に百八十三回の震動あり强震の部度山嶺崩潰する爲め爲木室蘭署長の附近住民に對し被害區域三里外に立退かしめたまでの一千六百戸八千人に及べり有珠市街地の一部泥土に化しつゝを見たる說あり取調中伊達村長流小學校を有珠村紋鑑小學校の御眞影は已に他に奉遷せり今朝道廳は札幌岩見澤二警察署より決死巡査數名を率ひ應援として派遣せり

**有珠山鳴動續報**　(大海嘯の虞れあり避難者已に一萬人)△派遣員の實査　二十五日道廳派遣員大井上技師、豐倉技手一行は由麗實査の結果有珠山西南山麓の畑に二十六箇所の小噴口ありて砂又は冷水の噴出せるを發見し又昨朝の激震にて有珠灣内にも噴口を作り島嶼を出現し同時に有珠市街地には龜裂を生じて處々に周圍十間深さ三尺餘の泥沼を現出し此他有珠山の西にある高山崩壞して山容を失へり右の次第にて郵便の通路杜絶し電信は辛うして通じ避難者既に一萬に及べり古老のアイヌは大海嘯あらんと信じ居り又大井上技師も亦三陸海嘯當時の鳴動に似たりとて海嘯を憂慮しつゝあり(札幌廿六日午前特電)。

**餘響の地震**　有珠山震動の餘響なるべく廿四日より廿五日の夜迄に當地に於ても十三回の地震あり何れも測候所の地震計に感じたるのみなりしが廿五日午後五時頃の分は稍や强かりき函館測候所長梶沼長三郎氏は取調の爲め有珠方面に向ひ又二十五日の夜道廳よりの命に依り二十六日の一番列車にて應援の爲め函館警察署渡邊巡査部長は九名の巡査を引率して有珠山方面に赴けり。(函館廿六日午前特電)。

**有珠山震動に就て**　加藤理學士談　(昔時四回の爆發震動あり今回は小量の蒸氣を漏す)贍振國の有珠山が二十二日以來大

震動を起し益々激甚となれる事は電報にも屢々見ゆる如くなるが同山は同地にても有名なる火山にして其稻野は北に在つては洞爺湖に臨み南は海面にして噴火灣を作り西は本火山の基底を爲せる低き山脈續きにて噴火灣と洞爺湖の兩斜面の境を爲せり其位置は東徑百四十度四十九分半北緯四十二度三十三分の地點にして頂上の最高點は海拔僅に五百九十五メートルに過ぎざれども此地方には甚だ高き山岳の無きと其形の奇拔なると歷史時代に於て甚だしき爆裂作用の起りたる事等によりて有名なり山形は大有珠、小有珠の二山東西に岐れ互に乳房山形を呈し其南北には大なる外輪山屏列し其廣袤は南北約十八町東西二十四町許りあり。

**活動の沿革**　此火山の活動は洪積期の末に開始し現在の本體は同期以後に於て形成せられたるものなるべく爆裂は恐らく歷史時代に起りたるものなるべきも現今アイヌの口碑に據るより外證すべきものなきを以て甚だ信ずるに足るものなしと舊記によれば寛文三年七月二十二日より二十五日の間に於て大爆裂ありたり次で文政五年一月十九日に始り翌月初旬まで震動したり此際虻田村有珠村は皆燒土に被はれて廣漠たる野原の如く成りたりと尙ほ此外慶長十六年十月及び安政元年にも少しく噴火したりと傳へらる然して現今即ち今回の震動以前の狀況は甚だ微弱なるものにて僅に大有珠山の東南中腹と小有珠山の南の中腹に當り數個の小噴氣孔ありて小量の蒸氣を漏せるのみなりと。

**噴出の物質**　は熔岩、泥流及び火山灰砂礫等にして其噴出物の石目を檢するに岩塊は多角狀を呈し普通の火山に認め得る殆んど總ての熔岩を網羅し破片物の如きは多く粗鬆にして浮石質の多きは其生成に關し瓦斯の働き大なる事を示し重要の證據と見るべきものなりと云ふ。

**郵便電信局避難**　有珠山鳴動廿二日來殆ど間斷なく水平震動に伴ひ危險地域西紋鷲、壯瞥、有珠、尾流、虻田の各村にして虻田附近は震動の爲道路に龜裂を生じたる個所あり其筋より立退方命令あり。

廿三日來各村全部他に避難し人心悚々日下危險の爲め壯瞥、西紋鷲、虻田間の遞送止まり郵便電信の配達困難を極む壯瞥局は二十三日夜蟠溪に、虻田局は二十四日夜辨邊に（電信機は其儘さし辨邊より局員出張晝間のみ通信す）避難、西紋鷲（電報は晝間のみ取扱）も其向の要求に依り何時避難するやも知れず室蘭、西紋鷲局電信輻輳し局員の疲勞甚し本日札幌局より局員四名應援として派遣す。

有珠山變災の狀況別途大臣へ報告の處郵便電信の連絡に付左の通り措置す。

（廿五日札幌遞信管理局長發遞信省着）

一、虻田附近最も危險同局は辨邊へ避難し虻田西紋鷲洞爺辨邊各局間遞送不能依て本日より辨邊洞爺間臨時往復一日二便開始し一方森、虻田間船送便を辨邊に寄港せしめ連絡を計れり（就送虻田寄港は不能）。

二、壯瞥局は區內（蟠溪）に避難し其他に事務を開始せるも西紋鷲間遞送不能の爲迂回線路を取調中通輿路。

三、虻田局電信は技師一名殘り危險を冒し通信せるも何時避難するや知れず避難後の電信連絡に付計畫中。

四、西紋鼈には目下の處郵便電信に支障なし洞爺辨邊は安全ならん。

**震動百八十三回**　昨廿四日午後零時より同十一時迄に震動百八十三回内強震十三回漸次強震の度を增し危險の徵あり附近住民の總部千二百戶は避難せしむ有珠山は震動毎に頂上の岩石幾部崩壞するも山態に異狀を認めず噴煙も平素の如し人畜死傷なし（二十五日午前十一時北海道廳長官發内務省着）。

**廿六ヶ所の小噴口**　本日有珠山西南山麓直ちに二十六箇所の小噴口を現出し砂と泥水等噴出し又有珠湾内に無數の小噴口を現出し又有珠村道路及各地に前同樣の噴口數十ヶ所あり虻田街道にも小噴口二三あり其他大なる異狀なし。（二十六日午前零時二十五分同上發同上着）。

**有珠山愈々噴火**　有珠岳西北の鶴洞錦湖畔なるトコタン市街地を去る約百間後の山に徑十間の爆裂噴火口一徑五間位の噴火口二個を現出せり時は二十五日夜十時二十分頃にて大音響を發し三十分繼續して黑煙高く上り火光を放ちて降灰あり震動數回減少せり二十五日午後四時四十分大なる震動あり虻田にては御眞影奉置所戰役紀念碑倒潰し土藏五棟の壁落ち家屋の戸障子外ると共に壁土落ち道路の龜裂增大せり御眞影は奉遷濟となる（札幌二十六日午後特電）。

**有珠山破裂**　有珠山本日午後二時破裂し白煙三十餘丈昇れるも震動數は却て減少且つ微弱となり人々安堵の色あり（廿六日午後八時四十分札幌管理局發遞信省着電）。

**震動稍減ず**　有珠山の震動去廿五日は強震二十一回稍強震十三回、弱四十二回に減ぜり海面と畑地に噴口生じたる爲めならんか又報告遲延するは交通機關危險なるに依る（廿六日午後十一時五分北海道廳長官發内務省着電）。

**無名山の爆發**　二十七日午後零時五分北海道廳長官發内務省着電左の如し。

當廳派遣の吏員實地調査の結果一昨廿五日午後十時二十分頃有珠山の西北方トコトン市街地背後高さ六百尺餘の無名山五百尺の處にて爆發せる事を發見せり新噴火口は南北に長さ約五十間幅約十五間にして瓢箪形なり附近二三百間の樹木枝折れ葉は凋落し、降灰、西北方向三里に及び深き所にては三寸位あり草木爲めに色を變ず途中龜裂あり又道路一尺餘陷落せし個所あり本日午後二時三十分再度の噴火ありて黑煙昇騰し爾後引續き噴煙し今尙ほ盛なり住民は避難し居るを以て死傷なし又本日强震二回弱震十八回にして震動大に減じたり。

**有珠山噴火に就て**　（海嘯の時期過ぐ洞爺湖邊の影響）

▲海嘯の虞なし　過般來鳴動せる有珠山は廿五日に至り愈々徑十間と五間の爆裂噴火口二個を生じて降灰ありたる事は既に電報に見ゐし如くなるか右に就き地學協會の小林氏は曰く從來の報告が專門家の實査に依りしものならざる限りは正確に現狀より將來を考査する能はず隨て其果して爆裂せしや否やは斷言し難けれど要するに目下登山踏査し居れる大井上技師の報告が得ば大體の想像はなし得べきか同技師は海嘯の杞憂を抱けりとあるも二十五日夜の發作其他より考へて海嘯の來るべき時期は既に過ぎたるが如し云々。

## 有珠山踏査結果

（廿九日午後北海道長官發内務省着）

當廳派遣員有珠山踏査の結果二十七日夜大震動の爲め噴火口新に三口を現出し合計六ヶ所となるを發見せり避難民中遠距離にして危險なしと認むる一部には歸宅を許せり。

▲洞爺湖附近の影響　有珠山は噴火灣に臨める火山にて先年破裂せる樽前山と同じ山脈に屬し遠く灣を隔てゝ渡島の駒ヶ岳と對峙し北には洞爺湖を隔てゝ駿夷富士の稱ある羊蹄町あり西には數年前鐵鑛を發見せる虻田村あり洞爺湖の水は流下して大澤となり附近の風光頗る佳く舊土人の外内地人の移住する者少からず伊東男、柴田中將、加藤子、朝比奈知泉氏等の開墾地あり避暑地としても將來發展の見込ある地方にて有珠山の近き西紋鼈の市街は明治初年伊達男爵舊臣と共に移住し有名なり此地より室蘭まで陸路七里、有珠山まで三里、伊達村、長流村及び有珠村の住民約八千人あり何れも避難したるものとせば昨今は恰も菜種麥の收穫時なれば例令ひ大破裂を免れたりとするも農民の損害は少からざるべく一朝破裂の曉には自然洞爺湖にも變動を與へ末流の長流川に大洪水を見るやも知れずとなり。

## 大森博士有珠山行

（目的は地震の觀測）

大森理學博士は北海道有珠山震動實況視察の爲め一週間の豫定を以て同地に出張を命ぜられ二十八日午後六時上野發にて出發同地に急行するよし。

## 有珠山終に破裂

（六百尺の無名山新噴火口を開く）

北海道廳派遣の吏員實地調査の結果廿五日午後十時二十分頃有珠山の西北方トコトン市街地背後高さ六百尺餘の無名山五百尺の處にて爆發せる事を發見せり新噴火口は南北に長さ約五十間幅約十五間にして瓢箪形をなし附近二三百間の樹木枝折れ葉は凋落し降灰西北方向三里に及び深き所にては三寸位あり草木爲に色を變ず途中龜裂あり又道路一尺餘陷落せし箇處あり二十六日午後二時三十分再度の噴火ありて黑煙昇騰し引續き噴煙し今尚盛なり住民は避難し居るを以て死傷なく強震二回翌十八回ありしも震動大いに減じたり（二十七日札幌發電）

## 破裂後の有珠山

（噴煙の高き百五十間）

廿七日出張員の實地踏査に依れば有珠山西北方林麓無名地斜面に長さ約百五十間幅約三間の大龜裂を生じて水蒸氣を吐き出せり調査を了りて約四五町も離れし折から忽然爆發し前後三回高さ約百五十間水蒸氣及び砂を噴出するを實見したり又有珠山北屏風山麓に二個の爆裂口新たに現出したるも午後二時頃より稍々靜穩に歸したり同夜午後八時四十分に至り又非常の大震動ありしも被害狀況尚ほ不明なり又一昨二十八日午前八時より午後三時迄有珠岳又大鳴動し八時頃より大雷雨に變じたり大井上技師一行登山調査せんとせしも噴煙の爲め近づく能はず山腹より山麓に掛けて一帶の樹林に六個の噴火坑を現出し黑煙熾なり有珠灣附近田畑及び溜に土砂の隱起せるもの五十餘ヶ所に及べり。

## 有珠山爆發公報

（爆發頻々、被害不明）

廿七日出張員の實地調査に依れば有珠山西北方麓無名地斜面長さ約百五十間幅三間の大龜裂を生じ水蒸氣を噴く調査を終り約五六町距たりし際俄然爆發すること前後三回約幅五十間水蒸氣及砂を噴出するを觀る又有珠山麓北屏風山麓に二個の爆裂口新に現出

し午後二時頃より稍や平穩に歸す同夜八時四十分に至り又非常の大爆發ありしも被害の狀況尙ほ不明なり（廿八日北海道廳發內務省着電）

**有珠山の噴火**　（室蘭廿九日特電）（稍や平穩に復せり、民心漸く安堵す）有珠山爆發報告に曰く爆裂噴火口は新に有珠山北方北屏風山麓に二個出現せりされど稍や靜穩に復す今後大なる災害なかるべしと信ず伊達村避難者に限り警戒を解く虻田村は一家の責任者に限り復歸せしむ二十五日小有珠山に出現せる噴火口は深さ六十尺幅十五間長さ五十間なり、鳩山和夫氏は今朝伊達村に向へり右の如き狀況なれば視察團一行は歸途に就き民心堵に安んぜり。

**有珠山噴火續報**　（室蘭二十九日特電）（鳴動噴火猛烈なり佐藤技師の視察）有珠山方面に六個の爆發噴火口を生じ二十八日は鳴動噴煙猛烈なりき、農商務省技師佐藤傳藏氏は有珠山視察の爲め本日到着し直ちに伊達村に向け出發せり。

## 富士山の暴風雨

△落雷で人事不省者あり　△附り老人少女登山の事

深川區大島町一二桶職木村屋事島田安太郎（三十九）は祖先享保十八年中富士山五合五勺目へ靈切不動堂を建立せし以來子孫代々毎年登山する例なるを以て安太郎は深川山々講社の先達となり既に本年にて十八回も登山せしが八月二十五日も例により同番地小野村岩次郎（七十四）同區蛤町一の三女學生伊藤お歌（十八）弟清（十六）の老幼外數十名の講中を伴ひて登山し翌廿六日强力河村久吉（三十五）を雇ひ午前八時九合目迄登りしに天候俄に險惡となり見る間に棒千大の雹降り次いで大吹雪となりしかば一同は岩を這ひて辛うして頂上に達し僅に金明水を取りて再び下山の途に就き何れも身體凍にて殆んど歩行の自由を失ひしにも拘はらず困難を冒して暴風雨中を東口六合目の室まで逃込みしに此處には横濱丸新講三十五名の團體避難し居りて何れも行衣を炬火にて乾かしゐたれば其の火を借りて暖を取らんとせし瞬間凄じき物音と共に雷は室近く落下し其雷火は室の電話口へ感電して山々講社一行中の伊藤長藏（三十）は右股に大火傷を爲し尙十二名は人事不省に陷りたり室中大騷ぎとなり夫れ〳〵介抱の上漸く蘇生せしめたるが是と同時に八合目にも亦落雷し數名の負傷者あり斯くて島田の一行は再昨日午前迄六合目に避難し一昨夜八時卅分新橋へ歸着せしが斯る暴風雨は近年稀有の事なりと又福岡縣京都郡豐津村高木悅藏（八十七）同人妻尾上（七十五）の兩人は老後の思ひ出に富士登山を企て本月十八日附添婦人一名、强力三名、籠二挺、馬一頭を從がへて御殿場を發し道を中畑口に取り五合目まで籠の便を借り同夜三合目に一泊し十九日早朝出發徒歩にて登山し御鉢廻りを爲し無事御殿場に歸着せしが蹔在栗原四郎右衛門の妻まつ（八十七）も子孫五人を從へて二十二日東京を出發し上吉田の芙蓉閣に一泊し二十三日朝日閣專屬の强力渡邊彦一（三十一）同長次郎（三十六）の二名を從へて登山の途に着き同夜七合目に一泊翌日頂上に達し歸途は須走に下り御殿場を經て歸郷したりと云ふ老人の元氣驚くべし。

**富士山の暴風雨**　廿八日午前十一時頃より富士山に暴風雨ありたれど孫て警戒し居たることゝて被害者なかりし（靜岡二十

九日特電)。

**富士山の暴風雨**　(三十餘名は山室に避難中、登山者に多少被害あらん)　二十六日午前一時富士登山を企てたる赤坂歩兵第一聯隊の二箇中隊は首尾能く其目的を遂し同日午前十時無事下山し伊倉聯隊長は獨り頂上に止まり諸所を撮影し氣溫四十五度を計りて正午下山したるが午後一時頃より頂上に暴風起り且つ雷鳴激しく同日登山したる者の中三十餘名は目下各山室に籠りて避難し居るも尚ほ途中にありしもの百餘名は岩石に嚙り附き避難中なれば多少の被害者は免れざる可く此急報に接したる御殿場警察署よりは救助の爲め二十七日朝數名の巡査を登山せしめたり(靜岡二十七日電話)。

**大雷雨後の富士**　(登山者夜を冒して下山す)　御殿場分署より富士登山者保護の爲め登山したる巡査の報告に據れば二合目休泊所にては幸ひ被害なきも電話器は破壞したるより七合目四合目の分を取外して同所に据附け廿八日午後七時より開通せしめたり當日頂上までの登山者は大宮口より百三名御殿場口より百五十名吉田口より二百名ありたるも暴風雨の襲來を恐れ何れも夜を冒して下山せしめ頂上には一名をも休泊せしめざりしと尚ほ今も六合目及び四合目に至るまでは屢々暴雨襲來する由(靜岡二十九日午後特電)。

**富士山の凍死者**　(四名中二名蘇生す)　十日午前七時富士山八合目に於て發見されたる凍死者は其後頂上の駐在巡査及大宮より急行せる醫師の應急手當に依り四名中二名は漸く蘇生し同日午後三時全く健康體に復したるが右は赤坂區一ツ木町廿九番地大木桑次方雇人寺倉仲次(二十三)大阪市東區南本町四丁目六十三番地尾村茂三郎(五十)と判明したるも他の絶命したる二名の住所姓名は未だ不明なり(靜岡十一電話)。

**富士山頂學生凍死**　九日朝來の暴風雨に富士山麓の各警察署にては登山者に警戒を加へ居たるにも拘はらず同日午前十時廿二三才位の學生體の男八名は其警戒を拒み暴風雨を冒して登山したるが今朝午前六時に至るも下山せざるを以て山麓の各警察署にては山頂の駐在巡査に其安否を取調しめしに一行中の四名は八合目の岩の蔭に凍死し居り他の四名は行衛不明なれば目下其所在捜索中なるが同山頂は十日朝來一層の激變を加へ且暴風益々其勢を加へたるを以て其捜索は頗る困難なり而して右學生は九日午前六時御殿場着列車にて新橋驛より來着したるものなりと云ふ。

**富士山上の暴風**　(下山者島田先達の談)(落雷せしは六合目負傷數十名を出す)　深川區蛤町桶職木村屋事島田安太郎(卅九)は深川山々講社の先達にて既に十八回も登山したる剛の者なるが本年も同區大島町小野岩次郎(七十四)の老人を始め同區蛤町一丁目伊藤サヨ(十八)同人弟稔(十六)の少年少女の外十數名の講中を伴ひて廿五日東京を出發し同日は六合目に宿泊し翌廿六日には強力河村久吉(卅五)を案内に登山したるが纔て七合目に至るや篠突く如き大雨降り出したれば一同大に避易せしも互ひに勇氣を鼓して非常の艱苦を嘗めつゝ滯りなく頂上に達し夫れより下山の途に就くや又も大雷雨に遭ひて愈々辛苦を重ねつゝ漸く六合目まで下山し二十七日の午後無事新橋に着したり富士に於ける同日の雷雨は近來になき猛烈を極め八合目の室に於ては落雷の爲め數

十名の負傷さへ出したりと云へるが今同人の談話を記さんに。

**天地震動す**　私共は廿六日の朝六合目を出發して登り始ましたが丁度七時頃七合目の邊まで進しますと大粒の雨がポツ〳〵と降つて來まして風さへ吹き添ひ驅て大暴風雨の模樣になつて來ました私は是迄十八回も登山致しまして其中には笠を吹き飛ばされて紐許り殘つた事もありましたが夫れから見ると未だ優しい風でありますが故斯樣な事に驚いては御頂上は出來るものでないと一同を勵まして登つて參りますと丁度九合目の室に着いた頃には非常な暴風雨になりまして何れも室に閉ち籠められて彼の大きな山に誰一人頂上する者もなければ下山する者もなく次第に雷鳴の音が激しくなると共に天地が薄暗がりの樣になつて山が震動して來まして何とも變に樣のない物凄い光景となりました私共は九合目の室に入つて暴風雨の止を待て居ますと外は拇指大の雹が降つて來ましたが折角此處まで來て頂上しないも殘念と思ひまして斷然頂上する事に致しました。

**四面晦瞑**　斯くて老人を始め女の子等を連れまして匍うては立ちして漸く登山致しましたが今迄幾度となく登山した中で今度程辛い目に遭つた事はありませんでした。

**幾十人の負傷者**　當日八合目の石室に泊た者が八九十人ありましたが吉田口の方を開合せました處是も百幾十人と云ふ大人數が居りまして東口八合目より吉田口八合目に廻つた者が三名途中で水に押し流されて轉落し大分怪我をしたとの事でありました私共は六合目まで下る事に致しまして漸く六合目の石室に着くと入口の戸の蹟から火の玉が這入つて來ますと共に山が張り裂けたと思ふ樣な音が致したので六人の者は一時にアツト驚いて倒れましたが其内の一人の知きは左の脇腹から掛て左の足まで一面に大火傷を受けました落雷のした場所は六合目外數ヶ所ありましたが八合目吉田口に落ちたのは最も烈しいのだそうでありまして三十幾人の負傷が出來し何れも重傷で動けないそうであります其輕いのは私共が二十七日御殿場の停車場に居りました時下山して來ましたのを見ると全身幾ヶ所となく火傷を負うて居りまして見るも無慘の有樣でありました云々。

**富士山頂の落雷**　（御殿場二十六日特派員發電）（被害者三十四名に上る）二十六日午後五時半富士山頂に起りし大雷雨は近來稀に見る程の激烈にて山上殊に山梨縣方面の被害最も多く次日下山せる御殿場分署の一警官の報告に依れば其被害の大體を知るに足れり。

▲罹災者の慘狀　二十六日同時刻吉田口六合目の岩室に落雷し電氣は山上に上りて八合目の岩室に感電し同室内にありし三十八名の中四名を除くの外重輕傷を負ひ殊に其中一名は頭部殆んど被害なく又同時刻御殿場口六合目の電話線にも落雷したるが其電氣は矢張り八合目に感電して同所以上頂上に至る途中約二十町程の電線は殆んど寸斷せられたるのみか被覆されたる銅線の内部が殆んど全く熔解して其形體を止めず登山者は之を拾ひて鞋の紐の代として持ち去りたる者多く僅かに其殘り二片を御殿場分署に持歸りて同所に保管し居れり今後電話線の一研究問題となる可し。

▲電話器の破壞　電話器の破壞したるものは御殿場口一個、同

六合目にて受話器一個破損、八合目頂上の電話器も大破せり。

△山中に在る者多數　二十六日の大雨以來登山者の大半は下山したるも尙ほ大宮口、吉田口、須走口を合せて約三百餘名は山中に在る可く二十七日午前十一時十一時頃より山上稍や平靜に歸したるが尙ほ山上に二名の警官を派して警戒し居れり。

**富士山の落雷**　（六合目の電線に落つ　重輕傷者三十四名）二十六日富士山に大暴風雨ありたる事は既記の如くなるが同日午後五時三十分吉田口六合目より稍や上の電線に落雷し電流電線を傳ひて吉田口八合目の休泊所内電話器に激怒し折柄同所に休憩し居りし登山者三十八名の中三十四名は其電流に打たれて重輕傷を負ひたるが何れも生命には別條なく出來得る限りの手當を施しつつあり右休泊所なる石室は非常に混雜し居り尙ほ落雷と同時に須走口山内の電線にも激怒し其他附近備附の電話器數座にも破損を生じたる爲め目下電話不通にて今尙ほ詳細を知る事能はず（靜岡廿八日電話）

**電話線と富士の落雷**　（避雷針あれども無効か電話線架設の爲ならず）二十六日の富士山上の落雷と電話線との關係に就き中央電話交換局肥田技師は語つて曰く電話線は性質上頗る落雷に感觸し易ければ市内の電話線に對しては本局又は各分局にては完全なる避雷針を設置し置き更に電話機を取附けある各戸に對しても安全なる避雷針の設置を施しある外路傍の電柱にも悉く避雷線を附しあるを以て從來夏季の落雷に際しても左したる故障なかりしが今回の富士山の落雷に就ては果して電話線の爲めに被害の程度を大ならしめたるか如何は實地調査の上ならでは判明せざるも想ふに富士山上の電柱毎にも必ず避雷針を取附けあるには相違なければ唯岩石多き山上の事なれば電柱を立つるに當り巖石を掘るに由なき箇處は已むなく二三本の支木を三方に交叉し押附け置あるものもあるべく斯くの如き場合の避雷針は普通平地の如き水分ある地底に埋る能はざれば針端は巖上に晒され避雷針はあれども無きが如き狀態に在れば萬一其の附近へ登山者が集合し居り不幸にも落雷したりとせば避雷針の効用は全く無効にて悲慘なる椿事の生ずるも圖られざるなり併し富士山上に電話線を架設せる爲め落雷を招きしと云ふ事は斷じて無きなり云々。

**富士山上の大雷雨**　（と戰ひし勇ましい質屋の姉弟）昔享保十八年先祖が富士の五合五勺目へ雲切不動を勸進せし以來深川大島町四稱屋島田安太郎（廿九）が其代になつて十九回目の富士詣を去る廿四日行ひしが同行凡て七人此内に同蛤町一の二質店小堀屋伊東鶴太郎の娘歌子（十八）弟賢十六）姉弟も加はりしが十五年來稀有の大暴風雨を冒して山頂を極め下山の途次六合目にて落雷の危難を免かれ恙なく再昨夜歸京したる話を歌子に聽く△私は當年四月三輪田女學校を卒業しましたが在校中から登山の念禁じ難く恰も從弟伊東長藏（三十）が山々講に加はり登山と聞き無理から父の許しを得て弟清と此行に加はる事となりました一行中の女は私たつた一人浴衣がけに紮紺の短袴白脚絆に結付草履弟は洋服で草鞋がけ共に海水帽の顎紐堅く結んで廿四日午前六時飯田町驛を立つて其夜は吉田口の忍山邊へ泊り翌日は夜の色殘る頃立つて胎内潛り小御岳へかゝつた頃雨となり肌衣まで濡れて六合目で一泊し漸々と響く山鳴りを聞き

◎雜報　富士山の暴風雨

つゝゲツスリ艇込み廿六日は六時に室を出たが夜來の風雨益荒れ幌の庇が風でヒツタリ顏へ吸ひ付き息苦しく白襟かけ溫袍の袖口も金剛杖握る拳も雷が横撲りに當つて痺れる程痛く袴の裾は天に沖して軍艦旗のやうに緣が千切れ飛ぶ物凄さ弟と手を堅く握り合つて頂上せねば戻らぬ了見强力などは危險を告げましたが笠が飛ばぬ限りはと云ふ先達の言葉に勇んで九合目迄來ると足下に雷の音、なほも暴風雨を犯して夢中で登りましたが助けて奚れツと上から室へ飛び込んで來る人もある程故登山は出來まいと室へ休み炭一俵を焚いて暖を執り小止みを待つて出發し胸突八丁で二度も辷りやつとの思ひで頂上へ着きお宮を覗きましたが霧で一寸下も見へません金明水を戴いてサア下山となると又風雨激しく大波へ飛込むやうで足許さへ見へず呼吸は詰まる眼は晦む眞つ暗な心地になり八合目から安藤といふ强力に負ばれて六合目迄下りましたが杖握つた掌を弟に離して貰ふ位此室で泊る事となつて弟と一所に奥に枕は並べても嵐の音で眠りもならず斧々迫る寒さに抱合つて夜明け許りを待ち焦るゝ寅の八時頃ピカツと蓮屏風を縫ふ稲妻と共に拳銃を打つたやうな音がしてハツと思ふと身体が一尺も飛上りました、落雷したのだと云ふ事で入口に腰てた人は氣絶したと云ひます此時弟は脊骨を鐵槌で打たれた氣がしたさうです、室では諸所でお經が起るこれ切り世界が滅亡するやうな騒ぎでした、マンジリともせず七時に起きて外套を借り頭から包まつて叫び狂ふ暴風を犯し漸度か轉びながら麓へ着いたのは三時頃砂掘ひまでは雨を浴び續けで思へばよく無事でしたと ◎弟を顧みれば僕も初出で忘られぬ好紀念になりました千葉縣寒川の講中が二人行方不明になつたと麓で聞きましたが僕は丸で夢中でしたと勇ましく語り次げり。

富士の山開き　（十七日八合目に降雪あり）富士山開に付き去る十四日より人夫數名にて頂上淺間神社々前を掃除し居たりしに十七日全く終了し又工事中の電話架設も當日大宮口及び須走口共竣工したれば愈々山開きとなりて登山者續々あり十七日には十餘名の團體登山ありたるが當日午後二時より八合目に降雪あり且つ强風なりしかば御殿場警察署にては登山者保護の爲め特に巡査二名を登山せしめたり（靜岡十八日電話）。

別報　前日來登山して其準備を爲し居りたる大宮町官幣大社淺間神社竹麻宮司によりて廿日午前十時山頂奥ノ宮一名冥山久須志神社にて嚴肅なる山開式を行ひたり前日より登山して此式典を拜觀せんとする者無量百餘名大宮警察分署よりは巡査を派出して取締を爲し又大宮口五ヶ所須走口三箇所に巡査派出所を山梨縣上口にも同樣五箇所の派出所を又は五合目に登山者の救護所を設け警部一名看護婦三名を附して救護の任に當らしめたり廿日午前八時頃より空曇り小雨ありたるも次第に霽れ行きて午前十時の山開式には一天拭ふが如く山頂は華氏三十三度を昇降しつゝあり日光殘雪を射て壯觀極りなし（靜岡二十日電話）。

女子商業生の登山　（强力に負けぬ足取　怠なく目的を遂ぐ）女子商業學校の生徒金子ツタ（十四）關エイ（十六）恩田キス（十八）柴崎モト（十八）永田ヨシ（十九）竹田トシ（二十）山西カツ（廿）の諸子は講師土方正平氏監督の下に頃日富士登山を試み馬返しより金剛杖麥藁帽子綿入草鞋等の登山姿甲斐々しく强力に負けぬ足並

にて一行悉なく頂上に遂し展望を恣にしたる上、下山直ちに甲州へ向つて出發したりと。

**登山娘子軍**（總勢十六人新橋首途欣々の色眉宇に溢る）この花會の企てになる婦人富士登りの一行は天氣都合を氣遣ひ期日未定なりしが二十八日の晴天に會員一同勇み立ち遠かに微を飛して同日午後一時十分新橋發の汽車にて出發したり之れより先き會員の夫人令孃は數日前より既に草鞋下よ脚袴よと夫れ〴〵身仕度を調へ首途の用意取り〳〵の折から二十七日に至り會より「明二十八日朝の天氣模樣を見定めたる上多分は午後一時十分新橋出發の事と致すべし」との打合あり愈々明日はお山登と年若き會員の内にはまだ見ぬ富士の夢に嬉さの包み切れず正午には早やイソイソと新橋停車場に駆け付くるもあり幣原博士夫人を殿に一行十六人顔の揃ひたる時一同紀念の撮影を爲したるが一行は目印として大國旗一旒を押し立て會員は何れも淡淺黄色の手提袋を提げたり新くて一行は見送りの人々と機嫌好く、行つて來ますの挨拶を交換し汽笛の聲もろ共に勇ましき首途に就きぬ聽ては金剛杖の響いさましく一萬二千尺を踏破して三國一の芙蓉峰の上に優しい姿を現はすなるべし一行會員の人名左の如し

この花會登山人名

本郷西片町十六番地　幣原　妙子（三十）
日本橋區大傳馬町二ノ十一　篠原タツ子（四三）
下谷區竹町一番地　大木ミツ子（十四）
神田區龜住町七　中川フミ子（十七）
府下代々木字初代　山田クニエ（廿五）
下谷練塀町二ノ十九　上野アサ子（十二）
同　上野サト子（十七）
芝三田伊皿子十四　老沼十三郎（十八）
同　同　勝男（十六）
同　同　敏（十五）
府下板橋　渡邊寛司
この花會理事　千葉秀胤
同上寫眞班　堀井昇
外三名

**富士登山秘訣**（登山者の注意要件この花會員の登山）この花會員は例年の如く本年も好天氣なれば來る二十八日を以て富士登山の途に就く筈なるが一行は幣原文學博士夫人を始め九名にて例年に似ず少數なるは天候の不順なるが爲め二の足を踏みたるもの多き故ならんが同一行は今回に限り修學旅行的として歸途は御殿場より吉田口に赴く事となり右に付き終始斡旋の勞を執居れる千葉氏は今日まで餘り多く行はれずして往々登山の目的を達せず中途下山する人の爲めに登山者の注意すべき要點を語りたるが右は會員に限らず一般の人の始めて登山せんものには時節柄必要の條項なればこれを左に錄すべし。

▲身體の冷渡りし時　登山者の往々苦しむは七合目以上に至りたる時は急に寒冷を覺ゆる事あり石室に入るも蒲團を引つ被るも將た又火燵にて暖を取るも身尚ほ戰慄を覺えて容易に暖氣を得難く途には下山の已み難き場合に至る者少からず斯る時の應急手當としては先づ一二杯の酒を呑み有り合ふ手頃の石を二三個程爐に投

◎雜　報　高層氣象觀測

じて熱せしめ之を溫石として腹、胸、背に入れて靜かに眠に就く時は忽ち恢復するを得べし此は極めて簡單なる方法にて事新らしく云ふ程の事にあらざれど偖て實際に山上にて此方法を試みる人少なきは不思議なり。

▲山岳病の豫防　漸く頂上に登れば眩暈を起し又頭痛を感ずる人多し是れ風物の珍らしき爲め餘りに視力を費したるが原因なりと云ふものあれど全くは空腹を覺ゑたる故なるを知る人少なし彼の强力の如き己れの荷を多少とも輕くせんとて早目に晝食を强ゆる事あり其結果未だ中途に至らざるに滿腹し登るに從つて粗食なると空氣の稀薄等より食慾進まざる等にて遂に眩暈を起すに至るもの多し左れば登山者は必ず食事を規則正しくして常に七分目程を食し決して滿腹する迄食を取らざる事必要なり而して經驗上二時間目位に食する方最も山岳病の豫防法なり。

▲日光の直射　日光の直射は烈しく疲勞を感ずるのみか時に不眠に陷る事あり登山者が頂上近くなりて更に疲勞するも日光の直射主なる原因なれば總て手甲脚絆等のある帽子を用ひて皮膚に日光の直射せざる事肝要なり現今にても行者等が白衣を着し手甲脚絆足袋を用ひ居れるも生理上自然に要求されたるものならん。

▲不時の用意　從來登山者に向つて登山に要する費用は五圓にて充分なりと云へば正直に五圓を持參する人あり右は萬一の時に當りて大に困却する時あるべし敢て多額の費用を持參し行く必要なきも若し山上にて天候激變して降雨暴風等の起りたる時は費用は立處に豫算より超過すべし斯る場合に宿料を費ひて强て風雨の中を下山するものあるは冒險此上もなき事と云ふべし費用若し不足の時は靜かに巡回し來る警官の來るを待ちて事情を述べ父兄より送金方の手續を待つに若かず故に多少の豫備金を携帶するは又忘るべからざる必要條件なり云々因にこの花會員が本年富士登山を見合せて伊勢參宮を爲すべしと記せし事ありしも右は誤聞にて伊勢參宮は先年登山したる人々の儘しにて本年の登山談とは全く別箇の團隊なりと。

## 高層氣象觀測

（野中至氏の意氣込富士觀象臺の新築）

本邦高層氣象觀測者として一生を富士觀象に委ね居れる小石川區原町の野中至氏は疇に夫人千代子の歿父物故したるを以て鄉里福岡に歸省中なりしが漸く忌も明きたりとて二十三日歸京したり。

▲富士觀象臺　野中氏の談に依れば數年前菊池大麓寺尾天文臺長中村氣象臺長等委員となり富士觀象會なるものを組織したるが頓て頂上に一觀測所を建築する筈なりしも未だ科學的の觀念が一般に普及せざる故にや寄附金も極めて少額なる上に建設に要する諸材料を高山の上に運搬するは容易の事にあらず自然經費も少からざれば此に氏は大に鑑みる所あり自から私費を擲つて先づ越年するに足るべきものだけにても新築せんと決意し爾來計畫中なりしも天候の激變常なき事とて工事容易に捗らず一夏に終日作業し得べきは僅か四十日に過ぎずして今日の處落成の豫定も出來ざる次第なれど今明年中には是非落成さする心積りなりと。

▲山上の觀測所　明治二十八年夫人と共に嚴冬の寒氣を凌ぎて觀測せし時に建てたる石室は今尙依然として海拔三千七百七十八米

突の高所に存せり氏の計畫にして成就しなば氣象學上少からざる利益を斯界に呈すべきは云ふまでもなく別宅を裾野に設け一年の大半は此に住みて觀象上に身命を賭し居れり。

▲閑院宮殿下の御成　氏の別宅が御殿場登山口より一里上りたる所にて自然の風光展望に頗る佳なりとて閑院宮殿下は昨年も二三回御立寄りありたるのみか御宿泊あらせられし事あり本年も過日氏に向け御申越ありしも氏は恰も忌中に當り居たるを以て恐れ多しとて御辭退申上げたりと云ふ。

▲この花會の登山　婦女子の團體を以て數年來富士登山を試み常に好成績を得居れるこの花會員は本年も登山する事となり二十五日出發の筈なりしも天候惡しく野中氏より兩三日延期する方宜しからんと通じたれば愈々二十八日を以て御殿場口より登山する筈なるが同會々長野中氏夫人も同行の筈なりしも乳兒ある爲め本年は遺憾ながら見合すべしと右に付き野中氏は同會の爲に盡力せんとて夫人同道二十七日御殿場に向ふべしとなり。

## 淺間山噴煙記

**淺間山の大鳴動**　淺間山は七月四日午前十時五十分大音響を發したり當岩村田町にては戸障子に響きて物凄かりき、震動は北方より南方にせるものゝ如く北側の戸障子は南側の戸障子より一倍强く其響きを感じたり山は折しも密雲の鎖すところとなりて噴烟の狀態を窺ふこと能はざりしが夜間ならば壯觀を極めしなるべし鳴動の變は先頃の大鳴動よりも大なりし被害あらざる樣なり(四日午後岩村田特電)

◎雜　報　淺間山噴煙記

**淺間山鳴動後報**　前報後調査せる所によれば淺間山麓なる小滿村北大井村にも何等の被害なく只大音響を聞きたるのみなりしと云へり本日は登山したるもの一人もなく密雲依然として山の半腹以上を覆ひ居れば山上の樣樣は分らざるも被害はなかるべし(四日午後岩村田電話)(七月五日)

**岩村田の地鳴**　昨日午前十一時五分頃北佐久郡岩村田地方の大地に風聲の如き甚强き音北より南に鳴り響きたるが原因は淺間山なるべしとの報其に筋に達したり(七月五日)

**淺間山の噴煙**　八月十八日午前十時五十分淺間山噴火餘燄殷盛となる、折惡しく蓼天山頂を見る能はざりしも灰白色の噴烟高く雲層を突破して千餘米突に及び積雲狀となり其頂部は中空に展開するを見たり、後次第に左右翼を放ち西方に漂こり一時間餘にして平常に復す。

同月二十日午後二時淺間山噴烟又々激甚となり帆狀をなして西空に棚びき午後四時頃に至り其延長約六里に及べるを見たり、西麓に於て或は降灰せる個處もあるならん(於西麓追書)

**淺間山の噴火二個處に降灰**　八月十八日午前十一時四十分淺間山噴火し、小縣郡(チイサガタグン)滋野村(シノ)大字芝生田(シボウダ)に降灰ありて硫黃の臭氣を發せりと、又北佐久郡本牧村(モトマキ)へも同日午後零時三十分約三十分の降灰ありしと。(以上十八項信濃毎日より轉載として信州且來君報)

**淺嶽の大鳴動**　淺間山は八月廿六日夜より大噴烟あり二十七日は朝來三四回の小鳴動と共に大噴烟あり目下尙盛に噴烟中な

り（二十七日午前十一時發）。

**淺間山再鳴動**（神山群馬縣知事より十三日内務省に左の報告ありたり）七月十一日夜十一時頃より群馬縣吾妻郡長野原町方面に於て淺間山の鳴動を聞き音響は遠雷の如くにして漸次弱くなりしも今尚ほ止まず夜間は僅少の火焔を見たるも雲霧ありて狀況不明なり又東麓一帶に降灰あり約一分の厚さに達せり。

**阿蘇山の噴煙**（熊本）數日前より阿蘇山噴煙し廿六日夜より二十七日朝に亘り最も激しく附近村落へ煙烟彩しく降り地上一面黑色と變じたるが二十七日午後三時頃雷雨ありて洗ひ去られたりとの報其筋に達せり。

**伊國火山活動**伊國ヴエスヴィアス火山は頗る危險となれり（七月十日伯林發）。

**淺間山郵便局**　△毎年七月十一日より九月廿日迄開局せらるべき同郵便局は本年度は特に登山者の便を計り取扱時間を延長せり即ち事務を擴張せり昨年迄は午前六時より午後十時迄なりしも本年よりは午前五時より事務を開始し且書留小包郵便物の引受交付をも取り扱ふ事となりたり。

△七月十一日より開局せられたる、淺間山湯の平郵便局は昨年より餘程便利となれり即ち昨年は小諸郵便局集配人出發の時刻が午前七時四十分なりしを八時三十分となりし前日の最終便の總てを持つて登山せしむる事としたるものにて其日の新聞を頂上にて讀むを得べく午後は四時三十分（元は三時十分）下山の事とし十三日より實行ゆなり。

△七月十一日より開局せられたる淺間山郵便局が同日より二十日迄十日間に於ける引受郵便數は第一種四、二種五百〇二にして交付せしものは通常郵便十二なり登山者總數四百七十二名にして之を各日別にすれば左は如し

| | 登山者 | 天候 | 氣溫 |
|---|---|---|---|
| 十一日 | 二七 | 晴 | 六〇 |
| 十二日 | 二三 | 晴 | 六二 |
| 十三日 | 六四 | 雨 | 六一 |
| 十四日 | 一九 | 晴 | 五八 |
| 十五日 | 一七 | 雨 | 五五 |
| 十六日 | 四六 | 曇 | 五七 |
| 十七日 | 二四 | 雨 | 五六 |
| 十八日 | 五一 | 曇 | 五七 |
| 十九日 | 二八 | 晴 | 五六 |
| 二十日 | 一七三 | 晴 | 六六 |

**草津輕便鐵道**　淺間山の麓沓掛停車場より上州吾妻郡草津溫泉に達するの輕便鐵道會社は滿株拂込濟となりて先づ草津方面より本測量に着手され本年中には小淺間草津間の開通を見明年五月迄には沓掛より全線開通する運なるべし。

**八ヶ岳に降雪**　南佐久郡臼田附近は、五月二十八日夜より、大雨に冷氣加ほりしが、二十九日朝は、八ヶ岳峰續きに、降雪あるを見受けたり。

**八ヶ岳にて凍死**　探險隊の案内者七月十六日諏訪郡四賀村神戸青年會員十九名は、八ヶ岳の絶頂赤ノ岳探檢の爲め登山せんと同郡泉野村字槻木、百瀨勘右衛門（五三）

を案内者として同日未明出發勇みに勇んで登攀せり然るに天候俄然險惡となり登山中止を云ふものありしも、血氣の健兒の事故、遂に七合目迄攀ぢ登り、此邊に於て一夜を明かしたり、翌十七日は前日にも優りて天愈々搔き曇り見る〳〵中に雨となり霧となり加ふるに烈風吹き荒み三尺先は暗憺たりしも、探險隊は勇氣を鼓舞し漸くにして目的の赤ノ岳に至りたり、然るに内二名は遂に人事不省に陷るあり、實に其慘憺目も當てられざる困難に遭遇せり、一方には案内者の百瀨勘右衛門は氣分惡しとて七合目に休息し登山せざりしに、寒氣身に逼りて無慘にも凍死したり。探險隊は案内者の事を訊くことは知らず、いつの間にか歸山せし事と思ひ前の二人を介抱して刈の道より下山したりしも、案内者百瀨の歸りたる樣樣なきより翌十八日捜索隊を派し登山したるに百瀨勘右衛門は、横岳の岩下の松を確かと抱へしまゝ座禪往生を遂げ居たるを發見し大いに驚きて擔ぎ下れりと因に青年會より十五圓の葬式料を勘右衛門の女房に與へたりと。

## 木曾駒ケ岳の山開き

西筑摩郡の駒ケ岳に七月二十一日山開き執行、各小屋主及び神職等數名登山せり。

## 御岳山の登山者

木曾御岳山の登山者は七月七日山開き以來日々五六名位宛なりしも去る二十三日關東の大講四十五名登山せり。

## 御岳山郵便局

七月二十一日より開始したる西筑摩郡御岳局よりは一日一回集配人を往來せしめる由。

◎雜報　木曾駒ケ岳の山開き

## 御岳山銅像建設

東京日本橋區亀井町紙屋商大瀧講社先達白石藤兵衛同市本石町本龍山大瀧講社員小林德次郎兩氏は御岳神社信仰家にて年々歲々登山する由なるが東京美術學校諸氏の手を經て大瀧矜迦羅童子大瀧制吒迦童子大瀧不動尊大權現意波羅天宮日之大權現の六尊體銅像を鑄造し今夏御岳山に建設する事に決定し此程西筑摩郡三瀧村中澤合力總裁を上京せしめ該品輸送方を囑託し去る十日木曾福島町萬屋旅館に到着せしを以て同地の信仰者は盛んに之れが入山式を擧行し其翌日同郡王瀧村松原旅館に轉送せり該費額は送料共約壹萬圓を要せし趣にて同地御岳開山以來未だ曾て見ざる所の大銅像なりと建設者二氏は遠からず登山して盛大なる儀式を擧行する由因に鐵道貨物取扱に係りたる其斤數量は二千七百七十斤にして奈良井驛にて降車し夫より福島町まで荷馬車搭乘福島町よりは數十名にて輸送せし程なりと。

## 英人の燒岳探嶮噴煙黑黃色に變ず

信飛國境に聳ゆる燒岳探嶮の爲め英國陸軍將校レッデ、ガーシヤの兩氏は共に七月十一日登山のため上高地温泉に到り先づ燒岳を探嶮の上鎗ヶ岳、穗高岳等を跋渉する筈なりと、尙上高地よりの通信によれば燒岳は七月上旬より從來滾々たりし黑色の噴烟は黑黃色と變じ頗ふる偉觀を呈し居れりと尙ほ七月二十日頃より數名の外人登山の由にて頻々上高地温泉へ照會し來れりと。

## 悲し峠開鑿の議

南安曇郡安曇村地籍に屬する悲し峠は飛騨に通ずべき最近の通路なるを以て、南安曇郡にては之を開鑿壓道を通ぜんかとの計劃あり目下測量中にありと云ふ。

◎雜　報　慘憺たる燒岳

## 慘憺たる燒岳

信飛國境に聳ゆる燒岳は其後尙ほ噴煙盛にして福田南安曇郡長が兩三日出白骨より上高地溫泉を視察せる際の實驗談を聞くに噴煙は依然猛烈にして附近一帶の生木悉く枯死し其區域次第に擴大し一見慘憺なりと語れり。（六月三十日）

# 會報

## 本會幹事の改撰と新任

本會々務日に繁忙を極めつゝあるを以て、今回幹事改撰に際し、二名の增員を決議し、會則第五條に由り左記十名幹事に撰出せられたり。

河田　默氏
高頭仁兵衛氏
武田久吉氏
高野鷹藏氏
工學士　辻本滿丸氏
（新任）中村清太郎氏
理學士　梅澤親光氏
小島久太氏
（新任）三枝威之介氏
法學士　城數馬氏

## 會員登山報

○辻本滿丸氏は七月十三日東京出發、十四日信州大出に着し、十六日會員三枝、中村兩氏と同道して籠川を溯り扇澤より棒小屋乘越を登り、祖父ヶ岳を越えて鹿島槍ヶ岳を窮め、夫より山脈を逆行し再び祖父ヶ岳を越え、岩小屋澤岳、鳴澤岳、赤澤岳、スバリ岳、針木岳を縱斷し野臥六泊にして廿二日針木峠に着し同日嶺上に一泊、廿三日蓮華岳に登りて又た峠に戻り、他の二氏に別れて大町に下山、廿五日北城村四ッ谷より白馬山に登り白馬、朝日、杓子及鑓の四峯に登り鑓ヶ岳溫泉を經て下山し、三十日歸京せらる、次で九月初旬、日光男體山及太郎山に登られたり。

○豐田金之助、星野爲太郎、服部鎌太郎、加山龍

之助氏等は八月上旬白馬岳に登り南方に縱走して鹿島槍ヶ岳附近に至る、豫定なりしも當時天候惡絕を極めし爲め白馬岳頂に至りしのみにて止むをえず登山を中止せられたり。

○南日重治氏は七月二十六日越中上瀧より水須を經て熊野川緣に野營、二十七日真笠ヶ岳を越えて有峰に到着、二十八日樂師ヶ岳登山(第二回)、二十九日眞川に沿ふて立山溫泉に至り、三十日導者山崎吉次郎を伴ひ同地より奥大日岳を窮めて室堂に一泊、三十一日立山に第二回の登山を行ひて溫泉に歸着、八月一日宇治長次郎を導者として佐良峠を越え越中澤太挽小屋一泊、二日雷雨中に針木峠を越え信州大町到着、三日北城村四ッ谷に至り四日大蓮華山に登り頂上小屋に一泊、五日鑓ヶ岳に登り引き返して蓮華溫泉に下られ六日須澤、七日越中滑川に至り瀧倉岳登山の爲め八、九、十の三日間天候の回復を待ちしも見込なきを以て一旦郷里山室村に歸られ、十九日出發平澤對岸の山女小字東厥村に至り二十日同地よりアブキ谷を登り午後五時瀧倉岳頂上に達し同夜十時アブキ谷の炭燒小屋に一泊、二十一日歸郷せられたり。(本誌本欄參照)。

○山村銳吉氏は九月初旬、日光男體山及太郎山に登られたり。

○岩村圓氏は八月初旬、穗高山及燒岳に登山せられたり。

○佐藤武雄氏は富士山に第五回登山を遂げらる。

○中村清太郎氏は七月五日東京を出發し、信州戸隱山表山及高妻山を窮め、西岳登攀を試みられしも天候不良の爲め中止し、黑姫、飯綱の二山に登り十三日長野に下り、十四日大町に至り、同地より北アルプスの大縱斷を遂行し(別項參照)、其後、信州小諸に滯在し、湯ノ丸、籠ノ塔赤ゾレ及び三尾根を窮め、九月中旬歸京せらる。

○三枝威之介、中村清太郎兩氏は辻本氏と共に七月十六日信州大出より導者及人夫として遠山兵三郎、同龜治、大西又吉、仁科春吉、宮田榮吉の五名を伴ひ籠川を溯り同夜は扇澤なる奥小澤のドウに野營、十七日强雨の爲め同上滯在、十八日扇澤源流の雪溪を登りて信越國界なる棒小屋乘越に達

し、祖父ヶ岳を越えて冷澤（ツメタザワ）の頭なる山嶺の鞍部に一泊、十九日鹿島槍ヶ岳に登り前日の行路を逆行して棒小屋乘越に宿泊、二十日國境山脈縱斷を繼續し、岩小屋澤岳を越え新越乘越に一泊、二十一日鳴澤岳及赤澤岳を越えスバリ乘越に一泊、二十二日大スバリ岳、小スバリ岳、針木岳を越え針木峠上に一泊、二十三日蓮華岳を窮め、針木峠に戻り、針木澤を下りて黑部川岸のダイラに一泊（辻本氏は龜治、榮吉の二人を率いて針木峠より大町に下山す）、二十四日同上滯在、二十五日佐良峠に登り五色ヶ原の高原を横斷し名稱分明ならざる一高峯を越え一泊、二十六日又南走してこれも名稱不明の一高峯を縱斷して馬鞍狀をなせる尾根の頂上に野營二十七日一峯を越え藥師連嶺にかゝり栂山三角點下に野營廿八日岩井谷の頭及藥師岳を縱走して藥師峠の一端に野營二十九日少しく前進して上ノ岳麓に一泊（食糧買入の爲眞川に下りしが故なり）三十日上ノ岳に上り山稜を東南走してアカキ岳の二峰を越え黑部五郎岳麓に野營三十一日黑部五郎岳に登り蓮華岳に達し同山頂に一泊八月一日風雨の爲め滯在二日雨中を双六岳を經て鎌尾根を南走し槍ヶ岳を越えて坊主小屋下に野營三日上高地に出で、越えて五日辻村氏と共に霞澤岳を極められたり。

○辻村伊助氏は、七月下旬信州白馬岳へ登られ、大町より高瀨川を溯り、水俣谷に入りて、赤澤岳及び槍ヶ岳の間に出で、上高地に下り、霞澤岳に登らる。

○大槻禎郎氏は、八月初旬上高地溫泉に到り、硫黃岳及び槍ヶ岳に登らる。

○吉岡華堂氏は、上高地に赴き、轉じて八月九日越中立山に登らる。

○石崎光瑤氏は、八月初めより、上高地に十三日間滯在せられ、繪畫及び寫眞の製作に從はれたり。

○伊藤巖氏は、七月下旬槍ヶ岳に登らる。

○子爵田中阿歌麿氏は、七月信州大町に向はれ、青木、本崎、中綱諸湖を調査せらる。

○吉田孫四郎氏、及びニー、イー、ウニッブ氏は共に、越中立山に登らる。

○木村鑛吉氏は、八月三日東京を發し、富士山を須

山口より登りて吉田に下り、八日上高地温泉に到り、滯留十餘日、霞澤岳、硫黄岳、槍ヶ岳に登り、二十八日歸京せらる。

○立田鐵二氏は、七月二十五六の兩日に槍ヶ岳に登り、二十七日硫黄岳に登らる。

○加山龍之助氏は、八月上旬白馬岳に登られ、越中に到らんとせられしも、風雨のため果さず、一旦四谷に戻られ、十二日第二回白馬岳を登りしも、又風雨のために妨げられて十六日下山し、轉じて二十日甲州臺ヶ原より、甲斐駒ヶ岳に登りて、歸らる。

○山本德三郎氏は、目下入營中なるが、八月二十一日野砲兵第八聯隊第二中隊有志登山隊に加はり、百澤村を經て、津輕富士なる岩木山に登られたり。

○榎谷徹藏氏は、再び信州駒ヶ岳を窮められ、和合岳に廻り、行者岳、三ノ澤岳の位置を明かにせられ、更に北方に轉じて、白馬岳の絶巓を極め、こゝより南望せる三十餘座の大山岳を、殘る隈なくスケッチに收められ、一たび四屋に下りて、更に大黑岳、五龍岳、唐松、八方諸岳を窮められる。

○山田倫氏は、八月八日乘鞍岳に登られ、一泊、九日風雨のため平湯温泉に下られ、二泊し、十一日阿房峠を越えて、硫黄岳に登られしが、風雨のため、槍ヶ岳穗高登山の豫定を變じ、蒲田に下りて、一泊、十二日飛驒高山に歸らる。

○笠井高三郎氏は、八月一日より四日までの間に、鄕里伊豫の石堂山を跋渉されたり、石堂山は美馬郡半田郡半田奥山と、祖谷の境にある連嶺にして、最高點矢筈山は、一千八百四十八米突に達すといふ、同氏の通信は前項に載せたり。

○今村巳之助氏は、七月下旬上州古峯ヶ原より細尾峠へ出で、幸湖東岸に到り、湯出に入り、第四回の白根山登山を遂げられたり。

○冠松次郎氏は、七月下旬信州中房温泉より、大天井岳常念岳を登られ、二俣溪流に沿ひて、槍ヶ岳に登られ、上高地に下られたり。

○河田默氏は、信州上高地温泉に遊ばれたり。

○大北聰彦氏は、八月中旬信州上高地に到り、硫黄岳、霞澤岳を登り、飛驒平湯に到り、乘鞍岳に登

らる。

○吉澤庄作氏は、八月二十四日黒部川上流に溯り、祖母谷温泉より大黒銅山に出で、餓鬼岳の上流五龍山（？海拔八、二〇〇〇尺）へ登攀せられ、此方面の地形を明かにして、劒山、立山より、針木、鹿島、鑓岳、白馬、清水の北アルプスを全部カビネ五枚續きに撮影せられたりといふ。

○中島清氏は、七月五日　日光白根山、及び男體山に登らる。

○石谷讓二、關谷泰二氏は、菅沼方面より、日光白根山に登らる。

○榎谷徹藏氏は、八月十二日木曾上松より駒岳第二回登山を試み、玉窪小舍に泊ること四晩、山中の各所を探りて、再び上松に下り、直ちに北城を指し、二十日四屋より白馬岳に登り、二十四日四屋より大黒岳を越えて大黒鑛山に入り、二十五日五龍岳を窮め、二十六日唐松岳・八方岳を踏査せらる、此行寫生・スケッチ併せて七十九個を作られたりと。

○大平晟氏は、五月二十九日、小諸口より信州淺間山に登らる。

○大平晟、吉澤與三松二氏は、八月二十二、三の兩日越後七ッ釜より苗場山に登られ、三俣に降らる。

○嶋峰徹氏は、八月二十九日獨逸アルプスのリーゼンゲビルゲ（標高約一萬尺）に登らる。

○谷口源藏氏は、九月二十四、二十五の兩日に、阿蘇山に第五回登山を試みられたり、同氏に依れば舊火口及び三十九年の新火口は、今は僅に餘喘を保てるのみ、新に古き第二、第四火口より盛に噴氣しつゝあり、殊に第二火口の分は、本年八月の新爆發にして、孔底一面に熱湯の沸騰せるを見るとの。

○新野亮太郎氏は、本年五月中、越後の金倉山及び米山に登られ、八月八日小諸口より信州淺間山に、十一日上州子持山に、十五日榛名富士へ登られ、清水越えを踏えて、郷里越後に歸らる。

○本會幹事高頭仁兵衛、小島久太、高野鷹藏、の三氏は、槍ヶ岳を起點として、飛騨山脈一部縱走の目的を以て八月二十四日出發、松本、島々を經て二十五日上高地に着、嘉門治を導者として人夫八名に米、味噌其他食料寫眞器、防寒具等約七十貫の

荷物を具して、二十六日朝上高地を發し、槍ヶ岳に向ふ、途中二股の堂に於て、會員立田鐵次氏の槍ヶ岳より下山し來らるゝに會ひ、赤澤の小屋に同志の士の既に泊れるを知れり、横尾の邊にて小島氏、手帳を流失す、同行一同遺憾の極みなり、赤澤の小屋に五時着、先宿の士は會員冠松次郎氏の天井より二股を下り、明日槍ヶ岳に登山せんとせらるゝなり、夜中雨降り、前途を思へば憂色なき能はず。

廿七日朝赤澤の小屋を發す、横尾の邊より積雪ありて、殺生小屋の邊迄續く、途中一夜雨を共にせる、冠君と別れて、吾等は槍の乘越より、雲漠漠として、はてしも知らぬ彼方に延々たる鎌尾根に下る、漸くにしてセンベイ坂の下に好適せる露營地を見出して一泊す。

廿八日昧爽雲晴れて、展望佳なり、センベイ坂三角點下に直立して、四方を展望するに、遠く白馬の連峰より西白山、を望み見る可し、南は槍ヶ岳の大障壁に隱れて見ず、脚下高瀬川の溪谷は雲游々として見えず、吾等の行くべき道筋は、曲折目前に展開す、一上一下時に雪田を下り時に花園を登る、双六池の畔、萬籟聲なきの所、吾が影を宿して亦山中の客たるを知れり、蓮華岳に至るの頃雷雨至りて、方向を失ひ甚だしく困難せり、幸にして晴れ、黑部乘越に至りて泊る。

廿九日鷲羽に登り北行黑岳に至る、黑岳に至るの前赤岳の邊にて高野一種の蝶を發見す、歸來其天籍を採り Oeneis jutta Hbn.（タカネヒカゲ）なるを知れり、日本產高山蝶に一新種を加へたるなり。雲の平に降り祖父谷を降下して、黑部川を下り、藥師の堂に至りて泊る。

三十日、藥師岳に登り、一行有峰に泊る。

三十一日有峰より飛驒國に入り洞より舟津に泊る。

八月一日高山に入り一行別る。

○會員貴島憲氏は、八月中霧島、阿蘇及び英彦山に登られたり。

○鵜殿正雄氏は山邊好一氏と共に導者一名を雇ひ九月二十八日信州上伊那郡美和村赤河原より藪川を經て仙丈岳八合目に到り風雨のため北澤の小林

事務所に引返されしも翌二十九日仙丈の絶巓に登られ大仙丈澤を下りて小仙丈の小林事務所に一泊三十日の雨天に野呂川を下りて廣河原小舍に一泊十月二日小雨を冒して白峰北岳の絶巓に攀ぢ降雪に遇ひて下山廣河原に一泊三日蘆安温泉に下り一泊翌四日杖立より地藏岳鳳凰山を踏破し富士及び白峰赤石諸山脈に大降雪ありたるを望見して下山せらる。

○青木忠次郎氏は八月中雨中木曾御嶽に第二回の登山を遂げられたり。

○加賀正太郎氏は歐洲アルプスに遊ばれ八月下旬四千百米突餘のユングフラウ山を登攀せられマタアホーン山の裾を半周して同名の氷河を下り二十六日夜はアルプス直下の寒村ブレウイルに泊しアオスタの溪谷に遊ばれセント、ベルナアド峠を越えて瑞西に入られたり。

○會員 B. C. Bowden 氏は中津より御嶽に登られたり。

◎會　報　書柬及びハガキ

## 書柬及びハガキ

▲鵜殿生に御答へ申上候、　御質問の如く、光禪寺岳とせしたるは、空木ヶ岳に相違なく、空木ヶ岳を見たる時、篠田老人に聞きたるに、光禪寺岳と答へられたるまゝ、出所も記さず、直に光禪寺岳と書きたる次第に候間、こゝに記して、鵜殿生の厚意を謝し候。

又前號のものとは相異りたる事に候が、紀念號第三頁十六行に『馬攻馬場は東と西に廣く云々』とあるは北と南に長く、(東西にもひろがり居るも北と南とに比してせまく)の誤りに付き、こゝに正誤仕り候也、以上。　(久留島徵一)

▲八月一日より四日間にて、齋家脇龜太郎氏と共に、石堂山を登山探險仕候、石堂山は、美馬郡中田奥山と祖谷との境にある山にて、權現を祀りあり、土俗稱して石堂サンと申し居候。

石堂山の峰續きなる矢筈山鼎笠山等には、石堂權現に酷せる小祠を所々に祀りあり候、其故に此山脈を總稱して、石堂山とも申すべく候、最高の矢筈山は、標高1667.3米(五萬分の一)にて、伊豫土佐の境なる笹ヶ峯(日本山岳志中の篠山1680米同山ならん?)の1630.49米に次いで、日本の結晶片岩中、最高の山ならんと存じ居り候、阿波國に於て登るべき山二つを選み申さば、劍山とこの山ならんと存じ候。

以下少しく小生の經路及び旅中興味ありし事、目新らしく感ぜし事等を、申し上げ候。小生は前堂に宿し、翌日八時頃より案内者を連れて山の尾を西へ段々登り候、其邊はブナ叢林にて、頗る趣き深く候、而し森林の幽邃美は、多少繪の分る人ならでは、充

分に其趣味を解し得ざるかも知れずと存じ居り候、それより登るに從ひて、樹皮の茶白色なるダケカンバが次第に澤山現れ候、樹幹枝の具合等、櫻々酷似致し居り候につき、土俗はモウカザクラと呼び居り候、又此木を以て、椀等を製造する由にて候、九時半頃石堂權現の本體なる、御塔石に着し候、此石は其形一寸標名の九十九折岩と相類し土俗の崇拜する處にて候、此處より奥は殆ど人跡未到の地にて、路もあるかなきかの如くにて候、クカイサウ、ヤマブキショウマ、梅鉢草、フウロサウの一種等、岩邊に滿開致し御花畑の樣にて候、御塔石より少しく行きて、水のある處にて、辨當を食し、それより矢筈山に進み候、この山の頂には、三角點と矢筈石これあり候、地質調査書の二十萬高知圖幅に矢筈山(1512米)とあるは、石堂山の誤り同じく黑笠山(1357米)とあるは矢筈山の誤りなるを確め候、そこより東進して、羅棚の大斷崖を經て、瓢箪山に進し候、此山を矢ノ峰、又は東ヨボシと申す者もこれあり、どれが正しきか不明にて候、瓢箪山の附近は、草原にてダケカンバが處々に樹立致し、丁度奈良の鹿草山の樣にて候、猶黑笠山まで進む考にて候處、時間等の部合にて、此處より前堂に引き歸す事と致し、午後二時下山し始め候、此邊にはダケカンバの純林にて、知何にも風致よろしく候、四國には白樺は之れなく候へども、このダケカンバの美は、必ずしも白樺のそれに劣らじと存じ候、劍山にも二回登攀致し候ひしが、ダケカンバは、殆ど氣付かざる程にて候間、小生の知れる範圍内にては、阿波國にて、ダケカンバの森林美を味はんとすれば、この山に登らざるべからずと存じ候、それより少雨を侵して、闇鬱なる大森林中の急坂を遮二無二に走り下りて、片側谷(宛字)に出で、其處にて氷の如き水にて行を致し、石の小屋の小村を上りて、四時半頃前堂に着歸致し候、ウエストン氏は日本アルプス中の山民の生活を十九世紀のそれよりも寧ろ九世紀のそれに似たりとか、申したる樣に記憶仕り居候が、この石ノ小屋は、僅に七八の人家が、山中の別世界に隔離致し居る事とて、却つて紀元前九世紀の生活狀態を現じ居ると申すべく、人類學の標本にでも成るべしと存じ候。(笠井高三郎)

△小生事去月上旬、男體と白根に登り申し候、十二分に知れわたりたる由に候へば、況して山岳に關する知識極めて乏しき小生の、今更兎や角書き述べむ必要も無之ものから、小生一身にとりては、頗るおもしろき旅行に候ひき。

三日午前、華嚴の瀑に、小なりとも純に、弱かりけむと雖濁らざりけむ藤村君の靈を吊ひ『死』の莊嚴を想ひ、依て以て警見したる『生』の更に更に莊嚴なるに打たれ申候。男體にては四分の三の休憩所より、雨至り、晩望は全く斷念仕り候が、頂上に及んでは、大雷雨にて、電亦至り、紫電閃々、疾風矢の如しで、多少危險にも候ひしが、避けんとて避けうべき場合に候はれば、神妙にも此の大自然の洗禮を受けつゝ、岩鏡の餘り美しく咲き匂ひたれば

氷雨降り雷電裂くる二荒の　峯の絶頂に岩鏡採る

づぶ濡れになりて、中宮祠の宿に歸りたるは午後七時頃に候ひき。(案内者小杉初五郎)—あはれ岩鏡は、東京の暖地には適せずして、今は我庭に見るかげもなく枯成候。

白根には五日午前七時湯本の宿屋を出で、白根澤にて農科大學生二名、及びその案内者と一緒になり、小生の案内者とも合せて

一行五名、正午奥白根に着致候、去年こゝに登られたる會員今村氏の名刺を、頂の小祠堂より、我が案内者たる福田勝次取りいだし、小生に紹介致し候、かゝる所にて、名刺だけにもせよ同好の我が會員に面會するを得たるは、嬉しき事に候。小生も同じく會員の肩書をして、一葉を納め置き候、今日は雨は降らざりしも、晴天にてはなく、眺望は充分なるを得ず候ひき。佛池を下に望む分峰にて、突然一匹の小兎飛び出し、こは面白しと大學生の平井君と、余の案内者と、余と三人にて、岩石の下に追ひつめ、小生雖なく之を生擒するを得たるは、愉快に候ひき、一同に示したる後、間もなく放ちやり候。歸路は植物採取にて候。

右おくれ馳せ乍ら、たゞ大畧御注進まで。此の次に暇をえば、前人未踏の高山深谷を探檢致し、少しは中を利かし度きものと、痩せ我慢を致し居り候、御一笑、頓首　（東京　中島　清）

▲山岳第五年第一號所載、上山六助氏撮影「槍ヶ岳の北東望」なる圖は、左右あべこべに御座候、又同頁の「鷲羽岳より常念岳を望む」なる圖は、槍ヶ岳坊主小舍附近より、赤の岳を超えて、常念岳を見たる處に、酷似し居れども、如何なるものに御座候や、御調査の上、御訂正を望む次第に御座候。

かくの如き事は、小生如き者が、かれこれ申すは潛越の沙汰なれ共、これも「山岳」の完備を望むのあまりに出でたる事と御見のがし被下度候。　（岐阜縣　伊藤　巖）

▲御約束申上候レーニア登山記、忙がしきまゝ、一日と延び、二日遲れ、誠に申譯無之候實は先月末風邪位ひと、別に氣にも止めざりしが過りにてデッドボール（ミカドといふチームを作り毎日曜日白人チームと仕合致し居り候）を頂載したる左の胸部に熱を持ち候、なれど、昨日けふと日に增し、人間らしく元氣も相出で候、この分ならば全快の期も遠からぬよし、醫師も申されし故、原稿をぼつ〳〵書き始め候、右讃の次第故、延引の段は幾重にも御用捨あらまほしく候。

自分はとても、この夏登山などは出來ねども、誰れかに自分の意志を遂行させ度いと考へ、遂に別紙新聞切抜きの通り、旭新聞社を勸めて、第一回登山隊を募集いたさせ候、一行は大凡十五六人も有之べきか、この第一回に成功すれば、來年は大々的に第二回を行うよし、社長先生大いに力瘤を入れ居り候、これによりて在留同胞に登山趣味を廣め度くと存し居り候。

第一回登山隊は、來る九日當地發に候まゝ、其結果は追つて御通知いたすべく候。　（米國オレゴン遠藤章二）

『レニア登山隊募集　富士登山は、故國盛夏の候に於ける壯擧にして老若男女の別なく、擧つて此擧を敢てしつゝあるに拘らず、當地在留の同胞が、朝夕レニアの秀峯を仰視して、未だ登山の快擧を試みざるは本社の窮に遺憾とする處、本夏多年の有望を果たさんことを企圖し洽く同胞の同行希望者を募集す。

發起者　旭新聞　賛成者　天野末吉　同伊藤德五郎

○注意　八月九日午前八時タコマイースタン鐵道停車場に集合の事、少くとも旅費貳拾弗用意の事、服裝は各自に用意すべき事。

一、登山の際他の助力を期待すべからざる事。

一、同行希望者は出發當日迄衛生に注意し喫烟飲酒を愼み殊に徒歩の練習をなすべき事。』

# 靈仁耶登山の計畫

○日數と費用　廣告にあるが如く一同勢揃ひをなして愈々登山の第一歩を踏むべき日は來月九日にして一同は同日午前八時タコマイースタン停車場に集合して出發し其翌々十一日を以て歸市するものにして都合三日間の旅程なるが此の行の費用と服裝其他の準備費を除き一人少くも貳拾弗を要すべき豫算なり。

○三日の行程　第一日八月九日午前八時タコマを發して同十一時頃アッシフォードに着し、午後一時半頃ロングマイアースプリングに達し夫れより徒歩にて七哩を歩きキャンプ、ガヴ、ゼ、グラウドにて一泊。

第二日　午前二時キャンプを發して正午頃絶頂に達し悠々長躰して午後四時頃キャンプに歸り一泊。

第三日　午前八時キャンプを發し前日の道路を引返して歸市。

行程大畧は如上の通りなるが今少しく詳述すればタコマイースタン鐵道にて六十哩を走りてアッシホートに達し夫れよりステージにて更らに十四哩を行きてロングマイナースプリングに着、此の處より宿泊すべきキャンプ、ガヴ、ゼ、クラウドまでは七哩にして徒歩すべきものなるが馬を雇へば其賃金三弗を要求せらるべし故に馬を雇はんとするものはロングマイナースプリングにて雇入るべく同所には二軒の宿屋ありて案内者の需めにも應ずべし。

○登山の用意　服裝は嚴寒に耐ゆべきものならざる可からざれば可成毛織物を撰ぶべく殊に靴下は厚毛織物ならざるべからず而して決して忘却すべからざるものは黑眼鏡、革製手套、グリースペイントロープ一卷、アルペンステック(登山杖)にして黑眼鏡は貳拾五仙位の黑過ぎざるものにて宜敷く、グリースペイントは雪やけを防ぐために必要の藥品にして何れの藥舗にもあり登山杖は一本壹弗貳拾五仙にして南第一街のシアトルハードウエーヤー商會に販賣し居れり而して尙可成輕きキャップ脚袢、毛織アンダー物及び毛織の極めて厚きモンキーシャツ又はカバーシャツを用意すべく靴は輕きものを撰びハーフソールを打ち裏面にチールを打附べく之れにて準備整ふものなるが登山希望者は廣告にもあるが如く。

○身體の練磨　前以て身體の鍛練をなし殊に兩脚を健全ならしむるの運動を行ひ一切他人の助力を仰がざる心得ならざるべからずされば平常壯健ならざる者は例令意氣のみ壯なりとも他の同行者に迷惑を懸くるの恐れもあるべければ思留まるを得策なるべし。

（旭新聞切拔）

△拜啓去る十五日小暮より赤城山に上り候、翌日は地蔵に上り十七日大胡に下山致し候それより夜行にて赤倉溫泉に參り本日雨を冒して妙高山に上り候途中、天狗の堂あたりより所々に雪を見、頂上に達し候頃は幸ひ雨は止みて撮影に差支へなかりしはうれしき次第に候、積雪は一二寸にて峰を斑らに飾り氣溫は三十九度を示し候（十月十九日赤倉にて加山龍之助）

△拜啓小生負傷に付御見舞にあづかり深く御禮申上候、御書狀家兄より回送只今拜讀仕り候。

國民新聞記載の記事は小生より家兄に送りし度

度の端書を根據とし尚記者勝手の形容詞を加へしものと思はれ候。

扨落雷當時の模樣を御通知いたす前に此度の登山の通知を致すべく候。

八月五日　東京出發……中央線……松本一泊
六　日　上高地着　日々雨天にて滯在
十　日　雨を冒して燒岳に登る僅かにして絶頂に到着する能はずして歸へる
十一日　再び登山頂に達す
十二日　霞澤岳登山頂に達す
十三日　穗高岳に登り始め雨に逢ふて引返す
十四日　雨
十五日　阿房嶺を越へて平湯に達す

かくて乘鞍岳登山仕り候

山岳會には不必要なる處も有之事と存じ候へども先づ平湯出發より書き始めるべく候。

十五日平湯村山清十郎方投宿早速主人を呼び明日終日晴天ならば登山若し午後に至り曇或は雨となる樣子ならば登山せずして高山に赴くと相談をいたして床につき申候。十六日天曇る當日の案内者村山清十郎が頓て晴天となると言ふより六時頃平湯出發（小生上高地滯在中時計を破損せしより時刻に關して確と報導致兼候）かくて四ッケ岳の一峰？に達せし頃天は已に曇り凍死者のありし峯に達せし頃四方雲霧に閉され室堂に着せし時は既に雨降にて暫時休憩致候時に十一時頃と思ひ候ひしが其後負傷致してより夜に入る迄の時間を考ふれば此時は已に正午を過ぎ居りしやも知れず候もと小生は乘鞍に登らば平湯へは戻らずして野麥に下山する計畫なりしより携帶品全部を持來りしが此雨と霧の爲に山頂にて別るゝ定めの案内者が單身下山する小生に向つて大體の方向を敎ゆる事困難なりといふより茲に再び平湯に下る事とし所持品全部を室堂に置き唯雨具のみ着して最高絶巔に向ひ候此時當は頻りに頭上近く鳴り響き居り候小生は一時危險なりと思ひ候ひしも案内者が平氣に登り行くよりかゝる場合には度々遭遇するものにて左程危險にも非ざるものならんと考へ小生も亦平然と後に續き候かくて絶頂に達し候案内者は破損せる三角標及び三角標と小祠との中間に井戸大

の穴（其時は既に岩石にて埋めありし）を指して是等は度々の落雷にてかくなりしものなりと小生に教へ共に小祠に參拜し尙依然彼は拜し居りし間小生は拜し終つて彼と一間程隔たりて煙草を喫しつゝ立ち居りしがそれなり何事も知らず彼の言に依るに一大音響と共に蹲踞して拜しつゝありし彼は驚愕の餘り横さまに倒れ其瞬間に小生の發砲に（ピストル）因りて誤まつて射られしものと思ひしが身に何等の痛みなきより小生を顧みしに小生が其場に斃れ居りしかば自らと傷つけしと思ひさてピストルは下の室堂に置きし故雷管の破裂か若しくは誰か爆發物を其場に置きしものかとあたりの石を取り除けしも左樣の物は在らず小生の身體は何處にも出血なく顏色已に變じ呼吸止まり居りしより彼は已むなくゴザを覆ひ石を乘せて一先づ下山し警察署及役場と相談の上死體を運ばんと思ひしかども一度何とかして蘇生するものならばと思ひ返し神は人を救ふ者と聞くに何故人を殺したかと心中に思ひ『乘馬さーん御客樣を助け給へ』と神を叱して小生の背を打ち腹部を抑へしに小生はアッ〳〵〳〵と息をふきかへしたとの事に候彼は尙落雷の爲めなる事は知らず小生は無論のこと而して小生は先年凍死者を出したる事あるより小生も今や凍死せんとしつゝある（但し寒氣を覺ゆる程にも非ず）等と思ひ居り候此時身は岩石に凭れ睡氣催し口中苦く頻りに純白（泡の細きに因るべし）の唾を吐き雷に打たるゝ前の事柄も殆んど忘れ口自由にならずして言語を發するに稍々困難に彼の言葉も亦明かに聞き取れず彼がピストル云々（ピストルで負傷したのかと尋ねしならん）と言ふを聞き小生は『ピストルを何處に忘れてきた』と尋ねしと思ひ我が心中に『多分山頂へでも置き忘れた（下山の途中中腹にて凍死しかゝつたものと思ひつゝありしなり）のだらうしかし命さへ助かればよい』と思ひピストルの事につきては彼に答へしか答へざりしか確と覺えず候其他彼と小生との間に會話が有しか無かりしかも確とは覺えず候唯小生は彼に向つて如何にもして己を助けよと申し候いざ立たんとせしに兩脚しびれて立つ事能はず彼れに負れて下り候『あの彎の權現の池は覺えがありますか』と言はれて『あの彎に見た池だな』と小生が答へしといふ其れも今は覺え

す候五十に餘る老爺が十七貫の小生を負ふ事とて室堂までには數回休憩いたせし由なるが唯一度のみ覺へ居り候。

負傷部は前額部に斑點（最も輕く斑點部のみ痛むのみ）負傷後五日位にて跡もなく全治す

左足向ふズネに斑點

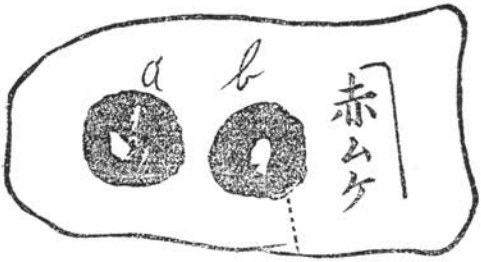
恰も種痘の時の傷の如し僅かに出血あり擦りむきし位の痛みなれども是が爲めに右脚歩行に堪へず其後日々快方に向ひ十數日にして全く歩行に不自由なし傷跡未だ存す

左臀部燒ケド

2のbは廿五日頃全治aは本日繃帶1の傷は普通

の傷よりも療治するに痛み少なく2の傷は○位の細小となりし時と雖も少し強く觸るゝ時は痛み烈しく腦貧血を起すの氣味あり。

右脚は其後傷の痛み殆んど無く筋肉を釣る爲めに歩行困難にして左脚は筋肉の伸張に翼常なく痛みによりて歩行に困難となれり




向ズネの傷と同じく面かも其より傷深し

室堂に着して彼は假松の枯枝を切り來りて澤山の薪を

寶物大作り水筒に水を汲み來り候此時小生は元氣恢復致し居り候彼は何時迄附き



添い居たりとて致し方なければ之より直ちに下山早速人夫募集直ちに迎へに來る考へなるも今より下山せば明日早朝ならでは來る能はざれば其時迄辛抱せられよと告げて彼は下山の途に就き申し候火を焚きて暖をとり居り候へ共室堂所々破壞して雨漏り夜中は甚だしく冷氣を感じ申し候但し衣は冬襯衣二枚夏襯衣一枚夏服及彼の上衣(ハッピ)を着し居り候

傷の痛みはやけどの痛みと同じく面して甚だしくは無之候。

右足は殆んど痛みあらざりしも甚だしく脹れあがり居り候彼は夜の九時頃平湯に着人夫七名は同十時半頃風雨を冒して平湯出發清十郎氏の令息、

清二郎、鶴吉及平瀬清助、田中初之助、上田長藏、中本長之助、早川由藏、風雨の爲め提灯浸れて消ゆるよりやむなく鑛山に休憩夜の明くるを待ちて出發即ち十七日午前八時頃室堂へ來り候茲に初めて食物を供給され少休の後いざ小生を負ふて出發せんといふ事になり小生室を出でゝ歩みを試みしに僅かに歩行し得るより行ける處まで行かんと杖に縋りて歩み候四ツヶ岳附近にて岡田茂太郎村山龜二郎の二人迎ひに來り候かくて長時間を要して鑛山まで歩み之より負はれて午後三四時頃平湯に到着二十二日迄平湯温泉に湯治いたし不十分ながら歩行の出來得る樣になりしより二十二日平湯出發漸くにして五里の道を七時間を費やして長岡に着一泊其夜發熱甚だしく二十三日歩行頗る困難人を船津に遣はし車を呼び寄せ午後長倉出發車上傷甚だしく痛む船津に着柿下に投宿直ちに醫士にかかり二十六日臀部の直接觸れざる樣にして十四里を俥にて富山に出で醫士の診察を受けて二十七日富山驛發汽車にて二十八日鄕里松坂に着幸ひ家兄醫を業とす依つて自宅療養中に候全治迄には尙二週間程要すべく候臀部負傷の爲めに腰を据へる事能はず拙劣なる文字が一層拙劣に相成申し候加ふるに亂筆の處は幾重にも御容赦被下度候先は御返報迄（九月三日大北聰彦）

◎會報　書東及ハガキ

▲拜呈、本年度登山を報告す。

五月中金倉山（二、二一四）と米山（三、二一八）へ登り候、どちらも越後の山に候。

八月中　月の八日淺間山へ信州小諸より、同十一日上毛子持山へ野馬郡長尾村大字鯉澤より、同十五日榛名富士へ攀じ申候。

右の内、子持山丈は、山岳誌に記載無之、去る九日喰片貝大平村長方にて、高頭氏に會ひ語り候處、該山は二千尺内外と申され生も同感に候。

八月中十八日間を費し、漸く右の三山丈しか果さず、是れは空前の洪水に出會して、彼方此方滯留（伊香保へ一週間鯉澤に五日間）無餘義次第、雌子持の奥峰、獅子巖頭を冒して、關八州の濁海を展望したるは本年中の一大偉觀、其他踏路清水の峽嶺を越えて、歸國したるがせめての見聞に候。

鯉澤滯在中。利根一帶出水のため、時ならぬ鮎を飽食したるは、饒倖の至りと存じ候。

やまめ、かじか、中々大なるが、流れ申候。また清水を越えて。越後魚津河岸、八海山西麓の客舍（三國街道の一驛六日町と申す）にて、名物の初鮭を膳部に備へたるは、身に餘る光榮と、折柄の明

◎會　報　會員訃報

月に採る重れ候、之れは八月二十二日夜の事に候。蛇足偏に御免被下度候。（九月二十七日新野亮太郎）

## 會員訃報

### 小泉和雄氏

會員小泉和雄氏は、八月二十一日病を以て逝去せられたり、氏は武州神奈川の豪家、小泉長左衞門氏の令弟、資性温順君子の風あり、平生植物研究に志を有せられ、斯道の實驗造詣淺からず、日本博物學同志會の一員として、その機關雜誌『博物之友』に「植物見聞錄」「洋種植物」「花籠」「箱根の植物」「初夏の赤城山」等の述作を載せられ、時に同會の講壇に立たれたることありき。就中箱根山は、氏が最も愛好せられたる山岳なりしが如し、神奈川の名園、千草園は、氏が嘗て病痾を養ふ旁ら、初めて經營せられたるものに係わる、享年二十六。

### 梅村宇皎氏

八月十一日東京附近を荒らしたる暴風雨は、麴町永田町山王山なる、某氏邸宅の崖を崩壞して、崖下に住居せる會員梅村宇皎氏宅を壓し、夜半一時といふに、梅村氏は悲慘なる死を遂げられたり。氏は敬虔摯實なる佛教徒にして、雜誌『新佛教』を編輯せられ、多年この教へのために健鬪せらるゝより、身邊多くの崇拜者に圍繞せられたりといふ、氏別に俳句の嗜みあり、氏の逝去せらるゝや、『東京朝日』記者は、紙上に氏の肖像を載せ、功業を錄して、この未來多き青年宗教家の非業の死を哭せり。享年二十八。

### 大北聰彦氏の奇禍

會員大北聰彦氏は、八月十六日飛騨平湯温泉を發して、乘鞍岳に登攀せられたるが、山上にて疾雷の襲ふところとなり、人事不省となり、且つ前額右膝關節臀部に重傷を被りて昏絶せられたるが、同伴の導者に介抱せられて、幸ひに平湯に下るを得、暫く傷を養うて後、郷里伊豫松阪に歸り、靜養せらる、新聞『國民』の報するところ左の如し。

十五日に上高地を出發し十六日に平湯主人の案内で乘鞍岳に登り峻嶒を攀ぢて三里餘も進んだ所で突如として激しく雷鳴が起つた兩人は荷物を其處へ捨てゝ又兩峰を超え勇を鼓し最高峰に向た

折しもあれ雷鳴は益物凄く鳴響いて閃く紫電の爲に目を開くるとが出來ぬけれでも最高峯に上り詰めて案内した主人が小さな祠に參拜する間聰彦は悠然として煙草を喫ひ乍ら休息して居ると此時雷は一聲高く強く鳴り亘ると共に轟然耳を劈ざく音物凄く聰彦の上に落雷し氏は夫れに擊たれて其儘人事不省に陷り前後を覺ねず斃れて了つた後で主人の話によると主人は突然非常な音響がしたので自分も其處へ倒れたが其瞬間聰彦が誤つて短銃で自分を射た物と思つて聰彦の方を見ると聰彦は岩上に倒れて人事不省となり紫黑色の雲が一杯に其の上を匿つて居る直に駈け寄つて抱き起すと聰彦は顏色が紫色に變じ呼吸が止つて居るので大急ぎで背を打ち腹を抑へ高聲に呼んだので始めて息を吹き返した聰彦氏自身では全く寒氣の爲め凍死したものと感じて居つた相で尤も此處では四年前三人まで冒險者が凍死したのである。主人は傷者を負ふて室堂に運び薪を拾つて火を拵らへ溫めた上正氣が付いたのを見て大急ぎで下山して人夫を雇ふて翌朝室堂迄來た午後二時から翌朝八時迄一睡一食もせず大火傷と疲勞と饑餓、寒氣とに戰ひ横に寢た儘薪を片手で火中に投じ僅かに暖を取つて居た翌朝八時になると人夫七人中途で又二人出迎へに來たので漸く九人で峻嶮を下り午後二時頃平湯迄着くと見物人は山路を圍んで群集して居た雷に打たれた所は前額右膝關節脛部等で重傷ではあるが生命には別條なく今でも山麓に滯在して療養中であるが一兩日前漸く筆が執れる樣になつたので始めて其情況を兄の蕭彦氏に書き送つた。

猶本號所載同氏來狀を參照せられたし。

◎會　報　第五回有志晩餐會

# 第五回有志晩餐會

回を重ぬる事五回、年二歳を加ふるに過ぎざれど、回は回を追て趣味深からんとす、登山期の終末に近き、九月十七日其第五回は開れたり、在來の晩餐會を觀るに、少しく貴族的にして、未だ熱烈なる山岳談を交すに足らず、我徒最初の主旨たる平凡なる會合、家族的、又書生流なる、親密の間に山を談じ溪流を語るには、稍々片苦しきの觀あり、舊觀を沒して新なる面目にせんとて、第五回は、四谷見附外、三河屋(牛肉店)に開催せり、吾人の希望たる書生流なる會合は、鍋中沸々の音と共に、談愈々熟し近來の快事、更の過ぐるを知らざりき、吾人は將來に於ても、平凡なる會、書生流なる會たらん事を祈りて止まざるなり。

來會者姓名(順序不同)。南日重次氏、增田吾助氏、冠松次郎氏、吉岡華堂氏、大下藤次郎氏、木村鑛吉氏、服部鉄太郎氏、辻村伊助氏、二階堂保則氏、山内淳一氏、高島北海氏、エー、キー、ウエッブ氏、中村清太郎氏、梅澤親光氏、高頭仁兵衞氏、小島

久太氏、住廣造氏、加山龍之助氏、三枝威之介氏、辻本滿丸氏、高野鷹藏氏、次回は明春一月中旬開催の筈、當番幹事次の如し。

南日重次氏　山内淳一氏　中村清太郎氏

## 高山深谷第二輯の發行

高山深谷第一輯は、意外の歡迎を受けて、頒布を了せり、今や同好諸君の希望勸告に由り、其の第二輯を發刊すべく、本會は多大の勞力と費用を犧牲にせんとす、印畫の種別、發行の方法等は別紙廣告欄を觀られたし、本輯十二葉の印畫は、全く吾が會員の技巧に由りて得たる、珍品なりとす、同好諸士、山を愛するの士、山を好むの士、座右一部を備ふべきの品なり。

## 新入會員

に達せざりしため、經費の都合上、印刷畫となすことを止め、寫眞印畫をそのまゝ特製の臺紙に貼付して、豫約者諸君に頒布を了せり、其際一々說明書を添付して、送るべかりしなれど、右の如く印刷に附せざりしを以て、說明書はこゝに、本誌の餘白を借りて登載することゝなしたり。

說明書は、撮影者各自が、特に執筆の勞を與へられたるものにて、今之を公にするに當りて、本會は原寫眞の作製者諸君が、本會の請に應ぜられて、その貴重なる原板を貸與せられ、且つ說明を起草せられたる厚意に對して、深く感謝するところなり。

因にいふ、第一輯は右の次第にて、少數の製品悉皆頒布濟みとなり、本會に一部も餘分を藏せず其後他より聞き込まれ、又は作品を一覽せられて、熱心に購入を申し出でられたる諸君に對して、折角の御希望に應ずる能はざりしは本會の頗る遺憾とするところなり。

作品の出來榮ゑ如何に至つては、本會自ら贊せざるも、第一輯の所持者諸君に就いて問はれたし。

## 本號の挿畫

本號には石版及びコロタイプ版等に、大版のものを挿入したれば、他の寫眞版等の數を減ずるの止むなきに至れり、諒焉。

## 「高山深谷」第一輯印畫說明

「高山深谷」第一輯は、豫約者不幸にして豫定數

## 梓河畔の穂高山

明治四十二年六月十八日午前十時

辻村伊助氏撮影

梓の清流の、上高地に來つて、西南に走るや、穂高より發する岳川を合せて、林道の邊に碧潭をなす、河童洲是なり。橋あり、河童橋と呼ぶ、圖は橋上に立つて、北の方前夜の雪を頂ける穂高の全面を望めるもの。右方の山岳は明神岳、左方の山は前穂高。

## 黒岳の南望

明治四十二年七月廿七日正午

辻村伊助氏撮影

飛騨山脈の中央に黒岳あり、上高地より槍ヶ岳を越えて三日、大町より烏帽子を超ゑて三日、富山より有峯を經て同じく路三日にして達すべし、圖は山頂の一角より、南方の天を望めるもの、皚々たるは槍、穂高、咫尺せるは鷲羽、赤岳、硫黄ヶ岳。

## 薬師ヶ岳のカール (Kahl.)

(越中薬師ヶ岳頂上より穂高山、槍ヶ岳及黒岳を望む)

明治四十二年七月二十二日午前六時廿分

辻本滿丸氏撮影

日本北アルプスの雄峯、越中薬師ヶ岳(海拔約三千メートル)の頂上より、東南を望みたる光景にして、遠景の内、右方の雲上に峨々たる頂上を現せるは信州上高地(カミグチ)に君臨せる穂高山、其左方即ち圖の中央に高聳せる尖峯は、著名なる槍ヶ岳なり、左端に當りて頂上の一部雲に蔽れたるは、信越國界なる黒岳とす。近景は薬師ヶ岳頂上なるカール(Kahl)の上部にして、前方なる急斜の岩壁と最も近き雪田(實際は前方に傾斜す)とは、右方に於て相連續し、其間に半圓狀の急谷(所謂カール)を擁す。白雲瀰漫せる中景の深谷は、黒部川の源流地にして、日本北アルプス中、最も僻遠幽絶なる窶區とす。

## 鳥海山ブナの天然林

志村鳥嶺撮影

鳥海山(海拔七〇〇六尺)は、羽前、羽後の國境に聳ゆる休火山なり、山容の雄大なるは。本州北部に於て、稀れに見るところのものなり、此圖は明治四十二年八月、該山、矢島口登攀路の中途なる、喬木帶を撮影せしものなり、ブナ(殼斗科)の單純林にして、林相頗る美なり、皆數百年を經たる老木、直幹、皚々碧空を摩し、枝葉蓊鬱天日を蔽ふ、幽邃、森嚴等の眞意義は、此喬木帶中に入りて、始めて味ふ事を得べし、本邦高山喬木帶濶葉樹林の模範となすべし。

## 立山大汝（オヽナンジ）より信飛境上の諸峰を望む

四十一年八月十七日　石崎光瑤氏撮影

立山の連峰到る處、展望の大なる事他に儔を見ず、而して大汝より富士の折立附近、巉巖重疊、所謂神鉞鬼斧の裏、毛髮悚然たらしむるの峭壁に倚りて望むを、第一位に推重せざる可らず、佐良峠、五色原、淨土山等に於て、巖に、花に、女性的絢美を盡くせる山勢、雄山を過ぎ、大汝を越ゆるに及びて、次第に濃艷の色彩を却け、稜々たる山骨を露はし、深辟懼る可き大峭壁をつくり、永劫の風化に抵抗せる其面、生物の存在を疑ふところ、點々として矮少可憐なる千島桔梗の、僅に岩壘によりて露を含める濃紫の花を垂れたる、さらずば天津乙女の譬に似たる高根菫、岩爪草の金葩銀英、大虛を亘る不斷の天風に微動せるに、翩躚たる胡蝶の、蒸々たる雲より出でゝ雲に入るの仙寰に立ちて、遙に信飛境上、狂濤激浪の旋渦奔騰せる如き亂雲の表に、悠々霄漢に競ひ聳ゆる大山崇嶽を望む時、誰か壯美に驚ひ、讃美の聲を發せざるものあらんや、圖は其一部を寫せしに過ぎず、神韻縹緲の感興は、これを人に傳へ難きを憤む。

## 立山深谿の雪と雲

四十一年八月十七日　石崎光瑤氏撮影

純白のスカイラインは、巍々九千八百尺の天際を劃し、直下無限の地底に奔馳しては、銀河九霄より漲り落つるが如きもの、これ立山の南面黑部の谿谷に向つて急馳せる、千古不滅の大雪谿なり、アレシアに似たる堅緻なる氷雪の面、彼のアルプスの魔女が紡げる千古の白絲との比喩も啻ならず、千筋の直線を刻して（此雪の作用は、山岳第一年第一號山崎理學士の高根雪に詳述されあり）遙に蜿蜒迂廻、深く黑部の幽谷に入つて盡くるものゝ如し。黑部の谿谷、蓊鬱たる大森林の奔湍飛瀑を包擁せるところ、雲霧常に谷に搖曳し、幽谷をして更に神祕的森嚴の感を深からしむ。

黎明東天漸く微光を潮しては、横雲金線の如く走り。急ちにして、朝暾山の端を出づるや、空の眞紅は此白雪に燃えて、瑪瑙の色彩鮮かに、翠黛眠り暗き谷深く、夢の如く浮み來れる白雲の、濃淡影を落してこゝに徂徠するや、日光の直射を受けて、絕大のカンバスに、變幻極まりなき萬象を畫く、しかも寂莫太古に似たる此靈域、耳にするは、雄山の峯頭、幽かなる神樂の斷續と、天籟の颯々たるあるのみ。

◎會　報

立山大汝より信飛境上の諸峰を望む
立山奥大日岳の絕巔

## 立山奥大日岳の絕巔

四十二年七月廿九日　石崎光瑤氏撮影

地獄谷の南を流るゝ鍋名川を渉つて、大日山塊と別山との連亘せる星根に登り、高山としては頗る穩和な、丁度幾内式の山梁を西に辿つて最後に崔嵬たる一角を攀づると、車百合、風露、唐松草等の紫紅黃白入り亂れて、原板唐織の浮模樣の樣に飾つた花園に出で、初めて奥大日岳の絕頂が現はれる。

絕巔の北面は恐ろしい狂暴な大龜裂を生じた急斜面の雪谿が、早付の大壓の底に向つて直下してる、此水晶の樣な億萬のフィル

立山深谿の雪と雲

ンから滴る雫の幾個も〳〵寄り集まつたのが、急瀬奔流で名高い早付川の水源となつて、末は日本海に注ぐのである。

奥大日岳は一寸邊鄙なのと、山自身の遠望が左程秀拔でないのとで、立山登山者の注目を惹く事が薄い、隨つて多くの人に蹂躙されて居らぬから、花一輪摘み採つても、雪一塊掬つても、純潔で清爽な氣が溢れてる、どうしても處女の山と云ふ感が湧く、天正の悲劇によつて、特に立山の名品に數へられた黒百合の如き、盜採家の爲に採り盡されて自分が、久しい間數回の登山に、容易く其芳唇に接し得なかつたのが、此絶頂の三角標の中に、咲いてるのを見た時は頗る嬉しかつた。

## 立山の東面

明治四十二年八月三日　三枝威之介氏撮影

八月三日北城を發し、細野を經て平川に沿ひて登ぼる道、平川の北俣に沿ひて溯る、遂に大黒岳の大雪渓に達す（山岳第四年二號の口繪）二時間半餘にして大黒岳の頂上に至る、此所、越信の國境、日本アルプスの屋梁にして、西方に立山、劍岳の峻塊を望む、東方は雲霧の覆ふ所となる、脚下大黒鑛山の屋背を眺み、南方五龍岳の怪姿を仰ぐ、越中に下る、二町にして此寫眞を得たり。

## 槍ヶ岳より南方諸山を望む

明治三十九年八月二日　午後零時半　河野齡藏氏撮影

明治三十九年八月一日、信濃國北安曇郡白馬山に登り、二日南の方、杓子岳を經て槍ヶ岳に至り、植物採集を行ふ、槍ヶ岳に登りし時、正に午なり、朝來の雲海既に全く消ゆて更に溪谷より雲煙の盛に上騰するを見る、山巔に立ちて南方諸山を眺むれば、日本アルプスの連山は、蜿蜒として南に亘り、大黒岳は眞に其前に横り、鹿島槍ヶ岳は、遙に其銳峰を拔く、立山の連山は、其の右側に在りて、雄峻を競ひ、其壯大の景は、我をして寫意勃々禁ずること能はざらしむ、則ち三脚を立て之を撮影せり。

## 地藏岳より望める鳳凰山と駒ヶ岳

明治四十一年七月二十八日午前七時十分　高頭式氏撮影

鳳凰山、地藏岳は駒ヶ岳山脈に屬し、甲斐國北、中兩群界を劃せる一連嶺なり、抑も駒ヶ岳山脈とは、赤石山系の小支脈にして粗粒の閃雲花崗岩が、秩父古生層を貫きて噴出せるもの、最高は駒ヶ岳にして三千米突に逼り、鳳凰（約二、七〇〇）、地藏（二、八四一）を起し、次第に南方に低下す、登路三條あり、中央東線韮崎又は日野春驛に下車し、青木鑛泉、南御室を經て地藏、鳳凰に登るもの路最も可なり、同線臺ヶ原驛より柳澤、北御堂を過ぎ鳳凰に攀づるもの、現今路絶滅せり、他は御勅使川を溯りたる蘆安より登ぼるものにして、南御堂にて青木路に合す、韮崎より約六時間にして青木湯に着し、急峻なる喬木帶を登る二時間にして南御堂に至る、夫れより半時にて花崗岩の山稜に出づ、砂拂といふ、更

に二時間餘、地藏岳を經て鳳凰山の地藏佛に達す、北岡に藥師、觀音の二岳あり、地藏岳よりの展望は極めて絶佳にして富士山、野呂川の露谷、白峰三山、仙丈岳、甲斐駒、八ヶ岳、金峰山、甲府平野に富士川の銀蛇を躺れらすを着、近く觀音岳、鳳凰山の地藏佛を瞰し、遙に北アルプス乘鞍岳、槍ヶ岳を仰ぎ、夏に信州駒、蓬萊群山を瞻望し得、高山植物は豐富ならざるに似たり。

## 赤石山の頂上

明治四十二年七月　日午前十一時

高野鷹藏氏撮影

赤石山の名、赤石澤に由て起る、南日本アルプス第二の高嶺にして、惡澤岳、魚無河内岳、聖岳を從へて、遙に白峰山脈の北岳に相對す、高距三千百二十米突、東は田代川の溪谷に境し、西は、小淵川を發す、峰頭、南、北に二隆起し、南のもの主峰にして一等三角點あり、道は先づ北方の一峰に登り、低下して再び主峰に登る、此寫眞は、頂上を去る北方數町の所より、撮影せるものにして、山頂の左面は駿州にして、右方は即ち信州なり。

## 早川連嶺池の茶屋

明治四十二年七月二十一日午前十一時

高野鷹藏氏撮影

日本南アルプスの盟主、白峰山脈の東壁をなすもの、早川連嶺なり、高さ雲霄を拔くに非ず、地積數十里を翌ふに非ずと雖も、東方の防守として白峰山脈股肱の臣たり、早川連嶺ありて早川露谷の深きをなす、早川露谷の深きは白峰山脈の高きをなす。

早川連嶺を越ゆるもの數路あり、曰く大峠、曰く七ツ峠、曰く奈良田嶺、曰く何、昨夏(四十二年)七月赤石山脈縱走を試みんとするの發途、早川連嶺を越ゆ、遙石鯛澤より平林村に取り、連嶺の最高部に達す、道二岐し、右するもの奈良田、左するもの湯島に至る、此所一小池あり、四圍幽鬱にして、池畔一小屋あり、呼んで「池の茶屋」と云ふ、白峰山脈東方の一勝地たり。

◎會　報　赤石山の頂上　早川連嶺池の茶屋

（校訂者　初校　高野鷹藏　再校　楠澤親光）

明治四十三年十一月二十六日印刷
明治四十三年十一月三十日發行

定價六拾錢

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　横濱市太田町六丁目九十三番地　廣瀨安七

印刷所　横濱市太田町六丁目九十三番地　東京印刷株式會社　横濱分社

發行者　横濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九番　電話最長百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂